兵庫県文化財調査報告　第271冊

氷上郡春日町

七日市遺跡（Ⅲ）

弥生～平安時代の調査

〔本文編〕

近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日JCT）に伴う発掘調査報告書

平成15年度

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第271冊

氷上郡春日町

七日市遺跡（Ⅲ）

（なぬかいちいせき）

弥生～平安時代の調査

〔本文編〕

近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日JCT）に伴う発掘調査報告書

平成15年度

兵庫県教育委員会

弥生時代　円形周溝墓と竪穴住居

弥生時代　方形周溝墓群

奈良・平安時代　堀立柱建物

平安時代　集落跡

C 地区　方形周溝墓群 出土土器

D 地区　SK30 出土土器

E 地区　方形周溝墓群 出土土器

F 地区　SR01 Ⅲ層 出土土器

L 地区　方形周溝墓群 出土土器

M 地区　方形周溝墓群 出土土器

M 地区　SD01 出土　弥生時代中期の土器

七日市遺跡　出土石器

例　言

1．本書は、兵庫県氷上郡春日町野村に所在する七日市遺跡、および下野村遺跡（旧名 ： 西野々遺跡）の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査は、北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路）建設事業に関連して、建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所の依頼を受けて、平成5年度～平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。このうち、弥生時代以降を対象とした調査は平成9年までである。

3．整理作業については、近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日 JCT）に関連して、日本道路公団関西支社の依頼を受けて、平成 12年度～ 15年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4．七日市遺跡の調査成果は時代別に2冊で構成し、本書はそのうち弥生時代以降を対象とする。
旧石器時代の成果は『七日市遺跡（Ⅲ）旧石器時代の調査』（兵庫県文化財調査報告　第272冊）に記述している。

5．遺物写真の撮影にあたっては、イーストマン株式会社と委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

6．本書に使用した方位は国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。また各遺構図面で使用している方位は座標北を示す。

7．本書に使用した地図は下記のとおりである。
第２図　春日町全図 No.1　平成元年9月作成
第９図　国土地理院1/50000地形図「福知山」 平成8年2月1日発行
国土地理院1/50000地形図「篠山」　平成3年9月1日発行

8．本書の執筆は、調査担当者で分担した。編集は、森本貴子の補助を得て長濱誠司が行った。なお、各執筆担当は本文目次に記した。

9．整理作業にあたり、藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に出土サヌカイトの産地分析を実施していただいた。
この成果については『七日市遺跡（Ⅲ）旧石器時代の調査』に掲載させていただいた。

10．七日市遺跡の調査成果は既に現地説明会資料等で公表している。これらと本報告では内容を異にする部分もあるが、本書が最新の担当者の見解と理解されたい。

11．調査・整理にあたっては下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
氷上郡教育委員会　春日町歴史民俗資料館　佐原　真　都出比呂志　福永伸哉　和田晴吾
菱田哲郎　山中敏史　近澤豊明　深澤芳樹　河野一隆　山中一郎　禰冝田佳男　森岡秀人
石野博信　　順不同・敬称略

凡　例

遺構

本書では、遺構は種類ごとに以下の略号を用いた。

SA：柵　SB：掘立柱建物　SD：溝　SE：井戸　SH：竪穴住居　SK：木棺墓・土坑

SP：土器棺墓　SR：旧河道　SX：周溝墓・墓　P：柱穴

遺構番号は各地区の遺構の種類ごとに01から始めている。

遺構名は原則として調査時に命名したものを用いているため、一部に不統一な遺構名があることを理解されたい。

周溝墓の図版に用いた等高線は５cm間隔である。

掘立柱建物の面積は、桁行方向の両端の柱痕間の芯々間距離と桁行方向の両端の柱痕間の芯々間距離を掛け合わせて算出したものである。

遺物

土器・金属器

七日市遺跡Ａ地区から順に遺物番号をつけている。

土器の断面は、弥生土器・須恵器は黒塗り、土師器は白抜き、黒色土器・陶磁器は網掛けにし、区別している。

金属器は番号の前にＭをつけて区別している。

石器

原則として器種ごとに並べて番号をつけている。他の遺物とは、番号の前にＳをつけて区別している。

下野村遺跡出土遺物

土器・石器ともに七日市遺跡出土遺物に続けて番号をつけている。

本文目次

第1章　七日市遺跡(Ⅲ)の調査に至る経緯

第1節　七日市遺跡および周辺の調査 …… (村上泰樹) …… 1
第2節　七日市遺跡（Ⅲ）の調査経過 …… (村上) …… 3
第3節　七日市遺跡（Ⅲ）の整理作業 …… (長濱誠司) …… 10
第4節　普及活動 …… (長濱) …… 11

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境 …… (村上) …… 13
第2節　歴史的環境 …… (長濱) …… 18

第3章　七日市遺跡の遺構

第1節　A地区の遺構 …… (村上) …… 21
第2節　B地区の遺構 …… (村上) …… 42
第3節　C地区の遺構 …… (多賀茂治) …… 45
第4節　D地区の遺構 …… (中川　渉) …… 51
第5節　E地区の遺構 …… (多賀) …… 54
第6節　F地区の遺構 …… (長濱) …… 61
第7節　G地区の遺構 …… (中川) …… 67
第8節　H地区の遺構 …… (中川) …… 70
第9節　I地区の遺構 …… (中川) …… 72
第10節　J地区の遺構 …… (多賀) …… 73
第11節　K地区の遺構 …… (多賀) …… 75
第12節　L地区の遺構 …… (多賀) …… 77
第13節　M2地区の遺構 …… (長濱) …… 84
第14節　M地区の遺構 …… (長濱) …… 86
第15節　P地区の遺構 …… (中川) …… 105
第16節　Q地区の遺構 …… (中川) …… 106
第17節　R地区の遺構 …… (中川) …… 110

第4章　七日市遺跡出土遺物

第1節　弥生時代の土器 …… (多賀) …… 112
第2節　古墳・奈良時代の土器 …… (長濱) …… 145
第3節　平安時代の土器 …… (村上) …… 148
第4節　出土石器 …… (上田健太郎・長濱) …… 154
第5節　出土金属器 …… (村上) …… 165

第5章　下野村遺跡の調査
第1節　遺跡の概要 …… （多賀）…… 166
第2節　A地区の遺構 …… （多賀）…… 166
第3節　B地区の遺構 …… （多賀）…… 168
第4節　出土遺物 …… （多賀・上田）…… 169
第5節　小結 …… （多賀）…… 171

第6章　まとめ
第1節　弥生時代の七日市遺跡 …… （多賀）…… 172
第2節　奈良・平安時代の七日市遺跡 …… （長濱）…… 175
第3節　平安時代の集落 …… （中川）…… 181

報告書抄録…… 219

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置 …… iii
第2図　調査区の位置 …… iv
第3図　七日市遺跡および周辺の調査 …… 3
第4図　調査区地区割図 …… 5
第5図　七日市遺跡周辺の地形分類図 …… 14
第6図　調査区土層断面図 …… 15
第7図　調査区内コンタ図（1）…… 16
第8図　調査区内コンタ図（2）…… 17
第9図　周辺の遺跡 …… 20
第10図　楔形石器の形式分類 …… 156
第11図　片刃石斧の各部名称 …… 159
第12図　石庖丁の各部名称 …… 160
第13図　条里制地割と奈良・平安時代の遺構 …… 176
第14図　奈良・平安時代遺構配置図 …… 178

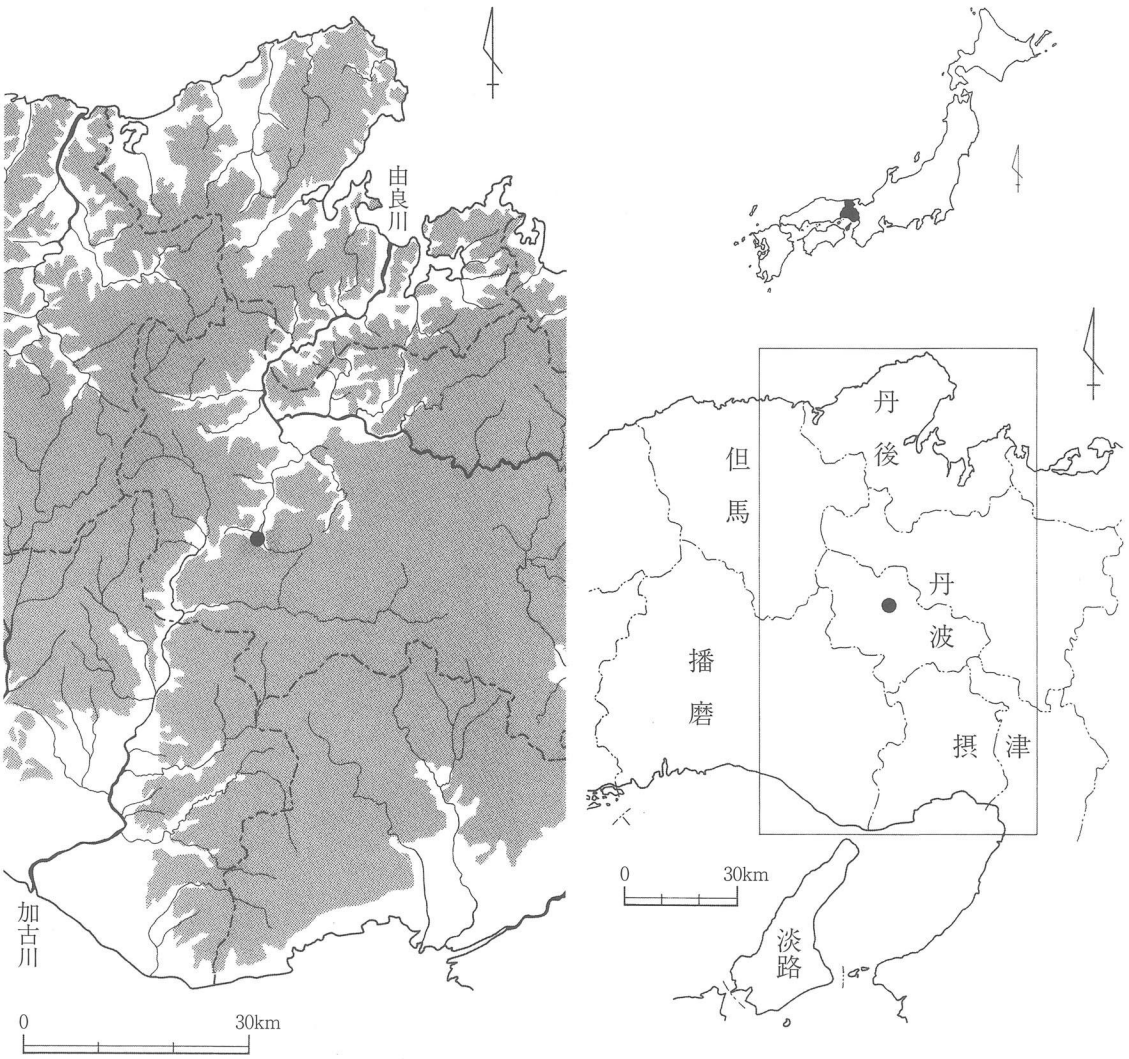
表　目　次

表1　七日市遺跡および周辺の調査一覧…… 2
表2　七日市遺跡の石器組成一覧…… 164
表3　出土金属器一覧…… 165
表4　七日市遺跡平安時代掘立柱建物一覧…… 183

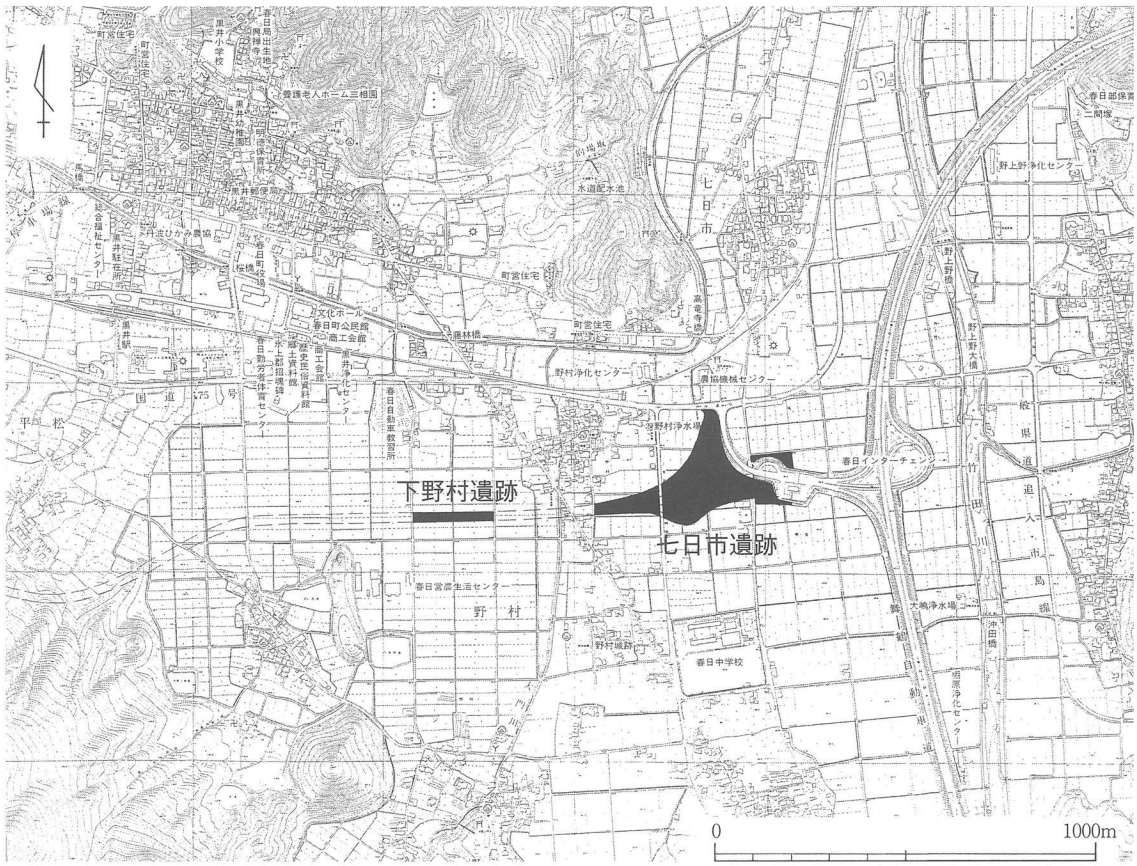
表５　七日市遺跡出土土器観察表…… 184
表６　下野村遺跡出土土器観察表…… 213
表７　下野村遺跡出土石器観察表…… 214
表８　七日市遺跡出土石器観察表…… 215

巻頭図版目次

巻頭図版１　弥生時代　円形周溝墓と竪穴住居／弥生時代　方形周溝墓群
巻頭図版２　奈良・平安時代　掘立柱建物／平安時代　集落跡
巻頭図版３　Ｃ地区方形周溝墓群出土土器／Ｄ地区 SK30 出土土器
巻頭図版４　Ｅ地区方形周溝墓群出土土器／Ｆ地区 SR01 Ⅲ層出土土器
巻頭図版５　Ｌ地区方形周溝墓群出土土器／Ｍ地区周溝墓群出土土器
巻頭図版６　Ｍ地区 SD01 出土弥生時代中期の土器／七日市遺跡出土石器



第１図　遺跡の位置



第２図　調査区の位置

第１章　七日市遺跡（Ⅲ）の調査に至る経緯

第１節　七日市遺跡および周辺の調査

七日市遺跡は、兵庫県氷上郡春日町棚原・七日市・野村地区にまたがる旧石器時代・弥生時代から平安時代の集落遺跡である。七日市遺跡発見の契機は、昭和55年から56年にかけて大阪経済法科大学村川行弘氏を中心におこなわれた、春日町棚原・野上野･多利地区のほ場整備事業（春日中央区）、近畿自動車道舞鶴線（現舞鶴若狭自動車道）予定地側道部分・排水部分の確認調査であろう。この一連の調査によって、七日市遺跡の弥生時代の遺構は東西方向約400ｍ、南北方向約500ｍの範囲展開することが明らかになった。この成果は『春日七日市遺跡－確認調査報告書－』として昭和59年度に刊行されている。

その後、地元教育委員会（氷上郡教育委員会）によりほ場整備事業に伴う調査が相次いで行われ、七日市遺跡の周辺で野村遺跡・棚原遺跡などの遺跡の実態が明らかにされていった。

昭和57年になると、近畿自動車道舞鶴線建設事業が具体化し、兵庫県教育委員会により建設予定地内の確認調査が開始された。この確認調査の結果、昭和58年には、山垣遺跡・野村遺跡（野村Ｂ・Ｃ遺跡）の本発調査が実施され、さらに昭和59年には七日市遺跡の調査が本格的に開始された。この七日市遺跡の調査は、翌60年10月まで継続され、約17,000㎡の本発掘調査が行われ、七日市遺跡の解明に大きな成果をあげている。この成果は『七日市遺跡（Ⅰ）－第１～３分冊』（兵庫県教育委員会　1990）としてまとめられている。

この調査以後、七日市遺跡および周辺の調査は一時停滞したが、平成元年に七日市遺跡の北側を東西に走る国道175号線道路改良事業に伴って七日市遺跡の調査が実施された。この調査成果は『七日市遺跡（Ⅱ）』として平成２年度に刊行されている。

この時期、七日市遺跡および周辺に新たな道路建設が計画された。七日市遺跡のある近畿自動車道敦賀線（現舞鶴若狭自動車道）春日インターチェンジと接続した北近畿豊岡自動車道の建設である。この自動車道は、春日インターチェンジと接続し、氷上郡氷上町・青垣町を通過し、朝来郡山東町・和田山町を経由し、豊岡に至る計画である。

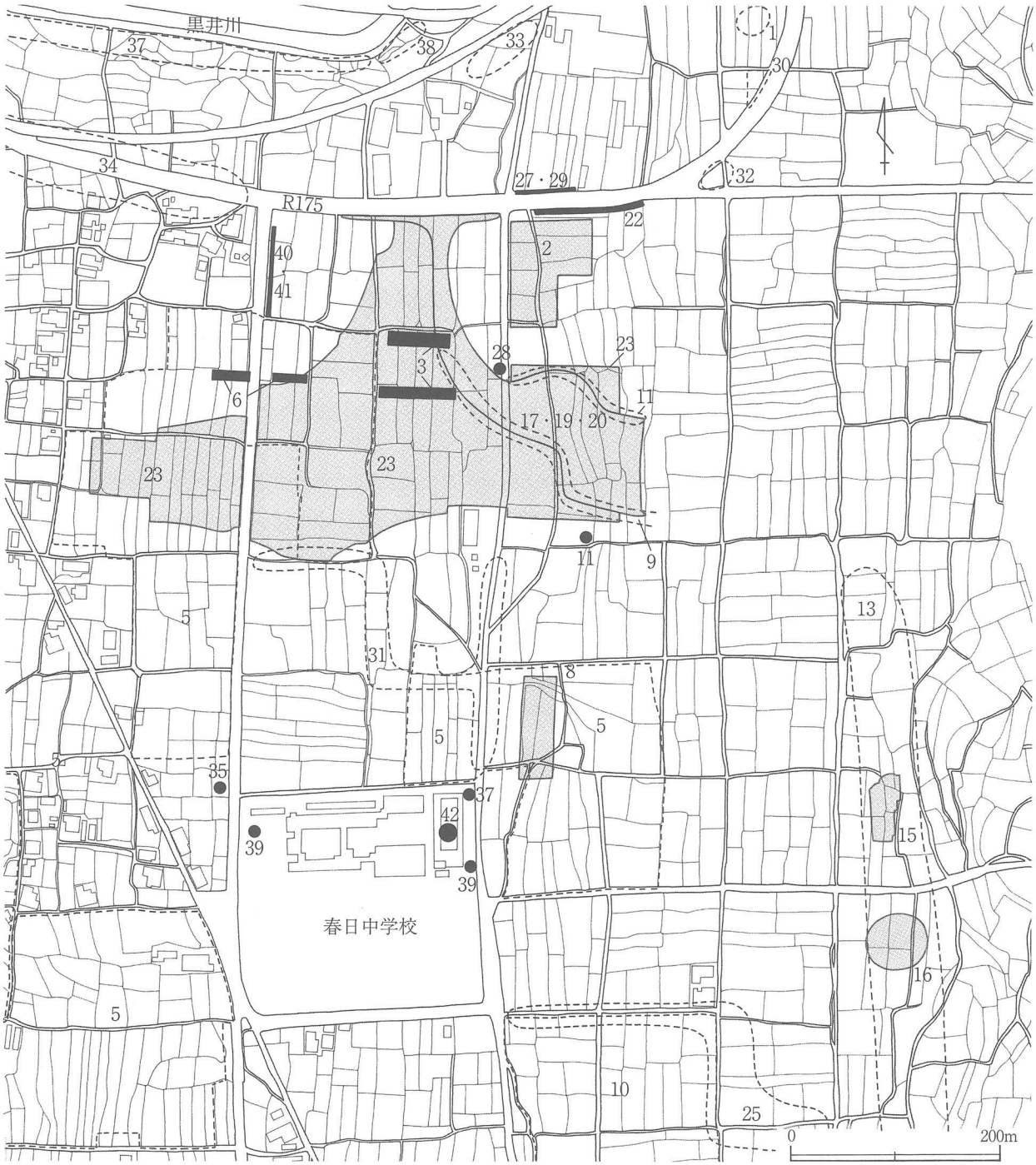
この計画を受け、兵庫県教育委員会は、平成３年に氷上郡内の春日町～青垣町区間の分布調査を実施した。分布調査の結果、七日市遺跡は道路建設予定地にあたる春日インターチェンジの西側約90,000㎡の範囲に遺物の分布が認められ、七日市遺跡が西側に広がることが予想された。このため、兵庫県教育委員会では、工事担当部局である建設省近畿地方建設局　兵庫国道工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局　兵庫国道事務所）と協議を行い、平成５年５月より確認調査を開始し、以後平成10年度まで19次（６ヶ年）の七日市遺跡（下野村遺跡）の確認・全面調査を行った。

この大規模調査と並行して、七日市遺跡およびその周辺では、氷上郡教育委員会による、下水道敷設工事・民間開発を契機とした確認調査、兵庫県教育委員会による国道175号線沿いの緑化推進事業・交通安全施設整備事業・黒井川河川改修事業等を契機とした確認調査・本発掘調査が現在も実施されている。

表１　七日市遺跡および周辺の調査一覧

No.	遺跡名	場所	調査原因	調査種別	調査主体	調査期間	備　考	調査番号
1	春日七日市遺跡	七日市他	排水路工事	確認調査	調査団	S55.10		
2	春日七日市遺跡	七日市	ほ場整備事業	確認調査	調査団	S56.1～3	『春日七日市遺跡−確認調査報告書−』春日七日市遺跡発掘調査団 1984	
3	七日市遺跡	七日市	ほ場整備事業		氷上郡教育委員会	S56. 4～5		
4	七日市遺跡	七日市	ほ場整備事業	確認調査	氷上郡教育委員会	S56. 7		
5	棚原・野村遺跡	棚原他	ほ場整備事業	確認調査	氷上郡教育委員会	S56.8～12		
6	野村遺跡	野村	ほ場整備事業	本発掘調査	氷上郡教育委員会	S56.12		
7	棚原遺跡	棚原	ほ場整備事業	確認調査	氷上郡教育委員会	S56.12		
8	棚原遺跡	棚原	ほ場整備事業	本発掘調査	氷上郡教育委員会	S57. 1～2		
9	春日七日市遺跡	野村他	近畿自動車道舞鶴線	本発掘・確認調査	氷上郡教育委員会	S57. 1～3	用排水路部分の調査	
10	七日市遺跡	棚原他	ほ場整備事業	確認調査	氷上郡教育委員会	S57. 6～7		
11	七日市遺跡	七日市	排水路工事		氷上郡教育委員会	S57. 11～12		
12	七日市遺跡	七日市	近畿自動車道舞鶴線	確認調査	兵庫県教育委員会	S57. 11～12		820016
13	野村遺跡	棚原	近畿自動車道舞鶴線	確認調査	兵庫県教育委員会	S57. 12		820014 820015
14	山垣館址	棚原	ほ場整備事業	確認調査	氷上郡教育委員会	S58. 4～5		
15	山垣遺跡	棚原	近畿自動車道舞鶴線	本発掘調査	兵庫県教育委員会	S58. 4～9	『山垣遺跡−「里長」関連遺構の調査−発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1990	83006
16	野村 B・C 遺跡	棚原	近畿自動車道舞鶴線	本発掘調査	兵庫県教育委員会	S58. 4～9		83005
17	七日市遺跡	七日市他	近畿自動車道舞鶴線	確認調査	兵庫県教育委員会	S58. 11～59. 2		83007
18	野村城跡	野村	道路整備事業		氷上郡教育委員会	S59.1～3		
19	七日市遺跡	七日市	近畿自動車道舞鶴線	確認調査	兵庫県教育委員会	S59. 3	『七日市遺跡（I）−第1～3分冊−』　兵庫県教育委員会　1990・1991	83009
20	七日市遺跡	七日市 野村	近畿自動車道舞鶴線	本発掘調査	兵庫県教育委員会	S59. 6～60. 10		840023 850001
22	七日市遺跡	野村	道路改良事業	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H 1. 8～10	『七日市遺跡（II）』兵庫県教育委員会　1990	890014
21			道路改良事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H1. 4		890162
23	七日市遺跡	野村他	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H5. 5～7		930078
23	七日市遺跡	野村他	北近畿豊岡自動車道	本発掘・確認調査	兵庫県教育委員会	H5. 9～H6. 3	ⅢA・B 地区の弥生時代以降全面調査・同地区旧石器確認調査	930121
24	七日市遺跡	下野村	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H6. 1		930179
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H6. 5～10	ⅢD 地区の弥生時代以降全面調査・同地区旧石器確認調査	940201
25	七日市遺跡	棚原	下水道関連	確認調査	氷上郡教育委員会	H6.10～12		
26	七日市遺跡	七日市	民間開発	確認調査	氷上郡教育委員会	H7.9～10		
27	七日市遺跡	七日市	道路緑化推進事業	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H7.9～10		950267
28	七日市遺跡	七日市	上水道関連工事	確認調査	氷上郡教育委員会	H7. 11		
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H7. 9～H8. 1		950228
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H7. 9～H8. 2	ⅢP・Q・R 地区弥生時代以降全面調査	950227
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H7. 9～H8. 1	ⅢP・Q・R 地区旧石器確認調査	950229
29	七日市遺跡	七日市	道路緑化推進事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H7. 9		950265
30	七日市遺跡	七日市	民間開発	確認調査	氷上郡教育委員会	H8. 3		
31	七日市遺跡	七日市	下水道敷設	確認調査	氷上郡教育委員会	H8. 4～5		
23	下野村（西野々）遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H8. 6～H8. 9		960094
23	七日市遺跡	野村他	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H8. 6～H8. 12	ⅢA 地区旧石器全面調査	960093
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H8. 9～H9. 3	ⅢA-3・C・E・J・K・L・M-2 地区弥生時代以降全面調査・ⅢM-2 地区旧石器全面調査	960234
23	七日市遺跡	小倉	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H8. 9～H9. 3	ⅢA-3・C・E・J・K・L・M-2 地区旧石器確認調査	960462
32	七日市遺跡	七日市	道路緑化推進事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H8. 9		960291
33	七日市遺跡	野村	民間開発	確認調査	氷上郡教育委員会	H8. 10		
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H8. 12～H9. 3	ⅢM-1・N・O・F 地区の弥生時代以降の全面調査	960369
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	本発掘・確認調査	兵庫県教育委員会	H8. 12～H9. 3	ⅢM-1・N・O・F 地区旧石器確認調査	960370
23	七日市遺跡	野村	（一）春日和田山道路I	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H9. 5～H9. 10	ⅢG・H・I 地区弥生時代以降全面調査	970164
23	七日市遺跡	野村	北近畿豊岡自動車道	確認調査	兵庫県教育委員会	H9. 5～H9. 10	ⅢG・H・I 地区旧石器確認調査	970165
23	七日市遺跡	野村	（一）春日和田山道路I	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H9. 5～H9. 11	ⅢF・J・K・L・M 地区旧石器全面調査	970160
34	七日市遺跡	野村	道路緑化推進事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H9. 6～H9. 7		970224
23	七日市遺跡	野村	（一）春日和田山道路I	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H9. 10～H10. 2	ⅢB 地区旧石器全面調査	970339
23	七日市遺跡	野村	（一）春日和田山道路I	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H9. 11～H10. 3	ⅢA-3・C・E 地区旧石器全面調査	970340
23	七日市遺跡	野村	（一）春日和田山道路I	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H10. 5～H10. 12	ⅢD・G・H 地区旧石器全面調査	980083
35	七日市遺跡	七日市	駐車場建設	確認調査	氷上郡教育委員会	H10. 8		
36		棚原	養護学校建築工事	確認調査	兵庫県教育委員会	H12. 3		990328
37		黒井	河川改修事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H12. 12		2000321
38	七日市遺跡	野村	河川改修事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H13. 5		2001045
39	七日市遺跡	野村	給食センター建設事業	確認調査	氷上郡教育委員会	H13. 6		
40	七日市遺跡	野村	交通安全施設等整備事業	確認調査	兵庫県教育委員会	H14. 12		2002184
41	七日市遺跡	野村	交通安全施設等整備事業	本発掘調査	兵庫県教育委員会	H15. 1		2002222
42	七日市遺跡	野村	給食センター建設事業	確認調査	氷上郡教育委員会	H15. 7～H15. 8		

註）本一覧表は、『七日市遺跡（Ⅰ）−第３分冊−』兵庫県教育委員会　1991 掲載の表に加筆作成した。
分布調査は除いている。アミカケは本調査報告書対象調査



第3図　七日市遺跡および周辺の調査

第2節　七日市遺跡（Ⅲ）の調査経過

1．分布調査

七日市遺跡（Ⅲ）を含めた北近畿豊岡自動車道建設予定地内の分布調査は、平成3年4月に氷上郡春日町～同郡青垣町にかけての約24.4kmの区間で行われた。この分布調査によって41カ所の遺物散布地等を発見している。このうち春日町内では13カ所の遺物散布地・古墳等が発見された。とくに七日市遺跡周辺では舞鶴若狭自動車道（旧近畿自動車道舞鶴線）春日インターチェンジより西側部分、約90,000

㎡の範囲で遺物を採集することができ、七日市遺跡がさらに西側に広がることが予想された。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

水口富夫（故人）、平田博幸・西口圭介・中川　渉・藤田　淳、多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）、鈴木敬二（現兵庫県県民政策部）、柏原正民、廣野　誠（現兵庫県健康生活部）

2．確認調査・本発掘調査

分布調査の成果を受け、工事担当部局である建設省近畿地方建設局　兵庫国道工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局　兵庫国道事務所）と協議した結果、平成5年5月より確認調査を開始することで合意した。

確認調査にあたって問題になったのは、旧石器時代の文化層の確認であった。調査担当者を含め調査方法について協議した結果、確認調査中に上層面で遺構を確認した場合は、上層面の本発掘調査が終了した時点で、下層（旧石器時代）の確認調査を実施する。確認調査中に上層面の遺構が無かった場合は、引き続き下層面の確認調査を実施することになった。

また、確認調査の結果、本発掘調査対象範囲について農業道路・用水路で区切られた範囲ごとにA～Rのアルファベットをふり、地区名とした。またアルファベットの冒頭には七日市遺跡Ⅲ次調査のⅢを付した。（本報告書では地区名のⅢを省略して記述している）

調査方法は、機械掘削により耕作土・クロボク層を除去し、A.T.層あるいは下層の灰白色シルト層上面で遺構を検出した。また確認調査を含む旧石器時代の調査については、原則として人力により基盤となる礫層まで掘り下げた。

調査の記録のうち、上層面遺構の実測は空中写真測量（縮尺1/20）を行ない、下層の旧石器時代については、遺物の取り上げに、（株）京都コンピューターシステムのＳＩＴＥⅡおよびアジア航測株式会社石器取り上げシステムを使用した。このシステムはＰ・Ｑ・Ｒ地区の上層遺構平面実測にも試験的に用いた。また写真記録は、ヘリコプターによる空中写真撮影および足場による個別遺構の撮影を行った。

平成5年度調査

確認調査（平成5年5月7日～7月26日・平成6年1月11日～13日）

確認調査は春日インターチェンジ取り付き部分にあたる野村地区から西側に延びる計画路線内のうち下野村地区までの区間で行った。調査は幅1ｍのトレンチを中心に、その周囲に2×2ｍの坪を配置し、遺跡の広がりを確認する方法をとった。

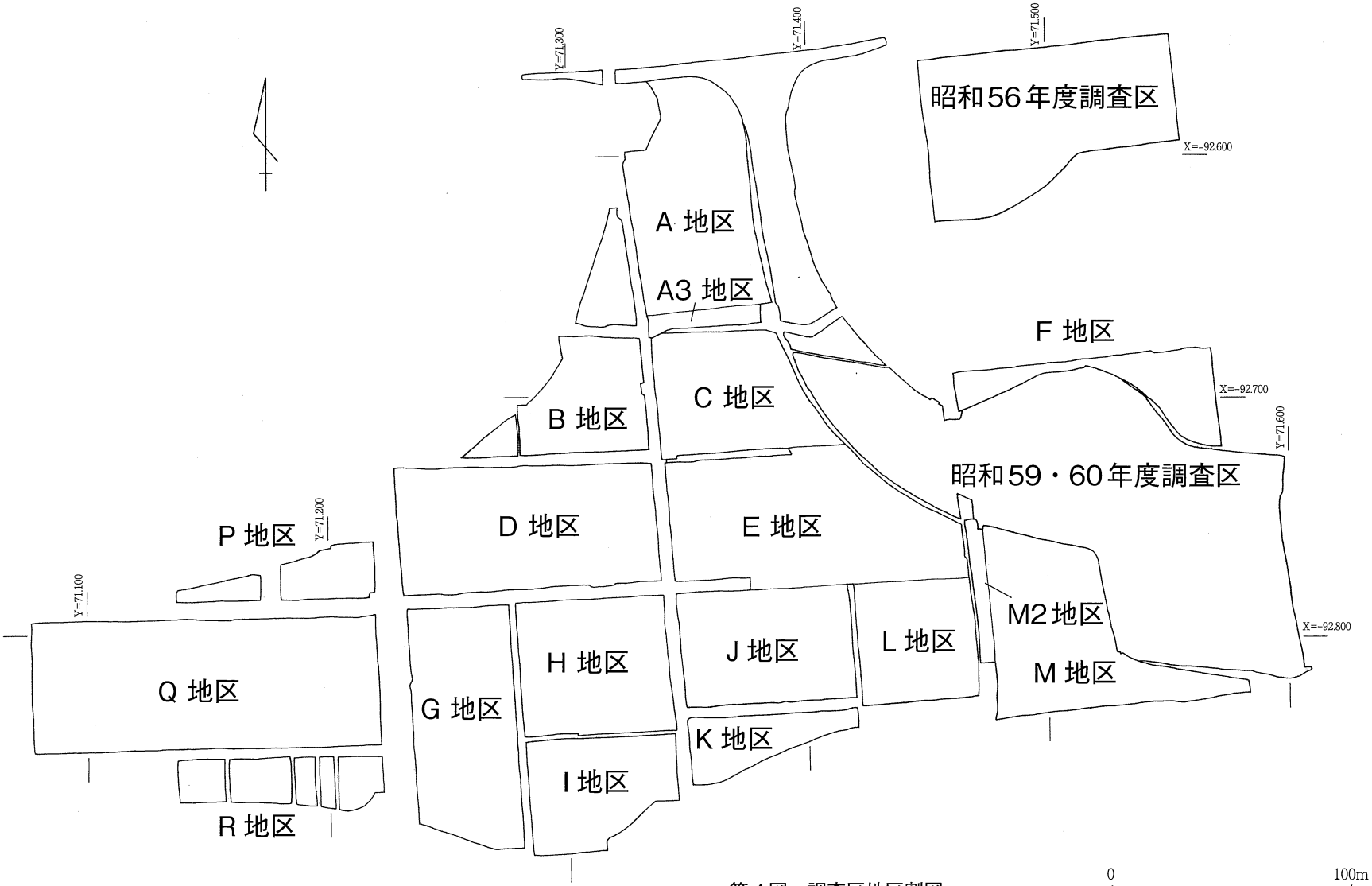
調査は20本のトレンチと141カ所の坪を配置し、遺跡の広がりを確認した。確認調査面積は2,172㎡である。調査の結果、一部未買のため調査できなかった部分（L地区・下野村集落内）を除き、野村地区の計画路線内は、ほぼ全域で弥生時代～平安時代の遺構が確認されたほか、新たに下野村地区の西側で弥生時代後期の集落跡を発見し西野々遺跡（後に下野村遺跡と改名）と命名した。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

村上泰樹、山本　誠・多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）

その後、下野村集落内にある未買収地区の一部で確認調査が可能になったため、トレンチによる確認


Y=71.300
Y=71.400
Y=71.500
昭和56年度調査区
X=-92.600
A 地区
A3 地区
F 地区
B 地区
C 地区
X=-92.700
Y=71.600
昭和59・60年度調査区
D 地区
E 地区
P 地区
Y=71.200
Y=71.100
M2地区
M 地区
X=-92.800
Q 地区
G 地区
H 地区
J 地区
L 地区
K 地区
I 地区
R 地区
0
100m

第４図　調査区地区割図

調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物ともに発見されず、七日市遺跡は、下野村集落までは及ばない可能性がでてきた。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

村上泰樹

本発掘・確認調査（平成5年9月1日～平成6年3月3日）

国道175号線の取り付き部分にあたる、A地区・B地区の上層遺構（弥生時代）と下層（旧石器時代）の確認調査を実施した。上層では、A地区で弥生時代中期を中心とした竪穴住居跡、B地区では方形周溝墓・木棺墓などを検出し、居住域と墓域の関係を知る手がかりが得られるなどの成果があった。12月には現地説明会を開催し、一般に公開した。

上層遺構の調査が終了した段階で、調査区内に10m方眼のグリッドを設定し、1グリッド内に1カ所の割合で1×4mのトレンチを設定した。その結果、66カ所のトレンチを設定し、確認調査を行った。

調査の結果、A・B地区内に設定したトレンチよりナイフ形石器、楔形石器等の石器が出土し、両地区内に旧石器時代の文化層が存在することが明らかになった。

上層の本発掘調査面積7,229㎡、下層の確認調査面積262.5㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

村上泰樹、山本　誠・多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）

平成6年度調査

本発掘・確認調査（平成6年5月25日～平成6年10月6日）

本年度はD地区上層（弥生時代・平安時代）の本発掘調査および、下層（旧石器時代）の確認調査を実施した。調査の結果、D地区上層では、弥生時代中期後半を中心とした土壙墓・木棺墓等の遺構のほか、平安時代後期の掘立柱建物跡を検出し調査した。

この成果は8月に現地説明会を開催し一般に公開した。

下層の旧石器時代の確認調査は、10m方眼のグリッドごとに1×4mのトレンチを59カ所配置した。調査の結果、7カ所のトレンチでナイフ形石器などの石器が出土し、同地区にも旧石器時代の文化層が存在することが明らかになった。

上層の本発掘調査面積5,422㎡、下層の確認調査面積224㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

村上泰樹、山本　誠・多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）

平成7年度調査

確認・本発掘調査（平成7年9月4日～平成8年1月26日）

平成7年度は、P・Q・R地区の本発掘調査と、同地区の旧石器確認調査を実施するとともに、未確認調査地区であるQ地区より西側、下野村集落の区間の確認調査を実施した。

P・Q・R地区の本発掘調査の結果、平安時代後期の掘立柱建物群を検出した。また同地区の下層、

旧石器時代確認調査は、10m方眼のグリッドごとに1×４mのトレンチを104カ所配置した。調査の結果、石器等の遺物は出土せず、文化層は確認できなかった。

Q地区より西側部分の確認調査は、6本のトレンチを設定し調査した。上層面で遺構が確認できなかったため、下層（旧石器時代）まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに無かった。

P・Q・R地区の本発掘調査面積は9,903 ㎡、同地区旧石器時代確認調査面積416 ㎡、未調査区確認調査161 ㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第１班

山下史朗・多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）

平成８年度調査

本発掘調査（平成8年6月4日～9月6日）

平成５年度に実施した確認調査で新たに発見された下野村遺跡の本発掘調査を行った。下野村遺跡は、当初その所在が下野村地区に隣接する西野々地区内にあるとの認識で西野々遺跡と呼称した。しかしその後の調査で下野村地区に該当することが判明し、この調査以後下野村遺跡と名称を改めた。

調査の結果、弥生時代後期の土抗・溝、弥生時代後期～古墳時代前期の流路を検出した。

本発掘調査面積は11,300 ㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

中川　渉、多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）、岡　昌秀（現県立神戸北高等学校）

本発掘調査（平成8年6月10日～12月26日）

平成5年度に上層面（弥生時代以降）の調査を終了したＡ地区の旧石器時代の本発掘調査を実施した。調査は調査対象区を国土座標に沿って南北、東西とも10ｍの小区画に地区割りし、各地区の北側および東側に幅１ｍのトレンチを設定した。全面を掘り下げる前にこれらのトレンチを先行して掘り下げ、石器の分布状況および掘削深度を把握した。その後掘削を開始し、石器の分布状況および文化層を明らかにした。この結果、当該地区では、3層の文化層を確認し、8カ所のブロックを検出した。

石器はナイフ形石器・局部磨製石斧をはじめ約1,300点出土した。旧石器時代の本発掘調査面積は、4,836㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

山下史朗・山本　誠（現兵庫県教育委員会文化財室）、長濱誠司

本発掘・確認調査（平成8年9月2日～平成9年3月19日）

Ａ３・Ｃ・Ｅ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ２地区の上層面の本発掘調査と各地区の旧石器時代の確認調査を実施した。このうち今回の確認調査によって旧石器時代の文化層が発見されたＭ２地区の旧石器時代の本発掘調査も実施した。

上層面（弥生時代以降）の本発掘調査では、弥生時代中期後半から終末期の竪穴住居や方形周溝墓、平安時代の溝を検出した。上層面の調査が終了した平成９年2月1日には現地説明会を開催し、一般に公開した。

下層（旧石器時代）の確認調査は、調査対象地区全域に10ｍ方眼のグリッドを設定し、各グリッドに1×４ｍないしは1×９ｍのトレンチを128カ所配置した。調査の結果、すべての地区において文化層が存在することが明らかになった。とくにＣ地区北側部分およびＪ地区北側部分では石器の出土が顕著であった。

旧石器時代の本発掘調査を実施したＭ2地区では、A.T.火山灰層の直下で石器が出土した。旧石器時代の調査を含めた本発掘調査面積は15,420㎡、旧石器時代の確認調査面積は1,013㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

中川　渉、多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）、岡　昌秀（現県立神戸北高等学校）

本発掘・確認調査（平成8年2月2日～平成9年3月19日）

Ｍ・Ｆ地区の上層面（弥生時代以降）の本発掘調査と各地区の旧石器時代の確認調査を実施した。

上層面の調査の結果、弥生時代中期～末の竪穴住居・円形周溝墓等、奈良・平安時代の掘立柱建物群を検出した。

下層旧石器時代の確認調査は、近畿自動車道舞鶴線インターチェンジ部分の調査成果により、当地区まで文化層が及ぶことが明らかであったため、Ｍ地区の南端にトレンチ2本を設定し調査したところ、文化層を確認した。この結果、旧石器時代文化層は全域に広がることが明らかになった。

上層面の本発掘調査面積は5,192㎡、下層の旧石器時代確認調査は196㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

山下史朗・山本　誠（現兵庫県教育委員会文化財室）、長濱誠司

平成９年度調査

本発掘・確認調査（平成9年5月12日～10月7日）

Ｇ・Ｈ・Ｉ地区の上層面（弥生時代以降）の本発掘調査と当地区の旧石器時代の確認調査を実施した。

上層面の調査の結果、Ｈ地区で弥生時代中期前半の竪穴住居等を検出したほか、Ｇ・Ｈ地区では平安時代の掘立柱建物群を検出した。

下層（旧石器時代）の確認調査は、調査対象地区全域に10ｍ方眼のグリッドを設定し、各グリッドに1×４ｍないしは1×９ｍのトレンチを86カ所配置した。調査の結果、Ｇ地区北半部分とＨ地区において文化層が存在することが明らかになった。

上層面の本発掘調査面積は9,868㎡、下層の旧石器時代確認調査は359㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

中川　渉、多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）、岡　昌秀（現県立神戸北高等学校）

本発掘調査（平成９年5月20日～平成9年11月21日）

すでに上層面（弥生時代以降）の調査が終了したＦ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ地区の旧石器時代の本発掘調査を行った。

調査は調査対象区を国土座標に沿って南北、東西とも10ｍ（一部20ｍ）の小区画に地区割し、各地区の北側および東側に幅１ｍのトレンチを設定した。全面を掘り下げる前にこれらのトレンチを先行して

掘り下げ、石器の分布状況および掘削深度を把握した。全面的な掘り下げに先立ち、A.T.火山灰層の上面まで下げ、火山灰降下時の地形復元を行った。その後掘削を開始し、石器の分布状況および文化層を明らかにした。

調査の結果、２層の文化層（第2文化層・第4文化層）を確認することができた。各調査区で石器ブロックを確認することができ、局部磨製石斧等が出土した。

本発掘調査面積は10,527 ㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第１班

山下史朗・山本　誠（現兵庫県教育委員会文化財室）、守岡克倫（現兵庫県立兵庫工業高等学校）

本発掘調査（平成９年10月20日～平成10年２月10日）

平成５年度に上層面（弥生時代以降）の本発掘調査が終了したＢ地区の旧石器時代の本発掘調査を行った。

調査は、クロボク層およびA.T.層を重機で除した後、調査対象区を国土座標に沿って南北、東西とも10ｍの小区画に地区割りし、各地区の北側および東側に幅１ｍのトレンチを設定した。これらのトレンチを掘り下げ、石器の分布状況を把握した後、石器集中部分は人力で掘削し、それ以外は重機で基底層（礫層）まで掘り下げた。石器の出土位置の記録には、アジア航測株式会社が開発した遺物取り上げシステムを使用した。

調査の結果、A.T.火山灰層下位より文化層（第２文化層）が確認され、1カ所の石器ブロックが確認された。このブロックよりハンマーをはじめ、総数809点の石器が出土した。

また遺構として、焚火跡と推定できる炭化材集中地点が発見された。

本発掘調査面積は2,249 ㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第１班

中川　渉、多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）

本発掘調査（平成９年11月17日～平成10年３月20日）

平成８年度に上層面（弥生時代以降）の本発掘調査が終了したＡ３・Ｃ・Ｅ地区の旧石器時代の調査を実施した。

調査は、調査対象区を国土座標に沿って南北、東西とも10m（一部20m）の小区画に地区割りを行った。Ｃ・Ｅ地区については、A.T.火山灰層の上面を検出し火山灰降下時の地形を復元した。その後、各小区画内の北側および東側に幅１ｍのトレンチを設定し掘り下げた。トレンチにより石器の分布状況や掘削深度を把握した後、全体を掘り下げた。

調査の結果、文化層（第２・３文化層）を確認し、３カ所のブロックを検出した。石器はナイフ形石器・スクレイパー等約400点出土した。平成10年３月14日には現地説明会を開催し一般に公開した。

本発掘調査面積は8,933 ㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第１班

山下史朗・山本　誠・多賀茂治（現兵庫県教育委員会文化財室）、守岡克倫（現兵庫県立兵庫工業高等学校）、岡　昌秀（現県立神戸北高等学校）

平成10年度調査

本発掘調査（平成10年5月22日～12月10日）

平成6・9年度に上層面の調査が終了したD・G・H地区の旧石器時代の本発掘調査を行った。

調査は、調査対象区を国土座標に沿って南北、東西とも10m（一部30m）の小区画に地区割りを行った。調査に先立ちA.T.火山灰層の上面を検出し火山灰降下時の地形を復元した。その後、各小区画内の北側および東側に幅1mのトレンチを設定し掘り下げた。これらのトレンチにより石器の分布状況や掘削深度を把握した後、全体を掘り下げた。

調査の結果、1層の文化層（第2文化層）を確認し、6カ所の石器ブロックを識別することができた。石器は局部磨製石器をはじめ約590点出土した。

本発掘調査面積は12,153㎡である。

調査体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第1班

久保弘幸・山本　誠（現兵庫県教育委員会文化財室）、守岡克倫（現兵庫県立兵庫工業高等学校）

以上の調査を経て、七日市遺跡Ⅲの調査を全て終了した。

平成10年8月29日～9月27日の期間、これまでの調査成果を総括し広く一般に公開するため、地元春日町歴史民俗資料館において特別展「3万年のメッセージ　七日市遺跡」が開催された。また9月15日には「シンポジウム『3万年のメッセージ　氷上回廊－七日市遺跡－』」も開催され、七日市遺跡の歴史的価値について活発な討議がなされた。この成果は、春日町歴史民俗資料館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の編集で、平成12年に『三万年のメッセージ　七日市遺跡と「氷上回廊」』として春日町歴史民俗資料館より発行されている。

第3節　七日市遺跡（Ⅲ）の整理作業

七日市遺跡の整理作業は発掘調査時に室内での土器洗浄とネーミング作業から開始された。本格的な作業は調査終了後、埋蔵文化財調査事務所および同事務所魚住分館において行った。七日市遺跡は出土遺物数量が多いため、整理作業は弥生～平安時代の調査を対象とした「七日市遺跡（Ⅲ）その1」と旧石器時代の調査を対象とした「七日市遺跡（Ⅲ）その2」の2つに分けて実施した。「七日市遺跡（Ⅲ）その1」は平成12年度から4ヵ年で、「七日市遺跡（Ⅲ）その2」は平成13年度から3ヵ年で整理作業を進め、いずれも平成15年度を最終年度とし、調査報告書の刊行を目指した。「七日市遺跡（Ⅲ）その1」では、七日市遺跡に隣接する下野村遺跡の整理作業も含めて行った。

なお事業の性格から、委託機関は調査時の建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所から日本道路公団関西支社になり、契約を結んで作業を実施した。

各年度の作業と体制は下記のとおりである。

平成12年度

出土遺物のネーミングから土器の接合・補強を行い、実測する遺物の選別を行う。

整理の体制

調整担当　　主査　岡田章一

工程管理担当　主任　深江英憲
編集担当　　主任　多賀茂治
非常勤嘱託員　西口由紀　眞子ふさ恵　中田明美　西野淳子　横山キクエ　中西睦子　竹内泰子　嘉戸篤子　宮野正子　前田恭子

平成13年度

遺物の実測を行い、実測終了したものから写真撮影のため土器の復元を行う。

整理の体制

調整担当　　主査　岡田章一
工程管理担当　主査　菱田淳子
編集担当　　主査　多賀茂治
非常勤嘱託員　吉田優子　島村順子　石野照代　河上智晴　藤井光代　蓬莱洋子（復元作業）
森本貴子　高田めぐみ　高瀬敬子　垣本明美　（土器実測）
古谷章子　佐伯純子　佐々木誓子　長川加奈子　溝上くみ（石器実測）

平成14年度

遺物写真撮影と遺構図補正・トレース、また出土金属器の保存処理を行った。

整理の体制

調整担当　　主査　村上泰樹
保存処理担当　主査　加古千恵子
工程管理担当　主査　菱田淳子
編集担当　　主査　長濱誠司
非常勤嘱託員　森本貴子　高田めぐみ　高瀬敬子　垣本明美　（遺構・土器トレース）
古谷章子　佐伯純子　佐々木誓子　長川加奈子　溝上くみ（石器トレース）
西野淳子　三好綾子　藤井光代　三島重美（保存処理担当）

平成15年度

レイアウトから刊行までの作業を行う。担当職員は原稿の執筆に専念した。

整理の体制

調整担当　　主査　村上泰樹
工程管理担当　主査　長濱誠司
編集担当　　同上
非常勤嘱託員　森本貴子　古谷章子　高田めぐみ　高瀬敬子　垣本明美

第４節　普及活動

七日市遺跡は兵庫県内でも有数の遺跡であるため、調査当初より普及活動には力を入れ、調査成果の公表については、積極的に行う方針で調査を行った。各年度においては機会のあるごとに現地説明会を

開催したほか、地元小学校などの見学を随時受け入れた。また調査担当職員は『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』などへの執筆や各種研究会での発表などを通じて考古学研究者への資料提供も行っている。

1．現地説明会

各調査は、原則として上層遺構面（弥生～平安時代）の本発掘調査、下層遺構面（旧石器時代）の確認調査の順で行っている。上層遺構面の調査が最終段階となった時点で調査成果の新聞発表を行い、現地説明会を行った。

弥生～平安時代の調査を対象とした現地説明会は下記の３回実施しているが、これとは別に平成８年度から10年度には旧石器時代を対象とした現地説明会も開催している。この説明会にも弥生～平安時代の出土遺物を展示している。

・平成５年12月19日　Ａ・Ｂ地区を対象に行った。竪穴住居群と大型の円形周溝墓を公開した。
・平成６年８月27日　主にＤ地区を対象とし、過去の調査成果と合わせて発表した。
・平成９年２月１日　主にＣ・Ｅ・Ｌ地区の方形周溝墓群を対象に過去の調査成果と合わせて発表した。
　またＭ地区の発掘作業中の様子も公開した。

2．特別展・シンポジウム

6年にも及ぶ七日市遺跡の発掘調査の最終年度となった平成10年度に七日市遺跡の調査成果を公表するため、地元春日町歴史民俗資料館と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が共催し、春日町の文化祭の一環として8月29日～9月27日の間、平成10年特別展「３万年のメッセージ　七日市遺跡」を春日町歴史民俗資料館で行った。

展示期間中の9月15日には資料館に隣接する春日町文化ホールにおいて「シンポジウム『３万年のメッセージ　氷上回廊－七日市遺跡－』」を開催した。国立歴史民俗博物館佐原真館長による記念講演と、関西大学博物館山口卓也学芸員、大阪大学文学部福永伸哉助教授、奈良国立文化財研究所山中敏史集落遺跡研究室長をパネラーに迎え、シンポジウムを実施した。当日は、春日町民はもとより京阪神や遠く九州から500名を超える参加者があった。またこのシンポジウムの記録を中心とした『三万年のメッセージ　七日市遺跡と「氷上回廊」』が平成12年3月に刊行された。

なおこの特別展やシンポジウムは建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所の協力を得て実施している。

（肩書き、機関名は当時のもの）

第2章　遺跡の環境

第1節　　地理的環境

七日市遺跡は兵庫県の東北部、氷上郡春日町七日市・野村・棚原に所在する。氷上郡のほぼ中央部を一級河川である加古川が南流し、柏原町･氷上町の周辺には氷上盆地と呼ばれる低地が形成されている。この氷上盆地の東側に位置する春日町は、周囲を譲葉山・三尾山・妙高山・城山・五大山などの標高300～500ｍ級の山々に囲まれている。山々の間には、春日町南東部に位置する野瀬集落あたりに端を発する竹田川、春日町の西側に隣接する氷上町石生地区に形成された谷中分水嶺に源をもつ黒井川が東進する。竹田川・黒井川両河川の周囲には幅500～800ｍの範囲で５面の段丘あるいは埋没段丘が形成され、また山際には扇状地が発達している。竹田川は、七日市遺跡の東側を北向きに流下し、遺跡の北側に位置する多田集落で黒井川と合流し、京都府福知山付近で由良川と合流する。

七日市遺跡は、この竹田川と黒井川の合流地点の南側約1.5kmの地点を中心に、推定で南北方向約1 km、東西方向0.8kmの範囲に展開する遺跡である。

１．七日市遺跡周辺の地形（第５図・図版１）

青木哲哉氏の作成した竹田川・黒井川流域の地形分類図（青木哲哉　1990）によると、七日市遺跡およびその周辺の地形は、埋没段丘（段丘Ⅳ）・段丘（段丘Ⅴ）・扇状地に分類されている。七日市遺跡の中心部分は埋没段丘（段丘Ⅳ）であり、その東縁辺部が段丘Ⅴ、西縁辺部は扇状地となっている。青木氏によれば段丘Ⅳは、遺跡の南東側約３kmに位置する国領集落から竹田川沿いに高度を下げ、棚原集落を経て七日市遺跡の南側で、段丘Ⅴ面の下に埋没すると考えられている。

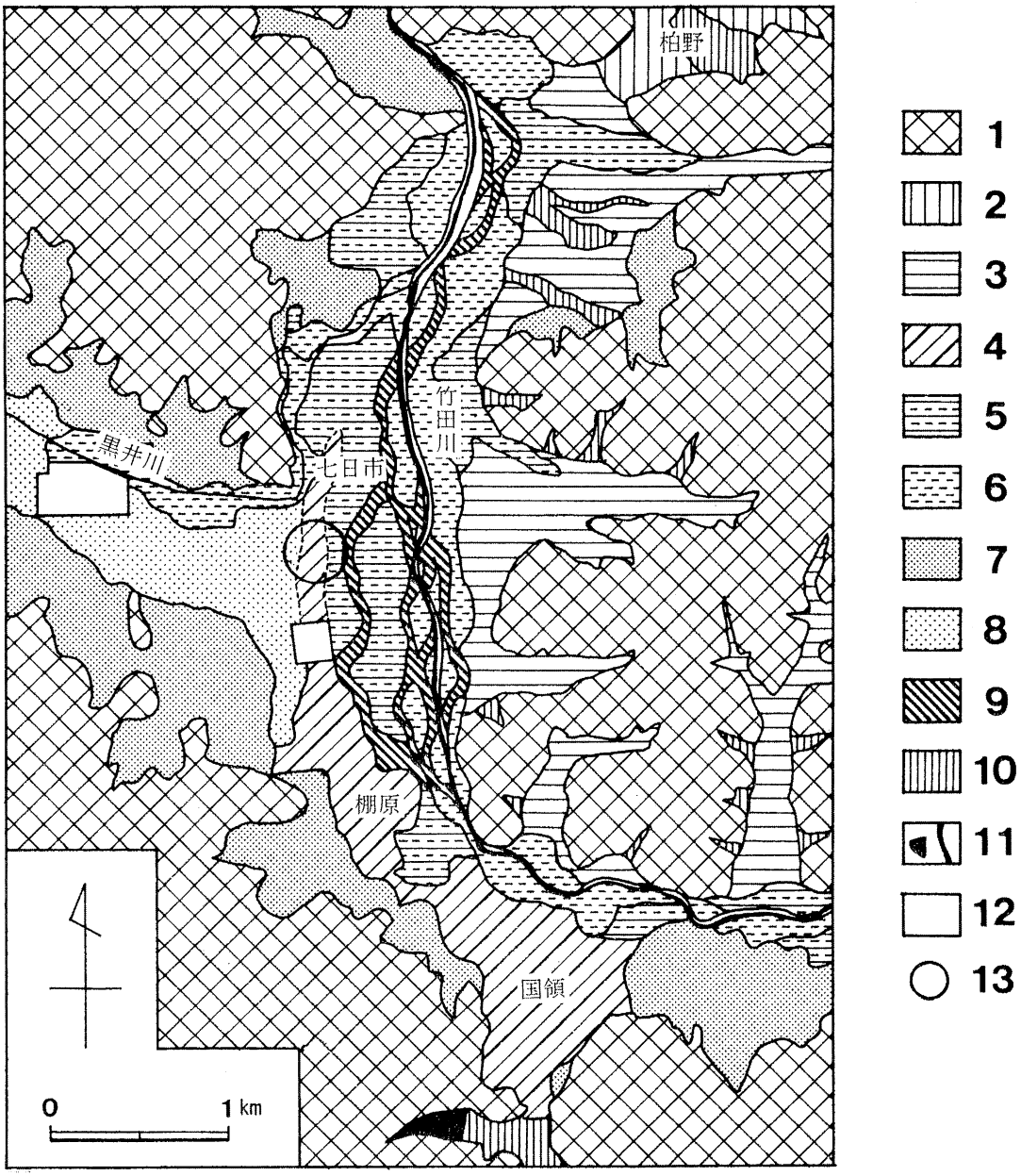
図版１は遺跡周辺の微地形復元図である。この微地形図によって､七日市遺跡周辺の地形を概観する。七日市遺跡の南西部は105ｍ～90ｍの等高線が北東方向に向かって張り出した状況を示している。この間の等高線の間隔も狭く、おおよそ標高90ｍラインを境にして等高線の間隔は広がる傾向が看取れる。青木氏の地形分類による、扇状地形を示すと理解できる。この90ｍラインより南側は緩やかな傾斜が認められ、この扇状地先端に下野村遺跡は立地している。

七日市遺跡周辺部に目を向けると､調査区の中央付近と東側部分に南北方向に走る凹地が確認できる。とくに東側部分の凹地は場所によって異なるが西側の高位部分より0.40～１ｍ程度低くなっている。この凹地より東側、竹田川の間は北方向に張り出した微高地が認められる。この微高地上に東端には、飛鳥・藤原期の山垣遺跡が立地している。

青木氏の解釈にしたがえば、七日市遺跡調査区中央部の凹地は扇状地との境、東端の凹地が旧河道、両凹地間が段丘Ⅳ、東端の凹地より東側が段丘Ⅴに相当すると理解できる。

２．七日市遺跡の地形と層序（第６図～第８図）

以上、青木氏の業績を踏まえ、微地形復元図をもとに遺跡周辺の地形について述べた。ここでは、調査区内の弥生時代以降（弥生時代中期前半以降）の層序と微地形について述べる。旧石器時代の地形および層序についてはここでは触れない。



（青木哲哉　1990）

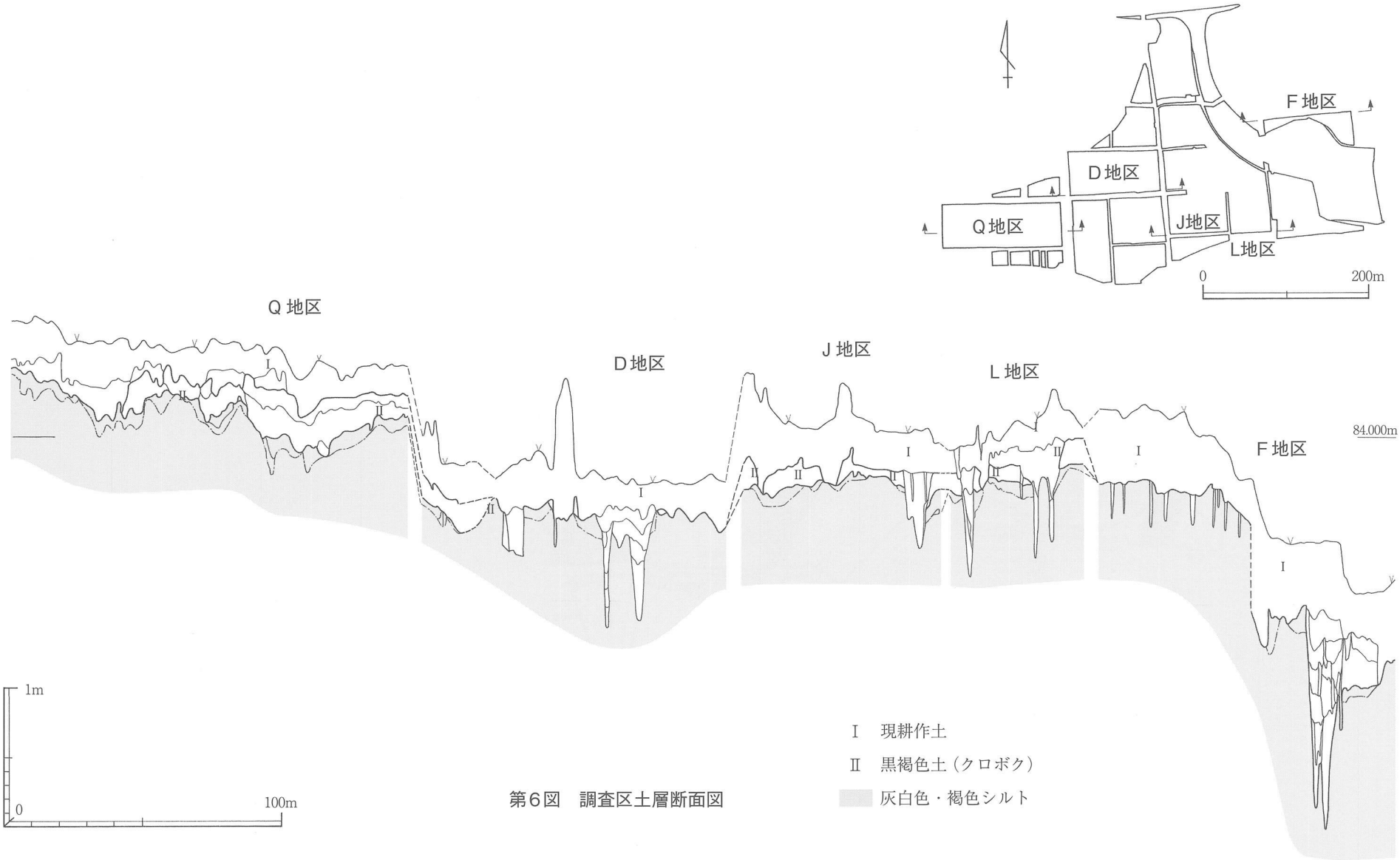
1．山地　2．段丘Ⅰ　3．段丘Ⅱ　4．段丘Ⅳ（境界線が破線の部分は埋没している）

5．段丘Ⅴ　6．現氾濫原　7．崖錐・土石流　8．扇状地

9．旧河道　10．開析谷　11．溜池・河川　12．人工改変地

13．七日市遺跡

第5図　七日市遺跡周辺の地形分類図



第6図　調査区土層断面図

第7図　調査区内コンタ図（1）

七日市遺跡の基本層序は、上層よりⅠ．耕作土、Ⅱ．黒褐色土である。これより下層は姶良・丹沢火山灰（A.T.）層、灰白色・褐色シルト、砂礫層の順で堆積している。Ⅱ層より下層は、旧石器文化層である。

弥生時代中期以降の遺構は基本的にⅡ層上面より切り込まれている。現実には遺構はⅡ層、A.T.層、灰白色シルト層上面で検出している。これは後世の水田化により、遺構が占地する微高地が削平されたことに起因している。遺構検出面であるⅡ層は、所謂「クロボク」と呼ばれている黒褐色土層である。クロボクの成因については明らかにされていないが、その堆積時期は弥生時代中期前半段階まで遡ることが、今回の調査で明らかになった。

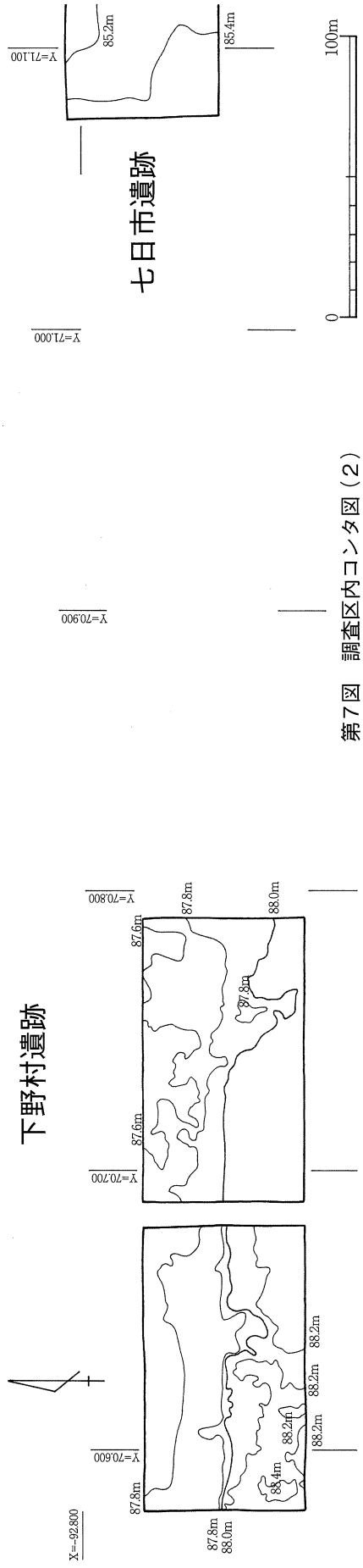
第７・８図は弥生時代・奈良時代・平安時代の遺構を検出した面の等高線図（20㎝コンタ）である。これによると、七日市遺跡の調査区は、大きく３カ所の微高地に分かれる、ひとつは調査区南西隅を最高位として北東方向に延びる部分、二つ目は調査区中央の南端部を最高位として北側に延びる部分、三つ目は調査区南東端を最高位として北方向に延びる部分である。そして、これら微高地の間には旧河道が南北方向に流れ、それぞれの微高地を画している。

調査区西側の微高地（扇状地）は、南西隅と北東隅では約1.4ｍの比高差で傾斜し、中央部のそれは、南端部と北端部では約1.4ｍの比高差がある。また東側の微高地は南北方向の比高差は40㎝程度である。とくに東側微高地では旧河道を挟んだ東側は0.4～1.4ｍの比高差で下がっている。

東微高地より東側が旧河道および段丘Ⅴに、中央部の微高地が段丘Ⅳ、西側の微高地が扇状地に大別できる。

各微高地境界を南北方向に流れる旧河道群は調査の結果、西側の旧河道は弥生時代中期段階の遺構を切っており、少なくとも奈良時代までには埋没している。中央部の旧河道は弥生時代中期～終末期にかけて存続しており、比較的短期間に埋没している。東側の旧河道は、弥生時代中期～中期後半に段階的に洪水（砂礫層）がおこり、古墳時代中期～後期にかけては緩やかな堆積（シルト層）があった状況が看取できる。そして飛鳥時代には埋没している。

調査区の中央および東側を南北方向に延びる２本の微高地（段丘Ⅳ）上には、弥生時代中期を中心とする集落が展開している。両微高地の西側と東側にはそれぞれ旧河道が流れ、



第７図　調査区内コンタ図（２）

集落を限っている。両微高地の境には2条の小さな旧河道が流れ、この旧河道と調査区西側にある扇状地との境を流れる旧河道との間は、方形周溝墓群を中心とした墓域として利用されている。居住域は、この微高地の北側および東側に占地している。

両微高地の間を流れる旧河道は、弥生時代終末期には埋没し、2 つの微高地はひとつの大きな微高地に変化する。飛鳥時代～奈良時代になると、この微高地の東半部に建物群が集中する。このころには、調査区東端部の段丘Ⅳと段丘Ⅴの境を流れる旧河道は埋没する。

平安時代後期の集落は調査区西側の扇状地上に移る。調査の結果、この扇状地の東側、段丘Ⅳとの境を流れる旧河道は、このころには埋没していたと考えられる。しかし主な遺構がこの旧河道より西側に展開している点を考慮すると、旧河道は埋没化が進みながらも小さな河川として機能し、集落の東限を画したのかもしれない。

弥生時代以降の七日市遺跡は、こうした地形的制約のなかで成立し、その後この地形を利用し、そして衰退した遺跡である。

参考文献

青木哲哉　1990『七日市遺跡（Ⅰ）（旧石器時代の調査）－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅻ－1）』兵庫県教育委員会

第2節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

氷上郡内では当該期の明らかな遺跡はほとんどなく、少量の遺物が採集されているにすぎない。

調査の行われた旧石器時代の遺跡としては、七日市遺跡(1)の他に市島町梶原遺跡(67)があり石器製作跡を検出している。また七日市遺跡の南東約8㎞、篠山盆地に所在する板井寺ケ谷遺跡は、A.T.火山灰層の上下で石器製作跡などが検出された。このうち下層ではサヌカイト製石器ブロックとチャート製石器ブロックが検出され、遺跡内に2つのグループが共存していたと想定されている。

縄文時代は七日市遺跡では空白の時期となっているが、南側に所在する国領遺跡(7)で草創期の石器製作跡を検出している。下野村遺跡(2)や竹田川右岸の多利小向遺跡では土器が出土している。市島町高坂古墳群では古墳の下層から縄文時代晩期の遺構を検出した。梶原遺跡でも縄文土器が出土している。

弥生時代

市島町的場遺跡（74)、氷上町横田遺跡(55)からは前期の土器が出土し、隣接して集落が所在すると考えられる。中期に入ると七日市遺跡は最盛期を迎える。竹田川右岸の山裾に位置する野々間遺跡(5)からは2口の銅鐸が埋納された状態で出土しているが、この銅鐸は七日市遺跡で祭祀に用いられたものと考えられている。国領遺跡は七日市遺跡遺跡が衰退する後期に入って集落が営まれる。的場遺跡、横田遺跡は住居も検出され、弥生時代を通じて断続的ながら集落が営まれていたようである。また出土した後期の土器は京都丹波地域や山陰地域のものと似た様相を呈し、周辺地域との交流を物語る。氷上町犬岡遺跡(60)では後期の土器、木器が多量に出土し、近接地に集落が想定される。柏原町大新屋遺跡（46）でも後期の住居が検出されている。墳墓では七日市遺跡北側の丘陵上に東山墳墓群（23）がある。また的場遺跡に隣接する市島町上ノ段遺跡（75）では末期の周溝墓、木棺墓を検出している。

古墳時代

氷上郡内の前期古墳としては山南町丸山１号墳、氷上町親王塚古墳（32）がある。いずれも河川を掌握する地に築かれ、卓越した規模を有する。前・中期の地域の小首長墓と考えられる古墳としては、比較的大型の古墳で構成される柏原町おさんの森古墳群（44）、方挌規矩鏡の出土が伝えられる萱刈坂古墳群（52）、竪穴式石室から捩文鏡が出土した市島町久良部１号墳（72）などがある。柏原町山根２号墳（49）も竪穴式石室から銅鏃が出土し前期古墳の可能性がある。氷上町明治山古墳（59）、横田山古墳（54）は山頂に立地し、箱式石棺を埋葬施設とする古墳で前期から中期に属すると推定される。春日町域では現在、前・中期の古墳は確認されていない。

後期に入ると山裾に多数の小規模古墳が築かれる。氷上町親王塚北野古墳群、柏原町七ツ塚古墳群（48）など大規模な古墳群もあるが、春日町域では数基の小規模古墳からなる古墳群が点在している。二間塚古墳（26）、桂谷寺古墳（25）、稲塚大塚古墳（22）は後期の小型前方後円墳である。多利向山古墳群（27）、火山古墳群（10）は群内に木棺直葬墳と横穴式石室があり、埋葬施設の変遷が伺える。坂古墳群（31）の横穴式石室は奥壁の石材を側壁の一部にかませる「角詰め」技法を用いている。

郡内の集落遺跡としては、柏原町域では三原遺跡（41）、三原西遺跡（42）、見長遺跡（39）、大新屋遺跡がありいずれも背後に大規模な古墳群がある。市島町域では三ツ塚遺跡（71）、上ノ段遺跡、梶原遺跡があるが、検出された住居の中には「青野型住居」と呼称されるものがあり、由良川流域との関係が伺える。春日町域では七日市遺跡をはじめ当該期の集落は確認されていない。

生産遺跡としては市島町鴨庄古窯跡群（68）が7世紀前半から須恵器生産を開始する。

奈良・平安時代

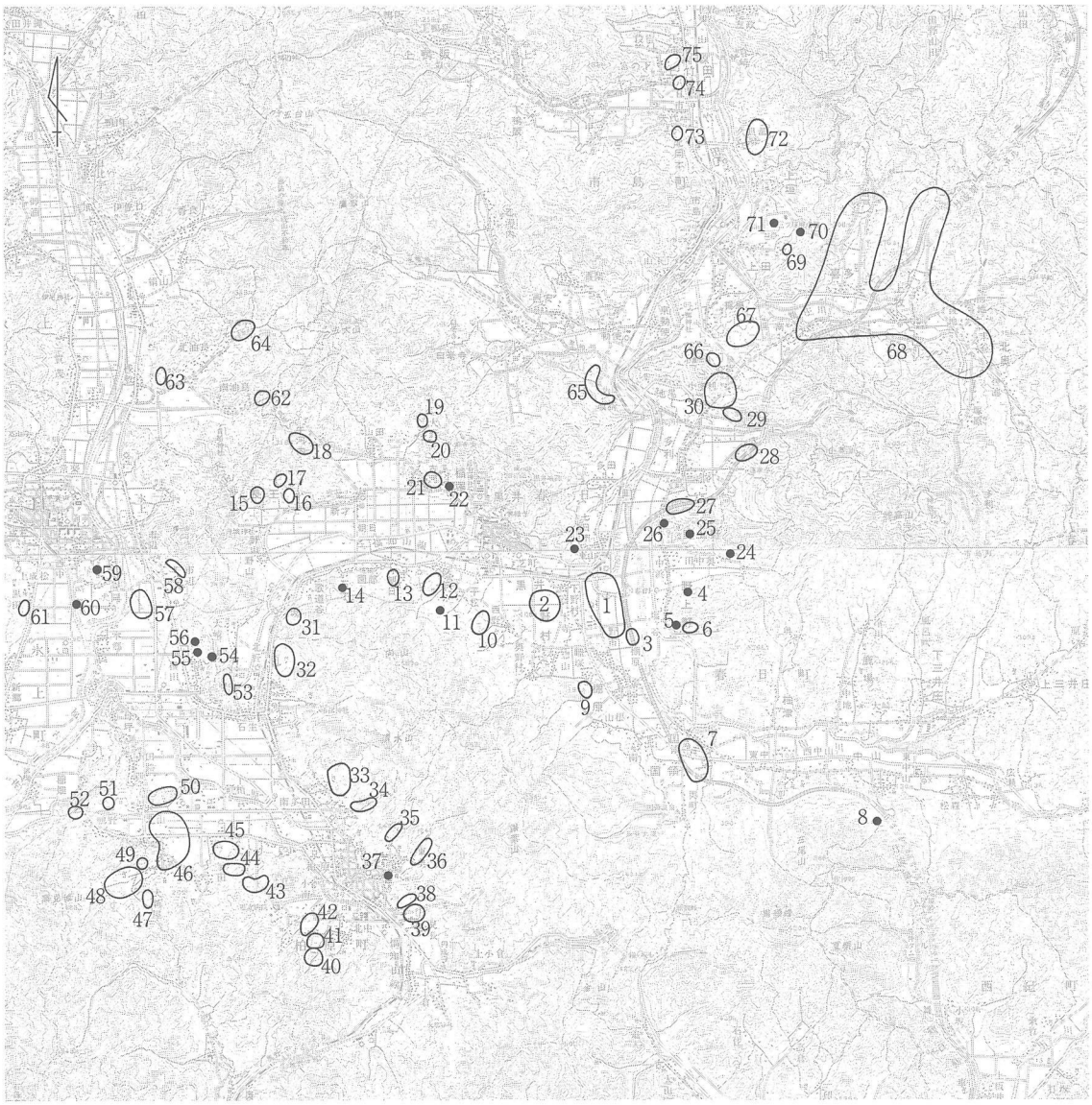
七日市遺跡は丹波国氷上郡春日郷に所在する。氷上郡内は古代山陰道が通過し、星角駅家、佐治駅家の２駅が設置されている。また山陰道から丹後国府へ至る丹後道が分岐する。星角駅家はその遺構自体は確認されていないが氷上郡衙推定地である氷上町氷上から石生付近に所在したと推定される。市辺遺跡（57）は郡衙推定地に隣接し、古代山陰道と加古川に面する。奈良時代の建物群が検出されたほか、銅印、皇朝十二銭、木簡などが出土した。古代寺院は市島町三ツ塚廃寺（71）が郡内で唯一確認されている。発掘調査の結果、伽藍配置は金堂と左右の塔が一直線上に並ぶ「新治廃寺式」であることが明らかとなり、また隣接地では寺院の瓦を生産した天神瓦窯（70）も確認されている。古代山陰道に面した柏原町柏原陣屋遺跡（37）では下層で礎石建物を検出しており、官衙または寺院が想定される。七日市遺跡の南東に近接する山垣遺跡（3）は溝に囲まれた大型建物を検出している。

集落遺跡は氷上町横田遺跡（55）、柏原町三原遺跡、市島町上ノ段遺跡がある。

市島町鴨庄古窯跡群は８～９世紀初頭が生産の中心となる時期であり、三ツ塚廃寺へも製品を供給していたようである。七日市遺跡の対岸に位置する春日町野上野窯跡（24）、野上野瓦窯跡（4）は不明な点も多いが製品が七日市遺跡や三ツ塚廃寺へ供給された可能性がある。郡内での須恵器生産は９世紀以降も行われる。この時期の遺跡として春日町中山窯跡（8）、平松八幡神社窯跡群（11）がある。

参考文献

氷上郡埋蔵文化財調査団・奈良大学文学部考古学研究室『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書』（1）～（3）
氷上郡教育委員会　1994～1996年
各遺跡の調査報告書は割愛した。



第９図　周辺の遺跡（S:1/100,000）

1.七日市遺跡　2.下野村遺跡　3.山垣遺跡　4.野上野瓦窯跡　5.野々間遺跡　6.塩ヶ谷岡田古墳群　7.国領遺跡　8.中山窯跡　9.六ツ塚古墳群　10.火山古墳群　11.平松八幡神社窯跡群　12.平松古墳群　13.朝日八幡山古墳群　14.石才大池遺跡　15.天王稲葉古墳群　16.稲見盾縫神社古墳群　17.長見古墳群　18.牛河内古墳群　19.大野氏亀山上古墳群　20.氏亀古墳群　21.古河古墳群　22.稲塚大塚古墳　23.東山墳墓群　24.野上野窯跡　25.桂谷寺古墳　26.二間塚古墳　27.多利向山古墳群　28.松ノ本古墳群　29.小多利古墳群　30.柏野古墳群　31.坂古墳群　32.親王塚北野古墳群　33.大歳神社古墳群　34.昭和池古墳群　35.藤ノ目古墳群　36.東奥古墳群　37.柏原陣屋遺跡　38.新町古墳群　39.見長古墳群　40.三原古墳群　41.三原遺跡　42.三原西遺跡　43.沖田古墳群　44.おさんの森古墳群　45.挙田B古墳群　46.大新屋遺跡　47.山の神池古墳群　48.七ツ塚古墳群　49.山根古墳群　50.山ヶ端古墳群　51.弁財天古墳群　52.萱刈坂古墳群　53.石生古墳群　54.横田山古墳　55.横田遺跡　56.横田北古墳群　57.市辺遺跡　58.市辺古墳群　59.明治山古墳　60.犬岡遺跡　61.黒田古墳群　62.南油良古墳群　63.桟敷古墳群　64.北油良古墳群　65.長者ヶ野古墳群　66.姫塚古墳群　67.梶原遺跡　68.鴨庄窯跡群　69.天神古墳群　70.天神瓦窯跡　71.三ツ塚遺跡・三ツ塚廃寺　72.久良部古墳群　73.北岡本古墳群　74.的場遺跡　75.上ノ段遺跡

第３章　七日市遺跡の遺構

第１節　Ａ地区の遺構

１．竪穴住居

SH01（図版４　写真図版６）

検出状況　調査区の北端に位置する。住居の北東側はSH04と接している。住居の東側はSH05・06と重複しており、本住居が、これらの住居を切っている。

規模・形態　平面形が方形の住居である。規模は東西方向5.0ｍ、南北方向5.3ｍである。検出面からの深さは0.16ｍである。住居の西壁下および北壁には周壁溝の痕跡を確認した。また住居中央部および東壁下付近で土坑を確認した。主柱穴は４穴である。柱間は東西方向が1.6～2.0ｍ、東西方向が1.6～1.76ｍである。南北方向を主軸とした場合、その方位はN9°Ｅである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・住居内土坑・柱穴がある。

周壁溝　西壁下および北壁下で検出した。西壁の周壁溝は幅0.32ｍ、床面からの深さ0.12㎝である。北壁の周壁溝は、北壁中央付近で、その痕跡を確認した。溝幅0.24ｍ、床面からの深さは5㎝前後と浅い。

中央土坑　住居のほぼ中央に位置する。東西方向0.68ｍ、南北方向0.44ｍと東西方向に長い楕円形を呈する。床面からの深さは、最深部で0.06ｍと浅い。

住居内土坑　東壁中央付近に位置する。平面形が長方形を呈する土坑である。土坑は２段に掘られており、上段の大きさは、東西方向0.68ｍ、南北方向0.48㎝である。下段は、0.32×0.33ｍの規模で、隅丸方形状に掘られている。最深部の深さは、床面より0.33ｍである。

柱穴　主柱穴は４穴で、いずれも円形の掘方である。柱穴の掘方は径0.32～0.48ｍ、床面からの深さは0.16～0.32ｍである。柱痕は径0.16～0.24ｍである。

出土遺物　弥生時代終末期の壺（１・３～５）・甕（２・６～９）・高杯（10）・鉢（11・12）が出土している。

SH02（図版５　写真図版26）

検出状況　調査区の北東部に位置する。住居の東側は調査区外に延びており、住居の南西部分を検出した。SH08とはほぼ重なるかたちで重複しており、SH08を切っている。また住居の南西隅部分は、SH07と重複しているが、重複関係は不明である。

規模・形態　方形ないしは長方形の住居である。規模は東西方向が3.6ｍ以上、南北方向が5.5ｍ以上である。検出面からの深さは、0.08ｍである。

屋内施設　周壁溝のみ確認した。

周壁溝　南壁下および西壁下で周壁溝を確認した。溝幅は0.12～0.24ｍ、床面からの深さは0.10ｍ以下と浅い。

中央土坑　確認できなかった。

柱穴　住居に伴う柱穴はなかった。

出土遺物　弥生時代終末期の壺（13）・甕（14・16）・高杯（15・17）、弥生時代中期後半の高杯（18）と砥石（S179）が出土している。

SH03（図版６　写真図版7）

検出状況　調査区北部の中央付近に位置する。住居の東側にはSH07が近接し。南西側ではSH10と接する。遺存状況が極めて悪く、周壁溝・中央土坑・柱穴のみ遺存していた。

規模・形態　平面形が円形の住居である。主柱穴は５穴である。柱間は2.56～3.2ｍである。うち３穴では柱穴が重複している。また西側の周壁溝の内側で幅0.2ｍ、長さ1.68ｍの周壁溝の痕跡と思われる溝を確認しており、住居の建て替えがあった可能性が考えられる。

屋内施設　周溝および中央土坑、主柱穴を検出した。

周壁溝　住居の東側および西側で周壁溝を検出した。溝幅は0.16～0.24ｍ、検出面からの深さは0.12ｍである。

中央土坑　住居のほぼ中央部に位置する。東西方向0.64ｍ、南北方向0.60ｍの楕円形を呈している。土坑は、西側部分に小さな平坦面をもつが、そのほかはほぼ垂直に掘られている。検出面からの深さは0.76ｍと深い。土坑内の埋土は灰層と考えられ、上下２層に大別できた。上下層とも焼土粒を多く含むが、下層は炭化物を含んでいる。

柱穴　掘方は円形を呈しており、規模は径0.24～0.32ｍ、深さは0.30～0.40ｍである。識別できた柱穴痕は径0.16～0.24ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（19・22）・高杯（21）・鉢（20）が出土している。

SH04（図版７　写真図版８）

検出状況　調査区の北半部、西よりに位置する。住居の南西側はSH01と接するほか、SH05と重複している。重複関係不明である。住居は、周壁溝、中央土坑、主柱穴のみ残存しており。遺存状況は極めて悪い。主柱穴は４穴である。柱間は2.08～2.64ｍで、東西方向が長い。

規模・形態　平面形が円形を呈する住居である。周壁溝は、北側と東側に部分的に残っていた。規模は推定で東西方向が6.6ｍ前後、南北方向が6.1ｍ前後と推定される。

屋内施設　中央土坑、主柱穴を検出した。

周壁溝　住居の北側および南東側で周壁溝を確認した。溝幅は0.23～0.37ｍ、検出面からの深さは、0.06～0.08ｍである。

中央土坑　住居内のほぼ中央部に位置する。土坑の南西側には長楕円形の土坑が併設されている。中央土坑は0.92×0.68ｍの北西から南東方向に長い楕円形を呈する。検出面からの深さは0.24ｍと浅い。土坑の南西側に併設された土坑は、1.24×0.24ｍの長楕円形を呈する。検出面からの深さは、0.4ｍ前後と浅い。

中央土坑内には黒褐色シルトが堆積し、大きく2層に大別できる。下層の黒褐色シルトは、上層に比べ、非常に固く締まっている点が大きな違いである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.28～0.56ｍ、深さは0.16～0.25ｍと浅い。識別できた柱穴痕は径0.16～0.24ｍである。

出土遺物　出土した土器はなかった。

SH05（図版８　写真図版９）

検出状況　調査区の北端に位置する。住居の西半部は、SH01・06、SK42に切られ、また東半部もSK29に切られており、遺存状況は悪い。住居は東半部分のみ遺存しており、周壁溝、中央土坑、主柱穴４穴が残っていた。残存していた主柱穴の柱間は2.4ｍ前後である。

規模・形態　住居の西半部分を欠き、全容は明らかではないが、径6.7m前後の円形の住居と考えられる。

屋内施設　中央土坑、周壁溝を検出した。

周壁溝　溝幅は0.20～0.25m、深さは0.12～0.16mである。

中央土坑　中央土坑は0.82×0.63mで、南北に長い楕円形を呈する。土坑の北側には小さな平坦面をもつ。深さは0.48mである。

土坑内には黒褐色の灰層が堆積していた。灰層は大きく3層に大別でき、中層には炭が混入している。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.32～0.72m、深さは0.10～0.25mと浅い。識別できた柱穴痕は径0.16mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（23）と高杯（24）が出土している。

SH06（図版9　写真図版9）

検出状況　調査区の北端部に位置する。SH01に切られており、わずかに住居の東端部で周壁溝、中央部で中央土坑の痕跡を確認した。主柱穴は確認できなかった。また、住居の東側では、SH05・SK42を切っている。

規模・形態　残存する周壁溝・中央土坑の屋内施設から判断して、7.0×6.7m規模の隅丸方形の住居と考えられる。南北方向主軸とした方位は、N30°Eである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑を検出した。

周壁溝　住居の東辺および北辺部にその痕跡を確認した。残存する周壁溝の幅は、0.16～0.24m、深さ0.12mである。

中央土坑　住居のほぼ中央部に位置する。0.62×0.53m規模の南北方向に長い楕円形を呈する土坑である。上部をSH01により破壊されているため全容は明らかではないが、残存する深さは、0.15mと浅い。

中央土坑の埋土は、3層に分かれる。最上層の第1層はSH01を構築する際の床面に貼られた土の痕跡と考えられる。

柱穴　主柱穴は確認できなかった。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH07（図版10　写真図版10）

検出状況　調査区の北東部に位置する。住居の北東隅は、SH02・08と重複しているが、新旧関係は不明である。住居は遺存状況が悪く、周壁溝・中央土坑をはじめ、主柱穴を4穴を確認した。

規模・形態　残存する周壁溝から判断して、6.7×6.1mの南北方向に長い長方形を呈すると考えられる。南北方向を主軸とした場合の方位は、N16°Eである。主柱穴は4穴である。柱間は3.4m前後である。

周壁溝は住居の西壁・南壁および東壁の一部で確認した。西壁と南壁の周壁溝の内側には、さらに周壁溝が検出され、住居の拡張が行われた痕跡を残す。

屋内施設　中央土坑、周壁溝を確認した。

周壁溝　西壁・南壁および東壁の一部で確認された周壁溝は幅0.1～0.24mで、深さは0.5m前後と浅い。また、西壁および南壁の周壁溝の内側で確認された周壁溝は、幅0.10mと狭小である。

中央土坑　住居のほぼ中央部に位置する中央土坑は、1.33×1.20mの規模で、東西方向に長い不整の楕円形を呈する。

土坑底の東側部分は緩やかに立ち上がる。深さは0.19mである。

埋土は2層に分かれ、下層は灰層で炭片を多く含む。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.30～0.60m、深さは0.20～0.20m。識別できた柱穴痕は径0.15mである。

出土遺物　弥生時代終末期の甕（25・26）・器台（27）・鉢（28）が出土している。

SH08（図版5　写真図版26）

検出状況　調査区の北東部に位置する。住居の東側は調査区外に延びているため、住居の南西部分を検出した。SH02とはほぼ重なるかたちで重複しており、SH02に切られている。また住居の南西隅部分は、SH07と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模・形態　住居の南西隅部分のみ検出したため、全容は不明である。方形の住居と考えられる。

屋内施設　不明。

周壁溝　幅0.3m前後。深さ0.15mである。

中央土坑　不明

柱穴　不明

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH09（図版11　写真図版11）

検出状況　調査区の北端部に位置する。住居の東隅部分でSH10を、また南隅部分でSH11を切っている。また、北西側ではSH05と、東側ではSH03と近接している。上部が昨平され遺存状況は悪い。住居は周壁溝・主柱穴・住居内土坑・中央土坑の屋内施設を確認した。

規模・形態　住居は3.5×4.1mの規模の北東方向に長い長方形を呈する。南西から北東方向を主軸とした方位は、N45°Eである。周壁溝は住居内を全周しており、西隅部分には住居内土坑が掘られている。主柱穴は4穴と考えられ、柱間は1.2～2.0mで東西方向が長い。

屋内施設　周壁溝、住居内土坑、主柱穴をはじめ、中央土坑の痕跡が認められた。

周壁溝　周囲を全周するかたちで掘削されている。幅0.15～0.25m、深さ0.12mである。

住居内土坑　住居の西隅に位置する。0.8×0.6mの規模で、北東方向に長い楕円形を呈する。深さは0.28mである。土坑内の埋土は3層に分かれ、いずれの土層中にも地山土のブロックが混入し、人為的に埋められた様相を示す。

中央土坑　住居の中央部付近で、中央土坑の痕跡を確認した。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.25～0.32m、深さは0.08～0.20m。識別できた柱穴痕は径0.16mである。

出土遺物　弥生時代中期末の鉢（29）と甕（30）が出土している。

SH10（図版12　写真図版11・12）

検出状況　調査区の北端部に位置する。西側でSH09に切られ、北東側にはSH03と接する。また北側にはSK02が近接している。

規模・形態　上部が昨平され遺存状況は悪い。住居は周壁溝・主柱穴・中央土坑などの屋内施設を確認した。住居は3.7×3.1mの規模で、北東方向に長い楕円形を呈する。周壁溝は、住居内を全周するかたちで掘られている。住居内の中央部に長楕円形土坑を併設した中央土坑が確認された。主柱穴は、中央土坑を挟んで2穴確認された。柱間は2.08mである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑がある。

周壁溝　住居の周囲を巡る周壁溝は、幅0.20～0.24m、深さ0.08～0.10mである。

中央土坑　長楕円形の土坑を併設した中央土坑である。中央土坑は0.84×0.60mの規模で、北西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.46mと深い。中央土坑の北東側に併設された土坑は、1.28×0.32mの規模で、深さは0.1mである。中央土坑の埋土は、4層に分層が可能で、最上層の土層は、長楕円形土坑の埋土と類似している。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.3m前後、深さは0.12～0.26m。識別できた柱穴痕は径0.17mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯の脚部（31）が1点出土している。

SH11（図版13）

検出状況　調査区の北端部に位置する。住居内の北隅はSH10に切られ、南西隅はSH12と接する。

規模・形態　無柱の平面不定形の住居である。規模は3.52×3.0m、深さは0.1m前後と遺存状況は悪い。

屋内施設　確認されなかった。

出土遺物　弥生時代中期後半の鉢（32）が出土している。

SH12（図版14　写真図版13）

検出状況　調査区の北端に位置する。住居の東隅はSH11と接し、西側は円形周溝墓SX01の周溝を切っている。北側はSH01・05・06の住居群と近接する。また南東隅は大型の掘立柱建物SB01の柱穴を切っている。

規模・形態　上部が昨平され遺存状況は悪い。住居は周壁溝・主柱穴・中央土坑などの屋内施設を確認した。住居は南北方向に長い隅丸長方形を呈し、7.5×5.3の規模である。南北方向を主軸とした方位は、N24° 30′ Eである。周壁溝は南西隅付近を除いた部分で確認されている。北壁・東壁・南壁の部分では二重の周壁溝を検出しており、住居を拡張した痕跡が認められる。主柱穴は4穴で、柱間は3.7～4.2mで南北方向が長い。

屋内施設　周壁溝・主柱穴・中央土坑がある。

周壁溝　溝幅は0.16～0.25m、深さは0.1～0.12mである。

中央土坑　2段に掘られた隅丸長方形の中央土坑である。1.82×1.29mの規模で東西方向に長い。内側は1.09×0.89mの規模で平面長方形に掘られている。深さは0.40mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.28～0.52m。深さは0.50m前後である。識別できた柱穴痕は径0.16m前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（33～36）・鉢（37・38）・脚部（38）が出土している。

SH13（図版15　写真図版14）

検出状況　調査区の北半部中央よりに位置する。住居の中央部分はSH14に切られ遺存状況は悪い。南西側は大型の掘立柱建物SB01の柱穴を切っている。

規模・形態　住居西半部の周壁溝を確認した。周壁溝は二重に孤を描いた状態で検出され、住居の拡張が行われた可能性をもつ。

屋内施設　周壁溝のみ確認した。

周壁溝　幅0.16～0.30mで、深さは0.05～0.10mと浅い。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（40・41）と脚部（42）が出土している。

SH14（図版15　写真図版14・15）

検出状況　調査区の北半部中央よりに位置する。SH13を切っている。住居の東半は削平を受け消滅しており、遺存状況は悪い。

規模・形態　方形の住居である。東半部分が消滅しているため全容は明らかではないが、5.0 × 4.2 m以上の規模と推定される。残存する壁高の高さは0.16 mである。かりに北東方向を主軸とした方位は、N25° Eである。住居のほぼ中央部には長楕円形の土坑を併設した中央土坑が確認された。南西壁下には周壁溝が部分的に掘られている。主柱穴は３穴確認したが、4本柱と考えられる。柱間は2.8～3.4mで、北西方向が長い。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.12～0.28 m。床面からの深さは0.16 mである。

中央土坑　南西側に長楕円形の土坑を併設した中央土坑である。中央土坑は1.15 × 0.68 mの規模で、北西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.46mである。中央土坑の南西側に併設された長楕円形土坑は、1.46 ×0.46mの規模で、深さは0.05mと浅い。中央土坑内の埋土は4層に分かれ、最上層を除く土層内には炭片・焼土片を含む。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.35～0.48 m。深さは0.25～0.32 mである。識別できた柱穴痕は径0.20 m前後である。

出土遺物　弥生時代中期末の壺（43）・甕（44～46・48）・鉢（47）が出土している。

SH15（図版16　写真図版15・16）

検出状況　調査区の北半部東よりに位置する。南東側には土坑SK53が位置する。住居の上部は削平を受け、周壁溝、中央土坑などの屋内施設を検出した。

規模・形態　方形の住居である。4.9 × 4.6 m前後の規模と推定され、わずかに北東方向に長い。仮に北東方向を主軸とした方位はN17° Eである。住居の中央部には両脇に長楕円形の土坑を併設した中央土坑がある。南西壁と南東壁の一部を除き、周壁溝が巡る。主柱穴は４穴で、柱間は3.2mと均一である。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴を検出した。

周壁溝　溝幅は0.12～0.24 m、深さは0.05～0.12 mである。

中央土坑　土坑の南北両側に長楕円形の土坑をもつ中央土坑である。土層断面の観察によると、南側の長楕円形土坑は、中央土坑を切っており新しいと理解されるが、中央土坑の最上層の埋土である第３層と長楕円形土坑第６層は土質が類似しており、中央土坑とセットになる可能性が高い。したがって両脇に長楕円土坑を併設したタイプの中央土坑の可能性も考えられる。中央土坑は0.76 × 0.74 nの規模で、不整な円形を呈する。深さは0.32mである。北東側の長楕円土坑は、1.12×0.54mの規模で、深さは0.15 mである。南西側の長楕円形土坑は1.52 × 0.38 mの規模で、深さは0.06 mと浅い。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.28～0.60m。深さは0.40～0.48mである。識別できた柱穴痕は径0.20 m前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（49）と甕（50）が出土している。

SH16（図版17　写真図版17・18）

検出状況　調査区の中央部、北寄りに位置する。北側には大型の掘立柱建物跡SB02が隣接し、南側には土坑SK74が位置する。

規模・形態　住居内土坑をもつ方形の住居である。5.0 × 5.0 mの規模でほぼ正方形である。残存する壁高は0.10 m前後である。かりに南北方向を主軸とした方位はN13° Eである。住居の東壁下には方形の住居内土坑が掘られている。また中央部には中央土坑がある。周壁溝は各壁下に部分的に掘られているが、住居内土坑のある東壁側は、全面に巡っている。主柱穴は４穴である。柱間は東西方向が2.3 m、

南北方向が2.7ｍで南北方向が長い。

屋内施設　周壁溝、住居内土坑、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　部分的に掘られている北壁・南壁・西壁下の周壁溝は。幅0.16～0.24ｍ、床面からの深さは0.08ｍと浅く、東壁下の周壁溝は0.16～0.24ｍ、床面からの深さは0.10ｍ前後である。

住居内土坑　住居内東壁下の中央部に位置する方形の土坑である。0.90×0.85ｍの規模で2段に掘削されている。深さは0.48ｍである。

中央土坑　0.45×0.48ｍの規模で円形を呈する。深さは0.16ｍと浅い。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.20～0.36ｍ。深さは0.20ｍ前後である。識別できた柱穴痕は径0.16ｍ前後である。

出土遺物　弥生時代終末期の甕（54～57）・壺（51～53）・器台（59）・鉢（58・61）・蓋（60）と石斧（S99）が出土している。

SH17（図版５　写真図版27）

検出状況　調査区の中央部に位置する。東側にはSH18が近接するほか、南側には円形周溝墓SX03がある。規模・形態　小型の方形住居である。0.36×3.0ｍの規模で北東方向に長い、長方形を呈する。残存する壁高は、0.16～0.20ｍである。周壁溝・土坑・主柱穴などの屋内施設はない。

出土遺物　弥生時代終末期の壺（62）・甕（63・64）・高杯（65）・器台（66）・鳥型土器（67）が出土している。

SH18（図版18　写真図版18・19）

検出状況　調査区中央部、東寄りに位置する。住居の東側で、木棺墓SK80・81と重複するほか、SH19と接する。西側はSH17が近接する。南側は大型の円形周溝墓SX03が位置する。住居の上部は削平を受け、遺存状況は悪く、周壁溝、中央土坑、主柱穴を検出した。

規模・形態　北側に張出部をもつ円形の住居である。住居の西半部では周壁溝が2重に巡っており、拡張が行われた痕跡と理解している。外側の周壁溝から推測した住居は、径7.2ｍ前後の円形住居と考えられる。内側は径5.3ｍ前後の張出部をもつ住居と考えられる。中央付近には南側に長楕円土坑を伴う中央土坑がある。主柱穴は4穴である。柱間は2.6～3.7ｍで東西方向が長い。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　外周を巡る周壁溝は幅0.2ｍ前後で、深さは0.10ｍ前後である。内側は幅0.12～0.24ｍで、深さは0.16ｍである。

中央土坑　南側に長楕円形土坑が併設されている。中央土坑は0.85×0.52ｍの規模で東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.33ｍである。長楕円形土坑は2.0×0.38ｍ、深さ0.15ｍで底面の中央付近は窪んでいる。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.25～0.40ｍ。深さは0.20～0.56ｍである。識別できた柱穴痕は径0.20ｍ前後である。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH19（図版19　写真図版19・20）

検出状況　調査区中央部、東端に位置し、住居の東端部は調査区外にいたる。西側にはSH18が近接し、木棺墓SK80・81と接する。南側はSD16を切っている。さらに南側には円形周溝墓が位置する。住居の上部は削平を受け、遺存状況は悪く中央土坑、周壁溝、主柱穴の屋内施設のみ確認した。

規模・形態　径7.2ｍのほぼ円形の住居である。中央部には中央土坑が位置し、中央土坑の周囲には縁堤部が築かれる。縁堤部は東側が開口している。主柱穴は5穴で、柱間は2.6～3.6ｍである。周壁溝は全周せず、西側と南側でその痕跡を認めた。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.15～0.28ｍ、深さ0.05～0.08ｍである。

中央土坑　住居のほぼ中央に位置する。中央土坑の周囲には、東側が開口する縁堤部の痕跡を確認した。幅残存する縁提部は幅0.3ｍ前後、高さ0.06ｍである。中央土坑は1.1×0.7ｍの規模で、東西に長い楕円形を呈する。深さは0.69ｍである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.25～0.50ｍ。深さは0.20ｍである。識別できた柱穴痕は径0.16～0.20ｍ前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（68～70）・甕・鉢（71・75）・高杯（77）と弥生時代終末期の甕（72・73）・器台（76）が出土したほか、中央土坑縁堤部より石鏃（S1）が出土している。

SH20（図版20　写真図版20・21）

検出状況　調査区の中央部に位置する。住居の南半部分はSH21と重複し、同住居を切っている。南側には木棺墓SK16、SH25が近接する。南東側は円形周溝墓SX03が位置する。また西側にはSH22がある。

上部は削平を受け、中央土坑、周壁溝の屋内施設のみ確認した。主柱穴は無く無柱構造の建物である。

規模・形態　4.5×4.2ｍの方形住居である。周囲を周壁溝が全周し、中央には中央土坑が位置する。かりに北西方向を主軸とした方位は、N46°　Wである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑がある。

周壁溝　幅0.12～0.16ｍ、深さ0.06ｍ前後と浅い。

中央土坑　0.62×0.40ｍの規模で北西方向に長い楕円形を呈する。深さ0.45ｍである。埋土は3層に分かれ、中・下層は粒径の大きい地山ブロックが混入し、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（78～84）・甕（85・86）・高杯（87・88）および脚部（89・90）と石庖丁（S127）および石庖丁の未製品（S132）が出土している。

SH21（図版21　写真図版20・21）

検出状況　調査区の中央部に位置する。住居の北隅部分はSH20と重複し、同住居に切られている。南側にはSH25と重複し、同住居にきられている。また木棺墓SK16と近接する。南東側は円形周溝墓SX03が位置する。また西側にはSH22がある。上部は削平を受け遺存状況が悪く。周囲にわずかに壁が残る。

規模・形態　主に西側部分を拡張した住居と考えられる。拡張後の規模は、5.6×5.4ｍで北東方向に長い長方形を呈する。かりに北東方向を主軸とした方位は、N32°　Wである。周壁溝より推定した拡張前規模・形態は、4.6×4.6ｍ規模の正方形である。中央付近には中央土坑が位置する。主柱穴は4穴である。柱間は2.1～2.4ｍである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.12～0.20ｍ、深さ0.08ｍである。

中央土坑　0.7×0.5ｍ規模の北東方向に長い楕円形を呈する。深さは0.36ｍである。

柱穴　掘方は円形である。規模は径0.24～0.43ｍ。深さは0.22～0.38ｍである。識別できた柱穴痕は、径0.15ｍ前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の鉢（91）が出土している。

SH22（図版22　写真図版22・23）

検出状況　調査区の中央部、西寄りに位置する。住居の南西隅は、SH23と重複し同住居を切っている。北西隅部分は、SH28と接している。また北東側にはSK73・79が位置する。住居は削平を受け、住居の壁は消滅している。

規模・形態　7.0×7.2m規模の楕円形を呈する。周壁溝は、全周し、中央部には、南側に長楕円形土坑を併設した中央土坑が位置する。主柱穴は4穴である。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.17～0.32m、深さ0.04～0.10mである。

中央土坑　中央土坑の南側に併設された長楕円形土坑は1.82×0.37mの規模で、深さは0.10mである。中央土坑は0.90×0.74mで、東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.50mである。土坑の北および東側には縁提部の痕跡が認められる。埋土は3層に分かれ、最下層は灰層である。

柱穴　掘方は円形ないしは不整形である。規模は径0.40～0.64m。深さは0.32m前後である。識別できた柱穴痕は、径0.25～0.32mと大きい。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（92）・高杯（93・94）が出土している。

SH23（図版23　写真図版22・23）

検出状況　調査区の中央部、西寄りに位置する。住居西半部はSH22と重複し、同住居に切られている。北西隅部分は、SH28と近接している。また北東側にはSK73・79が位置する。住居は削平を受け、住居の壁は消滅している。

規模・形態　推定で6.8×6.3m規模の楕円形を呈する住居と考えられる。南側壁沿いには周壁溝が残存しており、中央には中央土坑が位置する。主柱穴は4穴である。柱間は2.4～2.8mである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.16～0.24mで、深さは0.12m前後である。

中央土坑　径0.77m前後のほぼ正円形を呈する。0.66mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.32～0.56m。深さは0.16～0.48mである。識別できた柱穴痕は、径0.15～0.25mである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH24（図版24　写真図版27）

検出状況　調査区の南側、東端に位置する。住居の東端は調査区外に及ぶ。西側にはSX03が近接している。住居は削平を受け、住居の壁は南東隅を除き、ほとんど消滅している。

規模・形態　住居の北半部は、削平が特に著しく、住居の全容は明らかではない。住居は推定で径8.6m前後の円形を呈すると考えられる。中央には南側に長楕円形土坑を併設した中央土坑が位置する。住居の南には周壁溝の痕跡が認められる。主柱穴は7穴以上で、柱間は2.7～2.9mである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.16m前後、深さは0.05m前後である。

中央土坑　南側に長楕円形土坑を併設した中央土坑である。長楕円土坑は2.1×0.52m、深さ0.2mである。中央土坑は0.98×0.84m規模の東西方向に多少長い楕円形を呈する。深さは0.48mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.32～0.56m。深さは0.16～0.48mである。識別できた柱穴痕は、径0.15～0.25mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（95）が出土した。

SH25（図版25　写真図版24）

検出状況　調査区のほぼ中央に位置する。住居の北東隅はSH21と重複しており。同住居を切っている。東側には円形周溝墓SX03が位置する。住居は削平が著しく、壁は消滅している。

規模・形態　径8.5m前後の円形の住居である。周壁溝は北西隅を除きほぼ全周し、中央付近には中央土坑がある。主柱穴は7穴で、柱間は2.6～3.2mである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.16～0.26m、深さ0.05～0.08mである。

中央土坑　中央土坑は2段に掘削されている。上部の規模は1.0×0.9m、下部の規模は0.83×0.55mで隅丸長方形を呈する。深さは0.4mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.25～0.48m。深さは0.20～0.40mである。識別できた柱穴痕は、径0.25m前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（96）・高杯（97）・鉢（98・99）が出土している。

SH26（図版26　写真図版25）

検出状況　調査区の中央部、西寄りに位置する。西側にはSH27が近接し、東側はSK113と接する。削平を受け遺存状況は悪く、わずかに壁が残存する。

規模・形態　3.8×3.8m規模の方形の住居である。かりに北東方向を主軸とした方位はN54°Eである。周壁溝は全周し、中央には中央土坑がある。主柱穴は4穴で、柱間は1.6～1.9mである。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、主柱穴がある。

周壁溝　幅0.16～0.20m、深さ0.10～0.16mである。

中央土坑　中央土坑は2段に掘られ、上段は1.28×1.09mの規模で、不整形を呈する。下段は0.64×0.54mの北西方向に長い楕円形を呈する。底部には川原石が置かれていた。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.16～0.32m。深さは0.24～0.32mである。識別できた柱穴痕は、径0.12～0.24mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（100・101）・甕（102～104）が出土している。

SH27（図版13　写真図版25・26）

検出状況　調査区の南側、西端部に位置する。住居の西半部は調査区外に及ぶ。住居の北東隅ではSH26と接する。上部は削平を受け、わずかに住居の壁が残存している。

規模・形態　住居の西半部が調査区外に及んでいるため、全容は明らかではない。5.2×3.3以上の方形の住居と考えられる。北東方向を主軸とした方位は、N14°Eである。周壁溝は無く、住居の東壁際に住居内土坑がある。主柱穴は2穴確認しているが、4穴の主柱穴をもつと考えられる。柱間は2.6mである。

屋内施設　住居内土坑、主柱穴がある。

住居内土坑　0.60×0.48m規模の東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.52mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.35～0.40m。深さは0.12～0.20mである。識別できた柱穴痕は、径0.16m前後である。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（107）と弥生時代終末期の甕（105・106）・脚部（108）が出土している。

SH28（図版27　写真図版26）

検出状況　調査区の中央部、西寄りに位置する。南東隅はSH22と重複しているが、新旧関係は不明で

ある。北側には円形周溝墓SX01・02がある。削平が著しく中央土坑および柱穴を確認した。

規模・形態　著しく削平を受け遺存状況が悪く、住居の全容は明らかにできなかった。中央土坑は南側に長楕円形土坑を併設している。主柱穴は確定できなかった。

屋内施設　中央土坑がある。

中央土坑　南側に長楕円形土坑を併設する中央土坑である。長楕円土坑は1.1×0.29m、深さ0.10mである。中央土坑は造り替えが行われている。造り替え後の土坑は、0.9×0.8m規模で東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.42mである。造り替え前の規模・形状は不明であるが、深さは0.35mである。

柱穴　主柱穴として確定できた柱穴は無い。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH29（図版28　写真図版27）

検出状況　調査区の南側に位置する。削平が著しく遺存状況が極めて不良である。遺存する中央土坑、主柱穴によって住居と識別し得た。

規模・形態　主柱穴は8穴と推定される。柱間は2.4～3.2mである。主柱穴の配置から円形の住居と考えられる。周壁溝は確認できなかったが、住居の中央付近に中央土坑がある。

屋内施設　中央土坑・主柱穴がある。

中央土坑　1.1×0.8mの規模で北東方向に多少長い不整楕円形を呈する。深さは0.35mである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.32～0.56m。深さは0.16～0.44mである。識別できた柱穴痕は、径0.15～0.25mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（109）・甕（110）・高杯（111）が出土している。

SH30（図版29）

検出状況　調査区の南半部、中央付近に位置する。北東隅は円形周溝墓SX03と重複するが、新旧関係は不明である。南端部はSH31と接する。上部は著しく削平され、遺存状況は極めて悪い。遺存する中央土坑、主柱穴によって、住居と識別した。

規模・形態　主柱穴は6穴と考えられる。柱間は2.2～3.8mである。主柱穴の配置から円形の住居と考えられる。周壁溝は確認できなかったが、住居の中央付近に中央土坑がある。

屋内施設　主柱穴、中央土坑がある。

中央土坑　0.96×0.71mの規模で、北西方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは0.38mである。土坑内の埋土は4層に分かれ、最上層を除き固く締まっている。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.24～0.56m。深さは0.24～0.40mである。識別できた柱穴痕は、径0.24～0.30mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（112）が出土している。

SH31（図版30）

検出状況　調査区の南端部、ほぼ中央に位置する。住居の北端はSH31と接し、南東側はSH32が近接する。上部は著しく削平され、遺存状況は極めて悪い。遺存する中央土坑、主柱穴によって、住居と識別した。

規模・形態　主柱穴は6穴と考えられる。柱間は2.4～2.9mである。主柱穴の配置から円形の住居と考えられる。周壁溝は確認できなかったが、住居の中央付近に中央土坑がある。

屋内施設　主柱穴、中央土坑がある。

中央土坑　0.74×0.60mで東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.28mである。土坑内の埋土は4層

に分かれ、最上層を除き固く締まっている。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.25～0.40ｍ。深さは0.12～0.25ｍである。識別できた柱穴痕は、径0.16ｍ前後である。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SH32（図版31）

検出状況　調査区の南東隅に位置する。北西側にはSH31が近接し、北側には木棺墓SK105が位置する。上部は著しく削平され、遺存状況は極めて悪い。遺存する中央土坑、主柱穴によって住居と識別した。

規模・形態　主柱穴は南東隅の1穴を欠くが、6穴と考えられる。柱間は2.2～2.7ｍである。主柱穴の配置から円形の住居と考えられる。周壁溝は確認できなかったが、住居の中央付近に中央土坑がある。

屋内施設　主柱穴、中央土坑がある。

中央土坑　0.76×0.52ｍで東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.32ｍである。

柱穴　掘方は円形ないしは楕円形である。規模は径0.32～0.42ｍ。深さは0.15～0.32ｍである。識別できた柱穴痕は、径0.15～0.25ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

２．掘立柱建物

SB01（図版32）

検出状況　調査区の北端部に位置する。木棺墓SK01、土坑SK14・18・19と身舎が重なっている。SK01は建物を構成する柱穴に切られている。建物の南東側には木棺墓SK37・38・39が近接し、北東側には土坑SK31・33がある。また、北西側には土坑SK08がある。

形状・規模　N47°Ｅに棟軸方位をもつ。規模は桁行方向9.60ｍ前後、梁行方向3.44ｍの掘立柱建物である。桁行方向の側柱は10穴ないしは11穴で構成され、柱間は0.56～1.84ｍである。面積は約33.0㎡である。

柱穴　掘方の平面形は円形ないしは楕円形で、径0.24～0.80ｍである。識別できた柱痕は、径0.16～0.24ｍである。

出土遺物　柱穴内より壺（113・114）が出土している。

SB02（図版32）

検出状況　調査区の北半部、中央付近に位置する。土坑SK47・48および竪穴住居SH13の南端部と身舎が重なっている。建物の北西隅は竪穴住居SH12と接し、南西側には竪穴住居SH16が位置する。

形状・規模　N75°Ｗに棟軸方位をもつ。規模は桁行方向12.80ｍ、梁行方向4.32ｍである。桁行方向の側柱は、12穴以上の柱穴で構成されている。柱間は0.8～3.6ｍである。面積は約55.3㎡である。

柱穴　掘方の平面形は円形ないしは楕円形で、径0.22～0.40ｍである。識別できた柱痕は、径0.16～0.20ｍである。

出土遺物　土器は出土していなかった。

３．円形周溝墓

SX01（図版33・36　写真図版28）

検出状況　調査区の北西隅に位置する。西側は円形周溝墓SX02と周溝を共有している。東側周溝部分

はSH12に切られている。西側周溝の一部は調査区外に及んでいる。また上部は著しく削平され、周溝の溝底および埋葬施設の痕跡を確認したにすぎない。このため遺存状況が極めて悪く、周溝墓の全容は明らかではない。

形状・規模　北側・東側・南側・西側で周溝の痕跡を確認した。北周溝は直線的な様相を呈するが、他の東周溝および南周溝、西周溝の墳丘側ラインは孤状を描いており、周溝墓は円形周溝墓と考えられる。

周溝を含めた規模は、南北方向13.44ｍ、東西方向13.92ｍである。

周溝　北側周溝部は、最大幅1.16ｍ、深さ0.30ｍ。東側周溝部は、最大幅1.44ｍ、深さ0.06ｍ。南側周溝部は最大幅1.08ｍ、深さ0.40ｍ。西側周溝部は、最大幅0.54ｍ、深さ0.12ｍである。周溝底の状況は、平坦ではなく凹凸がある。

墳丘　周溝内側、墳丘部の規模は南北方向が12.01ｍ、東西方向が11.88ｍである。盛土は確認できなかった。

埋葬施設　土坑SK49が埋葬施設と考えられる。底部のみ遺存しているため主体部の様相は不明である。遺存している規模・形状は、1.21 × 0.75ｍ規模の東西方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは0.16ｍである。

出土遺物　周溝内より、弥生時代中期前半の壺（128）・甕（130・131）と弥生時代中期後半の壺（127）・底部（129）が出土している。

SX02（図版34　写真図版28・29）

検出状況　調査区の北西隅に位置する。東側は円形周溝墓SX01と周溝を共有している。北側の周溝の一部は調査区外に及んでいる。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　東側の周溝部は、円形周溝墓SX01と共有する。周溝の南側とSX01の共有部分は途切れており、周溝は全周していない。周溝を含めた規模は、南北方向8.40ｍ以上、東西方向が8.56ｍの円形周溝墓である。

周溝　西半部の周溝最大幅は0.72ｍ、深さ0.32ｍ前後で、溝底は比較的平坦である。南東側の周溝最大幅は0.68ｍ、深さ0.15ｍと浅い。北東側の溝底は多少窪んでいる。

墳丘　周溝内側、墳丘部の規模は北西－南東方向が7.6ｍ、北東－南西方向が7.04ｍである。盛土は確認できなかった。

埋葬施設　主体部は確認できなかった。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SX03（図版35・36　写真図版29・30）

検出状況　調査区中央付近より多少南東部に位置する。周溝墓の周囲にはSH17～21、SH24・25が周溝墓を囲むように位置している。またSH30とは重複していると考えられるが、その切り合い関係は不明である。また北東側には、木棺墓SK80・81が位置する。また墳丘内でSD17と重複している。新旧関係は明らかにできなかった。上部をは削平を受け、墳丘は確認できなかった。

形状・規模　西橋部分に陸橋部をもつ円形周溝墓である。周溝を含めた規模は南北方向18.72ｍ、東西方向18.64ｍである。

周溝　陸橋部を除きほぼ全周する。周溝は北西部と東部で幅を広げ、南西側含んでは幅を減じている。周溝の深さは南側部分が深く、北側に向かって、浅くなる傾向がある。周溝の規模は、北側で幅2.28ｍ・深さ0.24ｍ、東側で幅1.70ｍ・深さ0.32ｍ、南側で幅1.42ｍ・深さ0.48ｍ、西側で1.40ｍ・深さ0.24ｍ

である。周溝底面は、北半部では、凹凸が顕著である。周溝内埋土中には、墳丘より流失したと理解できる地山（灰白色シルト）・A.T.ブロックが混入した土層が確認されている。

陸橋部　遺構検出時には識別できず、陸橋部の基底部を確認した。陸橋部は平面形が、墳丘側（東側）に短辺をもつ台形状を呈している。陸橋部の規模は上端部で短辺1.12ｍ、長辺2.08ｍである。

墳丘　周溝の内側、墳丘部の規模は、南北方向14.64ｍ、東西方向1.52ｍである。墳丘の痕跡は確認できなかった。

埋葬施設　削平を受け、明確に同墓に伴う主体部と確定できた埋葬施設はない。ただ木棺墓SK95・96は、墳丘内に位置しており、主体部の可能性がある。

出土遺物　周溝内より弥生時代中期前半の壺（133・134）・甕（135・136）と弥生時代中期後半の壺（132）・甕（137）が出土している。石器は周溝内より石庖丁（S128・129）が出土している。

４．木棺墓

SK01（図版37　写真図版31）

検出状況　調査区の北端部に位置する。SB01の身舎と重なり、掘立柱建物SB01を構成する柱穴にきられている。北側には土坑SK08・09が、東側には土坑SK17・18・31をはじめ、木棺墓SK37～39が近接している。削平が著しく、遺存状況は悪い。土層断面で木棺の痕跡と、平面で木棺の小口穴と墓壙を検出した。

形状・規模　2.10×1.38ｍの規模で、平面形が長方形の墓壙をもつ。残存する墓壙の深さは、0.07ｍである。木棺の痕跡は平面的には確認できなかったが、小口穴が確認された。小口穴は南北方向に長い長楕円形を呈し、0.88ｍの間隔をおいて並列している。小口穴および土層断面から復元すると、1.00×0.62ｍの規模で東西方向に長軸をもつと推定される。木棺の長軸方位はN82°Wである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK04（図版37　写真図版31）

検出状況　調査区の北西隅に位置する。木棺墓の北側は調査区外に延び、全容は明らかではない。木棺墓の西側は土坑SK03に切られている。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　南北方向1.58ｍ以上、東西方向1.12ｍの南北方向に長い楕円形の墓壙である。残存する深さは、0.10ｍである。その中央には、南北方向1.20ｍ以上、幅0.48ｍの木棺が埋置されている。木棺の長軸方位は、N25°Eである。残存する木棺の深さは0.06ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK37（図版37　写真図版31・32）

検出状況　調査区の北端に位置する木棺墓である。東側には木棺墓SK38・39が近接している。また北東方向には、木棺墓SK01が位置する。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　1.64×0.84ｍの規模で、平面形が長方形の墓壙である。深さは0.15ｍである。墓壙内には1.26×0.64ｍの木棺が埋置されている。木棺の長軸方位はN45°Eである。残存する木棺の深さは0.14ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK38（図版38　写真図版31・32）

検出状況　調査区の北端に位置する小型の木棺墓である。木棺墓の西側には木棺墓SK37が、東側には木棺墓SK39が隣接している。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　1.32×0.50ｍの規模で南北方向に長い楕円形の墓壙である。残存する深さは0.16ｍである。木棺は墓壙中央より北寄りに埋置されている。0.72×0.31ｍの小型の木棺で、南小口幅0.29ｍ、北小口幅0.24ｍと南小口幅が広い。木棺の長軸方位はN18°Wである。残存する木棺の深さは0.14ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK39（図版38　写真図版31・33）

検出状況　調査区の北端に位置する木棺墓である。木棺墓の西側には木棺墓SK37・38が隣接している。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　1.92×0.64ｍの規模で、東西方向に長い長方形を呈する墓壙である。残存する深さは0.10ｍである。木棺は墓壙内中央より、やや北寄りに埋置されている。木棺は1.56×0.51ｍで、西小口幅0.51ｍ、東小口幅0.54ｍで、小口幅はほぼ同じである。木棺の長軸方位はN38°30′Wである。残存する深さは0.06ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK80（図版38　写真図版33）

検出状況　調査区の中央部東寄りに位置する大型の木棺墓である。木棺墓の南西側には、木棺墓SK81が並列している。東側と西側は竪穴住居SH18とSH17と接しており、南側には大型の円形周溝墓SX03が位置する。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　2.45×1.29ｍの規模で、東西方向に長い墓壙である。平面形は多少歪な隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.33ｍである。木棺は墓壙の中央より南寄りに埋置されている。木棺の規模は1.45×0.64ｍで、東小口幅0.61ｍ、西小口幅0.67ｍと多少西側小口が広い。木棺の長軸方位はN78°Wである。残存する木棺の深さは0.33ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK81（図版38　写真図版33）

検出状況　調査区の中央部東寄りに位置する木棺墓である。木棺墓の北東側には、木棺墓SK81が並列している。東側と西側は竪穴住居SH18とSH17に接しており、南には大型の円形周溝墓SX03が位置する。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　1.85×0.93ｍの規模で、東西方向に長い墓壙である。平面形は、多少西側がすぼまった隅丸長方形を呈する。木棺は墓壙のほぼ中央に埋置されている。木棺の規模は、1.37×0.57ｍで、東小口幅0.57ｍ、西小口幅0.60ｍとほぼ同じ小口幅である。木棺の長軸方位はN69°Wである。残存する木棺の深さは0.17ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK95（図版39　写真図版34）

検出状況　調査区の中央部付近に位置する小型の木棺墓である。大型円形周溝墓SX03の墳丘内北端に位置し、同周溝墓の主体部の可能性をもつ。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　1.32×0.69ｍの規模で、東西方向に長い墓壙である。平面形は西側が多少すぼまった隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.18ｍである。木棺は墓壙の中央より北寄りに埋置されている。木棺の規模は、0.97×0.48ｍで、東小口幅0.50ｍ、西小口幅0.48ｍとほぼ同じ小口幅である。木棺の長軸方位はN78°Eである。残存する木棺の深さは0.17ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK96（図版39　写真図版34）

検出状況　調査区の中央部付近に位置する木棺墓である。大型円形周溝墓SX03の墳丘内北端に位置し、木棺墓SK95と同様、同周溝墓の主体部の可能性をもつ。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　2.08×0.87m規模で、南北方向に長い墓壙である。平面形は北側が多少すぼまった隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.10mである。木棺は墓壙の中央より北寄りに埋置されている。木棺の規模は、1.21×0.48mで、北小口幅0.50m、南小口幅0.50mとほぼ同じ小口幅である。木棺の長軸方位はN40°　Eである。残存する木棺の深さは0.10mである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK105（図版39　写真図版35）

検出状況　調査区の南端に位置する大型の木棺墓である。北側約10mのところには大型円形周溝墓SX03が位置する。木棺墓の南・西側には竪穴住居SH30～32が近接する。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　2.54×1.14mの規模で、東西方向に長い墓壙である。平面形は多少歪な隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.32mである。木棺は墓壙の中央より北寄りに埋置されている。木棺は両側板の内側に小口をもつタイプで、側板の長さは2.15m前後である。南北小口間の長さは1.70mで、中央部の幅は0.60mである。木棺の長軸方位はN75°30′　Eである。残存する木棺の深さは0.28mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（170）・壺（171）が出土した。

SK131（図版39　写真図版36）

検出状況　調査区南半部に位置する。木棺墓の南東部は調査区外に及んでいるため、全容は明らかではない。木棺墓の東側には竪穴住居SH27が位置する。

形状・規模　東西方向1.12以上、南北方向1.15mの規模の墓壙である。墓壙は2段に掘られ、下段に木棺を埋置するタイプであろうか。下段の規模は東西方向0.8m以上、幅0.5mである。木棺の長軸方位はN43°　Wである。深さは0.34mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（182）が出土した。

5．土坑

SK28

検出状況　調査区北側のほぼ中央部に位置する土坑である。東側は竪穴住居SH03と接し、西側および南側は、土坑を取り囲むように竪穴住居SH01・04～06・09～11が位置する。

形状・規模　1.52×0.56mの規模で、東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.22mである。長軸方位は、N88°　Wである。埋土中には炭が混入しているが、土坑壁・土坑底面に被熱の痕跡は確認できなかった。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（138）が出土した。

SK07（図版40）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。土坑の周囲に近接する遺構はない。

形状・規模　0.62×0.47mの規模で、北西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.34mである。長軸方位は、N48°　Wである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（139）が出土した。

SK08（図版40）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。南東側には掘立柱建物SB01、木棺墓SK01が位置する。

形状・規模　0.87×0.59mの規模で、東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.11mである。長軸方位は、N70°　Wである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（140）が出土した。

SK09（図版40）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。掘立柱建物SB01の身舎内に位置する。南西側には木棺墓SK01が近接する。

形状・規模　0.60×0.37mの規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.23mである。長軸方位は、N28°　Eである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK14（図版40）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。掘立柱建物SB01の身舎内に位置し、北東側には土坑SK18・19が近接し、南側には木棺墓SK37～39が位置する。

形状・規模　1.90×0.54mの規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.10mである。長軸方位は、N40°　Eである。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（141）が出土した。

SK18（図版40）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。南側は土坑SK19、東側はSK31と接している。

形状・規模　1.16×0.66mの規模で、東西方向に長い歪な隅丸長方形を呈する。深さは0.12mである。長軸方位は、N73°　Eである。確定する根拠に乏しいが、形状および土坑周辺に存在する木棺墓群の存在を考慮すると、土壙墓の可能性がある。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（142）と石庖丁（S125）が出土した。

SK19（図版40　写真図版36）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。北側は土坑SK19、東側はSK31と接している。

形状・規模　1.52×0.82mの規模で、北東方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは0.18mである。長軸方位は、N55°30′　Eである。確定する根拠に乏しいが、形状および土坑周辺に存在する木棺墓群の存在を考慮すると、土壙墓の可能性がある。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（143）が出土した。

SK29（図版40）

検出状況　調査区北側中央付近に位置する土坑である。竪穴住居SH05と重複しているが、新旧関係は不明である。

形状・規模　1.16×1.16mの規模で、歪な楕円形を呈する。深さは0.10mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の鉢（144）が出土した。

SK31（図版41　写真図版36）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。南西側には木棺墓SK18・19と接するほか、掘立柱建物が近接する。土坑の北半部は調査区外に及び、全容は明らかではない。

形状・規模　北西方向3.32m以上、北東方向1.44m以上の規模で、歪な楕円形を呈する。深さは0.14mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（145）と石鏃（S19）が出土した。

SK33（図版41　写真図版37）

検出状況　調査区北端に位置する土坑である。土坑の東半部は調査区外に及ぶ他、南半部は溝に切られ全容は明らかではない。

形状・規模　遺存状況は悪く、規模・形態は不明である。深さは0.26ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（146・147）が出土した。

SK48（図版41）

検出状況　調査区中央付近に位置する大型の柱穴である。掘立柱建物SB02の身舎内に位置するが、周囲に並ぶ柱穴は無く、建物として識別できなかった。

形状・規模　0.71×0.52ｍの規模で、歪な円形を呈する。深さは0.42ｍである。

出土遺物　弥生時代中期前半の壺（150）と弥生時代中期後半の壺（149）･甕（151）･鉢（152）が出土した。

SK51（図版41）

検出状況　調査区中央部東端に位置する大型の柱穴である。周囲に並ぶ柱穴は無く、建物としては識別できなかった。

形状・規模　掘方は0.66×0.56ｍの規模で、円形を呈する。深さは0.48ｍである。識別できた柱痕は径0.24ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の鉢（153）・壺（154・155）・甕（156）が出土している。

SK53（図版41）

検出状況　調査区北半部、東端に位置する土坑ある。北西側には竪穴住居SH15が位置する。上部は削平を受け遺存状況は悪い。

形状・規模　2.68×1.30ｍの規模で、南北方向に長い隅丸長方形を呈する。深さは0.12ｍである。長軸方位はN42°Ｅである。

出土遺物　弥生時代中期前半の甕（157）が出土している。

SK57（図版41　写真図版37）

検出状況　調査区中央部、東端に位置する土坑である。土坑の東半部は溝に切られており、全容は明らかではない。

形状・規模　残存する規模は東西方向0.84ｍ以上、南北方向1.0ｍである。深さは0.12ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半と考えられるミニチュア壺（158）が出土している。

SK70（図版41　写真図版37）

検出状況　調査区中央部に位置する土坑である。南側には大型の円形周溝墓SX03が近接し、北東側には竪穴住居SH17・18が位置する。

形状・規模　1.09×0.96ｍの規模で、多少東西方向に長い不整楕円形を呈する。深さは0.14ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（160）が出土している。

SK71（図版42）

検出状況　調査区中央部に位置する土坑である。南側には大型の円形周溝墓SX03が位置し、東側には土坑SK70が近接する。

形状・規模　1.18×0.88ｍの規模で、東西方向に長い不整楕円形を呈する。深さは0.13ｍである。長軸方位はN73°Ｗを指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（161）が出土している。

SK72（図版42　写真図版38）

検出状況　調査区中央部に位置する土坑である。東側にはSH17が近接する。

形状・規模　２段に掘削された土坑である。　上段は0.70×0.68ｍの規模で不整な円形を呈する。下段は、径0.31ｍで円形に掘削されている。深さは0.56ｍである。土坑の形状から判断して中央土坑あるいは柱穴が考えられるが、確定するには至らなかった。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（162）が出土している。

SK73（図版42）

検出状況　調査区中央部西寄りに位置する土坑である。西側および南側にはSH22・23・28が近接し、北東側にはSH16が位置する。

形状・規模　1.82×0.90ｍの規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。深さは、0.10ｍである。長軸方位は、N9° 30′　W を指す。

出土遺物　弥生時代終末期の甕（163）と砥石（S180）が出土している。

SK74（図版42　写真図版38）

検出状況　調査区中央部に位置する土坑である。北側には竪穴住居SH16が近接する。

形状・規模　1.66×0.82ｍの規模で、東西方向に長い楕円形を呈する。土坑の東半部は平坦面をもつ。深さは0.22ｍである。長軸方位はN86°　E を指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（164）が出土している。

SK87（図版42　写真図版33・34）

検出状況　調査区中央部、西寄りに位置する土坑である。北側と東側にはSH22・28が近接する。

形状・規模　0.70×0.61ｍの規模で不整な円形を呈する。深さは0.26ｍである。

出土遺物　弥生時代後期後半の壺（165）・鉢（166・167）と砥石（S182）が出土している。

SK99（図版43　写真図版38）

検出状況　調査区南半部、南西隅に位置する土坑である。　西側には木棺墓SK105、土坑SK104が近接する。

形状・規模　2.96×0.70ｍの規模で東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.18ｍである。長軸方位はN88°　W を指す。

出土遺物　弥生時代中期前半の甕（168）が出土している。

SK104（図版42）

検出状況　調査区南半部中央、東寄りに位置する土坑である。南端部で木棺墓SK105と接する。

形状・規模　1.24×0.48ｍの規模で東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.14ｍである。長軸方位はN63°　E を指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の脚部（169）が出土している。

SK111（図版42　写真図版39）

検出状況　調査区中央部の西端に位置する土坑である。北側には土坑SK112が、東側には土坑SK141が位置する。

形状・規模　0.94×0.53ｍの規模で東西方向に長い楕円形を呈する。深さは0.28ｍである。長軸方位はN83°　W を指す。

出土遺物　弥生時代中期前半の甕（172）が出土している。

SK112（図版42）

検出状況　調査区中央部の西端に位置する土坑である。南側には土坑SK111・141が位置する。

形状・規模　1.64×0.60mの規模で東西方向に長い楕円形を呈する。東端には平坦部をもつ。深さは0.26mである。長軸方位はN67°　Wを指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の脚部（173）が出土している。

SK113（図版43）

検出状況　調査区中央部、西端に位置する土坑である。南西側には竪穴住居SH26と接する。

形状・規模　1.28×0.65mの規模で南北方向に長い楕円形を呈する。土坑の南側と北側に平坦部をもつ。深さは0.19mである。長軸方位はN27°　Wを指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の鉢（174）が出土している。

SK115（図版43）

検出状況　調査区南半部、西端に位置する土坑である。北側にはSH26、土坑SK113が位置する。

形状・規模　0.80×0.48mの規模で南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.21mである。長軸方位はN6°　Eを指す。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（175）が出土している。

SK116（図版43）

検出状況　調査区中央付近に位置する土坑である。竪穴住居SH25と重複する。

形状・規模　1.14×0.72mの規模で南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.22mである。長軸方位はN4°　Eを指す。

出土遺物　弥生時代中期前半の甕（176）と砥石（S181）が出土している。

SK121（図版43）

検出状況　調査区南東隅に位置する土坑である。土坑の北東端はSD27に切られている。

形状・規模　1.52×0.66mの規模で南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.14mである。長軸方位はN28°　Eを指す。

出土遺物　弥生時代中期前半の壺（177）が出土している。

SK122（図版43　写真図版39）

検出状況　調査区南東端に位置する土坑である。土坑の南西端は攪乱を受けており、全容は明らかではない。

形状・規模　0.92×0.80mの規模で歪な円形を呈する。深さは0.20mである。

出土遺物　弥生時代中期後半の高杯（178）が出土している。

SK125（図版43）

検出状況　調査区中央部に位置する土坑である。

形状・規模　0.52×0.46mの規模で円形を呈する。深さは0.22mである。柱穴痕はないが、規模・形状から判断して柱穴の可能性が考えられる。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（180）が出土している。

SK141（図版43）

検出状況　調査区中央部、西端に位置する土坑である。土坑の北東端は調査区外に延び、全容は明らか

ではない。

形状・規模　1.84×0.58ｍの規模で南北方向に長い楕円形を呈する。深さは0.10ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の脚部（183）である。

６．溝

SD08（図版45）

検出状況　調査区北端に位置し、ほぼ東西方向に延びる溝である。溝の西端はSH03の周壁溝にきられている。

形状・規模　溝の幅は最大で0.20ｍ、深さは0.12ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（184）である。

SD16（図版44）

検出状況　調査区中央部、東端に位置し、北東から南西方向に延びる溝である。溝の北東部はSH19にきられている。

形状・規模　溝の幅は最大で0.92ｍ、深さは0.08ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（185）・高杯（186・187）が出土している。

SD17（図版44）

検出状況　調査区南半部、東寄りに位置し、ほぼ東西方向に延びる溝である。大型円形周溝墓SX03内に位置し溝の東端部は周溝と重複しているが、新旧関係は明らかにできなかった。

形状・規模　溝の幅は最大で1.12ｍ、深さは0.20ｍである。

出土遺物　弥生時代中期前半の壺（189）・鉢（190）が出土している。

SD25（図版45　写真図版39）

検出状況　調査区南西端に位置し、北西から南東方向に延びる溝である。溝の南東方向には、同溝と同様に北西から南東方向に延びるSD29が近接している。

形状・規模　溝の幅は最大で１.05ｍ、深さは0.08ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の器台（188）が出土している。

SD27（図版44）

検出状況　調査区南西部に位置し北東から南西方向に延びる溝である。溝の南西側で土坑SK121を切っている。

形状・規模　溝の幅は最大で0.66ｍ、深さは0.08ｍである。

出土遺物　弥生時代中期後半の壺（191）が出土している。

SD29（図版45）

検出状況　調査区南西端に位置し、北西から南東方向に延びる溝である。溝の南西方向には、同溝と同様に北西から南東方向に延びるSD25が近接している。

形状・規模　溝の幅は最大で0.46ｍ、深さは0.11ｍである。

出土遺物　弥生時代中期前半の甕（192）が出土している。

第2節　B地区の遺構

1．方形周溝墓

SX01（図版47・51　写真図版41・42）

検出状況　調査区中央部、西寄りに位置する方形周溝墓である。東辺周溝部は方形周溝墓SX02の西辺周溝と重複し、SX02に切られている。したがって、周溝墓構築順序はSX01→SX02となる。北側には方形周溝墓SX03・04が近接し、南側および西側には木棺墓・土坑群が位置している。

周溝部の南東隅は攪乱を受けている。また北西隅の周溝の一部は、調査区外に及んでいる。また上部は削平されているため、埋葬施設は確認できず、周溝部のみ遺存していた。

形状・規模　東辺周溝部は、隣接するSX02の西辺周溝部に切られている。周溝の北東隅は途切れている。また南辺周溝部と東辺周溝部の接続部分については、攪乱を受けているため、途切れていたかは不明である。

周溝を含めた規模は、東西方向12.90ｍ前後、南北方向10.80ｍである。東西方向を主軸とした方位はN89°　Wである。

周溝　北辺周溝部最大幅0.96ｍ・深さ0.38ｍ、東辺周溝部幅0.80ｍ以上・深さ0.49ｍ、南辺周溝部最大幅1.32ｍ・深さ0.43ｍ、西辺周溝部最大幅1.08ｍ・深さ0.34ｍの規模である。南辺周溝部南壁部分には、小さな平坦部が認められ、部分的に2段に掘削されている。周溝内の溝底は、平坦ではなく凹凸が顕著に見られる。

墳丘　上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、墳丘部の規模は東西方向が11.16ｍ、南北方向が8.52ｍである。

埋葬施設　主体部は確認できなかった。

出土遺物　周溝内より弥生時代中期後半の壺・甕が出土した。南辺周溝内より壺（199・200）出土したほか、周溝内より甕底部（201）が出土した。

これら以外に東辺周溝部内より出土し、SX02との帰属が不明な土器として、甕（202）・高杯（203・204）がある。

SX02（図版48・51　写真図版43）

検出状況　調査区中央部に位置する方形周溝墓である。西辺周溝部は、西側に隣接する方形周溝墓SX01の東辺周溝部を切っている。北側には方形周溝墓SX03･04が近接し、南側および西側には木棺墓･土坑群が位置している。

形状・規模　西辺周溝部は、隣接するSX01の東辺周溝部に切られている。周溝の北東隅は途切れているが、また南辺周溝部と西辺周溝部の接続部分については、攪乱を受けているため、途切れていたかは不明である。周溝部の南西隅は攪乱を受けているほか、東辺周溝部は、方形周溝墓の東側を南北方向に流れる流路によって破壊されている。また上部は削平されているため、埋葬施設は確認できず、周溝部のみ遺存していた。

周溝を含めた規模は、南北方向10.0ｍ、東西方向9.10ｍである。南北方向を主軸とした方位はN10°Wである。

周溝　北辺周溝部最大幅1.12ｍ・深さ0.26ｍ、東辺周溝部は推定で幅0.90ｍ・深さ0.25ｍ、南辺周溝部最大幅1.35ｍ・深さ0.41ｍ、西辺周溝部幅0.88ｍ・深さ0.36ｍの規模である。周溝内の溝底は、平坦で

はなく凹凸が顕著に見られる。

墳丘　上部は削平され盛土は遺存していない。周溝内側、墳丘部の規模は南北方向が7.65ｍ、東西方向が7.61ｍである。

埋葬施設　主体部は確認できなかった。

出土遺物　南辺周溝部内より弥生時代中期後半の甕の底部（205）が出土している。

SX03（図版49）

検出状況　調査区の北西隅付近に位置する方形周溝墓である。周溝墓の西半部分は調査区外におよんでいるため、全容は明らかではなく、東辺と南辺の周溝部を検出した。東辺周溝部は、東側に隣接する方形周溝墓SX04の西辺周溝部にきられている。したがって、構築順序はSX03→SX04となる。北側には方形周溝墓SX01・02が位置する。

形状・規模　方形周溝墓の規模は不明である。

周溝　東辺周溝部最大幅0.92ｍ・深さ0.28ｍ、南辺周溝部最大幅1.04ｍ・深さ0.28ｍである。

墳丘　上部は削平を受け盛土は遺存していない。

埋葬施設　主体部は確認できなかった。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SX04（図版50・51　写真図版43・44）

検出状況　調査区中央部、西寄りに位置する方形周溝墓である。方形周溝墓の東半部は、東側を南北方向に流れる流路によって破壊されている。西辺周溝部は西側に隣接する方形周溝墓SX03の東辺周溝部を切っている。したがって、構築順序はSX03→SX04となる。北側には方形周溝墓SX01･02が位置する。

形状・規模　周溝墓の東半部は流路によって消滅しているため、全容は明らかではないが、周溝の南西隅は途切れている。　南辺周溝部は孤を描くように南東方向に開き、多少歪な平面形を呈している。周溝を含めた規模は、北西－南東方向6.0ｍ前後、北東－南西方向5.0ｍ以上である。仮に北東－南西方向を主軸とした方位はN81°30′Ｅである。

周溝　北辺周溝部最大幅0.73ｍ・深さ0.25ｍ、南辺周溝部最大幅0.55ｍ・深さ0.20ｍ、西辺周溝部最大幅0.63ｍ・深さ0.29ｍの規模である。

墳丘　上部を削平され、盛土は遺存していない。周溝部の内側、墳丘部の規模は北西－南東方向が5.0ｍ前後である。

埋葬施設　主体部は確認できなかった。

出土遺物　北東隅周溝内より弥生時代中期後半の甕（207・208）が出土している。

２．土器棺墓

SX05（図版52　写真図版44・45）

検出状況　調査区の南端部中央付近に位置する土器棺墓である。土器棺墓の南半部は後世の攪乱により破壊され全容は明らかではないが、埋葬容器である甕が遺存していた。

形状・規模　墓壙は北西－南東方向0.92ｍ以上、北東－南西方向1.25ｍの規模で、平面形は歪な楕円形を呈すると考えられる。埋葬容器である甕は、墓壙の中央より南西寄りに、口縁部を西側に向け寝かせた状態で埋置されている。

出土遺物　弥生時代中期後半の甕（209）が出土している。

3．土坑・木棺墓・土壙墓

SK01（図版53）

検出状況　調査区の西端部付近に位置する土坑である。東側には木棺墓SK02・04・05、土壙墓SK03で構成される墓群が位置する。土坑の北西隅は調査区外に及んでいる。

形状・規模　0.95×0.63ｍの規模で、平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。土坑底の北半部は一段堀窪められており、検出面からの深さは0.36ｍを測る。土坑の主軸はほぼ南北方向を指す。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK02（図版53　写真図版45）

検出状況　調査区の西端部付近に位置する木棺墓である。西側には土坑SK01 が、東側には木棺墓SK04・05、土壙墓SK03が近接する。

形状・規模　東西方向1.68ｍ、南北方向0.72ｍの隅丸長方形の墓壙である。墓壙の深さは、0.12ｍである。墓壙の南壁に沿って溝状の掘込みが認められる。木棺は墓壙内西寄りに埋置されている。識別できた木棺の規模は、東小口幅0.55ｍ・西小口幅0.54ｍで。全長は1.46ｍである。木棺の主軸方位はN63° Wである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK03（図版53　写真図版46）

検出状況　調査区の西端に位置する土壙墓である。西側には木棺墓SK02が、東側には木棺墓SK04が近接している。

形状・規模　3.08×1.21ｍに規模で、平面形が歪な楕円形を呈する土坑墓である。深さは0.49ｍである。長軸方向を主軸とした方位はN55° Eである。

出土遺物　土坑の中央より北寄りで弥生時代中期後半の甕（213･213･214）･壺（210～212）･高杯（215）･脚部（216）が出土している。

SK04（図版53　写真図版46）

検出状況　調査区の西端に位置する木棺墓である。木棺墓の西側には土坑墓SK03が、東側には木棺墓SK05 が隣接している。墓壙の東端部は調査区外に及んでいる。上部は削平を受け遺存状況は悪く、木棺は遺存せず、木棺の側板痕跡を確認した。

形状・規模　墓壙は北東－南西方向1.0ｍ以上、北西－南東方向0.72ｍの規模で北東方向に長い隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.14ｍである。墓壙底面の北東側と南西側には小口穴が掘られている。北東小口は、幅0.30ｍ・長さ0.42ｍ・深さ0.30ｍ、南西小口は幅0.24ｍ・長さ0.50ｍ・深さ0.30である。木棺は両側板の内側に小口をもつ組合式と考えられ、残存する側板の痕跡および小口穴から判断して、北東－南西方向0.75ｍ、幅0.45ｍ前後の小型のものであろう。木棺の主軸方位はN54° Eである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK05（図版54　写真図版48）

検出状況　調査区の西端部に位置する木棺墓である。木棺墓の西半部は調査区外および、全容は明らかではない。西側には木棺墓SK05、南東側には土坑SK06が近接している。

形状・規模　墓壙は楕円形を呈すると考えられる。北東－南西方向3.40ｍ以上の大型の墓壙である。深さは0.28ｍと遺存状況は良い。木棺は南東隅部分が検出できたが、規模は不明である。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK07（図版54　写真図版48）

検出状況　調査区の南端部西寄りに位置し、断定はできないが土壙墓と理解している。土壙墓の南端は調査区外に及んでいる。

形状・規模　墓壙は南北方向0.95ｍ以上、東西方向0.48ｍの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。深さは0.10ｍである。主軸方位は、ほぼ南北方向を指す。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK08（図版54　写真図版48）

検出状況　調査区の南端部西寄りに位置する木棺墓である。木棺墓の多くが調査区外に及んでいるため、全容は明らかではない。東側および西側には土壙墓SK07、木棺墓SK09が近接している。

形状・規模　木棺墓の南西隅部分のみの検出である。墓壙の深さは0.06ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK09（図版54　写真図版48）

検出状況　調査区の南端部西寄りに位置する木棺墓である。木棺墓の南半部が調査区外に及んでいるため、全容は明らかではない。西側には土壙墓SK07、木棺墓SK08が近接している。

形状・規模　両側板の内側に小口をもつ組合せ式の木棺と考えられる。墓壙の深さは0.10ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK10（図版55　写真図版49）

検出状況　調査区の南側、ほぼ中央付近に位置する木棺墓である。木棺墓の東側には木棺墓SK11・12、土器棺墓SX05近接している。

形状・規模　墓壙は東西方向1.8m、南北方向0.76ｍの規模で、平面形は東西方向に長い長方形を呈する。深さは0.12mである。木棺は墓壙内中央部より東寄りに埋置されている。木棺の規模は、東小口幅0.50m、西小口幅0.54ｍと多少西小口幅が広い。全長は1.4ｍである。

出土遺物　土器は出土しなかった。

SK11（図版55　写真図版49）

検出状況　調査区の南側、ほぼ中央付近に位置する木棺墓である。木棺墓の西側には木棺墓SK11・10、土器棺墓SX05が近接している。

形状・規模　墓壙は北西－南東方向1.20m、北東－南西方向0.52mの規模で、平面形南半部がすぼまった、南北方向に長い長方形を呈する。深さは0.12ｍである。木棺は墓壙内中央部埋置されている。木棺の規模は、北小口幅0.40ｍ、南小口幅0.30ｍである。全長は0.95ｍと小型である。木棺の主軸方位はN29°Wである。

出土遺物　土器は出土しなかったが、石庖丁（S134）が出土している。

第３節　Ｃ地区の遺構

１．概要

Ｃ地区は遺構検出面のレベルは最も高いところでT.P.84.2ｍであり、地形は北から南へゆるやかに傾斜する。調査区の西端と東側には、旧河道（SR02・SD02）が南北方向に流れており、遺構はこれらの河道に挟まれた微高地上に立地する。調査した遺構は弥生時代中期の周溝墓、木棺墓、弥生時代終末期

の竪穴住居などである。主体となるのは弥生時代中期の方形周溝墓群であり、七日市遺跡における弥生時代中期の墓域であった場所である。調査区の北端はA地区から続く居住域の端にあたり、柱穴や土坑が点在する。

2．竪穴住居

SH01（図版57　写真図版54）

検出状況　調査区の北端に位置する。弥生時代中期の方形周溝墓SX01が埋没した後に、周溝の一部と重なって造られている。後世の削平のため、深さは約0.05ｍしか残存していない。

規模・形態　南北6.6ｍ、東西6.2ｍのやや南北に長い方形である。

屋内施設　中央焼土坑、住居内土坑、柱穴、周壁溝を検出した。

周壁溝　幅約15～20cmの溝が全周する。東側の溝は住居内土坑を挟んで、ほぼ対称に幅0.5m、長さ0.4ｍほどの方形の突出部がつく。

中央焼土坑　ほぼ中央に東西0.7ｍ、南北0.4ｍ、深さ0.1ｍ弱の浅い窪みがあり、炭・灰混じりの土が内部に堆積し、底面は加熱のため赤変している。

住居内土坑　住居の東辺中央部に作られた一辺0.6ｍ、深さ0.3ｍの土坑であり、西側に円形、東側に方形の張り出しを設け、その周囲を幅0.2ｍ～0.4ｍ・高さ0.05ｍほどの土堤で囲む。土堤は盛土で造る。土坑の底部や縁には、粘土ブロックを多量に含む土が貼りつけられているのが認められたが、使用途中に補修をおこなった痕跡であろう。土坑の内部には炭粒が多く混じる土が堆積しており、その用途が炭など火力に関係するものであったことを伺わせる。

柱穴　4本の主柱穴を検出している。深さはいずれも約0.2ｍと極めて浅い。柱間距離は南北が2.6ｍ、東西が2.4ｍである。

出土遺物　残存状況が良くないため、遺物はわずかしか出土していない。弥生時代終末期（Ⅵ期）の高杯脚部（240）が、住居内土坑の埋土から出土している。

時期　弥生時代終末期（Ⅵ期）である。

3．土器棺墓

SP01（図版70　写真図版68・69）

検出状況　調査区の北端、SD05の北側にある。甕を横位に倒し、埋めたものであり、後世の削平によって口縁部や体部の約1/3は失われている。

規模・形態　土器は南北0.45ｍ、東西0.6ｍの楕円形の掘方に納められる。

出土遺物　埋められていたのは弥生時代中期後半（Ⅳ期）の甕（347）である。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SP02（図版70　写真図版69）

検出状況　調査区北半部、弥生時代中期の方形周溝墓SX02の北側周溝の北肩部を切って造られている。壺を立位に置いたものであり、土器はひしゃげた形で検出した。

規模・形態　土器は東西0.7ｍ、南北0.5ｍの楕円形の掘方に納められる。

出土遺物　弥生時代終末期の壺（348）が出土している。

時期　弥生時代終末期（Ⅵ期）である。

4．方形周溝墓

SX01（図版58・65　写真図版56・57）

検出状況　調査区の北西隅にあり、東側を弥生時代終末期の竪穴住居SH01に切られている。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西8.6ｍ、南北7.8ｍ、外側で東西11.3ｍ、南北10.9ｍの規模をもつ。周溝の内側は隅円方形であり、外側はやや胴張りの方形になる。

周溝　南東隅の周溝が切れて陸橋部となる。周溝は幅1.2ｍほどであるが、北東隅は幅が狭くなる。深さ0.2ｍ～0.3ｍほどであるが、北側及び東側の周溝は幅が広く、深さも深い。周溝内の埋土は概ね２層に分けられ、下層には土器が多量に包含されている。下層がこの周溝墓が墳墓として機能していた時代の堆積であり、上層がその後の堆積であろう。

出土遺物　周溝内埋土から多量の土器が出土した（242～275）。土器は西側及び東側の周溝から集中して出土している。土器はいずれも細片化しており、完形に復元できるものはなかった。また石庖丁（S135・S136）、凹み石（S176）、磨石（S174）、砥石（S189・S194）が出土している。

埋葬施設　盛土が失われていたため、周溝の内側で埋葬施設は確認できなかった。周溝内埋葬についても、存在に留意して調査したが、検出しなかった。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SX02（図版59・66　写真図版57～59）

検出状況　調査区の北東にある。東側を旧河道（SK01・SD02）で画され、西側にはSD05がつながる。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で南北10.4ｍ、東西8.4ｍの南北に長い長方形である。

周溝　東側が河道であるため、北・西・南の３方に巡らせる。幅は北側が約２ｍ、西側が約３ｍ、南側が約1.5ｍであり、深さは0.2～0.3ｍである。西側の周溝は、SD05を一辺とする方形周溝墓の一辺を共有しているため幅が広いということも考えられる。西側周溝断面を観察すると、西側からも東側からも盛土に由来する土（地山ブロックが入る土）が流れ込んで堆積している様子が見られることも、西側に周溝墓があった可能性を示している。

出土遺物　北側と西側の周溝内から多量の土器が出土している（276～301）。土器はいずれも細片化しており、完形に復元できるものはなかった。また他に楔形石器（S57）、石庖丁（S138・140・141）、砥石（S185）が周溝内から出土しており、西側の周溝からは磨製石剣（S81）も出土している。

埋葬施設　盛土が失われていたため、周溝の内側で埋葬施設は確認できなかった。周溝内埋葬についても、存在に留意して調査したが、検出しなかった。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SX03（図版60・68　写真図版60・61）

検出状況　調査区の西端に位置する。周溝の南西隅は旧河道SR02と接し、南側の周溝はSX04と共有している。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西5.6ｍ、南北6.0ｍ、外側で東西7.5ｍ、南北7.5ｍである。周溝は北側の東西の隅が切れ、陸橋部状になっている。

周溝　溝の幅は北側で約0.8ｍ、西側で約1.0ｍであり、深さは西側が最も深く0.3ｍほどである。断面形はいずれの箇所も内側が急で外側が緩やかとなる。埋土は、内側付近に盛土に由来する地山ブロック

が混じる土が堆積している。

出土遺物　西側と南側の周溝埋土内から土器が出土している（302～306）。302 の壺は周溝底に接してほぼ完形で出土している。

埋葬施設　盛土が失われていたため、周溝の内側で埋葬施設は確認できなかった。周溝内埋葬についても、存在に留意して調査したが、検出しなかった。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）である。

SX04（図版61　写真図版61）

検出状況　北側を SX03、西側を SR02、東側を SX05で囲まれる。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西８m、南北５mほどであり、東西に長いいびつな方形である。

周溝　北側・東側の周溝はそれぞれ SX03・SX05と共有する。南側の周溝は幅約２mほどあるが、不正形なものである。

出土遺物　周溝内から土器の小片と石斧（S110）が出土しているのみである。

時期　SX03や SX05の周溝を利用して造られており、これらの周溝墓より新しい弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SX05（図版62・67　写真図版62・63）

検出状況　調査区のほぼ中央部にある七日市遺跡で最大の方形周溝墓である。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西 17.4 m、南北 10.8 m、外側で東西 21.3 m、南北 16.5 mの東西に長い長方形の周溝墓である。

周溝　周溝は４隅が浅くなるが、特に東側の２隅が浅く陸橋状になる。北側の周溝が最も幅が広く、中央部で3.7 mあり、東側の周溝でも幅2.4 mほどある。西側を除く３方の周溝はいずれも溝の中央部分が土穴状に深くなっており、これは周溝が「溝状」に掘られたのではなく、長い楕円の土坑を連続して掘削したことを反映する。溝の埋土は黒褐色のシルトないしは極細砂であり、底部には地山（A.T. 火山灰、灰白色シルト）のブロックを含んだ土が堆積する。周溝の掘削後に底に踏み固められた土である。

埋葬施設　盛土が失われていたため、周溝の内側で埋葬施設は確認できなかった。周溝内埋葬についても、存在に留意して調査したが、検出しなかった。

出土遺物　周溝埋土内からは多量の土器が出土している（307～325）。特に北側周溝内から集中して出土している。土器は埋土の下層に多い。完形になるものはほとんどなく、いずれも細片化している。また石器も多量に出土している。磨製石剣（S85）、打製石剣（S86）、石庖丁（S139・142・143・144）、石斧（S100・S104）、磨石（S173・S198）、砥石（S187・188）がある。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）に造られ、以後Ⅳ期まで土器の供献が続く。

SX06（図版63・68　写真図版64～66）

検出状況　SX05の東側に接する。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西 6.3 m、南北 6.8 m、外側で東西 9.0 m、南北 9.0 mのほぼ正方形である。

周溝　周溝は全周するが、北東隅と南東隅、及び西側中央部の３カ所が途切れる。周溝の幅は 1.0～1.5 mほどであり、深さは 0.4 mほどである。溝の底には掘削時に底に踏み固めた地山ブロック混じりの土が認められる。

埋葬施設　盛土が失われているために、周溝内側には埋葬施設は確認していない。東側周溝の南端部で周溝内埋葬の木棺墓（SK27）を検出した。SK27は南北1.6ｍ、幅0.7ｍ、深さは周溝底から0.1ｍのものであり、組み合わせ式の箱形木棺を納めたものと推測する。

出土遺物　西側周溝の中央部陸橋脇から甕（326～328）が出土している。また周溝埋土中から楔形石器（S54）、砥石（S186）、石棒（S91）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX07（図版64・68　写真図版66～68）

検出状況　SX05・SX06 の南側にある。南側の周溝はＥ地区 SX04 の周溝に切られている。盛土は完全に失われており、周溝だけが残存している。

規模・形態　周溝の内側で東西8.6ｍ、南北9.0ｍ、外側で東西12.0ｍ、南北12.0ｍのほぼ正方形である。

周溝　周溝は全周するが、北東、北西、南東の３隅が途切れる。西側の周溝が最も幅広く、幅2.4mある。深さは東側の周溝が最も深く、0.4ｍである。

埋葬施設　盛土が失われていたため、周溝の内側で埋葬施設は確認できなかった。周溝内埋葬についても、存在に留意して調査したが、検出しなかった。

出土遺物　東側周溝中央部、西・南側周溝のコーナー付近から土器（329～333）が出土している。いずれも破片は小さい。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SX09（写真図版68）

検出状況　農業用水路の下にあり、水路の確保のため旧石器時代遺構面の調査時まで全形が明らかにならず、周溝墓と認識するのが遅くなったため、十分な記録は取れていない。他の周溝墓とは溝 SD02を隔てたところにある。

規模・形態　周溝内側で東西７ｍ、南北10ｍ、外側で東西12ｍ、南北15ｍである。

周溝　幅２～３ｍ、深さ0.5ｍほどの周溝が全周している。

埋葬施設　検出していない。

出土遺物　周溝埋土内から弥生時代中期の土器が多量に出土している（334～346）。340 のように完形近くなる大型土器もある。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

５．土坑

SK01（図版71　写真図版70）

検出状況　調査区の北東隅、SD02の肩を西側に拡張した水だめ状の遺構である。

規模・形状　東西６ｍ、南北10ｍの半円形の遺構である。東側に向けて底が傾斜し、東端で SD02の底につながる。

出土遺物　弥生時代中期の土器（349～356）、楔形石器（S20・S55）、石庖丁（S137）、石皿（S196）砥石（S183・S184）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SK02（図版71）

検出状況　調査区の北端にある土坑である。

規模・形状　東西0.9ｍ、南北1.6ｍ、深さ0.2ｍの不整形な土坑である。

出土遺物　甕が出土している（357・358）。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）

SK06（図版71）

検出状況　調査区の北端にあり、SD04に切られる。

規模・形状　東西2.2ｍ、南北0.8ｍである。南北に細長い。深さは0.2ｍほどである。

出土遺物　壺と甕が出土している（359・360）。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）である。

SK23（図版71　写真図版70）

検出状況　SX05の周溝の南側に接して掘られた土坑である。

規模・形状　南北1.4ｍ、東西0.9ｍあり、南北に長い楕円形の土坑である。

埋土　土坑埋土のうち、土坑壁に接して堆積する土は、地山ブロックを多く含んでおり、人為的に埋められた土であると考える。

出土遺物　完形に近い土器（361～363）が出土している。出土したのは第２層である。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）である。

６．木棺墓

SK12（図版69）

検出状況　SX05の北東にある木棺墓である。

規模　幅0.9ｍ、長さ2.4ｍの掘方に長さ1.7ｍ、幅0.6ｍの木棺をおさめる。

出土遺物　土器片が出土しているが図化できるものはない。

時期　出土遺物が無いため詳細は不明であるが、Ｃ地区に方形周溝墓が造られる弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK28（図版69）

検出状況　調査区の西隅にある。

規模　幅0.7ｍ、長さ1.1ｍ、深さ0.1ｍの隅円方形のものである。

出土遺物　土器の小片が出土しているのみである。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものか。

７．溝・河道

SD02（図版72　写真図版70・71）

検出状況　Ｃ地区の東端を南北方向に走る溝である。この付近には先行して旧河道SR01（Ｅ地区SR02、Ｊ地区SR01の延長）があり、Ｃ地区の南東隅で東へと折れている。この旧河道の埋没後に再掘削した溝がSD02であり、これはＥ地区SD22、Ｊ地区SD01、Ｌ地区SD15と連続する。

規模・形状　幅約６ｍ、深さ0.5ｍほどのものである。

埋土　溝内には砂礫層が堆積しており、その後にシルトが堆積する。

出土遺物　溝埋土内から土器（364・365）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）に掘削され、最終的にはⅥ期に埋没している。

SD04（図版72）

検出状況　SX02の北側にあり、土坑SK06を切る。

規模・形状　幅0.4m、長さ5.2m、深さ0.1mほどの溝である。

出土遺物　弥生時代中期の土器（373）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SD05（図版72）

検出状況　SK02 の周溝の北西隅から西へと伸びる溝である。この溝を一辺とした周溝墓を想定できるが、西側及び南側が不明瞭であり、ここでは溝に分類しておく。

規模・形状　幅1.5m、深さ0.2mの底が平坦な溝である。

出土遺物　弥生時代中期の土器が多く出土している。（374～381）

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）

SR02（図版72　写真図版71）

検出状況　調査区の西端にある旧河道であり、B地区のSR01の東側の肩にあたる。

規模・形状　幅2.5m、長さ10mにわたり検出している。底は西に向かって傾斜し、深さは約0.7mである。

埋土　シルトと極細砂で埋没しており、第２層には弥生時代中期の土器が多量に含まれる。

出土遺物　弥生時代中期の土器が出土している。（382～385）

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）にはあらかたが埋没している。

第４節　D地区の遺構

１．概要

D地区は東西100m余（１町）、南北50m余（半町）の長方形で、それを２分するように南北方向の溝SD05が横断している。SD05は水田を半町に区画する、条里に伴う溝と考えられる。

この溝より西側はやや微高地で、平安時代には掘立柱建物群や井戸が立地する居住区域となっている。また弥生時代の遺構も方形周溝墓・木棺墓などが散発的に見つかっている。

溝より東側は地形的に低くなるため、柱穴もまばらで、一部で弥生時代の木棺墓や土坑がみられるのみである。地区の東端は幅15～25mの旧河道で、H地区から続く溝SD07が取り付いている。旧河道は平安時代には埋没していたが、居住区域としては最後まで利用されなかった。

２．掘立柱建物

SB01（図版74　写真図版74）

検出状況　D地区西半部北西隅に位置し、北辺と西辺は調査範囲外に延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はほぼN2°　Eで、東西３＋α間×南北２＋α間の総柱建物である。さらに南辺には半間分の廂が、東辺には30cmほどずれて塀か柵状の柱列が付設する。検出し得た規模は東西方向が7.9mで、柱間は2.6～2.7m。南北方向は8.4mで、柱間は建物部が3.1m前後、廂部が約2.1mである。検出範囲の床面積は建物部が48.98㎡、廂も含めると66.36㎡である。

柱穴　掘方は直径30～40cmの円形または楕円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ15～35cmである。

出土遺物　柱穴Ｐ60から土師器杯（386・387）・小皿（388）、黒色土器椀（389）、Ｐ62から黒色土器椀（390）が出土した。

時期　11世紀～12世紀初頭の年代が与えられる。

SB02（図版75　写真図版74）

検出状況　Ｄ地区西半部南側の東寄りで、溝SD05の西側に位置する。また建物内の北辺には井戸SE01がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN8°　Wで、東西４間×南北４間の総柱建物である。さらに南辺には半間分の廂が付設する。ただし廂部中央の柱穴を欠いており、この部分には廂はなかった可能性もある。規模は東西方向が9.8ｍで、柱間は2.2～2.6ｍ。南北方向は13.0ｍで、柱間は建物部が2.6～2.9ｍ、廂部が約1.8ｍである。床面積は建物部が109.76 ㎡、廂も含めると127.4 ㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、直径15～20cmの柱痕部を有し、深さ15～40cmである。

出土遺物　柱穴Ｐ279から土師器小皿（391）、Ｐ276から黒色土器椀（392）が出土した。

時期　11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。

SB03（図版76　写真図版74・75）

検出状況　Ｄ地区西半部の中央で、掘立柱建物SB04から１間の間隔をおいて北側に位置する。両者は柱の並びも同一線上で、一体の建物とも考えられるが、ここでは別個のものとしておく。

形状・規模　南北方向の軸線はN6°　Wで、東西３間×南北２間の総柱建物である。規模は東西方向が7.8ｍで、柱間は2.4～2.7ｍ。南北方向は5.1ｍで、柱間は2.5～2.6ｍである。床面積は39.78 ㎡である。

柱穴　掘方は直径30～40cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～20cmである。

出土遺物　柱穴Ｐ171から土師器杯（393）、Ｐ174から黒色土器小皿（394）が出土した。

時期　11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。

SB04（図版77　写真図版74・75）

検出状況　Ｄ地区西半部南側の中央で、掘立柱建物SB02の西側、SB03の南側、SB07の東側に位置しており、これらの４棟は建物の軸線がほぼ同一である。

形状・規模　南北方向の軸線はN6°　Wで、東西４間×南北３間の総柱建物である。規模は東西方向が10.2ｍで、柱間は2.4～2.6ｍ。南北方向は8.2ｍで、柱間は2.6～2.9ｍである。床面積は83.64 ㎡である。

柱穴　掘方は直径20～40cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はないが、SB03と同時期と考えられる。

SB05（図版78）

検出状況　Ｄ地区西半部南西側に位置し、掘立柱建物SB07の東半部で重複しているが、切合い関係は不明である。

形状・規模　南北方向の軸線はN0°で、東西１間×南北２間の建物である。規模は東西方向が2.7ｍ、南北方向が5.6ｍで、柱間は2.7～3.1ｍである。床面積は15.12 ㎡である。

柱穴　掘方は直径30cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB06（図版76）

検出状況　D地区西半部南西側に位置し、掘立柱建物SB07の西半部で重複している。切合い関係は不明であるが、建物の軸線はSB05とほぼ揃っている。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°Eだが、東西方向は8°ほど反時計回りにずれており、平面形は平行四辺形を呈する。東西2間×南北2間の総柱建物である。規模は東西方向が5.0mで、柱間は2.4～2.6m。南北方向は7.0mで、柱間は3.4～3.7mである。床面積は35.0㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～20cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB07（図版78）

検出状況　D地区西半部南西側で、掘立柱建物SB04の西側に位置する。SB05・06と切合うが、前後関係は不明である。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°Wで、東西4間×南北2間の総柱建物である。規模は東西方向が9.6mで、柱間は2.0～2.7m。南北方向は5.9mで、柱間は2.6～3.0mである。床面積は56.64㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、直径約15～20cmの柱痕部を有し、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はないが、SB03と同時期と考えられる。。

3．井戸

SE01（図版82　写真図版84・85）

検出状況　掘立柱建物SB02建物内の北辺に位置する。井戸と建物が併存していたとすれば、SB02の北側は土間であったと推定できる。

形状・規模　掘方の平面形はやや不整な楕円形だが、中段からは円形となる。素掘りの井戸で、下層の6層には植物遺体を含むシルト層が堆積しており、当初から井戸枠をもたなかったとみられる。4・5層は自然崩落による堆積とみられ、最終的には人為的に埋め戻されている。規模は上面で径2.0×2.35m、底面で径0.95m、深さ1.35mである。

出土遺物　須恵器小皿（419）・椀（420）、土師器甑（421）・小皿（422）、黒色土器椀（423・424）・小皿（425）などがある。

時期　11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。

4．土坑

SK10（図版82　写真図版78）

検出状況　掘立柱建物SB02南東隅の外側に位置する。

形状・規模　平面形は不整な方形で、底面は平坦である。規模は1.4×1.65m、深さ0.2mである。

出土遺物　黒色土器椀（401）などがある。

時期　11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。

5．溝

SD04（図版83　写真図版85）

検出状況　D地区東半部の旧河道と溝SD07の間の中洲上に位置し、延長約5.4mで、両者をつなぐように設けられている。

形状・規模　断面は逆台形で、幅0.7m、深さ0.2mである。

出土遺物　弥生土器壺（426）・甕（427）・高杯（428）などがある。

時期　弥生時代中期の年代が与えられる。

SD05（図版83）

検出状況　D地区中央を南北に横断する条理地割りに伴う溝で、延長約51mを検出した。溝は南北に続くものとみられるが、北側は調査区外で、南側はG地区とH・I地区の間の現代の水路に切られている。

形状・規模　断面は逆台形で、幅0.7m、深さ0.2mである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SD07（図版83　写真図版85）

検出状況　H地区のSD01から続く溝で、D地区北側で旧河道に合流する。D地区内での延長は約45mである。

形状・規模　断面は逆台形で、底面は比較的平坦である。片側の肩を二段掘りにしている箇所もある。幅2.0～3.5m、深さ0.6mである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第5節　E地区の遺構

1．概要

E地区はC地区の南側、D地区の東側の調査区である。遺構検出面はT.P.84.2m～84.4mであり、地形は西側から中央部にかけて緩やかに低くなり、旧河道SR01を境として東側が高くなる。遺構は中央の低地部分にはほとんどなく、西側に方形周溝墓群があり、東側の微高地にも方形周溝墓群がある。

2．方形周溝墓

SX01（図版85・94　写真図版87～89）

検出状況　調査区の北端、SD22の西側で検出した。東側では周溝は検出していない。盛土は失われており、周溝のみを調査した。

規模・形態　周溝の内側で東西7.4m、南北12.0m、外側で東西9.8m、南北14.6mの南北に長い長方形である。

周溝　東側を除く3方に巡る。幅は1.0m～1.5m程度であり、深さは0.2m～0.3mである。埋土は底に地山ブロックを多く含む土（掘削時の踏み固め土）があり、その上に盛土に由来すると思われる地山ブロックを含む土が堆積している。

埋葬施設　盛土が失われているために、埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物　周溝の各所から土器が出土している。（432～435）また436～439はSX02との境から出土したものである。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

SX02（図版86・94　写真図版89・90）

検出状況　SX01の南側に接し、南側の周溝はSX03と共有する。盛土は失われており、周溝のみを調査した。

規模・形態　周溝の内側で東西7.5m、南北11.2m、外側で東西9.8m、南北14.0mの南北に長い長方形であり、SX01とほぼ同規模である。

周溝　全周し、南西隅が切れ、陸橋部となる。北側はSX01の南側周溝と接し、幅1.0m、西側は幅0.9m、深さ0.4m、東側は幅1.3m、深さ0.6mである。南側はSX03と共有しており、幅2.5m、深さ0.3mである。埋土は底に地山ブロックを多く含む土（掘削時の踏み固め土）があり、その上に盛土に由来すると思われる地山ブロックを含む土が堆積し、最終的にはシルトで埋没している。

埋葬施設　盛土が失われているために、埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物　周溝の各所から土器が出土している（440～443）。また436～439はSX01との境から出土したものである。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

SX03（図版87・95　写真図版91・92）

検出状況　SX02の南側に接する。南西部を斜めに弥生時代終末期の溝SD21に切られている。盛土は失われているが、中央部で木棺墓SK54を検出している。

規模・形態　周溝の内側で東西8.2m、南北13.5m、外側で東西10.8m、南北16.2mの南北に長い長方形である。

周溝　全周し、南東の隅が切れて陸橋部となる。西側で幅1.6m、深さ0.5m、南側で幅1.8m、深さ0.4m、東側で幅1.2m、深さ0.4mである。底の方には盛土の流土と思われる地山ブロックの入った土が堆積し、最終的に暗褐色のシルトで埋没している。

埋葬施設　中央部で木棺墓SK54を検出した。SK54は墓壙をほとんど失っているが、幅0.3m、長さ0.7m、深さ0.3mの小口穴が2カ所残存する。推定する木棺は長さ1.7m、幅0.6mくらいである。

出土遺物　南側周溝と東側周溝の南半部から弥生時代中期の土器（444～447）、石庖丁（S151）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

SX04（図版88・95　写真図版93・94）

検出状況　C地区SX07の南側に接する周溝墓であり、一部C地区にかかる。北半部を、ほ場整備に伴う水路工事によって削られている。

規模・形態　周溝の内側で東西8.0m、南北8.6m、外側で東西9.8m、南北10.9mのほぼ正方形である。

周溝　全周する。北側が一部失われているので、陸橋部があったかどうかは不明であるが、少なくともコーナー部分は切れていない。周溝は幅1m～1.5mであり、深さは0.3～0.4mである。埋土はA.T.や灰白色シルトなど、地山の土がブロック状に入る部分が多く、盛土が流出して堆積したものであると思われる。

埋葬施設　盛土が失われているために、埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物　周溝の各所から弥生時代中期の土器が出土している（448～452）。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

SX08（図版89・96　写真図版94～96）

検出状況　調査区の北端にあり、一部C地区にかかる。中央部をほ場整備に伴う水路によって削られている。この周溝墓は他の周溝墓とは方向を違えており、約45度傾いている。

規模・形態　周溝の内側で短軸8.0ｍ、長軸9.2ｍ、外側で短軸9.4ｍ、長軸10.4ｍのほぼ正方形である。

周溝　全周しており、北側と南側のコーナーが途切れる。幅は0.6～0.8ｍと狭く、深さは0.2～0.5ｍである。

埋葬施設　盛土が失われているために、埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物　西側の周溝内から弥生時代中期の甕（453～456）のみが出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）。

SX09　（図版90・96）

検出状況　調査区の東端の微高地上にあり、西側は奈良時代の溝SD01に切られ、中央部も平安時代の土坑SK01に切られる。

規模・形態　周溝の内側で南北6.9ｍあり、外側では8.6ｍである。西側を失うが、本来は旧河道SR01の際まであったものであろう。

周溝　北・南・東の３方に周溝を巡らせる。北東隅が切れ、陸橋部となる。

埋葬施設　検出していない。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器が出土している。（457～464）

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX10　（図版91・92・97）

検出状況　調査区の西端にある。電柱があったため、一部調査できていない所がある。また西端の一部が調査区外へと伸びる。

規模・形態　周溝の内側で一辺6.5ｍ、外側で7.5ｍのほぼ正方形である。

周溝　南側の周溝はSX22と共有しているため、幅が広くなっている。それ以外は幅0.8m前後、深さ約0.3ｍである。

埋葬施設　周溝内に木棺墓SK34がある。幅0.72ｍ、長さ1.28ｍ、深さ0.2ｍの長方形の土坑である。

出土遺物　弥生時代中期の土器が周溝内から出土している（465～473）。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX11（図版93　写真図版97）

検出状況　調査区の西端にある。北側はSX20に接し、西側はSX09に接する。

規模・形態　東西5.5ｍ、南北4.4ｍほどの隅円方形である。

周溝　北側はSX20、西側はSX09と周溝を共有する。南側の周溝は幅1.0ｍ、深さ0.3ｍである。

埋葬施設　中央には木棺墓の痕跡であるSK08 が、南側の周溝内に周溝内埋葬である木棺墓SK13 がある。SK08は木棺墓の墓壙の底部であり、長軸2.0ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.1ｍである。SK13は東西1.5ｍ、南北0.8ｍ、深さ0.3ｍの掘方に長さ1.3ｍ、幅0.5ｍの木棺をおさめる。

出土遺物　周溝内からは土器の小片が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX20　（図版93　写真図版97）

検出状況　SX11の北側に周溝を共有して接する。北側の大半は調査区外に延びている。盛土は失われ

ており、周溝のみ検出している。

規模・形態　全体の規模は不明である。隅円方形であろう。

周溝　南側に幅1.0ｍの周溝を巡らせる。深さは約0.2ｍである。

埋葬施設　検出していない。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器（474～481）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX22　（図版91・92・97）

検出状況　Ｍ２地区のSX18と重なるように検出している。

規模・形態　周溝の内側で南北6.5ｍ、東西５ｍ以上の隅円方形であるが、西側がＭ２地区SX18と重なるため、全体の規模は不明である。

周溝　北側はSX10と周溝を共有し、西側の周溝で幅1.1ｍ、深さ0.2ｍである。

埋葬施設　検出していない。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器の小片が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものであろう。

３．土坑

SK01（図版101）

検出状況　調査区の東端にあり、方形周溝墓SX09の上層で検出した。

規模・形態　南北3.6ｍ、東西4.2ｍ、深さ0.2ｍあり、西側が広く東側が狭い台形である。

埋土　暗褐色極細砂で埋まる。

出土遺物　平安時代の土器（482～489）、弥生時代の磨製石剣（S88）が出土している。

時期　平安時代のものである。

SK02（図版102）

検出状況　調査区の東端にある。弥生時代の遺構の上層で検出した。

規模・形態　南北6.4ｍ、東西1.1ｍの楕円形である。

埋土　灰色シルト質極細砂で埋まる。

出土遺物　平安時代の土器（487・488）、弥生時代の石棒（S92）が出土している。

時期　平安時代のものである。

SK03（図版102）

検出状況　調査区の東端にあり、西側をSD01に接する。弥生時代の遺構の上層で検出した。

規模・形態　南北3.9ｍ、東西1.2ｍの不整形であり、深さは0.1ｍほどである。

埋土　灰色シルト質極細砂で埋まる。

出土遺物　平安時代の土器（489～492）が出土している。

時期　平安時代のものである。

SK04（図版102）

検出状況　調査区の北東隅で、弥生時代の遺構の上層で検出した。西側はSK05に切られる。

規模・形態　東西・南北ともに約６ｍの不整形であり、深さは0.2ｍほどである。

埋土　下層は礫混じりのシルトで、上層は極細砂質のシルトで埋まる。

出土遺物　平安時代の土器（493）、弥生時代の楔形石器（S47・48・59）、加工痕のある剥片（S75）、砥石（S191・195）が出土している。

時期　平安時代のものである。

SK06（図版102）

検出状況　調査区の北東隅で、弥生時代の遺構の上層で検出した。北側は調査区外に続き、西側はSD01に切られる。

規模・形態　全形が不明なため、規模・形態ともに不明である。

埋土　黒褐色極細砂質シルトで埋まる。

出土遺物　平安時代の土器（495・496）が出土している。

時期　平安時代のものである。

SK21（図版101）

検出状況　調査区の北側、SD02とSR01に挟まれたところで検出した。

規模・形態　南北2.3ｍ、東西0.7ｍ、深さ0.3ｍの楕円形である。

埋土　暗褐色シルト～シルト質極細砂で埋まる。

出土遺物　弥生時代中期の土器（503）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SK36（図版101）

検出状況　調査区の北側、SR01の西側で検出した。

規模・形態　東西2.7ｍ、南北1.1ｍ、深さ0.4ｍの楕円形である。

出土遺物　弥生時代中期の土器（511・512）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

４．木棺墓

SK20（図版20　写真図版98）

検出状況　調査区の北東、SR01の東側にある。

規模　墓壙長1.17ｍ、墓壙幅0.60ｍ、棺長1.03ｍ、棺幅0.44ｍ、深さ0.12ｍである。

構造　長軸の両側に長さ0.50ｍ、幅0.15ｍ、墓壙底からの深さ0.18ｍの楕円形の小口穴があり、ここに小口板を立てるタイプである。

出土遺物　土器の小片が出土している。

時期　遺物から時期は決められないが、周辺にある周溝墓の時期と同じ弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである可能性が高いと考える。

SK28（図版98　写真図版98）

検出状況　調査区の南端にあり、SK30・31・33とともに、Ｌ地区SX01と同じ墓域を構成する。

規模　墓壙長2.07ｍ、墓壙幅0.78ｍ、棺長1.67ｍ、棺幅0.49ｍ、深さ0.18ｍである。

構造　西側小口のみ側板が小口板より突出しており、側板が小口板を挟み込むタイプである。

出土遺物　土器の小片が出土している。

時期　遺物から時期は決められないが、同じ墓域に属するSX01が弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであるので、同じ時期であると考える。

SK42（図版98　写真図版99）

検出状況　SX08の南東にあり、SK44・45・48・51・52とともに木棺墓群を形成する。

規模　墓壙長1.30ｍ、墓壙幅0.66ｍ、棺長1.10ｍ、棺幅0.46ｍ、深さ0.10ｍである。

構造　側板・小口板ともに底板の上におさまるタイプである。

出土遺物　土器の小片が出土している。

時期　遺物から時期を決められないが、周辺にある方形周溝墓（Ｅ地区SX08・SX04）と同じ時期、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK44（図版98　写真図版100）

検出状況　SK42の東側、SX48と並ぶように検出している。

規模　墓壙長1.17ｍ、墓壙幅0.68ｍ、棺長1.07ｍ、棺幅0.48ｍ、深さ0.28ｍである。

構造　側板が突出せず、小口板を埋め込まないタイプのものである。

時期　SK42と同じく弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK45（図版98　写真図版100）

検出状況　SK44のさらに東側、SX04のそばで検出した。

規模　墓壙長0.96ｍ、墓壙幅0.80ｍ、棺長0.72ｍ、棺幅0.58ｍ、深さ0.16ｍである。

構造　側板が両側ともに突出し、Ｈ形を呈しており、側板が小口板を挟み込むタイプである。

時期　SK42と同じく弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK51（図版98　写真図版101・102）

検出状況　木棺墓群の南端にSK52と並んで検出している。

規模　墓壙長1.69ｍ、墓壙幅0.79ｍ、棺長1.38ｍ、棺幅0.58ｍ、深さ0.10ｍである。

構造　側板が突出せず、小口板を埋め込まないタイプのものである。

時期　SK42と同じく弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK52（図版98　写真図版102）

検出状況　木棺墓群の南端にSK51と並んで検出している。

規模　墓壙長1.55ｍ、墓壙幅0.67ｍ、棺長1.34ｍ、棺幅0.53ｍ、深さ0.32ｍである。

構造　側板が両側ともに突出し、Ｈ形を呈しており、側板が小口板を挟み込むタイプである。

時期　SK42と同じく弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK60（図版99　写真図版103）

検出状況　調査区の南端、SX03の南西にあり、SK60～SK65で木棺墓群を構成する。

規模　墓壙長1.00ｍ、墓壙幅0.52ｍ、棺長0.80ｍ、棺幅0.40ｍ、深さ0.10ｍである。

構造　側板が突出せず、小口板を埋め込まないタイプのものである。

時期　遺物から時期を決定できないが、近接する方形周溝墓SX03と近い時期、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである可能性が高いと考える。

SK61（図版99　写真図版103）

検出状況　調査区の南端、SX03の南西にあり、SK60～SK65で木棺墓群を構成する。

規模　墓壙長1.40ｍ、墓壙幅0.58ｍ、棺長1.16ｍ、棺幅0.46ｍ、深さ0.20ｍである。

構造　側板が突出せず、小口板を埋め込まないタイプのものである。

時期　SK60と同じく、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK62（図版99　写真図版103～105）

検出状況　木棺墓群の中央にあり、SK61・63と並んで検出した。

規模　墓壙長2.22ｍ、墓壙幅0.84ｍ、棺長1.70ｍ、棺幅0.53ｍ、深さ0.40ｍである。

構造　長軸の両側に長さ0.65ｍ、幅0.2～0.3ｍ、墓壙底からの深さ0.12ｍの小口穴がある。またこの小口穴をつなげるよう南側に、幅0.10ｍ、深さ0.06ｍほどの側板をはめ込む溝がある。これらより、側板が小口板にはさみ込まれ、片側の側板が底板よりも下にくる構造であったことがわかる。

時期　SK60と同じく、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK63（図版100　写真図版106）

検出状況　SK62の南側で検出した。他の棺よりも墓壙が浅く、残存状態はよくない。

規模　墓壙長1.29ｍ、墓壙幅0.84ｍ、棺長1.16ｍ、棺幅0.44ｍ、深さ0.05ｍである。

構造　東側小口に幅0.15ｍ、深さ0.05ｍの小口穴がある。

時期　SK60と同じく、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SK64（図版100　写真図版106・107）

検出状況　SK61の西側で検出した。

規模　墓壙長1.85ｍ、墓壙幅0.96ｍ、棺長1.28ｍ、棺幅0.59ｍ、深さ0.36ｍである。

構造　側板が突出し、H形に小口板を挟み込むタイプである。

時期　SK60と同じく、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

５．溝・旧河道

SD01（図版103　写真図版107・108）

検出状況　調査区の東端を南北方向に縦断する。河道SR01が埋没したあとに、これを切って掘削している。この溝は南側のＬ地区から続き、北側の昭和59・60年度調査区にも続いている。

規模・形態　幅1.5～２ｍ、深さ0.2ｍほどの浅い溝である。ほぼ南北に真っ直ぐ走るが、調査区の南端で若干東に曲がる。溝底は平坦である。

埋土　灰色のシルトないしはシルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　奈良時代～平安時代の遺物（514～525）と弥生時代の石鏃（S8･10･12･22･27）、石斧（S94）、石錐（S41）が出土している。

時期　奈良時代に掘削され、平安時代後期には埋没している。

SD02（図版103　写真図版107・108・109）

検出状況　SD01の約10ｍ西側を平行して南北方向に走る。これもSR01の埋没後に掘削している。

規模・形態　幅１～1.2ｍ、深さ0.2～0.3ｍの溝である。調査区の南端で若干東へ曲がる。溝底は舟底状をなす。

埋土　灰色のシルトないしはシルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　奈良時代の土器（526・527）と弥生時代の石斧（S93）が出土している。

時期　SD01と同時期の奈良時代に掘削されたようであるが、埋没はSD01よりも早い。

SD21（図版104）

検出状況　調査区の西半を南東→北西へと走る溝である。南側はＪ地区のSD04とつながり、Ｊ地区SD01（Ｅ地区SD22の南側続き）から分岐している。

規模・形態　幅0.6～0.8m、深さ0.3mの溝であり、ほぼ直線に走る。溝底は平坦であり、断面形状は逆台形である。

出土遺物　弥生時代中期の遺物が出土している。(532)

時期　弥生時代中期の遺物が出土しているが、中期後半の方形周溝墓SX03を切っているので、掘削は方形周溝墓が築造され、廃絶して以降である。弥生時代終末期の掘削であると推測する。

SD22（図版104）

検出状況　旧河道SR02の埋没後に再掘削した溝であり、ほぼ南北に調査区を縦断する。北側はC地区SD02につながり、南側はJ地区SD01、L地区SD15につながる。

規模・形態　幅3m～5m、深さ0.5mほどであり、溝底は平坦である。

埋土　砂礫によって埋没している。

出土遺物　この地区では弥生時代中期の遺物（530・531）が出土している。

時期　掘削はSR02埋没後であり、弥生時代中期後半頃と思われるが、正確な時期は不明である。

SR01（図版103　写真図版109）

検出状況　調査区の東半を南東→北西へと流れる自然流路である。南側はL地区SD06・07に続く。

規模・形態　幅4～5m、深さ0.4mである。

埋土　最下層は砂礫層であり、その上に黒褐色シルトが堆積する。黒褐色シルト中には多量の土器が含まれる。

出土遺物　各種土器（533～586）、石庖丁（S152・153・154・155）、石斧（S95・105・123）、石鏃（S2・4・21・31・32・33・35）、削器（S44・50）、楔形石器（S56・60）、磨製石鏃（S79・90）、磨製石剣（S87）、砥石（S190）など、弥生時代中期の遺物が多く出土している。

時期　弥生時代中期には存在し、中期後半には埋没している。

SR02（図版104）

検出状況　SD22と重なって検出した自然流路である。北側はC地区につながり、南側はJ地区SR01につながる。この流路が埋没した後に、これを利用してSD22が掘削されている。

規模・形態　幅は最大で約10m、深さは0.5mほどである。

埋土　シルトで埋没している。

出土遺物　弥生時代の遺物が少量出土している。(587～591)

時期　弥生時代中期には存在し、SD22が掘削される頃には埋没している。

第6節　F地区の遺構

1．概要

F地区は町道棚原七日市線の東側、M地区とは昭和59・60年度調査区を挟んだ北側に位置する。北近畿豊岡自動車道建設に伴う発掘調査区のうち、唯一インターチェンジの北側に位置する調査区である。

調査区の北側は昭和56年度調査区、南側は昭和59・60年度調査区であり、本調査区はこれらの調査区に挟まれている。なお本調査区西半部についてはほ場整備に際して一部調査が行われ、今回検出した柱穴や土坑などの遺構の一部は半裁され、砂で埋め戻されたものがみられた。

当地区は現春日インターチェンジの拡幅となる部分を対象としているため、調査区は東西に細長く中

央でくびれて東西に２分された形状を呈する。調査区西半部は南北に延びる微高地上に位置し、遺構の大半はこの部分で検出した。ここでは調査区の制約や撹乱により明らかにしえない点もあるが、竪穴住居５棟、掘立柱建物５棟をはじめ土坑、柱穴などを多数検出した。これらの遺構は昭和59・60年度調査区に連続するものであり、さらに北側へ広がりを持つことは明白である。

調査区東半部は段丘崖を経て旧河道となる。旧河道は奈良・平安時代の上層と弥生時代の下層の２面に分けて調査した。遺構は上層で溝と掘立柱建物１棟、下層で河道、溝などを検出した。これらの溝、河道からは各時期の土器が多量に出土している。

２．竪穴住居

SH01（図版106　写真図版113）

検出状況　調査区西半部で検出した。ほぼ床面まで削平され残存状態は不良である。調査区の制約により完掘できず周壁溝と壁面の一部を検出したのみで、北半部は調査区外へ続く。SB01と重複している。

規模・形態　周壁溝の形状からこの住居は本来径６ｍ程度の円形住居であったと考える。

屋内施設　周壁溝、ベッド状遺構、柱穴、中央土坑を検出した。

周壁溝　南側の一部で検出した。残存状態が悪いため、本来全周したかについては明らかでない。規模は幅18㎝、深さ４㎝である。

ベッド状遺構　南隅部で地山削り出しのベッド状遺構の残欠を検出した。残存する形状から本来は周壁溝に沿って五角形に巡ると推定する。幅30㎝、高さ10㎝程度である。

柱穴　床面で本住居に伴う柱穴を4基検出したが、本来の主柱穴は５ないし６本と考える。

中央土坑　住居の中央付近と考えられる地点で中央土坑と推定する土坑を検出した。平面形は南北方向に主軸をもつ不整な楕円形を呈する。東西0.9ｍ、南北1.05ｍ、床面からの深さ30㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土の中層に土器片を包含する。

出土遺物　甕（600）、高杯（601）を図示した。また石器は楔形石器（S58）、加工痕のある剥片（S76）、剥片（S73）などが出土している。

所属時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SH02（図版107）

検出状況　調査区西半部で検出した。攪乱の影響を受け住居の北西隅部分のみ検出しえた。柱穴、土坑などと重複し、それらの遺構に本住居が切られている。

規模・形態　壁面がＬ字状に折れることから住居の平面形は方形を呈すると考える。住居の一部を検出しただけであり、その全容は明らかにしえない。

屋内施設　壁面に沿ってベッド状遺構がある。その他に住居に伴う施設は検出していない。

ベッド状遺構　壁面に沿ってＬ字状に検出した。幅40㎝、高さ15㎝を測る。

出土遺物　甕（602）を図示した。石器は図示しえなかったがサヌカイト製剥片が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SH03（図版106　写真113）

検出状況　調査区中央付近で検出した。調査区の制約により南隅部分のみ検出した。住居の大半は北側調査区外へ続く。

規模・形態　Ｌ字状にのびる周壁溝を検出したことから本来は方形住居であったと考えるが、建物の大

半が調査区外になるため、全容は明らかでない。

屋内施設　検出しえた施設は周壁溝のみである。

周壁溝　L字状にのびる。規模は幅20cm、深さ12cmを測る。

柱穴　周壁溝内側で数個の柱穴を検出したが、どれが主柱穴になるか明らかにできなかった。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　所属時期は明確にしえない。

SH04（図版106　写真113）

検出状況　調査区中央付近で検出した。調査区の制約により住居南東隅の部分のみ検出した。住居の北半部は調査区外へつづき全掘していない。また床面まで削平を受けている。

規模・形態　L字状に周壁溝を検出したことから本来は方形住居であったと考えるが、建物の大半が調査区外になるため、全容は明らかでない。

屋内施設　周壁溝、柱穴を検出したのみで、住居に伴うその他の施設は検出できなかった。

周壁溝　L字状に検出した。規模は幅16cm、深さ5cmを測る。

柱穴　周壁溝内側では複数の柱穴を検出したが、確実に本住居に伴う柱穴は抽出できなかった。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　所属時期は明確にしえない。

SH05（図版107）

検出状況　調査区南西隅で検出した。土坑を中心に柱穴が分布していることから、削平により周壁溝を失った住居と判断した。住居の西半部は調査区外へ続くと考えられる。住居周辺は遺構密度の高い場所であり、掘立柱建物など他の複数の遺構と重複している。

規模・形態　本来の平面形状・規模は明らかでない。

屋内施設　柱穴、中央土坑を検出した。

柱穴　確実に本住居に伴う柱穴は抽出できなかった。主柱穴の数も明らかでない。

中央土坑　東西に主軸をもつ不整楕円形を呈する。東西130cm、南北75cmを測る。深さは4cmである。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　所属時期は明確にしえない。

3．掘立柱建物

SB01（図版108　写真図版114）

検出状況　調査区西半部で検出した。建物の北西隅の部分のみ調査区外へ続くがほぼ完掘できた。比較的遺構密度の高い場所にあるため、SH01や柱穴などの遺構と重複している。またSB04が南西隅部に近接して所在している。

形状・規模　2間×3間の側柱建物である。建物の方位は桁行がN69°　Wを示す。規模は桁行7.0m、梁行4.4mを測る。柱穴間距離は、桁行2.3m、梁行2.2mでばらつきはほとんどない。

柱穴　8基検出し、北西隅の柱穴2基は調査区外となる。柱穴等遺構の密度が高い地点で検出したが、規模・形状から本建物を構成する柱穴の抽出は可能である。掘方の平面形は隅丸方形を呈し、一辺60～80cmを測る。深さは削平によるためか20～50cmと浅い。ほぼすべての柱穴が切り合いをもつことから、1度の建て替えが想定される。建て替え後の柱穴は総体的に40～60cmと建て替え前と比較して小型化

し、平面形も円形になる傾向にある。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　出土遺物はないが、奈良・平安時代に属すると考える。

SB02（図版109　写真図版114）

検出状況　調査区北西隅で検出した。柱穴を除いて他の遺構との重複はみられない。

形状・規模　建物の南東隅の東西２間分、南北１間分のみ検出したが、建物の大半は調査区外となるため全容は不明である。建物の方位はN75°　Wを示す。柱穴間距離は東西が1.8～2.0ｍ、南北が1.5ｍ程度でばらつく。

柱穴　本建物を構成する柱穴は４基検出したが、うち２基は調査区外に続くため全容は不明である。平面形は不整な方形を呈し、１辺40～80㎝を測る。深さは南東隅の柱穴が22㎝の他は10㎝未満で浅い。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　出土遺物はないが、奈良・平安時代に属すると考える。

SB03（図版108）

検出状況　調査区西端で検出した。竪穴住居などと重複しているが、それぞれの柱穴を区別することは困難である。南端は南側調査区外に続くと考える。

形状・規模　検出した地点は柱穴などが密集し、本建物を構成する柱穴を抽出するのは困難だが、２間×５間程度の南北棟建物になると考える。建物の方位はほぼ南北を示す。また北側では棟持柱と考えられる柱穴を検出している。東西3.6ｍ、南北7.0ｍを測り、南側にはさらに延びる可能性がある。柱間距離は北端が2ｍ程度あるのに対し、南側は1ｍ程度しかない。

柱穴　本建物を構成する柱穴を規模や形状から抽出することは困難であった。図示したものは配列から考慮して抽出したものである。平面形は円形または楕円形を呈し、径は20～60㎝とばらつきがある。深さはいずれも20㎝以下で浅い。柱穴の規模・形状や柱穴間距離が奈良・平安期の建物と異なることから、弥生時代の掘立柱建物の可能性がある。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　出土遺物はないが、柱穴の規模などから弥生時代に属する可能性がある。

SB04（図版109）

検出状況　調査区西半部で検出した。平面的にはほぼ完掘したと思われる。北東部分がSB02と近接するほか、柱穴などと重複している。

形状・規模　桁行がほぼ南北方向を示す側柱建物である。２間×５間分を検出したがさらに北側調査区外に続く可能性がある。南西隅の柱穴などを削平や攪乱によって欠いている。規模は東西4.4m、南北9.8ｍを測る。

柱穴　柱穴の平面形は円形と方形のものが混在する。規模は径または１辺の長さ40～160㎝、検出面からの深さ８～22㎝を測る。

出土遺物　出土遺物は弥生土器壺（603）が唯一であるが混入遺物であろう。

時期　出土遺物は混入したものと考えられ、奈良・平安時代に属すると考える。

SB05（図版110）

検出状況　調査区中央付近で東西方向に並ぶ柱穴列として検出した。調査区の幅が狭いうえに大きく撹乱を受けているため詳細は明らかでない。

形状・規模　調査区の制約と攪乱により詳細は明らかにできないが、柱間４間の柱穴列として把握でき、東西棟の掘建柱建物となる可能性がある。長さ7.4ｍを測る。

柱穴　柱間距離は西端が約１ｍある他は２ｍ前後である。平面形は不整な円形を呈し、径50～90㎝、検出面からの深さ10～40㎝を測る。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　出土遺物はないが、奈良・平安時代に属すると考える。

SB06（図版110　写真114～116）

検出状況　調査区東半部の段丘下で検出した。SD03と一部重複する。断面観察によるとSR01埋没の最終段階に行われた整地後に柱穴が掘り込まれている。

形状・規模　南北方向に６間分の柱穴列として検出したが、さらに南側調査区外につづく可能性がある。方位はN7°　Wを示し、P190からP196間の距離は16.4ｍ、柱穴間距離は2.5～3.0ｍを測る。この柱穴列の周囲にも7基ほどの柱穴があるが規模は小さく、柱穴列として把握できるものはない。

本柱穴列が建物を構成するものと仮定するならば七日市遺跡の奈良・平安時代の掘立柱建物としては最大規模のものとなる。

柱穴　検出した柱穴は7基で、大半の柱穴には柱が残存し、P191は根固めなどの礫を入れている。平面形は不整な楕円形を呈し、径は60～120㎝を測る。柱穴は整地層をある程度下げた状態で検出したためいずれも浅いが、柱痕の残存長や断面観察から復元すると少なくとも深さが40㎝程度あったと考える。

出土遺物　柱穴内より須恵器底部（604）、壺底部（605）が出土している。

時期　明確な時期は明らかでないが、遺構の重複から奈良時代後半～平安時代に建てられたと考える。

４．土坑

SK05（図版111）

検出状況　調査区西半部の北壁際で検出した。SH01と重複関係にあるがその先後関係は明らかでない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し長径0.9ｍ、短径0.75ｍを測る。検出面からの深さは10㎝である。断面形は逆台形を呈し、底部は凹凸をもつ。

出土遺物　図示できる遺物は出土していない。

時期　所属時期は明確にしえない。

SK11（図版111）

検出状況　調査区中央付近で検出した。南側を撹乱により失っている。

形状・規模　平面形は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。南東隅部分がカーブし、おさまっていくように見えるため、さほど南側調査区外へは続かないと考える。全長2.0ｍ、現存幅は１ｍ程度である。検出面からの深さは18㎝あり断面形は箱状を呈する。埋土内に土器片と骨片を含んでいる。

出土遺物　弥生土器広口壺（612～615）、壺底部（616）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SK12（図版111）

検出状況　調査区中央付近で検出した。SH03と重複関係にあり、SH03に本遺構が切られている。

形状・規模　平面形は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。西半部はSH03によって欠いている。現存長1.8ｍ、幅0.8ｍを測る。検出面からの深さは10㎝あり断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　弥生土器広口壺（617）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SK15（図版111）

検出状況　調査区中央付近、SK11の東側で検出した。溝や土坑と重複関係にあり、本遺構が他の遺構を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し長径0.7ｍ、短径0.55ｍを測る。検出面からの深さは25㎝であり、断面形はＵ字状を呈する。埋土内には土器片を含む。

出土遺物　弥生土器無頸壺（618）、甕（619）、底部（620）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK16（図版111）

検出状況　調査区南西隅で検出した。SB03と重複しているがその先後関係は明らかでない。その他の遺構との切り合いはみられない。

形状・規模　平面形は不整な楕円形を呈し長径1.1m、短径0.6ｍを測る。検出面からの深さは12㎝であり、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　須恵器杯（621・622）、土師器甕（623）を図示した。また石庖丁（S157）も出土している。

時期　出土遺物から奈良時代中～後半と考える。

５．溝・旧河道

SD03（図版112　写真図版117・118）

検出状況　調査区東半部上層で検出した南北方向にのびる溝である。SD04の東側に位置し、SD04と平行、SD10と直交する。

形状・規模　南北方向にのび、南北両側とも調査区外へ続く。幅3.5m、検出面からのは深さ30㎝である。調査区中ほどからSD11が分岐している。

埋土　シルトが堆積する。埋土には土器を多く包含する。

出土遺物　多数の須恵器・土師器が出土している。このうち、須恵器杯（625・626）、椀（627・628）、鉢（629）、高台付碗（630）、土師器椀（631）、甕（632）を図示した。なお、図示していないが木製品では板材などの加工材も出土している。弥生土器高杯（624）も出土しているが混入遺物であろう。

時期　出土遺物から奈良時代を通じて機能していたと考える。

SD04（図版112　写真図版117・118）

検出状況　調査区東半部上層で検出した南北方向にのびる溝である。SD03の西側に位置し、SD03・SD11と平行、SD10と直交する。

形状・規模　南北方向にほぼ直線的にのび、南北両側とも調査区外へ続く。幅２ｍ前後、検出面からの深さは15㎝程度である。

埋土　灰色から暗灰色シルトが単層で堆積する。

出土遺物　SD03同様に須恵器・土師器が出土しているが須恵器皿（638）のみ図示しえた。

時期　SD03同様に奈良時代を通じて機能していたと考える。

SD10（図版112）

検出状況　調査区東半部上層で検出した東西方向にのびる溝である。サブトレンチの掘削により北側の

肩を失っている。

形状・規模　SD03・04を埋める整地層から掘り込まれている。検出面からの深さ20cm、幅は不明である。

埋土　埋土内には礫や炭を含んでいる。

出土遺物　須恵器、土師器が多く出土したが、このうち須恵器杯（639～642）を図示した。

時期　奈良時代後半に掘削されたようである。

SD11（図版112）

検出状況　調査区東半部上層で検出した。南北方向にのびる溝で、SD03から分岐している。

形状・規模　調査区中ほどでSD03から分岐し、北側は調査区外へ続く。幅70～100cm、検出面からの深さは20cmである。

埋土　シルトが堆積する。

出土遺物　SD03同様に須恵器、土師器が多く出土したが、このうち須恵器杯蓋（643）、杯（644～646）、甕（647）を図示した。

時期　出土遺物から掘削は奈良時代後期以降と考える。

SR01（図版112・113　写真図版117・118）

検出状況　調査区東半部で検出した。昭和59・60年度調査区検出の旧河道と同一のもので南北方向にのび、南側は昭和59・60年度調査区へ続き、北側も調査区外へ続いている。

形状・規模　南北にほぼ直線的にのびる。規模は幅８ｍ前後、検出面からの深さは0.5～１ｍ程度である。底部は南側から北側へ傾斜をもつ。

埋土　断面観察および出土遺物から埋没する過程をたどると、弥生時代中期から後期前半の段階に洪水によって河道下部に砂礫が段階的に堆積し埋没が始まる（Ⅳ層）。

後期後半には西肩付近に流路が残り、底部に粗砂が堆積するものの順次シルトが堆積していく（Ⅲ層）。なおこの流路には土器が廃棄される。古墳時代前期～中期には主にシルトが堆積し埋没が進んでいく（Ⅱ層）。この河道が埋没した飛鳥時代以降に上層遺構であるSD03、SD04などが掘削される。これらの溝は自然堆積によりしだいに埋没し、その機能は失われていく。その後平安時代に整地が行われ（Ⅰ層）SB06が建てられる。

Ⅰ層は北壁１～８層、南壁2～４層、Ⅱ層は北壁10～15層、南壁５～10層、Ⅲ層は南壁11～16層、Ⅳ層は北壁18～20層、南壁17～22層が該当する。

出土遺物　各時代の土器が多数出土した。Ⅳ層出土土器として（649～655）、Ⅲ層出土土器として（656～706）、溝出土を除くⅠ層出土土器として（707～744）を図示した。また石器の出土も多く、このうち楔形石器（S61）を図化した。

第７節　Ｇ地区の遺構

１．概要

Ｇ地区は県道春日栗柄線の東側に沿った南北約100ｍ、東西40ｍ余の調査区で、調査区の西側に偏って平安時代の掘立柱建物６棟が分布している（調査時にはSB03とSB06を別棟としていたが、整理段階で一棟にまとめたため、SB06が欠番となっている）。県道がかつての坪境に相当し、坪境の通路に面して建物が並んでいたものと考えられる。

2．掘立柱建物

SB01（図版115　写真図版120～122）

検出状況　G地区西半部建物群の南端に位置し、西辺は調査範囲外に延びる可能性がある。検出範囲のうち西側1間分は建て替えの痕跡が明瞭で、他の切り合った柱穴についてもほぼ同じ場所を踏襲しているところから、全体的に建て替えられたことがあったとも考えられる。なお建物外の東側には井戸SE01がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°　Wで、東西4＋α間×南北4間の総柱建物である。ただし西南隅の柱は欠いており、南側1間分は全体にあったかどうか不明である。東西方向の規模は検出した範囲内で10.2m、柱間は2.4～2.7m。南北方向の規模は12.5m、柱間は北側3間が3.1～3.3mなのに対し、南側1間が約2.8mであるところから、この部分は建物の張出し部か廂部であったとみられる。検出範囲の床面積は120.22㎡である。

柱穴　掘方は直径30～45cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～40cmである。柱穴P5・P20には柱の抜き取り痕に角礫が入れられていた。P10では3つの柱穴が切り合った最終段階の抜き取り痕に、土師器鍋が納められていた。

出土遺物　柱穴P8から須恵器椀（750）、土師器杯（756）、P10から土師器小皿（758）・鍋（764）、P11から須恵器小皿（745）、土師器杯（755）、P12から須恵器椀（749）、土師器杯（757）・小皿（760）・鍋（762）、黒色土器椀（765～767・769）、P13から須恵器椀（747・748・752・753）、土師器小皿（761）・鍋（763）、黒色土器椀（768・770）、P17から須恵器小皿（746）、P18から土師器小皿（759）、P19から須恵器椀（751）、P92から土師器杯（754）が出土した。

時期　12世紀前半の年代が与えられる。

SB02（図版116　写真図版122）

検出状況　G地区西半部建物群の中央に位置し、西辺は調査範囲外に延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN11°　Wで、東西3＋α間×南北4間の総柱建物である。東西方向の規模は検出した範囲内で7.6m、柱間は2.2～2.8m。南北方向の規模は10.8m、柱間は2.6～3.0m。検出範囲の床面積は82.08㎡である。

柱穴　掘方は直径25～35cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ20～30cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB03（図版117　写真図版122・123）

検出状況　G地区西半部建物群の北端に位置し、西辺は調査範囲外に延びる可能性がある。建物東側の外5mには井戸SE02がある。SB05と重複しており、柱穴の1箇所に切り合い関係がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN9°　Wで、東西3＋α間×南北5間の総柱建物である。さらに南辺には半間分の廂が付属する。東西方向の規模は検出した範囲内で7.2m、柱間は2.3～2.5m。南北方向の規模は15.6m、柱間は北側5間が約2.7mで、廂部の1間が約2.0mである。検出範囲の床面積は112.32㎡である。

柱穴　掘方は直径20～50cmの円形で、直径約20～30cmの柱痕部を有し、深さ15～30cmである。柱穴P70・P75には柱の抜き取り痕に角礫が入れられていた。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はないが、SE02と同時期と考えられる。

SB04（図版118　写真図版120）

検出状況　G地区西半部建物群のSB01の北側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°　Wで、東西2間×南北2間の総柱建物である。さらに北辺には50～60cmほどずれて塀か柵状の柱列が付設する。東西方向の規模は4.6m、柱間は2.2～2.5m。南北方向の規模は4.9m、柱間は2.2～2.6m。検出範囲の床面積は22.54㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB05（図版118　写真図版122）

検出状況　G地区西半部建物群の北端に位置し、SB03と切り合い関係がある。東辺中央の柱穴は欠けている。さらに北側の調査区壁際にも柱列が認められるが、柱間・方向が微妙にずれており、別の建物の存在が考えられる。

形状・規模　南北方向の軸線はN6°　Wで、東西3間×南北2間の総柱建物である。東西方向の規模は検出した範囲内で6.2m、柱間は2.0～2.1m。南北方向の規模は4.1m、柱間は2.0～2.1m。床面積は25.42㎡である。

柱穴　掘方は直径25～30cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB07（図版118）

検出状況　G地区西半部建物群のSB02の北側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°　Wで、東西1間×南北2間の建物である。東西方向の規模は2.0m、柱間は1.8～2.0m。南北方向の規模は5.7m、柱間は2.8～2.9m。検出範囲の床面積は11.4㎡である。

柱穴　掘方は直径25～35cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ20～35cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

3．井戸

SE01（図版119　写真図版124）

検出状況　掘立柱建物SB01建物外の東側に位置する。井戸に伴う覆い屋状の施設は確認できなかった。

形状・規模　掘方の平面形は不整な円形で、2段に掘り込んでいる。素掘りの井戸で、下層の5層には植物遺体を含む粘土層が堆積しており、当初から井戸枠をもたなかったとみられる。その後一気に埋め戻されており、最上層は角礫・土器を混ぜて埋め立てている。規模は上面の径が約2.3m、底面の径が約1.1m、深さ1.35mである。

出土遺物　土師器鍋（788）、瓦器椀（789）、黒色土器椀（790）などがある。

時期　12世紀前半頃の年代が与えられる。

SE02（図版119　写真図版124・125）

検出状況　掘立柱建物SB03建物外の東側に位置する。井戸に伴う覆い屋状の施設は確認できなかった。

形状・規模　掘方の上面は不整な円形だが、四辺を垂直に掘り込むことによって、内壁を方形にしている。使用時には井戸枠が用いられていたとみられるが、廃棄時に抜き取られて残っていない。その後一気に埋め戻されており、最上層は角礫・土器を混ぜて埋め立てている。規模は上面の径が約1.4m、底面が1.0×1.15m、深さ1.2mである。

出土遺物　須恵器椀（791・792）、土師器小皿（793・794）などがある。

時期　12世紀後半頃の年代が与えられる。

4．土坑

SK01（図版119　写真図版125・126）

検出状況　井戸SE01の南東側8mに位置する。

形状・規模　平面形は方形で、垂直近くに掘り込み、底面は平坦である。底面外周の一部に縦板が残っており、本来は木枠を伴うものであった。埋土には炭・灰層が認められ、井戸以外の用途が考えられる。規模は一辺0.9m、深さ0.6mである。

出土遺物　須恵器椀（777）、土師器杯（778・779）・小皿（780～783）・托（784）、黒色土器椀（785・786）、白磁碗（787）などがある。

時期　12世紀前半頃の年代が与えられる。

SK02（図版119　写真図版126）

検出状況　井戸SE01の南側4m、土坑SK01の西側5mに位置する。

形状・規模　平面形は円形で、ほぼ垂直に掘りこみ、底面は平坦である。規模は径0.5m、深さ0.25mである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SK03（図版119　写真図版127）

検出状況　井戸SE01の東側に接しており、西半部を切られている。

形状・規模　現状は方形を対角線に切り取られた形である。規模は長辺1.0m、深さ0.2mである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第8節　H地区の遺構

1．概要

H地区はD地区の南側、G地区の東側に位置し、南北、東西とも60m前後の正方形に近い調査区である。調査区の西半部は旧河道や水路状の溝が通る低地であるのに対し、東半部の微高地には弥生時代の竪穴住居・土坑・溝、平安時代の掘立柱建物などが立地する。

2．竪穴住居

SH01（図版121　写真図版128）

検出状況　H地区東南隅に位置し、主軸は正方位に対し、45°ほど傾いている。

形状・規模　平面形はやや不整な方形で、規模は北西－南東方向が3.7m、北東－南西方向が3.8m、検出面からの深さ10cmである。床面の遺構は北東辺側の中央に柱穴を1箇所検出したのみである。

出土遺物　埋土および床面から弥生土器壺（795・796）が出土した。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）に属する。

3．掘立柱建物

SB01（図版122　写真図版129）

検出状況　H地区東北隅に位置し、北辺は調査区外に延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN9°　Wで、東西3間×南北3＋α間の総柱建物である。東西方向の規模は7.9m、柱間は2.6～2.8m。南北方向の規模は検出した範囲内で9.9m、柱間は3.2～3.4m。検出範囲の床面積は78.21㎡である。

柱穴　掘方は直径25～40cmの円形で、直径約20cmの柱痕部を有し、深さ10～30cmである。

出土遺物　柱穴P1から黒色土器椀（798）、P2から黒色土器椀（797）が出土した。

時期　11世紀末～12世紀初頭の年代が与えられる。

4．土坑

SK01（図版123）

検出状況　H地区南東側に位置し、SK02を切る。

形状・規模　平面は楕円形で、径1.3×0.8m、深さ10cmである。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　不明である。

SK02（図版123）

検出状況　H地区南東側に位置し、東南端をSK01に切られる。

形状・規模　平面は隅丸方形で、径1.05×0.9m、深さ15cmである。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　不明である。

SK03（図版123）

検出状況　H地区東北端で、SB01の東側に位置し、北端をSK04に切られる。

形状・規模　平面は円形で、径0.75m、深さ15cmである。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　不明である。

SK04（図版123）

検出状況　H地区東北端で、SB01の東側に位置し、SK03を切る。

形状・規模　平面は円形で、径0.8m、深さ10cmである。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　不明である。

5．溝

SD01（図版121）

検出状況　Ⅰ地区の西北隅で旧河道から分岐し、G・H地区の間からH地区西端沿いに北上した後、D地区のSD07に続き、再び旧河道に合流する。

形状・規模　旧河道の西側をバイパス状につなぐ溝で、人為的なものかどうかは不明である。H～D地区にかけての延長は約110ｍで、幅1.5ｍ、深さ45cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SD02（図版121）

検出状況　H地区東側に位置する。

形状・規模　北西－南東方向の緩い弧状の溝である。延長は4.5ｍで、幅0.6ｍ、深さ20cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SD03（図版121）

検出状況　H地区東北隅に位置し、掘立柱建物SB01と重複している。

形状・規模　東西方向の弧状の溝で、南に向かって円弧が張り出し、西端近くで二股に分岐する。延長は約30ｍで、幅0.7ｍ、深さ20cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第９節　Ⅰ地区の遺構

１．概要

Ⅰ地区はH地区の南側に位置する。調査区の東半部は微高地の縁辺部にあたるため、土坑１基を検出したのみで、ほとんど遺構は存在しない。一方、西半部は旧河道となっている。旧河道は平坦な低地を蛇行しながら北流する自然河道で、Ⅰ地区からH・D・B・A地区を貫流するが、ここでまとめて説明を加える。

２．土坑

SK01（図版123　写真図版129）

検出状況　Ⅰ地区中央に位置する。

形状・規模　平面は楕円形で、垂直近くの角度で掘り込まれた素掘り井戸状の土坑である。径1.45×0.9ｍ、深さ75cmである。

出土遺物　遺物は遺物は出土していない。

時期　不明である。

３．旧河道

SR01（図版201）

検出状況　Ⅰ地区西端沿いに北上した後、H地区西南隅からD地区東北隅に向かい、B地区東端からA

地区西南隅をかすめて西北方向に向かって抜けている。

形状・規模　河道は細かく蛇行していてほとんど直線部分がなく、D地区東端・C地区西端の蛇行部分は溜まり状となっている。検出した延長は約200mで、幅5～20m、深さ30～80cmである。

出土遺物　須恵器杯（799）が出土している。

時期　弥生時代中期には既に存在しており、中世までには埋まっていたものと考えられる。

第10節　J地区の遺構

1．概要

J地区はE地区の南側にある調査区である。遺構検出面の高さはT.P.84.4m～84.6mであり、南から北へと緩やかに傾斜する。調査区の東端に旧河道SR01があり、全体に遺構が希薄である。遺構は調査区の南側にまばらにあり、弥生時代中期の土坑や溝を検出している。K地区にかけて拡がる弥生時代の居住域の北端にあたる。

2．土坑

SK01（図版125　写真図版131）

検出状況　調査区南端の東側、SR01に最も近い所で検出した。

規模・形態　東西1.1m、南北1.3mの隅円方形の平面形をなす。坑底は平坦であり、深さは0.15mである。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（800・801）と石斧（S101）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK02（図版125　写真図版132）

検出状況　SK01の西側、調査区の中央南端で検出した。

規模・形態　東西0.9m、南北1.2mの平面楕円形の土坑である。深さは0.15mであり、東側の壁はオーバーハングして、袋状を呈する。

埋土　上下2層に分かれるが、下層は地山土のブロックや炭が入り、人為的に埋めたものである可能性が高い。

出土遺物　埋土内から弥生時代中期の土器（802・803）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK06（図版125　写真図版132）

検出状況　調査区中央やや西寄りの南端で検出した。

規模・形態　長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。

埋土　3層に分かれるが、シルト～極細砂で埋没する。

出土遺物　最上層から弥生時代中期の土器（804・805）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK07（図版125　写真図版133）

検出状況　SK06の西側で検出した。

規模・形態　長軸1.3ｍ、短軸0.8ｍの楕円形の土坑である。深さは0.15ｍであり、底には段がある。

埋土　黒～黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　上層から弥生時代中期の土器（806）と石庖丁（S160）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK10（図版125　写真図版133・134）

検出状況　調査区の西端で検出した。

規模・形態　長軸1.8ｍ、短軸0.8ｍの楕円形の土坑である。深さ0.15ｍであり、底に段がある。

埋土　灰黒色～黒褐色の極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（807・808）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK11（図版125　写真図版134・135）

検出状況　SK10の東側で検出した。SK12を切って掘り込まれている。

規模・形態　南北 2.0ｍ、 東西 1.3ｍの楕円形の土坑であり、深さは 0.2ｍである。 坑底はフラットである。

埋土　シルト質極細砂で埋まる。大きく上下２層に分かれるが、上層には土器が多く含まれる。

出土遺物　弥生時代中期の土器が多量に出土している（809～814）。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK12（図版125）

検出状況　SK11の西側に重なり検出した。SK11に切られている。

規模・形態　長さ1.3ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍの不整形な土坑である。

埋土　暗灰色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器片が出土している。

時期　SK12とさほど変わらない時期、弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものであろう。

SK13（図版125）

検出状況　調査区の西端で検出した。

規模・形態　幅0.7ｍ、長さ2.8ｍ以上、深さ0.2ｍである。

埋土　シルト～極細砂で埋没する。上層には土器や炭が多量に含まれている。

出土遺物　弥生時代中期の土器（815～821）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）の初頭のものである。

３．溝・旧河道

SD01（図版126　写真図版135）

検出状況　調査区の東端で検出した。南北方向にのび、北端付近でSD04と枝分かれする。この溝は、北側はＥ地区SD22に続き、南側はＬ地区SD15に続く。

規模・形態　幅は最も広いところで3.6ｍあり、深さは0.7ｍである。西側の肩はゆるやかに傾斜しており、東側は急な角度で立ち上がる。

埋土　洪水に由来する砂礫層によって半ば埋没している。その上にシルトが堆積する。

出土遺物　最上層のシルト層から弥生時代終末期の土器（822～826）と石庖丁未製品（S159）が出土

している。

時期　掘削時期は不明であるが、弥生時代終末期には埋没している。

SD03（図版126）

検出状況　調査区中央部南よりで検出した。

規模・形態　長さ4.4ｍ、幅1.4ｍの細長い溝である。深さは0.4ｍであり、溝底は舟底状である。

埋土　黒色～黒褐色シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（827～830）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD05（図版126　写真図版136）

検出状況　調査区西よりで検出している。

規模・形態　長さ５ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.15ｍの溝である。溝底は平坦である。

埋土　黒色もしくは黒褐色のシルト～シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（831・832）が出土している。

時期　弥生時代中期前半のものである。

SR01（写真図版136）

検出状況　調査区東端、SD01 の西側で検出した。北側はＥ地区の SR02 に続き、南側はＫ地区の SR01 に続く。

規模・形態　幅５ｍ～７ｍ、深さ１ｍほどの規模を持つ。

埋土　下層は砂礫で埋没する。上層はシルトが堆積している。

出土遺物　弥生土器の破片が出土している。

時期　弥生時代中期には存在し、SD01が掘削される頃までには埋没していたようである。

第11節　Ｋ地区の遺構

１．概要

Ｊ地区の南側にある調査区である。遺構検出面の高さはT.P.84.6m～84.8mである。遺構面は西から東、南から北へとゆるやかに傾斜する。調査した遺構は弥生時代中期の土坑・溝・旧河道であり、遺構密度は南へ向かって高くなる。弥生時代中期の居住域の縁辺部にあたる。

２．土坑

SK01（図版127　写真図版137・138）

検出状況　調査区の東側で検出した。東側は攪乱にかかる。

規模・形態　東西1.3ｍ、南北0.8ｍの楕円形である。深さは0.25ｍである。

埋土　シルト質極細砂～極細砂で埋没する。第２層には土器や炭粒が多く入る。いずれの層にも地山土のブロックが入り、人為的に埋められた可能性が高いと考える。

出土遺物　弥生時代中期の土器（838～840）と石斧（S36）が第２層から出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK04（図版127）

検出状況　調査区中央部南端の壁際で検出した。調査区外へ続く。

規模・形態　全形は不明であるが、長さ1.6ｍ以上、幅0.4ｍ以上あり、深さは0.2ｍである。坑底は平坦である。

出土遺物　弥生時代中期の土器（841）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK12（図版127　写真図版138・139）

検出状況　調査区西半部北側で検出した。SD03・SD04などと環状に並ぶ。

規模・形態　南北1.4ｍ、東西1.0ｍの楕円形であり、深さは1.0ｍである。

埋土　極細砂で埋没しており、第１層から土器が多く出土している。

出土遺物　弥生時代中期の土器（842）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK19（図版127　写真図版139・140）

検出状況　調査区西半部南寄りで検出した。

規模・形態　長辺2.2ｍ、短辺1.6ｍの隅円方形である。深さは0.1ｍであり、坑底は平坦である。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（843～848）が多く出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK25（図版127）

検出状況　調査区西半部のほぼ中央で検出した。

規模・形態　長さ4.8ｍ、幅1.3ｍの不整形であり、深さは0.1ｍである。

埋土　黒褐色シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（849～857）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK26（図版127　写真図版141）

検出状況　調査区西端で検出した。

規模・形態　長軸1.4ｍ、短軸1.0ｍの楕円形である。深さは0.2ｍである。

埋土　炭・土器を多く含む層（第２層・第４層）と地山土のブロックを多く含む層が交互に重なる。炭・土器の廃棄と埋め立てを交互に繰り返した結果であろう。

出土遺物　弥生時代中期の土器（858～861）と砥石（S193）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

３．溝・旧河道

SD02（図版128　写真図版141）

検出状況　調査区中央部の北よりで検出した。

規模・形態　長さ5.3ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.15ｍであり、溝底は平坦である。

埋土　黒褐色の極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（862～866）が南側に集中して出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD03（図版128　写真図版141・142）

検出状況　調査区の西半部北側で検出した。

規模・形態　長さ6.0ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.25ｍであり、溝底は舟底状になる。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期後半の土器（867～870）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）である。

SD04（図版128　写真図版142）

検出状況　SD03の南側で検出した。

規模・形態　長さ4.0ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.3ｍであり、溝底は舟底状である。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（871）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD09（図版128　写真図版142・143）

検出状況　調査区中央部の北端で検出した。

規模・形態　長さ4.5ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.1ｍであり、溝底は平坦である。

埋土　黒褐色シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（872・873）と石庖丁（S161）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD11（図版128　写真図版143）

検出状況　調査区西端で検出した。西側は攪乱によって失われている。

規模・形態　南北４ｍ、東西1.2ｍ、深さ0.1ｍである。溝底は平坦である。

埋土　シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（874）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD12（図版128）

検出状況　調査区西半部北側で検出した。

規模・形態　全形は不明であるが、長さ2.8ｍ以上、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍである。溝底は平坦である。

埋土　極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（875・876）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SR01（写真図版143）

検出状況　調査区の東端で検出した。北側はＪ地区SR01につながる。

規模・形態　幅３ｍ、深さ１ｍほどであり、河底は浸食のため凹凸が激しい。

埋土　砂礫で大半が埋没している。

第12節　Ｌ地区の遺構

１．概要

Ｌ地区は調査対象範囲の南東部であり、西側はＪ・Ｋ地区、北側はＥ地区、東側はＭ２地区である。遺構検出面のレベルは、T.P.84.4ｍ～84.8ｍであり、西側が低く東側が高い。東側のM地区から続く微高地上に遺構が集中し、弥生時代中期の方形周溝墓や木棺墓が密集する。微高地の西側には旧河道が南北に流れ、この河道とＪ・Ｋ地区の東端を流れる河道の間は低湿地であるが、弥生時代中期には方形周溝墓と木棺墓が造られ、墓域化している。

２．方形周溝墓

SX01（図版130　写真図版145～149）

検出状況　調査区の北端、Ｅ地区との境で検出した。中央部を近世の水路で攪乱されている。周囲には木棺墓がとりまき、南側のSX02とともに墓域を形成している。若干の盛土があったと思われるが、後世の耕作のため削平されている。

規模・形態　周溝の内側で南北7.1ｍ、東西6.3ｍ、外側で南北8.1ｍ、東西7.4ｍであり、平面形は隅円方形である。

周溝　幅0.5m、深さ0.2mの幅の狭い周溝が全周している。周溝は黒褐色シルトによって埋没している。

埋葬施設　中央部で木棺墓SK01を検出した。この木棺墓は墓壙長さ2.30ｍ、幅1.05ｍ、棺長1.76ｍ、棺幅0.54ｍ、深さ0.2ｍのものであり、両側に小口穴を持ち、側板が小口板を挟み込みＨ形をなす。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器（878～880）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SX02（図版131・132・134　写真図版150・151）

検出状況　SX01 の南側で検出した。西側を近世の水路が走り、周溝の一部は壊されている。また後世の削平のため、周溝は途切れ途切れに残っているのみである。若干の盛土があったようであるが、まったく残存していない。

規模・形態　周溝の内側で南北6.5ｍ、外側で7.3ｍである。東側の周溝の残りが悪いため、明瞭ではないが、東側にある土坑を周溝の痕跡と考えれば、周溝の内側で東西9.5ｍの規模となる。平面形は隅円方形である。

周溝　削平のため、切れ切れにしか残存していないが、幅は0.3ｍ～0.5ｍ、深さは0.1～0.3ｍである。

埋葬施設　周溝内で木棺墓２基（SK44･45）と土器棺墓１基（SP01）を検出した。SK44は墓壙長0.96m、幅0.54ｍ、深さ0.1ｍの木棺墓であり、両小口には小口穴をもつ。SK45は墓壙長2.80ｍ、墓壙幅1.02ｍ、棺長1.93m、棺幅0.63mの木棺墓である。SP01は底部を穿孔した壺（881）を直立させた土器棺墓である。直径0.42ｍ、深さ0.26ｍの掘方に納める。

時期　土器棺墓の土器から、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであると考える。

SX12（図版133・134）

検出状況　調査区東端の微高地上で検出した方形周溝墓であり、Ｍ２地区まで続く。北側と東側の周溝をＬ字形に検出している。南側と西側の周溝は削平されたようであり、検出できなかった。また西側はSX21と重なっている。

規模・形態　全形は不明であるが、周溝の内側で長軸11ｍ以上、短軸６ｍ以上の規模を持つ。角は隅円になる。

周溝　北側で幅1.0ｍ、東側で幅1.5ｍであり、深さは0.3ｍほどである。

埋葬施設　削平のため埋葬施設は失われていた。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器（882～893）が出土している。

時期　弥生時代中期前半～後半（Ⅱ期～Ⅳ期）の土器が出土しているが、他の遺構との重複もあり、その築造時期を決めがたい。大型の破片に中期前半（Ⅲ期）のものが多いので、この時期に造られた可能性が高いと考える。

SX21（図版133）

検出状況　SX21と重複して検出した。東側は未調査部分に伸びているが、隣のM2地区までは続いていない。検出したのは北側と西側の周溝である。

規模・形態　周溝の内側で、5m×3m以上の規模を持つが、全形は不明である。やや丸みを帯びた方形である。

周溝　幅は0.4m～0.5m、深さは0.2mほどである。

埋葬施設　削平のため失われている。

出土遺物　周溝内から弥生時代中期の土器が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

3．木棺墓

SK02（図版135　写真図版152・153）

検出状況　方形周溝墓SX01の北西角に接して検出した。

規模　墓壙長2.40m、墓壙幅1.05m、棺長2.01m、棺幅0.66m、深さ0.32mである。

構造　両側板が小口板をH形に挟み込むタイプの木棺をおさめる。

時期　SX01と同じ弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK03（図版135　写真図版153）

検出状況　方形周溝墓SX01の西側で検出した。

規模　墓壙長1.50m、墓壙幅0.60m、棺長1.34m、棺幅0.54m、深さ0.15mである。

構造　墓壙底は平坦ではなく、置土をして平坦化している。木棺は側板が突出しないタイプである。

時期　SX01と同じ弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK04（図版135　写真図版154）

検出状況　SK01の北東で検出した。棺の主軸方向は方形周溝墓SX01の埋葬施設と一致する。

規模　墓壙長1.85m、墓壙幅0.91m、棺長1.51m、棺幅0.64m、深さ0.12mである。

構造　両短辺に、墓壙底からの深さ0.15mほどの小口穴を設ける。これに小口板を立て、側板がH形にこれを挟み込むタイプである。

時期　SX01と同じ弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK05（図版136　写真図版154・155）

検出状況　調査区東側の微高地上で検出した。

規模　墓壙長1.87m、墓壙幅0.73m、棺長1.41m、棺幅0.54m、深さ0.20mである。

構造　西側のみ小口穴があり、東側は側板が小口板を挟み込むタイプである。

時期　弥生時代終末期の溝SD04よりも古く、弥生時代中期前半の溝SD05よりも新しいので、弥生時代中期前半～後半（Ⅲ期～Ⅳ期）頃のものであると考える。

SK10（図版136　写真図版155）

検出状況　調査区の東端で検出した木棺墓であり、東側半分は調査区外に続く。

規模　墓壙幅0.74ｍ、棺幅0.54ｍであるが、長さは不明である。

構造　小口穴はなく、側板も突出しないタイプである。

出土遺物　埋土から弥生時代中期の土器（900）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK11（図版136　写真図版155）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK10の西側で検出した。

規模　墓壙長2.02ｍ、墓壙幅0.98ｍ、棺長1.65ｍ、棺幅0.54ｍ、深さ0.10ｍである。

構造　両短辺に沿って小口穴があるが、南側の小口穴は中央から東によって掘られている。両側で小口板の大きさ・形状が異なっていたのであろう。側板は突出しない。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK12（図版136　写真図版156）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK11の北側で検出した。主軸方向はSK11と同じである。

規模　墓壙長1.85ｍ、墓壙幅0.92ｍ、棺長1.33ｍ、棺幅0.57ｍ、深さ0.28ｍである。

構造　両短辺に小口穴があるが、いずれも極めて浅い。両側板は小口板よりも突出して、Ｈ形に挟み込むタイプである。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK16（図版137）

検出状況　調査区東側の微高地上、木棺墓群の北端で検出した。溝SD05を切っている。

規模　墓壙長1.81ｍ、墓壙幅0.68ｍ、棺長1.15ｍ、棺幅0.67ｍ、深さ0.18ｍである。

構造　大きな墓壙に、短い棺を納める。小口穴はなく、側板の突出もない。

出土遺物　埋土から弥生時代中期の土器（903）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK19（図版137　写真図版157）

検出状況　調査区東側の微高地上、木棺墓群の北よりで検出した。

規模　墓壙長1.40ｍ、墓壙幅0.63ｍ、棺長1.11ｍ、棺幅0.45ｍ、深さ0.20ｍである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK20（図版137　写真図版157）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK19の北東で検出した。弥生時代中期前半の溝SD05を切る。

規模　墓壙長1.76ｍ、墓壙幅0.75ｍ、棺長1.34ｍ、棺幅0.46ｍ、深さ0.12ｍである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK21（図版137　写真図版157）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK19の東で検出した。弥生時代中期前半の溝SD05を切る。

規模　墓壙長2.70ｍ、墓壙幅0.90ｍ、棺長1.87ｍ、棺幅0.53ｍ、深さ0.50ｍである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

出土遺物　埋土から弥生時代中期の土器（904）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK23（図版138　写真図版158）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK11の北で検出した。土坑SK26を切る。

規模　墓壙長2.00ｍ、墓壙幅0.77ｍ、棺長1.44ｍ、棺幅0.51ｍ、深さ0.16ｍである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

出土遺物　埋土から弥生時代中期の土器（905）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK25（図版138　写真図版158）

検出状況　調査区東側の微高地上、SK05の北側で検出した。

規模　墓壙長1.43ｍ、墓壙幅0.56ｍ、棺長1.43ｍ、棺幅0.47ｍ、深さ0.15ｍである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期～Ⅳ期）のものである。

SK42（図版138　写真図版160・161）

検出状況　調査区南西部の低地で検出した。

規模　墓壙長0.97ｍ、墓壙幅0.46ｍ、棺長0.71ｍ、棺幅0.32ｍ、深さ0.10ｍの小型のものである。

構造　両短辺に小口穴があり、側板は突出して小口板を挟み込むタイプである。

時期　出土遺物はなく正確な時期は不明であるが、SX01・02と同じ墓域に属するとすれば、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK43（図版138　写真図版161）

検出状況　調査区南西部の低地、SK42の西側で検出した。

規模　墓壙長1.77ｍ、墓壙幅0.63ｍ、棺長1.39ｍ、棺幅0.46ｍ、深さ0.05ｍである。

構造　両側板が突出して、小口板をＨ形に挟み込むタイプである。

時期　SK42同様、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK30（図版135　写真図版159）

検出状況　調査区の北西、SX01の北側で検出した。調査区としてはＥ地区に入るが、SX01と一体の墓域を形成するので、Ｌ地区の遺構としてここで報告する。

規模　墓壙長1.78ｍ、墓壙幅0.70ｍである。

構造　両短辺に小口穴があるタイプである。棺の組み合わせ方は不明である。

時期　SX01と一体の墓域にあるので、SX01同様弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK31（図版135　写真図版159）

検出状況　調査区の北西、SX01の北側で検出した。SK30同様、調査区としてはＥ地区に入るが、SX01と一体の墓域を形成するので、Ｌ地区の遺構としてここで報告する。

規模　墓壙長0.98ｍ、墓壙長0.65ｍ、棺長0.82ｍ、棺幅0.43ｍ、深さ0.20ｍである。

構造　西側小口は北側板のみ突出し、南側板は突出しない。東側小口は両側板ともに突出する。小口穴はない。

出土遺物　楔形石器（S62）が出土している。

時期　SX01と一体の墓域にあるので、SX01同様弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

SK33（図版135　写真図版160）

検出状況　調査区の北西部、SX01の北西で検出した。これもSK30同様に調査区としてはE地区に入るが、SX01と一体の墓域を形成するので、L地区の遺構としてここで報告する。

規模　墓壙長1.32m、墓壙長0.67m、棺長1.16m、棺幅0.52m、深さ0.30mである。

構造　小口穴はなく、側板の突出もないタイプである。

時期　SX01と一体の墓域にあるので、SX01同様弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであろう。

4．土坑

SK08（図版139）

検出状況　調査区東側の微高地南側で検出した。溝SD04に切られている。

規模・形態　幅1.0m、長さ1.2m以上の楕円形の土坑である。坑底は平らである。土壙墓の可能性もあるが、断定できない。

出土遺物　弥生時代中期の土器（897）が出土している。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK09（図版139）

検出状況　調査区東側の微高地上で検出した。木棺墓SK11に切られている。

規模・形態　長径2.8m、短径1.7m、深さ0.10mの楕円形の土坑である。

出土遺物　弥生時代中期の土器（898）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK14（図版139）

検出状況　調査区東側の微高地南で検出した。

規模・形態　長径1.1m、短径0.5m、深さ0.08mの土坑である。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（901・902）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK26（図版139）

検出状況　調査区東側の微高地で検出した。木棺墓SK23に切られる。

規模・形態　長径1.6m、短径1.0m、深さ0.2mの楕円形である。

埋土　黒褐色シルト質極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（906）が出土している。

時期　弥生時代中期。

SK35（図版139）

検出状況　調査区東側の微高地の北側で検出した。

規模・形態　長径1.8m、短径1.6m、深さ0.1mである。

埋土　黒褐色極細砂で埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（907～909）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

5．溝・旧河道

SD01（図版140）

検出状況　調査区の東側、微高地の下を南北方向に走る溝である。旧河道SD06 の埋没後に、これと重なるように掘削されている。北側はＥ地区SD01につながる。

規模・形態　幅は約２m、深さ0.3mであり、溝底は平坦である。

埋土　下層は砂礫で、上層は灰色シルトによって埋没している。

出土遺物　奈良・平安時代の土器（946～958）と弥生時代の石斧（S124）、石鏃（S16）、石錐（S42）が出土している。

時期　Ｅ地区SD01と同様、奈良時代に掘削されたものである。

SD02

検出状況　SD01の西側約10mを平行して走る。北側はＥ地区SD02に続く。

規模・形態　幅約１m、深さは0.2m～0.3mである。

埋土　灰色シルトで埋没する。

出土遺物　奈良時代の土器が出土している。

時期　Ｅ地区SD02同様、奈良時代に掘削されたものである。

SD04（図版142　写真図版161）

検出状況　調査区東側の微高地上を南東→北西へと走り、旧河道SD06に合流する。

規模・形態　幅0.4m、深さ0.3mであり、底が平坦で断面は逆台形である。

埋土　上層は黒褐色シルト質極細砂で、下層は黒色シルトで埋没する。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（910～912）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ期）の木棺墓を切るので、掘削はこの時期以降であり、埋没は出土遺物が示す弥生時代終末期である。

SD05（図版142　写真図版161）

検出状況　調査区東側の微高地上を南東→北東へと走り、旧河道SD06に合流する。

規模・形態　幅0.3m～0.5m、深さ0.3mである。底は平坦であり、断面は逆台形である。

埋土　黒～黒褐色シルトで埋没する。

出土遺物　弥生時代中期の土器（913～917）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅱ期）には埋没している。

SD06（図版140・141）

検出状況　調査区東側の微高地を南北に流れる。北側はＥ地区旧河道SR01につながる。調査区中央付近で、Ｍ地区SD01から続く溝が合流している。この付近から北側は溝として人為的な加工が施されているようであるため、合流部より北側をSD06とし、これより南側をSD07として区別している。

規模・形態　幅４～５m、深さ0.5mほどである。

埋土　最下層は砂礫、上層はシルトで埋没している。

出土遺物　弥生時代中期の土器（918～930）と削器（S46）が出土している。

時期　弥生時代中期。

SD07

検出状況　SD06の南側に続く自然流路である。

規模・形態　幅２～３m、深さ0.5mほどである。

出土遺物　弥生時代中期（931～933）と終末期（934）の土器、石斧（S111）、石鏃（S14）が出土している。

時期　弥生時代中期にはほとんど埋没している。

SD08（図版142）

検出状況　調査区東側の微高地上で検出した南北方向に走る溝である。

規模・形態　幅１～1.2m、長さ７mの溝であり、深さは0.3mである。

埋土　炭化物や土器が混じる細砂混じりシルトで埋没している。

出土遺物　弥生時代中期の土器（935～938）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SD13（図版142）

検出状況　調査区東側の微高地の北部で検出した。西側はSD06に向かい、東側はＭ２地区まで続きが追える。

規模・形態　幅約２m、深さ0.3mほどのものである。

埋土　黒褐色シルトで埋没するが、最上層には地山ブロックが入るので、最終的には人為的に埋めたと考える。

出土遺物　弥生時代中期の土器（941・942）と石鏃（S24）が出土している。

時期　弥生時代中期（Ⅲ期）のものである。

SD15（図版142）

検出状況　調査区西端の低地を南東→北西へと走り、北側はＪ地区のSD01につながる。

規模・形態　幅４～５m、深さ１mほどである。

埋土　最下層は砂礫で埋まり、その上はシルト系の土で埋没している。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（943～945）が出土している。

時期　掘削時期は不明であるが、最終的な埋没は弥生時代終末期（Ⅵ期）である。

第13節　Ｍ2区の遺構

１．概要

本調査区は町道棚原七日市線の部分を対象とし、西側がＥ・Ｌ地区、東側がM地区と接している。M地区とは調査区が連続し、Ｅ・Ｌ地区とはコンクリート擁壁によって隔てられる。調査区の幅が６mと狭いうえに水道管などの埋設物により撹乱を受け遺構面の残存は良好でない。

検出した遺構は周溝墓、土坑、溝がある。周溝墓、溝は隣接するＥ・Ｌ・M地区へ続き、それぞれの地区で記述する。ここではＭ2区内で完結する土坑について記述する。

２．土坑

SK01（図版144）

検出状況　調査区南端で検出した。撹乱により中央部を大きく失っている。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模　平面形は不整形である。規模は東西1.9ｍ、南北2.1ｍ程度である。撹乱により完掘できないため深さは不明である。

出土遺物　弥生土器底部（959）が出土した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK08（図版144）

検出状況　調査区南半部、M地区との境付近で検出した。西側を鋤溝に切られるほか、複数の柱穴と重複している。

形状・規模　本来の形状は不明だがほぼ東西方向に主軸をもち、検出長1.9ｍ、幅1.0ｍを測る。検出面からの深さは10㎝前後であり、底部は凹凸がある。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK09（図版144）

検出状況　調査区中央付近、M地区との境付近で検出した。柱穴と重複している。

形状・規模　平面形はほぼ南北に主軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は長径1.8ｍ、短径1.2ｍを測る。検出面からの深さは６㎝であり、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　弥生土器壺（960～962）、底部（963）を図化した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK24（図版144）

検出状況　調査区北半部で検出した。他の遺構との重複はないが、撹乱により北西隅の部分を欠く。

形状・規模　平面形は北西－南東に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は長径1.7ｍ、短径1.2ｍを測る。検出面からの深さは15㎝であり、底部はやや凹凸がある。

埋土　上層には炭や焼土を含んでいる。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK26（図版144）

検出状況　調査区北半部、M地区との境付近で検出した。東側にM地区SK92があり接している。また東端付近が鋤溝と重複している。

形状・規模　北西－南東に主軸をもつ。長さ3.0ｍ、幅1.0ｍを測る。検出面からの深さは５㎝である。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK28（図版144）

検出状況　調査区北半部、M地区との境付近で検出した。溝、土坑などの遺構と接し、柱穴と重複している。

形状・規模　北西－南東に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1.6ｍ、短径1.2ｍを測る。検出面からの深さは15㎝を測り、断面形は浅いU字状を呈する。

出土遺物　弥生土器底部（965）、無頸壺（966）を図化した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK30（図版144）

検出状況　調査区北端、M地区との境付近で検出した。2本の溝と重複し、残存する部分は少ない。

形状・規模　平面形はかなりの部分を欠くため、本来の形状は明らかにしえないが、残存部分の形状から南北に主軸をもつ長方形となる可能性がある。推定規模は長さ2.8ｍ、幅1.8ｍ程度である。検出面からの深さは25㎝であり、底部は平坦である。

出土遺物　弥生土器底部（968）を図化した。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）であろう。

第14節　M地区の遺構

1．概要

M地区は北近畿豊岡自動車道に伴う七日市遺跡の調査区のうちでは最も東側の調査区となり、遺跡の東限でもある。町道棚原七日市線の東側に位置する。西側にＭ２・Ｅ・Ｌ地区があり、Ｍ２地区とは連続して調査した。調査区の北側と東側は氷上郡教育委員会が実施したほ場整備の用排水路設置に伴う発掘調査区（昭和56年度）をはさんで昭和59・60年度調査区に隣接する。

調査区はほぼ全域が南北に延びる微高地上に位置し、東側は段丘崖を経て旧河道にいたる。遺構の大半はこの微高地上で検出した。この状況は昭和59・60年調査区の状況と同じである。今回の発掘調査では竪穴住居10棟、掘立柱建物24棟、周溝墓19基の他、土坑、溝、柱穴を多数検出したが、これらは昭和59・60年度調査区で検出された多数の弥生時代、奈良・平安時代の遺構と一体となるものである。検出した遺構は、一帯の水田化に際して遺構面が削平を受け、残存状況は必ずしも良好といえず、少なからず消滅したものがあると思われる。

調査区の土層の状況はほ場整備のため良好に観察すべき壁面がなかったが、現耕土直下でクロボク層を検出し、その下にA.T.層が続く。この２層の上面で遺構面を形成している。

2．竪穴住居

SH01（図版145　写真図版165）

検出状況　調査区南半部で検出した。平面的には完掘しているが、削平により残存状況は良好とはいえない。SX12と重複する。

規模・形態　平面形は方形を呈する。南北3.9ｍ、東西4.8ｍ、を測る。

屋内施設　周壁溝、ベッド状遺構、柱穴、住居内土坑を検出した。

周壁溝　壁面に沿ってほぼ全周する。幅22㎝、深さ６㎝である。

ベッド状遺構　南辺の東半部で検出した。地山を削り出してつくっている。このベッド状遺構の中央に住居内土坑に伴う仕切溝がある。

柱穴　床面中央付近で中央焼土坑をはさんで東西に並ぶ柱穴を２基検出した。柱間距離は2.3ｍを測る。平面形は円形、楕円形を呈し、径は西側が38㎝、東側が25㎝である。深さは７㎝程度と浅い。

中央焼土坑　床面中央部で検出した。円形を呈し、埋土は焼土・炭が詰まっている。深さは浅く床面からわずかに掘り下げられたものである。

住居内土坑　南辺中央付近で検出した。隅丸長方形を呈し、南北65㎝、南北75㎝、床面からの深さ55㎝を測る。埋土には炭が混じっている。また東西両側に区画溝を伴う。

出土遺物　出土した遺物は多いが大半は破片である。壺・甕・高杯・鉢などがあり、(989～999) を図化した。また石庖丁未製品 (S163) が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代終末期 (Ⅵ期) と考える。

SH02 (図版146　写真図版165)

検出状況　調査区南半部で検出した方形住居である。平面的には完掘しているが、削平により残存状況は良好でない。SX13と重複する。

規模・形態　平面形は方形を呈する。南北4.7ｍ、東西4.5ｍを測る。

屋内施設　床面で周壁溝、柱穴、住居内土坑を検出した。

周壁溝　東西両隅付近で途切れ、全周しない。幅24cm、深さ4cmを測る。

住居内土坑　東辺の中央付近にある。周囲に盛土による土手を方形に巡らせる。幅30cm、高さ10cmである。住居内側は土手も幅があり約70cmを測る。土手に囲まれた中央部は円形に掘り込み、径42cm、深さ40cmを測る。

柱穴　床面で４基の柱穴を検出したため、主柱穴は４本柱と考える。柱穴は円形または楕円形を呈し、径28～58cmを測り、深さ20cm程度である。

出土遺物　出土した土器のうち、弥生土器鉢 (1000･1001) を図化した。石器は石錐 (S37)、石庖丁 (S126･165) がある。またサヌカイト剥片も出土している。

時期　出土遺物から弥生時代後期末 (Ⅴ期) と考える。

SH03 (図版147　写真図版165・166)

検出状況　調査区東端で検出した。ほぼ床面まで削平を受け、周壁溝の一部のみ検出した。調査区の制約により完掘できず、住居の一部は南側調査区外へ続く。後世の掘立柱建物と重複している。

規模・形態　周壁溝が孤状を呈することから円形住居と思われる。また、西側には多角形状に地山を削り出したベッド状遺構がつくられる。規模は削平のため明らかでないが、径７～８ｍ程度と推定する。

屋内施設　周壁溝、ベッド状遺構、柱穴、中央土坑、排水溝を検出した。

周壁溝　東半部で弧状に検出した。西半部では検出できなかったが、本来全周したか否かは明らかではない。幅25cm、深さ5cmである。

ベッド状遺構　西半部で検出した。地山を削り出してつくる。削平により全容は明らかでないが、く字状を呈することから、本来は多角形を呈していた可能性がある。ベッド状遺構沿いにのびる溝を検出している。

柱穴　床面で８基の柱穴を検出しているが、後世の掘立柱建物に伴うものがあり、すべてが本住居に伴うものではない。主柱穴は５ないし６本と考える。

中央土坑　周囲に盛土による土手を円形に巡らせ、南側調査区外へ排水溝が続く。土坑は２段に掘り込まれ、上段は１辺１ｍの不整方形、下段は径0.6ｍの円形を呈する。床面からの深さは45cmである。

出土遺物　弥生土器壺 (1002) が出土している。また石器は石庖丁未製品 (S166) が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代後期末 (Ⅴ期) と考える。

SH04 (図版148　写真図版166)

検出状況　調査区南半部で検出した。平面的には完掘しているが撹乱や削平により残存状況は悪い。

規模・形態　周壁溝の形状から住居の平面形は隅丸方形または円形住居である。東西5.2ｍ、南北5.1ｍを測る。

屋内施設　周壁溝、柱穴、住居内土坑を検出した。

周壁溝　南西部分を除いて検出した。南西部分が欠けるのは削平によるためか本来から存在しなかったのか不明である。規模は幅20～40cm、深さ5cm程度である。

柱穴　床面で約10基の柱穴を検出したが、住居に伴う主柱穴は4本であると考える。掘方の平面形は円形を呈し、径25～40cm、深さ20cm程度である。

住居内土坑　南端中央付近で検出した。掘方は楕円形を呈し2段掘りである。径は70×60cm、深さ55cmを測る。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　住居の形態から弥生時代後期後半（Ⅴ期）と考える。

SH05（図版149　写真図版166・167）

検出状況　調査区南西隅で検出した。SX01・06と重複し、本住居がこれらの遺構を切っている。本調査区内で検出した住居の中では比較的残存状況が良好で、壁面の立ち上がりが残存している。

規模・形態　平面形は方形を呈する。東西3.6m、南北4.0mを測る。

屋内施設　周壁溝、柱穴、住居内土坑を検出した。

周壁溝　壁面に沿って方形に巡るが、南東隅と南・西辺の中央部分を欠き、なんらかの施設が想定される。規模は幅20cm、深さ5cm程度である。

柱穴　床面の中央からやや南よりで柱穴を1基検出した。床面で検出した柱穴はこの1基のみである。円形を呈し、規模は径30cm、深さ30cmである。

住居内土坑　東辺の中央付近で検出した。北隅が後世の遺構と重複している。土坑は方形を呈し、周囲に地山を削り出した土手が巡る。東西0.7m、南北0.85m、深さ12cmを測る。また北側の土手際に仕切溝が付属する。

出土遺物　床面中央付近などから高杯などが比較的良好な状態で出土した。このうち（1013～1024）を図化した。またサヌカイト剥片も出土している。

時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SH06（図版150　写真図版167）

検出状況　調査区南西隅で検出した。複数の周溝墓や溝と重複し、また撹乱や削平の影響を受けるしたがって残存状態は良好でない。ほぼ完掘したが南隅部分のみ調査区外となっている。

規模・形態　南西辺を欠いているが、残存する周壁溝の形状から全体を復元すると、本来は隅丸方形を呈するものと推定する。周壁溝の南東隅と土坑の位置関係から南東－北西に長軸をもち、規模は5m×4m程度になると考える。

屋内施設　住居内で周壁溝、柱穴、住居内土坑を検出した。

周壁溝　コ字状に検出した。削平により南西辺を欠いているため、本来全周していたか否かは不明である。規模は幅20cm、深さ5cm程度である。

柱穴　柱穴は床面で7基検出したが、配列から主柱穴は4本柱と考える。平面は円形または楕円形を呈し、規模は径20～40cm、深さ30cmである。

住居内土坑　南東辺の中央付近で検出した。床面を浅く方形に掘り下げ、その底部をさらに径40cm、深さ40cmの円形に掘り下げている。

出土遺物　（1003・1004）を図化した。

時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SH07（図版151　写真図版168）

検出状況　調査区北東隅で検出した。SH10の他、いくつかの柱穴と重複関係にある。大半が調査区外へ続き、完掘できなかったが隣接地の調査では検出されていない。残存状況は不良である。

規模・形状　平面形は残存部分の形状から方形になると考える。一部を検出したのみで規模は不明だが、南辺の長さは3.8ｍを測る。

屋内施設　床面で検出できた遺構は柱穴、土坑である。周壁溝は巡っていない。

柱穴　床面では柱穴を数基検出したが、主柱穴は明らかでない。

土坑　床面で１基（SK60）を検出したが本住居に伴うか否かは明確でない。楕円形を呈し、全長1.2m、幅1.1ｍ、深さ0.2ｍを測る。

出土遺物　高杯脚部（1005）が出土した。また住居内のSK60からは須恵器杯（1195）が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SH08（図版152　写真図版168）

検出状況　調査区北隅に位置し、平面的には完掘している。削平により床面のレベルで検出している。比較的遺構密度の高い場所にあるため複数の溝・柱穴と重複している。

規模・形態　平面形は方形を呈する。東西6.5ｍ、南北6.3ｍを測る。

屋内施設　床面では本住居に伴う施設として周壁溝、柱穴、中央土坑、住居内土坑を検出した。

周壁溝　南辺の一部を除き、全周する。

柱穴　主柱穴は４本柱である。規模は径20～30cm、深さ10cm程度である。

中央土坑　床面中央付近で検出した。炭・焼土が充満する。平面は東西に主軸をもつやや不整な長方形を呈する。70cm×50cm、深さ20cmを測る。

住居内土坑　東辺中央付近に位置する。土坑の周囲には削平を受けているが方形に巡る土手のわずかな高まりが確認できる。土坑は２段に掘られ、55cm×65cmの掘方の底部に平面円形の土坑を掘り込む。径40cm深さ50cmを測る。下層には炭・灰が堆積する。また南側に仕切溝と考えられる溝を伴っている。

出土遺物　破片であるが比較的土器の出土をみた。そのうち（1006～1011）を図化した。

時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SH09（図版151　写真図版168）

検出状況　調査区北東隅で検出した。削平により遺構の残存状況は不良である。遺構の密度が高い地点に所在するため柱穴などの遺構と重複している。

規模・形態　住居の形状は残存する周壁溝の形状から南北に主軸をもつ隅丸方形を呈すると考えられる。復元しうる住居の規模は東西４ｍ、南北5.5ｍ程度である。

屋内施設　周壁溝、柱穴を検出したが、柱穴は本住居に伴うものを抽出するに至らなかった。

周壁溝　南・北・東辺を除いて断続的に検出している。規模は幅20cm、深さ２cm程度である。

出土遺物　弥生土器甕（1012）が出土した。

時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SH10（図版151　写真図版168）

検出状況　調査区北東隅で検出した。ほぼ床面まで削平を受けている。西側周壁溝の一部を検出しただけで大半は調査区外へ続くが隣接地の調査では検出できていない。

規模・形状　周壁溝が弧状に巡ることから住居の平面形は円形を呈すると考える。

屋内施設　本住居に伴う施設は周壁溝、柱穴を検出している。ただし柱穴は周壁溝と重複しているため、本住居に伴うものでないかもしれない。

周壁溝　規模は幅20cm、深さ５cm程度である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　時期は明らかでないが、弥生時代のものであろう。

３．掘立柱建物

SB01（図版153　写真図版169）

検出状況　調査区南西部で検出し、平面的には完掘している。SH01、SX08と重複関係にある。

形状・規模　２間×２間の側柱建物として復元できるが、削平のため中央の柱穴が消失した総柱建物となる可能性もある。方位は桁行 N6°　W を示す。規模は東西3.4ｍ、南北3.6ｍを測る。柱穴間距離は桁行が２ｍ、梁行が1.4～1.8ｍである。

柱穴　柱穴は平面形が円形または隅丸方形を呈し、規模は一辺0.6ｍ程度である。底部のみが残存している状況で、検出面からの深さは20cm程度と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB02（図版153　写真図版169）

検出状況　調査区東半部の北壁際で検出した。調査区の制約により南西隅部分のみ検出し、建物の大半は調査区外へ続いている。

形状・規模　東西２間、南北１間を検出したが、検出位置から昭和59・60年度調査区のSB135と同一の建物となる可能性があり、そうした場合桁行５間程度、梁行２間の建物として復元しうる。規模は東西2.4ｍを測り、柱穴間距離は2.0～2.2ｍである。

柱穴　柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.4～0.6ｍである。削平のため底部のみが残存する状況で、大半の柱穴は検出面からの深さが10cm未満である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB03（図版153　写真図版169）

検出状況　調査区南西部で検出した。一部撹乱を受けているが平面的には完掘している。

形状・規模　２間×２間の総柱建物である。方位は桁行を N10°　W に示す。規模は東西3.1ｍ、南北3.4ｍを測る。柱穴間距離は桁行の北側が２ｍある他は1.5ｍ前後である。

柱穴　平面形は円形か隅丸方形を呈し、規模は一辺0.5～0.7ｍ、検出面からの深さは10～20cm程度である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB04（図版153　写真図版170）

検出状況　調査区南西隅で検出した。建物の東半部のみ検出し、さらに西側の調査区外へ続く。

形状・規模　東西１間、南北２間を検出しているが、本来は２間×２間の総柱建物になると考える。方

位はN6° Wを示す。規模は南北4.4mを測る。柱穴間距離は南北が2.2mに対し東西は1.5m前後である。

柱穴　平面形は楕円形か隅丸方形を呈し、深さは60cm程度である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB05（図版154　写真図版170）

検出状況　調査区南西隅、SB04 の北側で検出した。東西、南北とも 2 間分検出し、さらに西側調査区外へ続く可能性がある。

形状・規模　他の遺構との重複などにより柱穴が欠ける部分があり、柱穴の通りもややいびつである。方位はほぼ南北方向を示す。規模は東西・南北とも 4.4 mを測る。柱穴間距離は南東隅が 1.8 mある他は 2.2 mである。

柱穴　平面形は円形か不整な方形を呈し、規模は一辺0.5 m前後、検出面からの深さ20～30cmを測る。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB06（図版154　写真図版170）

検出状況　調査区北東部で検出した。調査区の制約により完掘できず東西 1 間、南北 2 間分のみを検出したが、さらに東側調査区外へ広がる。

形状・規模　本来は 2 間× 2 間の総柱建物になると思われる。方位は南北方向がN10° Wを示す。規模は南北が3.1 mを測る。柱穴間距離は1.4～1.6 mを測る。

柱穴　平面形は円形を呈する。規模は径0.3～0.4 mである。検出面からの深さは削平のためいずれも10cm未満と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB07（図版153　写真図版171）

検出状況　調査区中央付近で検出し、平面的に完掘している。溝や柱穴などと重複関係にある。

形状・規模　2 間× 2 間の総柱建物である。方位はほぼ南北を示す。規模は東西3.2 m、南北3.4 mを測る。柱穴間距離は1.4～1.8 mである。

柱穴　平面形は円形を呈し径0.4 m前後のものが大半である。検出面からの深さは10～20cmである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB08（図版154　写真図版171）

検出状況　調査区中央付近で検出し、平面的には完掘している。遺構の密度が高い場所にあるため柱穴や土坑などと重複している。

形状・規模　桁行 3 間×梁行 2 間の南北棟の総柱建物として復元でき、今回検出した総柱建物の中では最も規模が大きい建物となる。方位は桁行がN2° Wを示す。規模は梁行4.7 m、桁行5.0 mを測り、柱穴の通りも整っている。柱穴間距離は桁行が1.6～1.8 m、梁行が2.2～2.5 mを測る。

柱穴　平面形は東側列が円形を呈するが他は方形を呈する。規模は一辺0.5～0.7 m、検出面からの深さ20～30cmを測る。P 810は柱抜き取り後、須恵器杯蓋を投入している。

出土遺物　P 810の掘方から須恵器杯蓋（1194）が出土している。

時期　出土遺物から奈良時代中～後半に建てられたと考える。

SB09（図版155　写真図版172）

検出状況　調査区東半部で検出した。平面的には完掘しているが、削平や撹乱により残存状況は良好でない。他の柱穴などの遺構と重複関係にある。

形状・規模　2間×5間の南北棟の側柱建物である。遺構面の削平により北東隅部分の柱穴2～3基を欠くが、柱の通りは良好である。方位は桁行N6°　Wを示す。規模は桁行9.7m、梁行5.5mを測る。

柱穴　平面形は楕円形または隅丸方形を呈する。規模は一辺0.5～1.0mとばらつきがあるが総じて大型であり、中には当初は土坑と認識して掘削したものがある。削平のため、検出面からの深さは大半の柱穴が10cm未満と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB10（図版156）

検出状況　調査区南西部、SB01の西側で検出し、平面的には完掘している。SX07・08と重複している。

形状・規模　2間×2間の総柱建物である。柱の通りは東側列が不揃いである。方位は南北方向がN8°　Wを示し、規模は東西4.0m、南北3.7mである。柱間距離は1.6～2.2mで不揃いである。

柱穴　平面形は円形を呈する。規模は径0.2～0.5mと不揃いである。遺構面の削平により残存状態は不良であり、検出面からの深さは最大で20cm、大半は10cm程度しかない。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB11（図版157　写真図版171）

検出状況　調査区北東隅で検出し、平面的に完掘している。比較的遺構密度の高い部分に位置し、SH09などの遺構と重複している。

形状・規模　2間×5間の南北棟の側柱建物である。方位は桁行がN5°　Wを示す。規模は東西4.5m、南北11.6mである。柱穴の通りもよく、柱間距離もほぼ2.2mに揃っている。

柱穴　柱穴は周囲の柱穴と比較して大型であり容易に抽出できた。柱穴の平面形は円形か楕円形を呈し、規模は径0.5～0.6mである。遺構面の削平によるため検出面からの深さは10～20cm程度と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB12（図版158）

検出状況　調査区北東部で検出し、平面的に完掘した。SB17・18 の南側に位置する。比較的遺構密度の高い場所にあるため、複数の柱穴などと重複している。

形状・規模　2間×5間の南北棟の総柱建物である。本建物と同様の構造をもつ建物は過去の調査では検出されていない。方位は桁行がN7°　Wを示し、規模は梁行3.1m、桁行8.6mを測る。柱穴の通りはよく、柱穴間距離も大半が1.6mを測り整っている。

柱穴　柱穴は周囲の柱穴と比較して大型であり容易に抽出できた。平面形は円形または隅丸方形を呈する。規模は一辺0.2～0.5mを測る。検出面からの深さは10～25cmである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB13（図版158）

検出状況　調査区中央付近で検出した、平面的に完掘している。SB07の北側に位置する。SD02のほか複数の柱穴などと重複関係にある。

形状・規模　２間×２間の建物として復元できるが、建物の中央にSD02があり、本来総柱建物であったか不明である。方位は南北方向がN3°　Wを示し、規模は東西4.6ｍ、南北4.4ｍを測る。柱穴の通りは、南北方向は比較的良好である。柱穴間距離は東西が2.5ｍ前後、南北が2.2ｍある。

柱穴　平面形は円形を呈し、規模は径0.2～0.6ｍとばらつくが0.4ｍ前後のものが多い。検出面からの深さは５～15cmである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB14（図版156）

検出状況　調査区中央付近で検出し、平面的には完掘した。南側にSB08、北側にSB20があり、これら建物の東側柱列がほぼ揃うことから計画的に配列されたと考えられる。

形状・規模　２間×２間の総柱建物である。方位はほぼ南北方向を示し、規模は東西2.7ｍ、南北2.9ｍを測る。柱穴の通りは良好で、柱穴間距離は東西、南北とも1.5ｍ前後である。

柱穴　平面形は円形を呈する。規模は径0.15～0.5ｍ、検出面からの深さは10～15㎝である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB15（図版156）

検出状況　調査区南西隅で検出した。SH06、SD25など複数の遺構と重複している。東西２間、南北１間分検出したが平面的には完掘している。建物はさらに南側へのび、SB16と重複すると思われるがその先後関係は不明である。

形状・規模　南側の柱穴列を欠くが本来は２間×２間の総柱建物になると考える。方位は南北方向がN5°　Wを示す。規模は東西3.3ｍを測る。残存する柱穴の通りは良好で、柱穴間距離はほぼ1.7ｍである。

柱穴　平面形は円形を呈し、規模は径0.4ｍ前後である。検出面からの深さは10～20㎝である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB16（図版156　写真図版172）

検出状況　調査区南西隅で検出し、平面的には完掘していると思われる。SX10、SD25などの遺構と重複している。SB15とも重複関係にあるが先後関係は不明である。北側柱列のうち柱穴１基を欠く。

形状規模　２間×２間の総柱建物として復元できる。方位は南北方向がN3°　Wを示し、規模は東西、南北とも2.7ｍを測る。柱穴の通りは良好であり、柱穴間距離は1.4ｍ前後である。

柱穴　平面形は円または楕円形を呈する。規模は径0.3～0.6ｍ、検出面からの深さは５～40㎝である。大半の柱穴は切り合いをもち、１回の建て替えが行われているものと考える。

出土遺物　P505から須恵器杯（1196）、P160から釘（M11）が出土した。

時期　奈良時代である。

SB17（図版159　写真図版173）

検出状況　調査区北端で検出した。平面的にはほぼ完掘しているが北東隅部分のみ撹乱により消失して

いる。SB18と重複しているが柱穴に切り合いをもたないため先後関係は不明である。

形状・規模　南北棟の側柱建物で２間×４間分検出したが、さらに南側にのびる可能性がある。方位は桁行N3°　Wを示す。規模は東西4.6ｍ、南北9.1ｍを測る。柱穴の通りは比較的良好であり。柱穴間距離は桁行2.2ｍ、梁行2.4ｍ程度である。

柱穴　本建物を構成する柱穴は周囲のよりも大型で抽出が可能である。平面形は円形または方形を呈し、規模は一辺0.3～0.7ｍ、検出面からの深さ10～15㎝を測る。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB18（図版159　写真図版173）

検出状況　調査区北端で検出した。調査区の制約により建物の一部を検出しただけである。南西隅がSB17と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　東西２間、南北１間検出し、さらに北側調査区外へ広がり、昭和59・60年度調査区検出のSB124と同一の建物になる可能性がある。そうした場合桁行５間程度、梁行２間の南北棟の側柱建物として復元できる。方位は南北方向がN8°　Wを示す。規模は梁行5.1ｍを測る。柱穴間距離は梁行2.3ｍと2.4ｍ、桁行2.0ｍを測る。

柱穴　平面形は不整な楕円形を呈する。規模は径0.6～0.7ｍ、検出面からの深さ10～20㎝である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB19（図版156）

検出状況　調査区北西隅で検出した。調査区の制約により建物の南側梁行の柱穴を検出しただけである。建物の大半は調査区北側へ広がる。

形状・規模　梁行２間のみ検出しただけで建物の全容は明らかでないが、昭和59・60年度調査区検出のSB121と同一の建物となる可能性があり、そうした場合２間×５間の側柱建物として復元できる。方位は南北方向がN3°　Wを示すと思われる。規模は東西5.0ｍ、柱穴間距離2.5ｍである。

柱穴　平面形は円形を呈する。規模は径0.5～0.7ｍ、検出面からの深さ10～20㎝を測る。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB20（図版160）

検出状況　調査区北半部、SB14の北側で検出した。遺構密度が高い場所にあるため土坑などの遺構と重複している。またSD02との重複により柱穴２基を欠く。

形状・規模　柱穴を欠く部分があるものの２間×２間の総柱建物として復元できる。方位は南北方向がN6°　Wを示し、規模は東西3.7ｍ、南北3.4ｍを測る。柱穴の通りは比較的よく、柱穴間距離は1.8ｍである。

柱穴　平面形は円または隅丸方形を呈する。規模は径0.3～0.5ｍ、検出面からの深さ15㎝未満である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB21（図版159　写真図版173）

検出状況　調査区東隅で検出した。SD01と重複している。

形状・規模　柱穴を２基検出しただけだが、昭和56年度水路部分の調査の際検出した建物SB20と同一と考えられ、そうした場合２間×２間の総柱建物として復元できる。方位は南北方向がN7°　Wを示す。規模は南北3.4ｍを測る。

柱穴　平面形は方形を呈し、一辺0.7～0.9ｍ、検出面からの深さ20～30㎝を測る。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB22（図版160　写真図版173）

検出状況　調査区南端で検出した。平面的には完掘していると思われるが削平が著しい部分であり、一部の柱穴が消失している。また水路により北東隅の部分を欠く。

形状・規模　南北棟の側柱建物になり、東西２間、南北４間分検出しているが柱穴を欠く部分があり本来の柱間は明らかにできない。柱穴間距離を約３ｍにすると比較的柱の通りが整った2間×３間の建物に復元できる。方位は桁行Ｎ３°　Wを示す。規模は桁行10.0ｍ、梁行5.8ｍである。

柱穴　平面形は円形または方形を呈する。規模は一辺0.5～0.75ｍを測る。検出面からの深さは10㎝以下と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB23（図版161　写真図版174）

検出状況　調査区東端で検出した。平面的にはほぼ完掘しているが、南東隅の一部が南側調査区外になり、水路によりすでに消失した部分がある。SH03と重複している。

形状・規模　２間×５間程度の南北棟の側柱建物として復元できる。方位は桁行がN5°　Wを示す。規模は桁行10.8m、梁行5.1ｍである。柱穴の通りはよく柱穴間距離は桁行梁行2.5m、梁行は2.4mである。

柱穴　平面形は円形を呈し、規模は径0.2～0.6ｍと不揃いである。検出面からの深さは５～20㎝である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

SB24（図版160　写真図版175）

検出状況　調査区東端の段丘端に立地する。水路の掘削により大半の部分が消滅し、残存状態は不良である。

形状・規模　桁行、梁行とも１間分しか検出しておらず全容は不明である。方位は南北方向がN7°　Wを示す。柱間距離は南北が約２ｍ、東西が約１ｍである。

柱穴　平面形は円形を呈し、径0.2～0.6ｍ、検出面からの深さ10～20㎝である。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、柱穴の形状などから奈良・平安時代に属すると考える。

４．周溝墓

SX01（図版162　写真図版175）

検出状況　調査区南西隅付近で検出した。西側にSX06があり、一部重複するが本周溝墓との先後関係は不明である。北側にSX07・11、南側にSX10が所在する。また西側の周溝がSH05と重複し、SH05に周溝が切られている。

形状・規模　削平により南側と北側の周溝が途切れているが、いびつながら弧状に巡ることから円形周溝墓と考える。規模は東西6.5m、南北６m程度である。西側周溝底からの高さは0.1mである。墳丘盛土は確認できなかった。

埋葬施設　周溝墓の中央付近で木棺墓（SK53）を検出した。削平により基底部のみ残存する。掘方は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。長さ1.75m、幅0.7m、検出面からの深さ５cmである。木棺の痕跡は確認できなかったが掘方底部において両短辺に沿って掘られた小口穴を検出した。両小口穴の間隔は1.15mである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX02（図版163）

検出状況　調査区南西隅で検出した。SD32と重複し本周溝墓が切っている。北側にSX03が所在し本周溝墓北側周溝と共有または重複しているが撹乱などによりその関係は不明である。南側は調査区外へ広がる。

形状・規模　撹乱や削平により全容は不明だが、周溝が孤状を呈することから円形周溝墓と考える。周溝の残存が不良であるため、明確な規模は不明だが東西７m程度になるものと考える。周溝は幅0.6m、検出面からの深さ10cmを測る。墳丘盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX03（図版163）

検出状況　調査区南西隅で検出した。南側はSX02と周溝を共有または重複し、北側はSX05と重複し、本周溝墓の周溝が切られている。東側はSX04と接するが本周溝墓との関係は明らかでない。検出したのは周溝墓の東半部のみであり、西半部は調査区外側へ広がる。

形状・規模　検出した周溝はコ字状を呈することから方形周溝墓と考える。周溝は東辺の中央付近で途切れる。周溝は全周していないため、全容は明らかにしえないが南北の長さは８m程度になる。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　弥生土器甕（1028）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX04（図版163）

検出状況　調査区南西隅で検出した。西側にSX03が接するほか、北側でSX06と重複している。またSD25と重複しているが、断面観察ではSD25埋没後に本周溝墓が造られている。

形状・規模　孤状を呈する周溝を約３m検出したのみであるため、周溝墓の平面形は明らかでない。

埋葬施設　周溝墓の中央付近と推定される箇所で埋葬施設と推定する土坑（SK55）を検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、N73°　Wに主軸を持つ。長さ1.3m、幅0.8m、検出面からの深さ15cmを測る。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX05（図版164　写真図版175）

検出状況　調査区南西隅で検出した。東半部のみ検出し、西半部は調査区外へ続く。東側はSX06と接する。北側はSX09と、南側はSX03と重複し、いずれも本周溝墓が切っている。またSD25と重複し、

本周溝墓が切っている。後世のSB04とも重複している。

形状・規模　周溝はコ字状に検出したことから方形周溝墓と考える。南北長9.5m、東側周溝からの高さは15cmである。周溝は断面形が逆台形を呈し幅1m程度である。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

埋葬施設　中央付近で埋葬施設と考えられる土坑（SK46）を検出した。土坑は東半部のみ検出し、西半部は調査区外に続く。掘方の平面形はほぼ東西に主軸をもつ長方形を呈する。検出長1.3m、幅1.15m、検出面からの深さ18cmを測る。木棺の痕跡は確認できなかった。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX06（図版165・174　写真図版176）

検出状況　調査区南西隅で検出した。北側はSX07と、西側はSX05と接し、SX07とは周溝を共有している。南側はSX04と、東側はSX01と重複するがいずれも先後関係は明らかにできなかった。南側周溝はSD25と重複し、周溝がSD25を切っている。周溝の内側には後世にSH05が造られている。また東側の周溝は削平によるためか途切れている。

形状・規模　平面形はやや歪ながら方形を呈する。東西7m、南北7.5m、西側周溝からの高さ15cmを測る。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　南側周溝内に弥生土器が4個体並んだ状態で出土し、図化した。壺（1029・1031・1032）・底部（1030）である。

所属時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX07（図版165）

検出状況　調査区南西隅で検出した。南側にSX06、西側にSX09と接し、南側周溝はSX06、西側周溝はSX09と共有している可能性がある。また北東部はSX08と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　残存する周溝は直線的にのびることから方形周溝墓と考える。東西6.8m、南北9.0m、東側周溝からの高さ18cmを測る。周溝の南西部と北東部は途切れて全周しない。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX08（図版166　写真図版176）

検出状況　調査区南東隅で検出した。平面的には全掘している。南側にSX07とSX11があり、南西部はSX07と重複しているが、その先後関係は不明である。また後世の掘立柱建物2棟とも重複している。

形状・規模　C字状にのびる周溝を検出したので円形周溝墓と考える。周溝は全周せず東半部を検出できなかった。南北7.5m、西側周溝からの高さ20cmを測る。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX09（図版166）

検出状況　調査区南西隅で検出した。東側にSX07、南側にSX05と接し、周溝を共有している可能性がある。平面的には完掘しているが削平によるためか周溝は一部を検出したにすぎず、残存状態は良好ではない。

形状規模　残存する溝が直線的であることから方形周溝墓と考える。周溝が全周しないため、全容は明

らかでないが東西5.0ｍを測る。南北の長さも同じく５ｍ程度とみられる。西側周溝からの高さは10cmである。

埋葬施設　中央付近で埋葬施設の可能性がある土坑（SK41）を検出した。掘方は平面形が長方形を呈する。南北に主軸をもち、東西の周溝ともほぼ平行している。長さ1.7ｍ、幅0.85ｍ、検出面からの深さ20cmを測る。木棺の痕跡は検出できなかった。埋土内には少量の焼土や炭が混じっている。

出土遺物　弥生土器甕（1033）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SX10（図版167）

検出状況　調査区南西隅で検出した。残存状況は不良であり、南側と東側にＬ字状にのびる溝のみ検出した。ほぼ全掘しているが南東隅の一部のみ調査区外となる。北側にSX01・06、西側にSX02・04が接して所在する。SD25、SH06と重複し、本周溝墓はSD25を切り、SH06に切られている。また後世の掘立柱建物２棟とも重複している。

形状・規模　検出した溝の形状から方形周溝墓と推定する。平面の規模は不明であるが東側周溝からの高さは15cmを測る。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX11（図版168）

検出状況　調査区南西隅で検出した。残存状況は不良であり、く字状の溝を検出した。西側にSX07、北側にSX08、南側にSX01が接するように所在する。

形状・規模　検出した溝の形状から方形周溝墓と考える。周溝は逆台形の断面を呈し、北側周溝からの高さは20cmである。

出土遺物　周溝内より出土した土器のうち弥生土器甕（1034）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SX12（図版167・174）

検出状況　調査区南半部、SD01の南側で検出した。周溝のうち南辺を欠き、残る３辺のみ検出できた。SX13と重複しているが先後関係は不明である。また後世のSH01に切られている。

形状・規模　コ字状に周溝が配されていることから方形周溝墓と考える。周溝は北東隅部分が途切れているが、当初からそうであったのか、削平で消滅したのか明らかにできなかった。規模は東西8.0ｍ、東側周溝からの高さ10cmを測る。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　出土した弥生土器のうち、壺（1035～1037）を図化した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅱ～Ⅲ期）と考える。

SX13（図版169）

検出状況　調査区南半部、SD01南側で検出した。北辺部はSD01により消失しているほか削平のため周溝の残存状況は不良である。SX12 と重複するがその先後関係は不明である。また周溝埋没後にSH02が造られている。

形状・規模　残存する溝の形状から方形周溝墓と考える。周溝は削平のため東辺のみ残存する。東辺の溝の深さは10cm程度であるが、南東隅と南西隅の底部は30～40cmと深く掘削しているために土坑状に残存している。周溝墓の全容は明らかでないが東西12ｍ、南北10ｍ程度になるとみられる。

出土遺物　出土した弥生土器の多くは破片であり、壺（1038）、甕（1039）のみ図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX14（図版170・171・175　写真図版177）

検出状況　調査区北西隅で検出した。東側にSX15、南側にSX16と接し、一部重複する。周溝の一部はSX16と共有する可能性がある。北側は調査区外へ広がるようだが隣接地の調査では本周溝墓に伴うと考えられる遺構は検出されていない。

形状・規模　調査区の制約、削平や他の遺構との重複によるため遺構の全容は明らかでない。検出できたのは南辺に近い部分のみである。

埋葬施設　南辺の溝の内側で木棺墓（SK93）を検出した。掘方は東西に主軸をもつ長方形で長さ1.8m、幅0.9m、検出面からの深さ８cmを測る。掘方の中央付近で木棺の痕跡を検出した。長さ1.35m、幅0.5mを測る。掘方底部には小口や側板を据えた痕跡はみられない。

出土遺物　周溝内から出土した弥生土器はすべて破片であったが、甕（1043～1047）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX15（図版170）

検出状況　調査区北西隅で検出した。東側にSX14、南側にSX16が所在し、SX16周溝に本周溝墓の周溝が切られている。

形状・規模　調査区の制約により、全容は明らかでないが、検出した溝が直線的にのびることから、方形周溝墓と考える。周溝は深さ10cm程度である。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　周溝出土の弥生土器はすべて破片であったが、壺（1040・1041）、底部（1042）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SX16（図版170・175）

検出状況　調査区北西隅で検出した。一部Ｍ２地区へ続く。南側はSX17と接する。またSD02と重複し、本周溝墓が切られている。

形状・規模　Ｌ字状に周溝を検出したことから方形周溝墓と考える。

埋葬施設　北東隅の周溝内で木棺墓（SK103）と木棺墓残欠（SX22）を検出した。いずれも周溝掘削後に検出したもので、掘方の形状や規模は不明である。

SK103　北側周溝の北肩部沿いで検出した。東西に主軸をもつ。側板および小口を固定するために掘方底部に溝を巡らせる。検出できたのはこの溝のみである。溝の形態から木棺は小口を側板で挟み、側板が突出している。木棺の規模は長さ1.2m、幅0.35mと想定する。検出面からの溝の深さは５cm程度だが周溝検出面からの深さは25cmある。

SX22　周溝北東隅部分で検出した２本の溝状遺構である。溝状遺構は長さ50cm、幅20cm、検出面からの深さ10～15cmである。両溝状遺構間の距離は1.3mある。この溝状遺構は南北方向に主軸をもつ木棺の小口穴と考える。木棺の規模は長さ1.3m、幅0.5m程度と想定できる。

出土遺物　周溝内から出土した弥生土器はすべて破片であったが、甕（1048）・底部（1049）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SX17（図版172・175）

検出状況　調査区北西隅部に位置し、Ｍ２・Ｅ地区に跨って検出した。北側でSX16と、南側でSX18と接している。南側周溝はSX18と共有または重複しているとみられるが攪乱が著しいため明確でない。

西側はＥ地区SX10と重複し、本周溝墓が切っている。

形状・規模　東側周溝を欠き、コ字状に巡る周溝を検出した。周溝の形状から方形周溝墓であると考える。平面形は東側に開きぎみのやや不整な長方形を呈する。規模は南北7.0ｍ、東西は８ｍ以上ある。南側周溝からの高さは30㎝を測る。埋葬施設などは検出できなかった。

出土遺物　出土した弥生土器の多くは破片であり、全容のわかるものは甕（1050）のみである。他に甕（1051～1054）・蓋（1055）を図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅱ～Ⅲ期）と考える。

SX18（図版173）

検出状況　Ｍ２・Ｌ地区に跨って検出した。攪乱などのため、周溝は断続的に検出し、そのつながりは明確でない。北側でSX17と、南側でSX19、Ｌ地区SX12と接する。西側はＥ地区SX22と重複しているとみられるが、先後関係は不明である。

形状・規模　攪乱のため残存は良好でないが方形周溝墓と考える。平面形は歪な方形を呈する。東西、南北とも7.2ｍを測る。南側周溝からの高さは0.2ｍを測る。

埋葬施設　周溝内中央付近において本周溝墓の埋葬施設と考える木棺墓（Ｍ２地区SK16）を検出した。木棺墓は南西側の周溝にほぼ並行する北西－南東方向に主軸をもつ。攪乱により南東半部約1/2を失っている。掘方の規模は長さ２ｍ、幅1.15ｍ、検出面からの深さ0.2ｍである。掘方の中央付近で木棺の痕跡を検出した。残存部から推定した規模は長さ1.5ｍ、幅0.6ｍである。底部には小口穴などの痕跡は確認できなかった。

出土遺物　出土した弥生土器はすべて破片であり、壺（1056・1057）のみ図化した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SX19（図版168）

検出状況　調査区西端で検出した。北側でSX18と、西側でＬ地区SX12と接する。削平・攪乱によりＬ字状にのびる溝のみ検出した。

形状・規模　溝は直線にのびることから、本来は方形周溝墓であったと考える。全容は不明だが東西長は5.5ｍ以上ある。北側周溝からの高さは25㎝を測る。盛土や埋葬施設は確認できなかった。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、周囲の周溝墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

５．木棺墓・土坑

SK01（図版177）

検出状況　調査区南半部、SH01とSH02の間で検出した。他の遺構との重複はない。

規模・形態　平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径80㎝、短径60㎝を測る。検出面からの深さは7㎝あり断面形は逆台形を呈する。底部はほぼ平坦である。

出土遺物　土坑内から比較的多くの弥生土器片が出土しているが、このうち1058～1065を図化した。また、石斧（S97）も出土している。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半から後半（Ⅲ～Ⅳ期）と考える。

SK02（図版176）

検出状況　調査区南半部、SH01・02・04に囲まれた地点に位置する。SK04などの土坑と重複し、SK04

に本土坑が切られている。

規模・形態　平面形は南北に主軸をもつ長方形である。長さ2.2m、幅は北辺が広く0.9m、南辺は0.65mを測る。両短辺に沿って小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められる。削平により検出面からの深さは0.1m程度と浅い。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

機能・用途　木棺墓である。側板の痕跡は平面で確認しえなかったが、断面では木棺の痕跡を確認している。断面で確認できた木棺の幅は0.7mである。小口の間隔は1.2mを測る。

時期　遺物は出土していないが、周囲の墓の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK04（図版177）

検出状況　調査区南半部で検出した。SK02など2基の土坑、柱穴と重複し、本土坑が他の土坑2基を切り、柱穴に本土坑が切られている。

規模・形態　平面形は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。全長165cm、幅90cm、検出面からの深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈するが底部はやや凹凸がある。

出土遺物　弥生土器鉢（1066）が出土している。

機能・用途　SK02同様に本土坑も埋葬施設の可能性があるが、木棺等の痕跡は確認できなかった。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK18（図版177）

検出状況　調査区南西端、SX06内で検出した。SX06の周溝およびSD25と一部重複し、本土坑がこれらの遺構を切っている。

規模・形態　やや不整な円形を呈する。径1.5m、検出面からの深さ20cmを測る。底部は平坦だが、東側壁面の立ち上がりが急なのに対し、西側はなだらかに立ち上がる。

出土遺物　須恵器杯および椀（1206～1209）が出土した。

時期　平安時代のものである。

SK29（図版178）

検出状況　調査区中央付近で検出した。SB07と重複し、本土坑が切られている。

規模・形態　南北に主軸をもち、溝状を呈する。長さ2.3m、幅0.6m、検出面からの深さ8cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　弥生土器壺（1067）が出土している。また石器は削器（S45）が出土した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SK30（図版178）

検出状況　調査区中央付近、SD01の北側で検出した。他の遺構との重複はない。

規模・形態　東西方向に主軸をもち、平面形は長楕円形を呈する。長径1.75m、短径0.7mを測る。検出面からの深さは8cmあり、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　弥生土器甕（1068）が出土している。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅱ期）と考える。

SK45（図版177）

検出状況　調査区北半部、SH08南側で検出した。単独で所在し、他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は南北方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長径100cm、短径65cm、検出面からの深さ

20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　加工痕のある剥片（S69）が出土した。

時期　明確な出土遺物がないため、時期を明確にできないが、サヌカイト剥片が出土していることから弥生時代に属すると考える。

SK56（図版178）

検出状況　調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は北西 - 南東方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1.4m、短径1.15mを測る。検出面からの深さは10cmである。断面形は浅いU字状を呈する。底部はやや凹凸がある。

出土遺物　弥生土器壺（1069、1070）・甕（1071）が出土している。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SK63（図版178）

検出状況　調査区南西隅付近で検出した。SX22およびSD25と重複し、これらの遺構が埋没した後に本土坑が掘り込まれている。

規模・形態　平面形は北西 - 南東方向に主軸をもつ不整楕円形を呈する。長径2.7m、短径1.1m程度である。検出面からの深さは45cmである。断面形はU字状を呈し、底部は凹凸がある。埋土の上層には細礫や炭を含んでいる。

出土遺物　弥生土器長頸壺（1072）が出土した。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SK65（図版179）

検出状況　調査区中央部のやや西より、SD01北肩部で検出した。他の遺構との重複はみられない。後世の撹乱により遺構の残存は不良であり、ほぼ底部付近まで削平を受けている。

規模・形態　平面形は東西方向に主軸をもつ長方形を呈する。長辺0.8m、短辺0.7m程度である。検出面からの深さは最大12cmある。断面形はU字状を呈する。

出土遺物　土坑底部より石斧（S114・S 117）、石斧未製品（S112）、削器（S116）、剥片（S113・S115・S118・119）が一括して出土している。

用途・機能　埋納または祭祀の遺構と考える。

時期　明確な時期は不明だが、弥生時代のものである。

SK72（図版177）

検出状況　調査区西端付近で検出した。付近には複数の土坑がある。他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は南北に主軸をもつ楕円形を呈する。長径115cm、短径90cmを測る。検出面からの深さは30cmあり、断面形は逆台形を呈するが底部はやや丸みをもつ。

出土遺物　須恵器杯（1205）、石鏃（S34）が出土している。

時期　奈良時代のものであろう。

SK81（図版180）

検出状況　調査区北西隅で検出した。SK82や溝状遺構などと重複し、本土坑がSK82を切っている。

規模・形態　平面形は東西に主軸をもつ不整長方形を呈する。規模は長辺4.8m、短辺2.1m、検出面からの深さ30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。

出土遺物　弥生土器（1073）や石斧（S120）、石庖丁未製品（S171）、石錘（S177）などが出土している。

また須恵器杯（1204）および杯蓋（1201～1203）も出土している。

時期　出土遺物は弥生時代中期後半（Ⅳ期）と奈良時代に分かれるがいずれかが混入であろう。

SK82（図版180）

検出状況　調査区北西隅で検出した。SK81と重複し、本土坑が切られている。

規模・形態　平面形は南北に主軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は検出長3.8ｍ、幅1.6ｍ、検出面からの深さ20㎝を測る。底部は凹凸がある。

出土遺物　弥生土器（1074～1076）、石庖丁（S172）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）である。

SK83（図版178）

検出状況　調査区北半部、SB12・13・17に囲まれた地点に位置する。

規模・形態　平面形は東西方向に主軸をもつ隅丸方形を呈する。長辺0.8ｍ、短辺0.7ｍを測る。検出面からの深さは18㎝である。断面形は逆台形を呈し、底部中央付近がやや丸くくぼむ。埋土の上層には焼土・炭を含んでいる。

出土遺物　弥生土器甕（1084・1085）が出土した。

機能・用途　埋土内に炭・焼土を多く含むことから火を用いる施設と考える。削平された住居の住居内土坑の可能性も考えられる。

時期　出土遺物の時期から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SK92（図版180）

検出状況　調査区北西部、Ｍ２地区との境界付近で検出した。他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は北西―南東方向に主軸をもつ不整長方形を呈する。長辺1.3ｍ、短辺0.7ｍ、検出面からの深さ５cm を測る。断面は逆台形を呈する。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

時期　遺物の出土がないため、所属時期は不明である。

SK99（図版180）

検出状況　調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は南北に主軸をもつ長方形を呈する。長辺2.4ｍ、短辺1.1ｍ、検出面からの深さ18㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。底部の南半に礫２点を置く。

出土遺物　弥生土器甕（1086）が出土している。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）である。

SK101（図版176　写真図版177）

検出状況　調査区北端で検出した。SK102と並び、本土坑が南側になる。他の遺構との重複はみられない。

規模・形態　平面形は北西-南東方向に主軸をもつ長方形を呈し、長さ1.45ｍ、幅0.75ｍを測る。検出面からの深さは20㎝である。墓壙のやや東よりで木棺の痕跡を検出した。小口が側板に挟まれ、側板が突出している。また断面においても小口、側板の痕跡が確認できた。これによると木棺の規模は長さ60㎝、幅25㎝である。

出土遺物　弥生土器高杯（1087）が出土している。

機能・用途　木棺墓である。

時期　弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

SK102（図版176　写真図版177）

検出状況　調査区北端で検出した。SK101と並び、本土坑が北側になる。水路掘削の影響により南東側の部分1/2程度が残存するのみである。

規模・形態　残存部分の形状から平面形は長方形を呈すると考える。検出長1.2ｍ、検出幅0.5ｍを測るが、本来は1.5ｍ×0.7ｍ程度の規模になるのだろう。検出面からの深さは最大で20㎝程度である。

出土遺物　図化しうる遺物は出土していない。

機能・用途　木棺の痕跡は確認できないが周囲に木棺墓などの墓壙が集中していることから、本土坑も木棺墓とみて間違いないだろう。

時期　時期は明らかにできないが、周囲の墓の時期から弥生時代中期後半（Ⅳ期）と考える。

６．溝

SD01（図版181　写真図版178）

検出状況　Ｌ地区検出のSD06と同一の溝で、調査区中央付近をわずかに蛇行しつつ東西方向にのび、東側はさらに昭和59・60年度調査区まで続き、SD32につながる。

形状・規模　東端付近では幅2.6ｍ、深さ0.4ｍ前後、西端では幅3.0ｍ、深さ0.5ｍ前後を測り、東側から西側へ傾斜をもつ。断面形は逆台形を呈するが、東端付近では浅いＵ字状を呈する。

埋土　埋土は上層（１・４層）と底付近に堆積する下層（２・６層）に大別できる。下層には径５㎝程度の礫を含むほか、上・下層とも多量の土器を包含している。

出土遺物　土器など多量の遺物が出土したが、上層出土遺物として弥生土器（1104～1158、1179～1184）を図示した。また分銅形土製品（1159）、ミニチュア土器（1160・1161）、台形土器（1162）も出土している。下層出土遺物として弥生土器（1165～1178）を図示した。

石器も多数出土したが、石鏃（S29）、楔形石器（S65）、削器（S49）、石庖丁（S168、169）、磨製石鏃（S78）を図化した。

時期　弥生時代中期前半（Ⅲ期）～中期後半（Ⅳ期）にわたって存続したと考える。

SD02（図版182　写真図版178）

検出状況　調査区内を南東から北西方向にのび、本調査区北東隅からＭ２区へ続く。さらに、昭和59･60年度調査区SD32、Ｃ地区SD03と同一の溝の可能性がある。南東端は調査区東端付近で消滅する。

形状・規模　北西端付近では幅1.2ｍ、深さ0.1ｍ、南東端付近では幅0.9ｍ、深さ5cmを測り、南東側から北西側へ傾斜をもつ。断面形は逆台形を呈するが、底部は凹凸がある。

埋土　上下2層に大別できる。F-F'断面では人為的に埋めた痕跡が伺える。

出土遺物　多くの土器が出土したが、弥生土器（1185～1192）、有孔円盤（1193）を図示した。石錐（S40）などの石器も出土している。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）～中期後半（Ⅳ期）にわたって存続したと考える。

SD10（図版183）

検出状況　調査区中央部の東寄り、SD01南側で検出した。南北方向にのびるが、北側はSD01と重複し、SD01に切られている。

形状・規模　検出長は約５ｍであり、その全容は不明である。幅2.5ｍ、検出面からの深さ0.2ｍを測る。

断面形は浅いU字状を呈する。

埋土　上下２層に分かれ、上層には礫や土器片を含む。

出土遺物　弥生土器壺（1088）・底部（1089）・甕（1090）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SD25（図版182）

検出状況　調査区南西隅で検出した。L地区検出SD05と同一の溝で、ほぼ直線的に調査区南側へのびる。周溝墓群と重複し、本溝が周溝墓に先行する。

形状・規模　幅0.6ｍ、検出面からの深さ20～30㎝を測る。溝の底部は南東側から北西側に傾斜している。溝の断面形は北西端付近では方形に近く、南東端付近ではU字状を呈する。

埋土　黒褐色のシルト～極細砂を埋土とし、細砂～中砂が混じる。

出土遺物　弥生土器甕（1091）を図示した。

時期　弥生時代中期前半（Ⅱ期）である。

SD32

検出状況　調査区南西隅で検出した。L地区検出のSD04と同一の溝で南東方向にのび、ほぼ直線的に調査区南側へのびる。周溝墓群と重複し、本溝が周溝墓を切っている。

形状・規模　幅0.4～0.6ｍ、検出面からの深さ40㎝前後を測る。溝底部はほぼ水平である。

出土遺物　弥生土器甕（1092）・底部（1093）・器台脚部（1094）・高杯脚部（1095）・壺（1096）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代終末期（Ⅵ期）と考える。

SD52（図版183）

検出状況　調査区北端で検出した。東西方向にのび、東西両端とも本調査区内で完結する。他の溝やピットと重複している。

形状・規模　東西方向に直線的にのび、検出長9.0ｍ、幅0.6ｍ、検出面からの深さ0.5ｍを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物　多くの弥生土器片が出土した。甕（1097～1099）・底部（1100）・鉢（1101）を図示した。

時期　出土遺物から弥生時代中期前半（Ⅲ期）と考える。

SD104

検出状況　調査区東端で検出した。昭和59・60年度調査区SD65と同一の溝である。

形状・規模　幅1.5ｍ、検出面からの深さ0.2ｍ前後を測る。調査区の制約により本調査区での検出長は短いが、北側は昭和59・60年度調査区へ、南側も調査区外へ続く。底部は南側から北側へ傾斜をもつ。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、昭和59・60年度調査区の成果から奈良・平安時代に属すると考える。

第15節 P地区の遺構

1．概要

P地区は県道春日栗柄線の西側に位置し、路線の北側道部にあたる。調査区の東半部には中世の掘立柱建物・柱穴群、西半部には近世の井戸が立地する。

2．掘立柱建物

SB01（図版186）

検出状況　P地区東端に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN1°　Eで、東西1間×南北2間の建物である。ただし西列の中間の柱穴は検出できなかった。東西方向の規模は5.3m、南北方向の規模は6.4m、柱間は3.0～3.4m。床面積は33.92㎡である。

柱穴　掘方は直径約30cmの円形で、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第16節 Q地区の遺構

1．概要

Q地区は県道春日栗柄線の西側に位置し、路線の本線部分にあたる。南北54m、東西140m余の調査区で、調査区の東半～中央にかけて平安時代～中世の掘立柱建物・柱穴群、西半部には近世の掘立柱建物・井戸が立地する。

2．掘立柱建物

SB01（図版187）

検出状況　Q地区中央に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°　Wで、東西2間×南北4間の建物である。東列には一部重複する柱列が認められる。東西方向の規模は5.0m、柱間は2.3～2.7m。南北方向の規模は10.9m、柱間は2.4～3.0m。検出範囲の床面積は54.5㎡である。

柱穴　掘方は直径30～40cmの円形で、深さ5～30cmである。

出土遺物　柱穴P 304から瓦器鉢の底部（1211）、P 302から黒色土器椀（1225）、重複する柱列のP 299から土師器杯（1224）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB02（図版188）

検出状況　Q地区中央で、掘立柱建物SB01の東側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN3°　Wで、東西2間×南北2間の総柱建物である。東西方向の規模は5.0m、柱間は2.4～2.6m。南北方向の規模は6.4m、柱間は北1間が3.4～3.7m、南1間が2.8m。床面積は32.0㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、深さ10～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB03（図版188）

検出状況　Q地区中央で、掘立柱建物SB02の南側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN4°Wで、東西3間×南北2間の総柱建物だが、南辺の柱穴3箇所は確認トレンチで削平してしまった。東西方向の規模は7.4m、柱間は西2間が2.8m、東1間が1.8m。南北方向の規模は5.8m、柱間は2.7～3.0m。床面積は42.92㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、深さ10～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB04（図版189）

検出状況　Q地区中央で、掘立柱建物SB03の東側に近接する。

形状・規模　南北方向の軸線はN1°Wで、東西2間×南北2間の総柱建物である。東西方向の規模は4.5m、柱間は2.1～2.5m。南北方向の規模は4.6m、柱間は2.1～2.5m。床面積は20.7㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、深さ15～30cmである。

出土遺物　柱穴P247から土師器小皿（1212）、黒色土器小皿（1213）が出土した。

時期　12世紀前半の年代が与えられる。

SB05（図版189）

検出状況　Q地区中央南半部に近接する。

形状・規模　南北方向の軸線はN9°Wで、東西2間×南北3間の建物だが、東辺の柱穴2箇所は検出できなかった。東西方向の規模は4.6m、柱間は2.2～2.4m。南北方向の規模は6.7m、柱間は2.2～2.3m。床面積は30.82㎡である。

柱穴　掘方は直径20～30cmの円形で、深さ5～25cmである。

出土遺物　柱穴P234から土師器杯（1214）、P236から土師器小皿（1215）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB06（図版190）

検出状況　Q地区中央の東寄りに位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°Wで、東西2間×南北2間＋αの建物で、西辺から北へ1間分柱穴が延びる。東西方向の規模は5.3m、柱間は2.5～2.8m。南北方向の規模は検出した範囲内で4.6m、柱間は2.0～2.4m。検出範囲の床面積は24.38㎡である。

柱穴　掘方は直径約20cmの円形で、深さ5～30cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB07（図版190　写真図版184）

検出状況　Q地区東側の北端に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN10°Wで、東西2間×南北2間＋αの総柱建物である。東西方向の規模は5.5m、柱間は2.6～2.8m。南北方向の規模は検出した範囲内で4.8m、柱間は2.4m。検出範囲の床面積は26.4㎡である。

柱穴　掘方は直径約20～30cmの円形で、深さ25～30cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB08（図版191　写真図版184）

検出状況　Q地区の北東隅に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5°Wで、東西2間×南北3間の建物である。東西方向の規模は6.3m、柱間は西1間が4.5mと広く土間状になり、東1間が1.8m。南北方向の規模は8.0m、柱間は2.5～2.9m。床面積は50.4㎡である。

柱穴　掘方は直径約20～40cmの円形で、深さ10～25cmである。

出土遺物　柱穴P167から黒色土器椀（1216）が出土した。

時期　11世紀末～12世紀初頭の年代が与えられる。

SB09（図版192）

検出状況　Q地区東端に位置し、東半部は県道側に続くものとみられる。

形状・規模　南北方向の軸線はN6°Wで、東西2間＋α×南北4間の総柱建物である。東西方向の規模は検出した範囲内で5.2m、柱間は2.0～2.8m。南北方向の規模は11.2m、柱間は2.2～3.2m。検出範囲の床面積は58.24㎡である。

柱穴　掘方は直径約20～30cmの円形で、深さ10～20cmである。

出土遺物　柱穴P102から土師器杯（1217）、P88から土師器鍋（1218）が出土した。

時期　12世紀前半の年代が与えられる。

SB10（図版192）

検出状況　Q地区東端に位置し、SB09と重複する。建物部の大半は県道側で、調査区内では西端の柱列を検出しえたのみである。

形状・規模　南北方向の軸線はN0°で、南北3間だが、東西方向は不明である。南北方向の規模は7.9m、柱間は2.1～2.9m。

柱穴　掘方は直径約10～25cmの円形で、深さ10～20cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB11（図版193）

検出状況　Q地区東側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN12°Wで、東西4間×南北3間の総柱建物である。ただし北から2列目中央の柱を欠いている。東西方向の規模は9.4m、柱間は1.9～2.7m。南北方向の規模は8.2m、柱間は1.9～2.7m。床面積は77.08㎡である。

柱穴　掘方は直径約25～30cmの円形で、深さ15～35cmである。

出土遺物　柱穴P33から黒色土器椀（1219）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB12（図版194）

検出状況　Q地区東側に位置し、SB11に重複する。

形状・規模　南北方向の軸線はN10°Wで、東西2間×南北2間の総柱建物である。東西方向の規模は5.4m、柱間は2.7m。南北方向の規模は7.7m、柱間は3.7～3.9m。床面積は41.58㎡である。

柱穴　掘方は直径約25～40cmの円形で、深さ5～25cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB13（図版194）

検出状況　Q地区東端で、SB10 の南側に位置する。大半は県道側で、調査区内では建物部の西側の一部を検出しえたのみである。

形状・規模　南北方向の軸線はN11° Wで、東西１間＋α×南北４間の建物で、総柱になるかどうかは不明である。東西方向の柱間は2.7ｍ。南北方向の規模は10.8ｍ、柱間は2.5～2.9ｍ。検出範囲の床面積は29.16 ㎡である。

柱穴　掘方は直径約25～30cm の円形で、深さ10～35cm である。

出土遺物　柱穴Ｐ３から土師器杯（1220）が出土した。

時期　12世紀後半の年代が与えられる。

SB14（図版190）

検出状況　Q地区中央で、掘立柱建物SB04の東側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN5° Wで、東西１間×南北１間の建物である。東西方向の柱間は2.0m。南北方向の柱間は1.8ｍ。床面積は3.6 ㎡である。

柱穴　掘方は直径20～35cm の円形で、深さ15～20cm である。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB15（図版193）

検出状況　Q地区東端に位置し、SB09と重複する。

形状・規模　南北方向の軸線はN3° Wで、東西２間×南北２間の総柱建物である。東西方向の規模は5.0ｍ、柱間は2.3～2.7ｍ。南北方向の規模は5.8ｍ、柱間は2.7～3.2ｍ。床面積は29.0 ㎡である。

柱穴　掘方は直径約20～25cm の円形で、深さ10～35cm である。

出土遺物　柱穴Ｐ91から土師器杯（1221）、黒色土器椀（1223）、Ｐ101から土師器小皿（1222）が出土した。

時期　12世紀前半の年代が与えられる。

SB16（図版195）

検出状況　Q地区北西隅に位置し、SB17と重複する。

形状・規模　南北方向の軸線はN3° Wで、東西２間×南北２間のうち南東隅の柱を欠いており、Ｌ字形の建物となっている。東西方向の規模は4.6m、柱間は2.3～2.6m。南北方向の規模は6.5m、柱間は3.0～3.5ｍ。床面積は23.14 ㎡である。

柱穴　掘方は直径約20～40cm の円形で、深さ10～45cm である。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB17（図版195）

検出状況　Q地区北西隅に位置し、SB16と重複する。北辺は調査区外に延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN2° Wで、東西２間×南北２間＋α建物である。東西方向の規模は4.6ｍ、柱間は2.3ｍ。南北方向の規模は検出した範囲内で4.0ｍ、柱間は1.9～2.0ｍ。検出範囲の床面積は18.4 ㎡である。

柱穴　掘方は直径約30～60cm の円形で、深さ20～45cm である。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB18（図版191）

検出状況　Q地区東端に位置し、建物の大半は調査区外へのび、西端の柱列を検出しえたのみである。

形状・規模　南北方向の軸線はN4°　Wで、南北3間だが、東西方向は不明である。南北方向の規模は6.0m、柱間は2.0m。

柱穴　掘方は直径約20cmの円形で、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第17節 R地区の遺構

1．概要

R地区は県道春日栗柄線の西側に位置し、路線の南側道部にあたる。南北約20m、東西約85mの調査区で、調査区の西半部に平安時代～中世の掘立柱建物・柱穴群が立地する。

2．掘立柱建物

SB01（図版196　写真図版181）

検出状況　R地区西端に位置し、南辺は調査区外に延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN3°　Wで、東西3間×南北2間＋αの建物だが、北辺東側の柱穴3箇所は検出できなかった。東西方向の規模は7.8m、柱間は2.3～2.8m。南北方向の規模は検出した範囲内で5.7m、柱間は2.6～3.1m。検出範囲の床面積は44.46㎡である。

柱穴　掘方は直径20～40cmの円形で、深さ10～25cmである。

出土遺物　柱穴P25から瓦器小皿（1228）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB02（図版197　写真図版181）

検出状況　R地区西半で、SB01の東側に位置する。

形状・規模　南北方向の軸線はN4°　Wで、東西3間×南北3間の建物だが、北西隅と南東隅の柱穴を欠いている。東西方向の規模は7.4m、柱間は2.1～2.6m。南北方向の規模は9.3m、柱間は2.4～3.7m。床面積は55.59㎡である。

柱穴　掘方は直径20cmの円形で、深さ10～20cmである。

出土遺物　柱穴P51から土師器杯（1229）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB03（図版198　写真図版181）

検出状況　R地区西半で、SB02の北東側の一部と重複する。建物の北辺はさらに調査区外へ延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN1°　Wで、東西2間×南北2間＋αの建物だが、東西方向は5°前後時計回りにずれており、平面形は平行四辺形を呈する。東西方向の規模は7.2m、柱間は3.5～4.0m。南北方向の規模は検出した範囲内で4.6m、柱間は1.6～3.1m。検出範囲の床面積は33.12㎡である。

柱穴　掘方は直径20cmの円形で、深さ10～20cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB04（図版199　写真図版181）

検出状況　R地区中央に位置し、建物の南辺はさらに調査区外へ延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN3°Wで、東西2間×南北4間＋αの建物だが、西辺の北側に1間×2間、東辺の南側に1間×1間の張り出しが付くため、東西は全体で4間分となる。また中央の柱穴を欠いており、土間状となる。東西方向の規模は最大10.7m、柱間は2.3～3.4m。南北方向の規模は検出した範囲内で11.0m、柱間は2.5～2.9m。検出範囲の床面積は80.17㎡である。

柱穴　掘方は直径25～30cmの円形で、深さ10～35cmである。

出土遺物　柱穴P76から土師器小皿（1230）、P93から土師器甕（1231）が出土した。

時期　12世紀代の年代が与えられる。

SB05（図版200　写真図版181）

検出状況　R地区中央に位置し、SB04の東側に接する。建物の南辺はさらに調査区外へ延びる可能性がある。

形状・規模　南北方向の軸線はN9°Wで、東西2間×南北3間＋αの建物だが、東南隅の柱穴を欠いている。東西方向の規模は8.2m、柱間は東側の1間3.0mに対し、西側が1間5.1～5.2mと広くなっており、土間状の部分と考えられる。南北方向の規模は検出した範囲内で10.2m、柱間は3.1～3.9m。検出範囲の床面積は74.34㎡である。

柱穴　掘方は直径25～30cmの円形で、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB06（図版196）

検出状況　R地区西側に位置し、SB02と重複する。

形状・規模　南北方向の軸線はN8°Wで、東西1間×南北1間の建物である。東西方向の柱間は2.3m、南北方向の柱間は1.8m。床面積は4.14㎡である。

柱穴　掘方は直径20cmの円形で、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

SB07（図版198）

検出状況　R地区中央で、SB04とSB05の間に重複する。

形状・規模　南北方向の軸線はN11°Wで、東西1間×南北2間の建物である。東西方向の柱間は2.5m、南北方向の規模は5.6m、柱間が2.7～2.9m。床面積は14.0㎡である。

柱穴　掘方は直径25～30cmの円形で、深さ10～15cmである。

出土遺物　出土したのは土器の細片のみで、図化できたものはない。

時期　年代を示す遺物はない。

第4章　七日市遺跡出土遺物

第1節　弥生時代の土器

七日市遺跡からは弥生時代の土器が多く出土している。出土土器についてその概要を述べるが、各資料の編年的な位置づけは、兵庫丹波地域における弥生土器編年（多賀茂治2002「兵庫丹波における弥生土器の様相（予察）」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号）に基づき記述する。

1．A地区出土土器

SH01出土土器（1～12）

竪穴住居SH01からは壺・甕・高杯・鉢が出土している。1は細頸壺の頸部である。下部はすぐに体部に続く。外面をヘラミガキ、内面をハケで仕上げている。3～4は広口壺である。3は短く直立する頸部に強く屈曲する口縁がつき、その端部を斜め上方に拡張しており、口縁部外面には擬凹線を施す。頸部外面にはわずかに縦方向のハケが認められる。4は球形の体部から外傾する頸部が立ち上がり、外反する口縁をさらに上方へと拡張した複合口縁の広口壺である。体部外面は縦方向のハケで仕上げており、内面は頸胴部境にユビオサエを施しており、体部内面には横方向のヘラケズリが施される。5は球形の体部に、短く直立する頸部に短い玉縁状の口縁がつく短頸壺である。体部外面にはタタキ成形の痕跡が残り、その後ハケ、ヘラミガキで仕上げられている。体部内面は頸胴部境にのみ横方向のヘラケズリが施されており、その他の部分は横方向のハケが施される。

2・6～9は甕である。いずれも複合口縁をもつものである。2はくの字形の口縁部の端を大きく上方に拡張したものである。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げており、体部内面は横方法のヘラケズリで仕上げる。6～8は短い口縁部の端を上方に拡張して複合口縁とし、その外面に擬凹線を施したものである。6は体部外面に縦方向のハケ目が認められ、内面は口縁部直下に横方向のヘラケズリが施される。7は体部の内外面ともにハケで仕上げており、ハケの方向は外面は縦方向、内面は横方向である。8は体部外面に細かい縦方向のハケ目が認められ、内面はストロークの短い横方向のヘラケズリで仕上げられている。9は球形に近い体部に短く上方に拡張する口縁部がつくものである。口縁部外面はヨコナデで仕上げており無文である。体部外面は横方向のハケで仕上げ、内面は横方向のヘラケズリで仕上げている。

10は小型の高杯である。杯部のみの破片であり、脚部の形態は不明である。精製の器種であり、外面には細かなヘラミガキが施されている。11は脚台付きの鉢である。外面は横方向のハケで仕上げる。12は手焙り形の鉢である。覆部の一部のみの破片であるが、鉢部の口縁部には刻目突帯を巡らせる。覆部は内外面ともにヘラケズリによって仕上げられる。

以上の土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期新段階）のものである。

SH02出土土器（13～18）

SH02からは壺・甕・高杯が出土している。13は直立する頸部に強く屈曲して水平に伸びる口縁部がついた広口壺である。口縁部端面には2条の凹線が施される。14・16は複合口縁の甕である。14は外反する口縁部の端を短く斜め上方へと拡張したものである。体部外面はナデで仕上げられているが、わ

ずかに縦方向のハケ目が認められる。体部内面は横方向のヘラケズリが施される。16は短く斜め上方に立ち上がる口縁をさらに上方へ大きく拡張するものであり、口縁部の外面には擬凹線が施される。口縁部の内面は横方向のハケで仕上げており、体部内面には横方向のヘラケズリが施される。15・17は複合口縁の高杯の杯部である。椀型の杯部の端部を上方へと大きく拡張するものであり、口縁部の外面には擬凹線を施す。18は高杯の脚部である。脚部端を拡張しており、端面に凹線を施す。内面は横方向のヘラケズリで仕上げている。

13～17は弥生時代終末期（Ⅵ－1期古段階）のものであり、18のみ中期後半（Ⅳ期）のものである。

SH03出土土器（19～22）

SH03からは壺・高杯・鉢が出土している。19・22は広口壺の口縁部である。19は口縁端部を上下に、22は下方に拡張し、端面に凹線を施すが、いずれも拡張は小さい。20は大型の台付鉢の鉢部であり、外面には凹線を施す。21は高杯の杯部であり、外面には口縁部直下と屈曲部に凹線を施す。

以上の土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

SH05出土土器（23～24）

SH05からは甕と高杯が出土している。23は甕の底部であり、24は高杯の脚部である。24は裾部に2個一対の孔があく。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ期）の甕である。

SH07出土土器（25～28）

SH07からは甕・器台・鉢が出土している。25・26は口縁部端を真上に拡張した甕である。26は口縁部外面に擬凹線を施す。27は器台の受け部である。口縁部を上下に拡張して複合口縁としている。口縁部外面には擬凹線を施し、内外面を横方向の細かなヘラミガキで仕上げる。筒部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げている。28は台付鉢の脚部である。外面を細かなヘラミガキで仕上げる。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期古段階）のものである。

SH09出土土器（29・30）

SH09からは鉢と甕が出土している。29は台付鉢の鉢部である。口縁部をわずかに肥厚させ、端面にはヘラで細かな縦方向の沈線を施す。外面には3条の縦方向の棒状浮文が貼付される。30は口縁端部を上方へと拡張し、端面に2条の凹線文を施し、体部外面にハケ状の工具を押圧して列点文を施した甕である。内面のヘラケズリは頸部の直下まで及んでいる。この土器は弥生時代中期末（Ⅳ－2期）のものである。

SH10出土土器（31）

SH10からは高杯の脚部が1点出土している。外面に4条の沈線を施す。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SH11出土土器（32）

SH11からは鉢が出土している。32は外面に凹線を施す鉢であり。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SH12出土土器（33～39）

SH12からは甕・鉢・脚部が出土している。33・34は口縁端部を上方につまみあげた甕である。35・36は口縁部を上下に拡張して凹線を施す甕である。37・38は台付鉢である。37は口縁部が水平に内側に屈曲し、外面に凹線を施す。38は口縁端部を肥厚させ、外面には凹線を施す。38は内面をヘラケズリ、外面をヘラミガキで仕上げた脚部である。径が大きいので、台付鉢の脚部であろう。これらの土器は弥

生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SH13出土土器（40～42）

SH13からは壺と脚部が出土している。40は口縁部に３条の凹線を施す直口壺である。41は広口長頸壺である。口縁端部を上下に拡張し、外面に凹線を施し、縦方向のヘラ描沈線を施す。残存部で確認していないので図では表現していないが、通常の施文パターンから考えて、円形浮文も貼付されていたと思われる。内面には櫛描き波状文が施される。42は脚部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SH14出土土器（43～48）

壺・甕・鉢が出土している。43は壺の底部である。外面にはハケ、内面には板ナデが認められる。44は甕の口縁部である。45・46は短い口縁部の端面に凹線を施す甕である。46は外面に櫛描波状文を施す。47は鉢である。口縁直下に凹線を施す。48は単純なくの字形の口縁を持つ甕である。これらの土器は弥生時代中期末（Ⅳ－２期）のものである。

SH15出土土器（49・50）

壺と甕が出土している。49は大型の短頸壺の口縁部である。端面に凹線を施す。50は甕の口縁部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SH16出土土器（51～61）

甕・壺・器台・鉢が出土している。51は広口短頸壺の口縁部であろう。口縁端面を拡張して擬凹線を施している。52は直口壺である。口縁直下に凹線を施す。53は壺の底部である。54は口縁部に段を付けた複合口縁の甕である。55・56は口縁部を大きく上方に拡張し、外面に擬凹線を施す甕である。57はくの字に折れ曲がる口縁をもつ甕である。58は鉢の底部である。タタキ成形である。59は加飾が著しい器台である。口縁部の端面に凹線を施し、その上下に刻み目を施す。外面には櫛描の波状文を施し、その下の屈曲部の段にも刻みを施す。60は蓋である。内外面ともにハケ・ヘラミガキで丁寧に仕上げている。61は精製の台付鉢である。内外面ともに細かいヘラミガキで丁寧に仕上げている。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１期新段階）のものである。

SH17出土土器（62～64）

壺・甕・高杯・器台・鳥形土器が出土している。62は直口壺である。63は小型の甕である。口縁部は上方に拡張し、外面に擬凹線を施す。64も甕である。口縁部を上方に拡張し擬凹線を施す。65は細かなヘラミガキで仕上げた高杯の脚部である。66は口縁部を大きく上下に拡張し、外面に擬凹線を施した器台である。67は全形は不明であるが、形状から鳥形土器の一部（尾部付近）であると考える。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１期古段階）のものである。

SH19出土土器（68～77）

壺・甕・鉢・高杯・器台が出土している。68は広口壺である。端部を上方に拡張し、外面に縦方向の沈線を施す。69も広口壺の口縁である。上下に拡張し、端面には櫛描の波状文、円形浮文を施し、内面には櫛描の扇状文を施す。70は受け口の広口壺である。口縁部・屈曲部・頸部に凹線を施す。71は口縁部下に３条の凹線を施す鉢である。72は甕の底部である。73は複合口縁の甕である。75は外面に凹線を施す鉢である。76は口縁部を上方に拡張し、端面に擬凹線を施す器台である。77は外面に凹線を施す高杯の杯部である。これらの土器の内、72・73・76は弥生時代終末期（Ⅵ－１期新段階）のものであり、それ以外は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SH20出土土器（78～90）

壺・甕・高杯が出土している。78～81は外面に凹線を施した直口壺である。82は口縁部を拡張し、頸部に圧痕文突帯を巡らせた短頸壺である。83は広口長頸壺であり、内面には櫛描の波状文で飾る。外面は残存部では確認していないが、円形浮文・縦方向の沈線で飾っていたと思われる。84は壺の底部である。85・86は甕である。87は大型の高杯の杯部であり、外面に凹線を施し、口縁直下には刻みを巡らせる。口縁端部は拡張し、端面には凹線を施し、さらにその上に櫛描の扇状文を施す。88は外面に凹線を施す高杯である。89・90は脚部である。内面は横方向のヘラケズリを施す。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SH21出土土器（91）

91は弥生時代中期後半（Ⅳ期）の鉢である。内外面ともにヘラミガキで仕上げる。

SH22出土土器（92～94）

甕・高杯が出土している。92は体部外面をハケで仕上げた甕である。93は水平口縁の高杯であり、口縁部を大きく垂下させる。94は高杯の脚部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SH24出土土器（95）

95は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）の甕である。口縁端部を上方に拡張し、体部外面はハケで仕上げる。

SH25出土土器（96～99）

壺・高杯・鉢が出土している。96は広口長頸壺の口縁部である。外面には凹線を施す。残存していないが円形浮文・縦方向の沈線でも飾られていたと考えられる。内面には櫛描の波状文が施される。97は水平口縁の高杯である。口縁部には竹管文が施される。98は外面に凹線を施した台付鉢である。99は脚台付きの鉢である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SH26出土土器（100～104）

壺・甕が出土している。100は無頸壺である。101は頸部に圧痕文突帯を巡らせた直口壺である。102は口縁部をわずかに上方につまみ上げた甕である。103・104は単純なくの字形の口縁をもつ甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SH27出土土器（105～108）

甕・高杯・脚部が出土している。105・106は口縁部を上方へ拡張する甕である。106は外面に擬凹線を施す。107は外面に凹線を施す高杯である。108は小型の脚部である。107は弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものであり、他は弥生時代終末期（Ⅵ－１期新段階）のものである。

SH29出土土器（109～111）

壺・甕・高杯が出土している。109はわずかに外反する直口壺である。外面には凹線を施す。110は口縁端部を肥厚させた甕である。内面･外面ともにハケで仕上げる。111は凹線を施す高杯の杯部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SH30出土土器（112）

112は外面に凹線を施す高杯である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SB01出土土器（113・114）

113は広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、外面には凹線と縦方向の沈線、内面には櫛描波状文

を施す。頸部外面には櫛描の直線文・波状文を交互に施す。114は直口壺である。外面に凹線を施す。

柱穴出土土器（115～126）

115はP65から出土した大型の高杯である。外面には凹線を施す。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。116・117はP112から出土した土器である。116は口縁端部を上下に拡張し、外面に列点文を施した広口壺である。117は口縁部に３個１単位の押圧を施した甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。118はP127から出土した広口壺である。口縁部は上下に拡張し、端面に列点文を施す。体部外面にも４段に列点文を施す。中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

119はP584から出土した広口長頸壺である。口縁部は下方に垂下し、端面には櫛描波状文を施した後に、円形浮文を貼付している。口縁部内面には櫛描波状文を施し、頸部には凹線が施される。中期後半（Ⅳ－１期）のものである。120はP650から出土した甕である。121はP813から出土した脚部である。内面をヘラケズリで仕上げる。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。122はP890から出土した直口壺である。頸部に凹線を施す。中期後半（Ⅳ－１期）のものである。123はP999から出土した甕である。中期末～後期（Ⅳ－２～Ⅴ－１）のものである。124はP1007から出土した広口壺である。口縁端部を垂下させ、外面に凹線を施し円形浮文を貼付する。内面には櫛描の波状文を施す。中期後半（Ⅳ－１期）のものである。125はP1012から出土した直口壺である。口縁部直下と頸部にそれぞれ３条の凹線を施す。外面にわずかにタタキ目の痕跡が認められる。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。126はP1058から出土した無頸壺である。外面は細かなヘラミガキで仕上げる。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX01出土土器（127～131）

壺・甕が出土している。127は口縁端部を上下に拡張し、凹線を施す広口短頸壺である。128は大型の受け口口縁をもつ壺である。口縁端部に刻みを施す。129は底部である。内面を縦方向のヘラケズリで仕上げている。130・131は甕である。130は短めの口縁がつき、内面を板ナデで仕上げる。131は口縁端部をわずかにつまみ上げる。これらの土器は127・129が弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）まで下るが、他は中期前半（Ⅲ－２期）の初頭のものである。

SX03出土土器（132～137）

壺・甕が出土している。132は口縁部を上下に拡張し、凹線を施す広口短頸壺である。133は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。134は口縁部を上下に拡張し、外面を凹線・円形浮文・縦方向の沈線、内面を櫛描波状文で飾った広口壺である。頸部には凹線を施し、体部には櫛描で直線文、波状文、列点文を施す。体部下半部内面には縦方向のヘラケズリが認められる。135～137は甕である。135・136は単純なくの字形の口縁をもつ。137は短い口縁がつき、外面には櫛描で波状文が施される。これらの土器のうち、132と137は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）、他は中期前半（Ⅲ－２期）である。

SK02出土土器（138）

138は口縁部直下と屈曲部に凹線を施した高杯である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK07出土土器（139）

139は外面に凹線を施し、内面を横方向のヘラミガキで仕上げた、中期後半（Ⅳ－２期）の直口壺である。

SK08出土土器（140）

140は外面に凹線を施した直口壺である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK14出土土器（141）

141は甕である。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK18出土土器（142）

142が外面に凹線を施した直口壺である。口縁に刻みを施す。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK19出土土器（143）

143は口縁端部に刻みを施した甕である。中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SK29出土土器（144）

144は全面に凹線を施した鉢である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK31出土土器（145）

145は口縁端部を上下に拡張し、端面を凹線・円形浮文・縦方向の沈線で飾った広口壺である。内面は櫛描波状文と扇状文で飾る。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK33出土土器（146・147）

甕が出土している。146･147とも口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線を施す。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK42出土土器（148）

148は鉢もしくは甕の底部である。タタキで成形されており、内面はハケで仕上げる。弥生時代終末期（Ⅵ－２期古段階）のものである。

SK48出土土器（149～152）

壺・甕・鉢が出土している。149は直口壺である。外面に凹線を施す。150は広口壺である。口縁部外面に波状文を施し、内面も波状文で飾る。頸部には波状文と直線文を施す。151は小型の甕である。口縁端部を拡張し、凹線を施す。152は外面に凹線を施す鉢である。これらの土器の内、150は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものであり、他は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK51出土土器（153～156）

鉢・壺・甕が出土している。153は凹線文で飾った大型の鉢である。154は口縁端部を上下に拡張し凹線を施した広口壺である。155は凹線で飾った直口壺である。156は大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK53出土土器（157）

157は外面をハケ、内面を板ナデで仕上げた中期前半（Ⅲ－２期）の甕である。

SK57出土土器（158）

158は広口長頸壺を模したミニチュア壺である。形態から中期後半（Ⅳ－１期）のものと考えられる。

SK66出土土器（159）

159は大型の短頸壺である。口縁部は強く内側に拡張しており、体部の肩部に列点文を施す。内面は上半部までヘラケズリが及んでいる。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK70出土土器（160）

160は口縁部を大きく垂下させ凹線を施した広口壺である。弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SK71出土土器（161）

161は凹線を施した水平口縁の高杯である。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK72出土土器（162）

162は口縁部を垂下させ端面に凹線を施す広口壺である。凹線の上から縦方向の沈線を施す。残存部では確認できないが、円形浮文を貼付していたと思われる。内面には櫛描の波状文と扇状文が施される。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK73出土土器（163）

163は口縁部を拡張し、端面に擬凹線を施した甕である。弥生時代終末期（Ⅵ－１期古段階）のものである。

SK74出土土器（164）

164は台付きの短頸壺である。脚部に円形の透かし孔があく。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK87出土土器（165～167）

壺・鉢が出土している。165は短い口縁部がつく短頸壺である。外面をハケ、内面を板ナデで仕上げる。166・167は鉢である。これらの土器は弥生時代後期後半（Ⅴ－４期）のものである。

SK99出土土器（168）

168は甕である。外面をハケで仕上げる。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK104出土土器（169）

169は脚部である。裾端面に凹線を施す。内面はヘラケズリで仕上げる。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK105出土土器（170・171）

170は体部に列点文を２段に施した甕である。171は口縁部端面に凹線を施し、内面に櫛で羽状文、扇状文を施した壺である。これらは中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SK111出土土器（172）

172は短く屈曲する口縁をもつ、中期前半（Ⅲ－２期）の甕である。

SK112出土土器（173）

173は脚部である。内面をヘラケズリで仕上げる。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK113出土土器（174）

174は凹線を施した鉢である。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK115出土土器（175）

175は凹線を全面に施した直口壺である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK116出土土器（176）

176は内外面ともにハケで仕上げた甕である。中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK121出土土器（177）

177は頸部に圧痕文突帯を巡らせた壺である。中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK122出土土器（178）

178は口縁部直下と屈曲部に凹線を施した高杯である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK123出土土器（179）

179は口縁端面に凹線を施す広口壺である。頸部には直線文を施す。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK125出土土器（180）

180は口縁部直下に３条の凹線を施した直口壺である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK128出土土器（181）

181は筒型の頸部に内側に屈曲する口縁部がついた長頸壺である。内面外面ともにハケで仕上げる。

SK131出土土器（182）

182は水平口縁の高杯である。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK141出土土器（183）

183は脚部である。内面はヘラケズリで仕上げる。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SD08出土土器（184）

184は外反する口縁部の端面に刻み目を施した広口短頸壺である。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SD16出土土器（185～187）

壺・高杯が出土している。185は直口壺であり、口縁部直下に２条の凹線を施し、頸部には圧痕文突帯を巡らせる。体部には櫛による列点を施す。底部付近の内面はヘラケズリで仕上げる。186は屈曲部に凹線を巡らせる高杯である。外面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。187は高杯の脚部である。筒部外面は沈線で飾り、裾部は棒状の工具でハの字形に刺突文を巡らせる。これらは中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SD17出土土器（189・190）

壺、鉢が出土している。189は口縁端面にハケ状の原体を押しつけて斜格子文を施す壺である。190は平底の鉢である。これらは中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SD25出土土器（188）

188は器台である。外面に凹線を施す。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SD27出土土器（191）

191はゆるやかに内湾した口縁部をもつ直口壺である。外面には凹線を施す。中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SD29出土土器（192）

192は甕である。外面をハケ、内面を板ナデで仕上げる。中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

包含層出土土器（193～197）

包含層の資料は、機械掘削・遺構検出中に出土した遺物であり、出土遺構を特定できなかった資料である。193は直口壺である。口縁部に３条の凹線を施し、体部は外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。194は大型の甕である。口縁部端面にハケ状の工具によって刻み目を施す。体部にはタタキ目がわずかに残る。195は直口壺である。タタキ成形されており、体部内面はヘラケズリで仕上げる。196は拡張した口縁端面に凹線を施し、円形浮文・棒状浮文を貼付した広口壺である。頸部には凹線を施す。197は台付の鉢である。精良な胎土を用い、丁寧なヘラミガキで仕上げられた精製土器である。

２．Ｂ地区出土土器

SX01出土土器（198～201）

周溝埋土から、壺・甕が出土している。198は壺である。199は外面に凹線文を施した直口壺である。200は細頸壺である。頸部外面に細かい凹線文を施す。201は甕の底部であり、外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX01・02周溝共有部出土土器（202～204）

SX01・02の周溝共有部分から出土した土器であり、どちらの周溝墓に帰属するのか確定できないも

のである。202は甕の体部である。内外面ともにハケで仕上げる。203・204は高杯である。いずれも外面に凹線文を施す。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX02出土土器（205）

205は甕の底部である。外面はハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX03出土土器（206）

口縁端部を拡張し、凹線文を施した甕である。外面をハケで仕上げる。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX04出土土器（207・208）

甕が出土している。207は口縁部をわずかに拡張した甕である。外面はハケで仕上げ、内面は底部付近をヘラケズリで仕上げる。208は甕の底部である。内外面ともに板ナデで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX05出土土器（209）

土器棺として使用されていた大型の甕である。口縁部は拡張され、凹線文を施す。外面は縦方向のハケで仕上げた後に、下半部をヘラミガキで仕上げる。内面はハケを施した後に、縦方向のヘラケズリで仕上げる。弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK03出土土器（210～216）

壺・甕・高杯が出土している。210は口縁部を拡張した短頸壺である。肩部にはハケの押圧で列点文を施す。211・212は直口壺である。211は凹線文を施す。213は口縁端部を拡張する甕である。214は甕の底部である。215は高杯の杯部であり、216は脚部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SR01出土土器（217～226）

壺・甕が出土している。217は口縁部端面に櫛描波状文を施し、内面には櫛で扇状文を施す広口壺である。218は口縁部端面に櫛描波状文を施し、頸部には凹線文を施す。219は体部からゆるやかにつづく頸部に外反する口縁部がつき、端面に凹線文を施す広口壺である。体部には櫛描の波状文を施す。220・221は口縁部端を上方につまみ上げた甕である。222・223は単純なくの字形の口縁部をもつ甕である。224～226は口縁部を拡張し凹線文を施した甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SR02出土土器（227～229）

227は拡張した口縁端面に凹線文を施し、その上からハケ状の工具で互い違いの方向に列点を施した壺である。228は拡張した口縁部端面に凹線を施し、縦方向の沈線を施した広口壺である。口縁部内面には羽状文を施す。229は口縁部端を拡張した大型の甕である。これらの土器は中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

包含層出土土器（230～239）

包含層出土土器と一括した遺物は、機械掘削や遺構検出の途中で出土したものであり、出土遺構を特定できないものである。230は口縁部直下に凹線文を施した直口壺である。231は口縁部に押圧を施した甕である。232は口縁部端を拡張し、端面に凹線文を施した甕である。233は口縁端部を上方につまみ上げた甕である。234は口縁端部を大きく拡張した大型の甕である。235は口縁部直下と屈曲部に凹

線文を施した高杯である。236は水平口縁の高杯である。237は強く外側に屈曲した口縁部をもつ鉢である。238・239は高杯の脚部である。外面には沈線を施し、内面はヘラケズリで仕上げる。

3．C地区出土土器

SH01出土土器（240）

240は低脚杯の脚部である。 外面は縦方向のヘラミガキを施す。 弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

P34出土土器（241）

241は台付鉢の鉢部である。内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げる。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

SX01出土土器（242～272）

SX01の周溝内からは多くの土器が出土している。壺・甕・鉢・高杯がある。

242は口縁端部を拡張し、端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を５本１単位で貼付する。内面には櫛描の波状文を施す。243・244は口縁端部を上下に拡張し、端面を深く窪め、その上から棒状浮文をアーチ状に貼付した特異なつくりの広口壺である。243は口縁部の上下端に刻みを施し、頸部に凹線を施す。245は拡張した口縁部の端面に凹線文を施し、その上に円形浮文と棒状浮文を貼付した広口壺である。口縁部の内面には櫛で扇状文を２段に施す。246も同様のものである。247は拡張した口縁部端面に凹線文を施し、頸部にも凹線文を施す。248は圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁端部を上下に拡張し、端面には凹線文を施し、その上から縦方向に沈線を入れ、さらに棒状浮文と円形浮文を貼付する。内面には扇状文を施す。体部には直線文と波状文を交互に施すが、下段の直線文の上下に櫛の先端で列点が施される。249も同様の施文をもつ広口壺である。体部の列点文は下段の直線文の下に上下２段に施されている。250・251も圧痕文突帯を巡らせる広口壺である。

252は頸部に断面三角形突帯を２段に巡らせた広口壺である。口縁部は下方に垂下し、外面には円形浮文が施され、端面の上端には刻み目が施される。253は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。254は長い胴部に外反する口縁部がついた短頸壺である。外面にタタキの痕跡が認められる。255は短く外反する口縁部のついた短頸壺である。体部はハケを施した後に、底部付近のみヘラミガキで仕上げる。肩部には列点文が施される。256は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁端面に凹線を施した後に刻みを施す広口短頸壺である。体部にも列点文が施される。257は大型の受け口口縁の壺である。頸部には圧痕文突帯を巡らせる。258は頸部に断面三角形突帯を２段に巡らせた広口壺である。体部には櫛描の波状文と直線文を交互に施す。

259～270は甕である。262は口縁端部を上方につまみあげる。263～265は拡張した端面に凹線文を施す。267も口縁端部を拡張し凹線文を施す。体部にはタタキの痕跡が認められるが、ハケによってほとんどナデ消されている。268～270は大型の甕であり、内外面ともにハケで仕上げられる。271は口縁部を上方に拡張した鉢である。内面はヘラケズリで仕上げられる。272は口縁部端を内側に拡張した鉢である。273は高杯の脚部である。外面には沈線が巡らされ内面はヘラケズリで仕上げる。274は鉢の脚部である。内面をヘラケズリで仕上げる。275は水差形土器である。口縁部の把手側が切りくぼめられる。口縁部下には凹線文が２段に施される。

これらの土器は253のように、中期前半（Ⅲ－２期）まで遡る可能性があるものもあるが、ほとんど

は凹線文出現期のものであり、中期後半（Ⅳ－１期）に位置づけられる。

SX02出土土器（276～301）

SX02の周溝からは壺・甕・鉢・高杯など多くの土器が出土している。276は口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施した広口壺である。277は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁端部は垂下させ、端面に凹線を施し、その上に刻みを施す。内面には櫛で扇状文を施す。278～280は直口壺である。279は口縁部直下と頸部に凹線文を施す。280は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、体部にはU字形の粘土を貼付する。体部にはハケで消されているが、タタキの痕跡がわずかに観察できる。281・282は壺の底部である。いずれもハケで仕上げられている。283は台付鉢である。底部外面付近はヘラミガキが施される。284は頸部に圧痕文突帯を巡らせた受け口の壺である。

285～288は甕である。287は大型のものであり、口縁部端を上方につまみあげる。288は口縁部端を上方に拡張し、端面に凹線文を施す。体部内面はヘラケズリが施される。289・290は鉢である。289は胴部最大径付近に凹線文を施す。内面はハケで仕上げる。290は台付の鉢である、内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられる。291は杯部の屈曲部と裾部の端面に凹線文を施した高杯である。292・293は水平口縁をもつ高杯である。292は拡張した端面に凹線文を施し、棒状浮文を貼付する。294～296は外面に凹線文を施した高杯である。297～301は脚部である。301を除き、いずれも内面はヘラケズリで仕上げられている。

これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期～２期）のものであり、量としてはⅣ－２期のものが多いが、かなりの時期幅をもつものである。

SX03出土土器（302～306）

SX03の周溝内からは壺・甕が出土している。302は細頸壺であり、体部には波状文と直線文が施される。303は壺の底部である。304は口縁部端に３個１単位で棒状の工具による押圧を施した甕である。305は内面を板ナデで仕上げる甕である。306は口縁部端をつまみ上げ、体部内面を板ナデ・ヘラケズリで仕上げる。底は焼成後に穿孔されている。これらの土器のうち、302と303は中期前半（Ⅲ－２期）のものであるが、306は中期後半（Ⅳ－１期）まで下がるものである。

SX05出土土器（307～325）

SX05の周溝内からは壺・甕・鉢が出土している。307～310は広口壺である。307は拡張した口縁端面に凹線文を施し、内面には扇状文を施す。308は口縁端部を垂下させ、端面には凹線を施し円形浮文を貼付する。内面には波状文を施し、２個一対の紐孔をあける。頸部には凹線文を２条施す。309は頸部に圧痕文突帯を巡らせる。口縁端部を拡張し、凹線文を施した後に２個１単位の円形浮文を貼付する。310は頸部に３条の凹線文を施す。311は小型の直口壺であり、体部外面をハケで仕上げる。312は水差形土器であり、口縁部と頸部に凹線文を施す。313・314は壺の底部である。315は頸部に圧痕文突帯を巡らせた大型の受け口口縁をもつ壺である。316は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。

317～322は甕である。317は口縁部に３個１単位の押圧を加える。内面は板ナデで仕上げる。318は肥厚させた口縁端面に羽状文を施す。320は口縁端部をつまみ上げたものであり、タタキ成形の痕跡が認められる。外面はハケでタタキ目を消しており、下半部はヘラミガキが施される。内面は約2/3の範囲にヘラケズリが施される。321・322は大型の甕であり、322は口縁部に押圧を加える。323は台付鉢である。凹線文５条・直線文・波状文・円形浮文・凹線文３条を外面に施す加飾の豊かなものであり、脚部から底部にかけては丁寧にヘラミガキが施される。脚部内面は全面にわたりヘラケズリが施される。

324は脚部であり、外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリで仕上げる。325は台付鉢である。脚部には3段に分けてヘラ描沈線が施され、裾部には棒状の工具で5方向に縦方向の切り目が入り、その周囲に刺突により環状に小孔を巡らせる。これらの切り目と小孔はいずれも貫通していない。これらの土器は中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SX06出土土器（326～328）

SX06からは甕が出土している。326は底部である。327は3個1単位の押圧を口縁部に施し、口縁部内面及び体部内外面にハケを施す。328も口縁部に押圧を加える甕であり、327同様口縁部内面にハケを施し、体部内外面をハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

SX07出土土器（329～333）

SX07からは壺と甕が出土している。329は口縁部を下方に垂下させた広口壺である。端面には刻みを施す。330は上下に拡張した口縁部の端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼付する広口壺である。内面には扇状文を施す。331は広口壺の体部であり、外面を斜格子文・櫛描直線文・斜格子文・直線文・扇状文で飾る。332は口縁部端をつまみあげた甕であり、口縁部に押圧を加える。333も口縁部に押圧を加えた甕である。内外面ともにハケで仕上げるが、内面の一部にヘラケズリが認められる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）から中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SX09出土土器（334～346）

SX09からは壺・甕・高杯が出土している。334～337は広口壺である。334は口縁部を拡張し端面に凹線文を施し円形浮文を貼付する。内面には扇状文を施す。頸部には直線文と波状文を施す。335は垂下させた口縁部の端面に凹線文を施し、その上から縦方向の沈線を施す。内面には波状文と扇状文を施す。頸部には凹線文が施される。336は拡張した口縁端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼付する。口縁部内面には波状文が施され、頸部には凹線文が施される。337は上下に拡張した口縁端面に凹線文を施し、頸部にも凹線文を施す。

338は内傾する頸部をもつ広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、端面には凹線文を施し、さらに縦方向の沈線を施す。体部には粗い波状文と直線文を施す。339は外面を凹線文で飾る直口壺である。体部外面には櫛描の直線文を波状文が施される。340は一対の把手がついた壺である。口縁部は上下に拡張し、端面には凹線文を施し、円形浮文を貼付する。体部下半部はヘラミガキで仕上げ、底部内面はヘラケズリで仕上げる。341～345は甕である。341・342は口縁部内面にハケを施すものであり、体部は内外面ともにハケで仕上げる。343・344は口縁端部を上方へつまみ上げた甕である。344は拡張した端面に凹線を施す。345は大型のものであり、拡張した口縁端面に凹線文を施す。体部外面はハケで仕上げる。346は高杯である。裾部に円形の透かし孔をあける。

これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SP01出土土器（347）

347は土器棺として使用されていた壺である。上半部を欠く広口壺である。外面はハケを施した後に下半部をヘラミガキで仕上げている。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SP02出土土器（348）

348は土器棺として使用されていた壺である。口縁部を欠く。底部は突出し、外面は摩滅のため不明瞭ではあるがヘラミガキで仕上げている。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

SK01出土土器（349～356）

甕・高杯・器台が出土している。349は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す。外面はハケ、内面は口縁部の下までヘラケズリを施す。350はタタキ成形の甕であり、口縁部を拡張し端面に凹線文を施す。351も口縁部を拡張し端面に凹線文を施し、内面は口縁部の下までヘラケズリを施す。352は高杯の杯部、353は脚部である。354・355は外面に凹線文を施した脚部であり、355は内面をヘラケズリで仕上げている。356は器台であり、外面に凹線文を施し、円形の透かし孔をあける。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）でも新しい様相を示すものである。

SK02出土土器（357・358）

357･358は頸部のしまりが弱い甕である。358は口縁端部を上方につまみあげる。中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK06出土土器（359・360）

壺と甕が出土している。359は口縁部を垂下させ広口壺である。端面には凹線文を施し、その上に縦方向に沈線を刻む。内面には櫛描波状文を施す。360は甕である。これらの土器は中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK23出土土器（361～363）

壺と甕が出土している。361は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。口縁部は下方に垂下させ、内面に扇状文を施す。体部には櫛描の波状文と直線文を交互に施す。362は口縁部を拡張し、端面に凹線文を施した広口壺である。体部に２段に列点文を施す。外面はヘラミガキで仕上げ、内面の底部付近にヘラケズリを施す。363は内面にヘラケズリを施す大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SD02出土土器（364・365）

壺が出土している。364は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺であり、垂下させた口縁部端面に凹線文を施し、その上から刻みを加え、２列１単位で小さな円形浮文３個を連続させて貼付する。内面には突帯を巡らせる。365は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）の初頭のものである。

SD03出土土器（366～372）

甕・鉢・高杯が出土している。366は口縁部を上方に拡張し端面に擬凹線を施した甕である。367は口縁部を上方に拡張した複合口縁の甕であり、タタキ成形のものである。368は口縁端部を上方に拡張した甕であり、端面には擬凹線を施す。369は有孔鉢である。370は小型の鉢である。371は鉢の底部である。372は高杯の脚部である。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１期古段階）のものである。

SD04出土土器（373）

373は口縁部端を拡張し、端面に凹線文を施した壺である。内面には櫛描の波状文と扇状文を施す。中期後半（Ⅳ期）のものである。

SD05出土土器（374～381）

壺・甕・高杯が出土している。374は頸部に圧痕文突帯を巡らせた直口壺である。375は大きく外側に開く口縁部をもつ壺である。口縁部端面に凹線文を施す。376は口縁端面に凹線文を施した壺である。377は大型の広口壺である。内外面ともにハケで仕上げる。378は口縁部内面にハケを施した甕である。内面は板ナデで仕上げる。379は口縁端部をわずかにつまみ上げた甕である。内面はヘラケズリで仕上げる。380は口縁部端面に凹線文を施し、体部に列点文を施す甕である。内面はハケを施した後に、ヘ

ラケズリで仕上げる。381は口縁部直下に凹線文を施した高杯である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SR02出土土器（382～385）

壺が出土している。382は頸部に圧痕文突帯を巡らせた壺である。383も頸部に圧痕文突帯を巡らせるが、口縁部端面に凹線文を施す。384は口縁部を垂下させ端面に凹線文を施し、円形浮文を貼付した広口壺である。頸部には凹線文を施す。385は壺の底部である。内縁をヘラケズリで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

４．Ｄ地区出土土器

SK03出土土器（397）

397は外面に凹線文を施した高杯である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK07出土土器（398～400）

壺・甕が出土している。398は口縁部を上方に拡張し、端面に櫛描波状文を施した広口壺である。399は甕であり、400は壺もしくは甕の底部である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK12出土土器（402～405）

壺・甕・鉢が出土している。402は外面に凹線文を施した直口壺である。403は外面に凹線文を施した鉢である。404は壺の底部である。外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。405は口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文を施した甕である。外面をハケ、内面を板ナデで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK26出土土器（406）

406は壺である。外面には稚拙な櫛描波状文・直線文を交互に施す。体部内面は中位以下をヘラケズリで仕上げる。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK30出土土器（407～418）

壺・鉢・高杯が出土している。407は口縁部がまっすぐ上方に伸びる直口壺である。外面には凹線文を施す。408は直口壺に把手を付けた水差形土器である。口縁部には凹線文を施し、体部には列点文が２段に施される。409も把手が付いた水差形土器である。外面はハケを施した後に下半部をヘラミガキで仕上げ、内面はヘラケズリで仕上げる。410は小型の短頸壺である。外面に列点文を施す。411は扁平な体部をもつ細頸壺である。内外面ともに体部中位にヘラミガキを施す。412は台付の水差形土器である。算盤玉形の体部に凹線文を施し、肩部に把手を付したものであり、脚部から底部にかけてヘラミガキで仕上げる。413は口縁部端面にハケ状工具の押圧によって刻みを施した甕である。内面はヘラケズリで仕上げる。414は短く外反する口縁部を持った鉢に脚を付けたものである。内外面ともにヘラミガキで丁寧に仕上げられている。

415は外面に凹線文を施した高杯である。416は脚付の鉢もしくは壺である。脚部の外面を丁寧にヘラミガキする。417は杯部外面に凹線文を施した高杯である。脚部はヘラ描の沈線で飾り、裾部には円孔をあける。418は大型の台付鉢である。脚部内面をヘラケズリする。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SD04出土土器（426～428）

426は口縁部に凹線文を施した水差形土器である。427は口縁部を上方に拡張した甕である。428は脚部をヘラ描沈線で飾り、内面をヘラケズリした高杯である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SR02出土土器（429）

429は丸底の壺である。古墳時代前期のものである。

包含層出土土器（430）

430は口縁部に突帯を貼付け、刻みを施した縄文時代晩期の深鉢である。

５．Ｅ地区出土土器

SX01出土土器（432～435）

SX01の周溝内からは壺と甕が出土している。432は頸部に凹線文を施す広口長頸壺である。口縁部は下方に大きく拡張し、端面に凹線文を施した後に、縦方向の沈線を刻む。内面には櫛描波状文を施す。体部上半には櫛描の直線文と波状文を交互に施す。底部外面はヘラミガキで仕上げ、内面は底部付近をヘラケズリで仕上げる。433は壺の底部である。外面をヘラミガキで、内面をヘラケズリで仕上げる。434は口縁端部を上方に拡張する甕である。底部内面をヘラケズリで仕上げる。435も口縁部端を上方につまみあげる甕である。内外面ともにハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX01・02間出土土器（436～439）

SX01・02の周溝共有部分から出土した土器であり、どちらの周溝墓に帰属するものか確定できないものである。甕が出土している。436は口縁部を上方に拡張し、端面に凹線文を施す甕である。437も口縁端部をつまみあげる甕である。底部も出土しているが、体部の大部分を欠くため正確な器高は不明である。438も口縁端部をつまみあげる甕である。439は甕の底部である。内面をヘラケズリで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期～Ⅳ－２期）のものである。

SX02出土土器（440～443）

SX02の周溝内からは壺と甕が出土している。440は短い頸部に大きく外反する口縁部がついた広口壺である。口縁部内面には櫛の刺突による文様が施される。体部には櫛描の波状文と直線文が交互に施される。441は口縁部に押圧を施す甕である。内外面ともにハケで仕上げる。442は口縁部端を上方に拡張する甕である。底部内面をヘラケズリで仕上げる。443は大型の甕である。体部下半部の外面を幅の広いヘラミガキで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）から後半（Ⅳ－１期）のものである。

SX03出土土器（444～447）

SX03に周溝内からは壺と水差形土器が出土している。444は壺の体部である。摩滅のため不明瞭であるが、外面にヘラミガキが認められる。445は体部に櫛描直線文と波状文を交互に施す壺の体部である。底部内面をヘラケズリで仕上げる。446は体部に櫛描波状文と直線文を交互に施す広口壺である。口縁部を上下に拡張し、端面に凹線文を施し、その上に円形浮文を貼りつける。内面には櫛による列点文を施す。447は小型の水差形土器である。肩部に把手を付ける。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SX04出土土器（448～452）

SX04の周溝内からは甕と壺が出土している。448は単純なくの字形の口縁をもつ甕である。体部内面の中位付近から下をヘラケズリで仕上げる。449は球形の体部に短く外反する口縁部をもつ壺である。体部外面は細かなハケで仕上げ、底部付近にヘラミガキを施す。体部内面は底部付近にヘラケズリを施す。450は頸部に刻み目を施した断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。451は口縁端部を肥厚させた甕である。452は大型の甕である。底部内面付近をヘラケズリで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SX08出土土器（453～456）

SX08の周溝内からは甕が出土している。453は口縁端部を上方に拡張し、刻みを施した甕である。体部内面の底部付近をヘラケズリで仕上げる。454も口縁部端を上方に拡張する甕である。底部内面をヘラケズリする。455は口縁端部を肥厚させた甕である。これも底部内面をヘラケズリする。456も口縁端部を肥厚させた甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SX09出土土器（457～464）

SX09の周溝内からは壺･甕･高杯が出土している。457は直口壺である。口縁端部を内面に肥厚させる。458は口縁部端面にヘラ描の平行線を刻み、円形浮文を貼りつけた広口壺である。459は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。460・461は甕である。461は口縁端面に押圧を加える。463は壺の底部である。464は水平口縁の高杯である。口縁端部を垂下させる。これらの土器は中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

SX10出土土器（465～473）

SX10の周溝内からは壺・甕・鉢が出土している。465は口縁端部を上方に拡張し端面に凹線文を施す壺である。頸部にも凹線文を巡らせる。466は広口壺の口縁部である。467はゆるやかに外反する口縁部をもつ広口壺である。468は口縁部端面に刻みを施し、内面に竹管文を施す広口壺である。頸部には櫛描直線文を施す。469は壺の底部である。470・471は甕である。471は口縁部内面に横方向のハケを施す。473は口縁部に3条の刻み目突帯を巡らせた鉢である。これらの土器のうち、465のみ中期後半（Ⅳ期）のものであり、他は全て中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

SX20出土土器（474～481）

SX20の周溝内からは壺・甕が出土している。474は直立する短い頸部に強く屈曲する口縁部がついた壺である。475は頸部に圧痕文突帯を巡らせた直口壺である。476は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁部端面には沈線を施す。477は頸部に櫛描直線文を施した広口壺である。478は口縁部を下方に屈曲させ、頸部に櫛描直線文を施した広口壺である。479～481は甕である。479は口縁部の下を強いヨコナデで仕上げている。480・481は大型の甕であり、口縁端部を肥厚させる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

SK09出土土器（497～500）

甕及び底部が出土している。497・500は底部である。498は短い口縁部が付く甕である。499は口縁部の下に櫛描直線文を施す甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅱ期～Ⅲ期）のものである。

SK10出土土器（501～502）

甕が出土している。501は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す甕である。502は口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文を施す甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

SK21出土土器（503）

503は口縁部下に櫛描直線文を施す甕である。中期前半（Ⅱ期）のものである。

SK25出土土器（504～508）

壺・甕・鉢が出土している。504は口縁部に2条の刻み目を施した断面三角形突帯を巡らせた直口壺である。505は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁端部を拡張し、端面に凹線文を施し、その上に縦方向に沈線を刻む。506は口縁部に押圧を加えた甕である。507は口縁部端を上方につまみあげた甕である。508は口縁部が内湾する鉢である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）から中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SK35出土土器（509・510）

509は口縁端部を上方につまみあげた大型の甕である。510は底部である。これらの土器は弥生時代中期前半～後半（Ⅲ－2期～Ⅳ－1期）のものである。

SK36出土土器（511・512）

511は短い口縁部をもつ大型の甕、512は底部である。これらの土器は弥生時代中期前半～後半（Ⅲ－2期～Ⅳ－1期）のものである。

SK27出土土器（513）

513は口縁端部を下方に拡張し、凹線文を施した広口壺である。

SD13出土土器（528・529）

鉢と壺が出土している。528は口縁部と体部に刻み目を施した3条の断面三角形を貼りつけ、その間に竹管文を施した鉢である。口縁部に2個一対の紐孔をあける。529は口縁部と体部に櫛描波状文を施した壺である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD22出土土器（530・531）

壺と高杯が出土している。530は口縁部に凹線文を施した直口壺である。531は内面をヘラケズリした高杯の脚部である。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

SD21出土土器（532）

532は頸部から体部にかけて櫛描直線文と波状文を交互に施した広口壺である。口縁部は上下に拡張し、端面に凹線文を施す。口縁部内面には櫛描波状文を施す。弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）のものである。

SR01出土土器（533～586）

壺・甕・鉢・高杯などが出土している。533は楕円形のつまみが付いた壺蓋である。外面に櫛描直線文を施し、2個一対の紐孔をあける。534は口縁端部を玉縁状に丸めた壺である。口縁部下に円孔を穿つ。535・536は壺の底部である。537は断面三角形突帯、棒状浮文、櫛描簾状文で飾った鉢である。538は無頸壺である。口縁部に2個一対の紐孔をあける。外面をヘラミガキで仕上げる。539～544は頸部に凹線文を施す広口壺である。539は口縁部端面に1条の凹線文を施し、内面に櫛描波状文と扇状文を施す。540は口縁端部を上下に拡張して、凹線文を施す。内面には櫛描波状文を施す。541も口縁部端面に凹線文を施す。542は口縁端面に施された凹線文の上に円形浮文を貼りつける。543は口縁部を下方に拡張し、端面を列点文、櫛描波状文、円形浮文で飾る広口壺である。頸部には断面三角形突帯を巡らせ、口縁部内面には櫛で羽状文を施す。

544は口縁端面と頸部に凹線文を施す広口壺である。頸部には櫛による列点文を施す。545も広口壺

である。546は口縁部に凹線文を施した受け口口縁の壺である。口縁部端面に凹線文を施し、頸部には圧痕文突帯を施す。547は肩部の2カ所に環状の把手を付けた直口壺である。口縁部外面を縦方向のハケで仕上げる。548は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。口縁部は端部を拡張し、端面に竹管文を施し、内面にも2列に竹管文を施す。549は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁部を上下に拡張し、凹線文を施した後に、縦方向の沈線を刻み、4個1単位の円形浮文と3本1単位の棒状浮文を貼付する。口縁部内面には外側に櫛描波状文を、内側に扇状文を施す。550は頸部に凹線文を施した広口壺である。頸胴部境には櫛描直線文を施す。口縁部は上下に拡張し、端面に凹線文を施し、その上に円形浮文と棒状浮文を貼付する。口縁部内面には外側に櫛描波状文を、内側に扇状文を施す。

551は頸部に凹線文を施した広口壺である。口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼付する。内面には櫛描波状文を二重に巡らせる。552は体部上半に櫛描波状文と直線文を交互に施した広口壺である。口縁部は端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す。553は台付の壺である。口縁部を欠くため全形は不明であるが、体部と脚部は一体に作られており、円盤状の粘土を充填して底部を作る。体部外面下半はヘラミガキが施される。台部は裾端部を拡張し、端面に凹線文を施す。内面はヘラケズリで仕上げる。554は口縁部に凹線文を施した直口壺である。口縁部端面にも凹線文を施す。体部外面はハケを施した後に、下半部をヘラミガキで仕上げる。体部内面はハケを施した後に、下半部をヘラケズリで仕上げる。555は体部上半に櫛描直線文と波状文を交互に施した壺である。口縁部を欠くが広口壺である。体部外面下半部にヘラミガキを施す。内面は下半部を縦方向にヘラケズリする。556は壺の体部である。残存部分が少ないため、プロポーションの復元に問題がある可能性があるが、体部上半に直線文と波状文を施す広口壺であろう。体部外面下半をヘラミガキで仕上げ、内面下半をヘラケズリで仕上げる。

557は口縁端部を拡張し端面に凹線文を施す甕である。体部内外面ともにハケで仕上げる。558は受け口状口縁をもつ近江型の甕である。内外面ともに粗いハケで仕上げられ、口縁部内面には口縁端部付近に刻み目を施し、その下に刺突列点文を施す。近江からの搬入品であろう。559は口縁端面に刻みを施し、体部外面に櫛描直線文を施した甕である。560はくの字形の口縁部をもつ甕である。561は口縁端部を拡張し凹線文を施した甕である。体部外面はハケで仕上げる。562も口縁端部を拡張し、端面に凹線文を施した甕である。体部には列点文を施す。563は口縁端部を上方に拡張する甕である。体部外面にはタタキの痕跡が認められる。内面は中位まで縦方向のヘラケズリが施される。564は口縁部を上下に拡張した甕である。565はくの字形の口縁部をもつ甕である。566は頸部に圧痕文突帯を巡らせた短頸壺である。口縁部端面には櫛による列点文を施す。口縁部内面は横方向のハケで仕上げる。567も頸部に圧痕文突帯を巡らせた短頸壺である。

568は体部外面に横方向のハケを施す大型の甕である。内面は中位まで縦方向のヘラケズリを施す。569は甕の蓋である。570はわずかに上げ底になった壺である。571は内面を板ナデで仕上げる鉢である。572が外面に凹線文を施した台付鉢である。鉢部と脚部は一体に作られており、円盤状の粘土を充填して底をふさぐ。脚部には円形の透孔をあける。573は口縁部に凹線文を施し、円孔をあけた無頸壺である。574は口縁部を内側に折り曲げた鉢である。口縁部付近に凹線を施し、2個1対の紐孔をあける。575は台付鉢の脚部である。鉢部と脚部は一体に作った後に、底部を円盤充填させる。脚部には円形の透かし孔があく。内面は横方向にヘラケズリで仕上げる。576は水平口縁をもつ高杯である。拡張した端面には凹線文施す。577は外面に櫛描は櫛描波状文を施す高杯である。578は水平口縁を持つ高杯である。

内外面ともにハケで仕上げる。579も水平口縁の高杯である。口縁部は下方に拡張している。脚部外面にはヘラ描きの沈線を施す。内面はヘラケズリで仕上げる。

580は断面三角形突帯を巡らせる脚部である。581は台付鉢の脚部である。外面に凹線文を施す。582は裾部に孔を穿つ脚部である。外面を赤色顔料で着色する。583は小円孔・三角形刺突文・櫛描の斜線文・三角形刺突文で飾った脚部である。584は脚部である。外面にヘラ描の沈線を施す。585・586は土器片を転用した紡錘車 である。土器編を円盤状に打ち欠き、中心に孔をあける。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）初めのものが大半をしめるが、その前後（Ⅲ～Ⅳ－2期）のものも若干含む。

SR02出土土器（587～591）

壺・甕・高杯が出土している。587は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施した広口壺である。588は口縁部を上方に拡張し、端面に凹線文を施した広口壺である。589は短い口縁をもつ甕である。590はタタキ成形した甕の底部である。591は高杯の脚部である。これらの土器は弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ期）のものである。

土器棺（597）

597は土器棺として使用されていた受け口口縁の壺である。口縁部には櫛描波状文を施し、その下の屈曲部には凹線文を施す。体部には櫛描で簾状文・波状文。直線文・波状文・直線文・波状文の順に施す。特徴的なのは成形・調整の工程である。体部は全体にハケを施すが、一部にハケの上からタタキを施した痕跡が認められる。調整の最終段階に器形の修正のためにタタキを加えたのであろう。体部下半にはハケを施す前にヘラケズリが施されている。これらから、ヘラケズリによる器形の成形→ハケによる器面の調整→タタキによる器形の矯正→施文という工程が想定できる。弥生時代中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

包含層出土土器（592～598）

592は口縁端部を拡張し、端面に凹線文を施す広口壺である。593は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。594は口縁部に刻み目を施す突帯を付加した広口壺である。口縁部には櫛描波状文を施し、頸部にも櫛描波状文を施すが、頸部の波状文は途中に扇状文を挿入することにより、流水文風の文様となっている。595は短い口縁部をもつ甕であり、596は蓋である。598は小型の広口壺である。

6．F地区出土土器

SH01出土土器（600・601）

甕と高杯が出土している。600はくの字形の口縁をもつタタキ成形の甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリしている。601は椀形の杯部をもつ高杯である。脚裾部に円形の透かし孔をあける。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－2期古段階）のものである。

SH02出土土器（602）

602は単純なくの字形の口縁部をもつ甕である。内面にハケ目が認められる。弥生時代中期末（Ⅳ－2期）のものである。

SB04出土土器（603）

603は口縁部と頸部に櫛描直線文を施し、口縁端部に刻み目を施した広口壺である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

P45出土土器（606）

606は口縁部を外反させた広口壺である。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

P55出土土器（607～609）

壺と甕が出土している。607はふくらみを持った口縁部に凹線文を施した直口壺である。608は口縁部端をつまみあげ、端面に擬凹線を施した甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。609は短い口縁部をもつ甕である。これらの土器のうち、607は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものであり、608は終末期（Ⅵ－１期古段階）のものである。

SK11出土土器（612～616）

壺と甕が出土している。いずれの土器も砂粒を多く含んだ粗い胎土で作られている。612は口縁部端面に沈線を施し、その上にヘラで縦方向の刻みを施した広口壺である。内面は横方向にヘラミガキを施す。613は口縁部端面と内面に櫛描波状文を施した広口壺である。614はわずかにふくらみを持った倒鐘形の体部に短く外反する口縁部がついた甕である。口縁端部に刻みを施し、体部には櫛描直線文を施す。615は体部からゆるやかに外反する口縁部がついた甕である。これも口縁端部に刻みを施し、体部に櫛描直線文を施す。616は壺の底部である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅱ－２期）のものである。

SK12出土土器（617）

617は頸部に３条の断面三角形突帯を巡らせる広口壺である。口縁端面の下側に棒状工具の押圧を加えている。この押圧は本来上側にもあった可能性がある。この土器は弥生時代中期前半（Ⅱ－２期）のものである。

SK15出土土器（618～620）

618は無頸壺である。口縁端部を拡張する。619は内外面をハケで仕上げた甕である。口縁部内面にも横方向のハケが施される。620は壺の底部である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SD03出土土器（624）

624は椀形の杯部をもつ高杯である。弥生時代終末期のものである。

SD12出土土器（648）

648は壺の底部である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものであろう。

SR01第Ⅳ層出土土器（649～655）

旧河道SR01の最下層の砂礫層中から出土した土器である。649は扁平な体部に短い頸がついた小型の広口壺である。口縁端部を拡張し、端面には櫛描直線文を施した後に竹管文を施し、内面にも櫛描波状文を施す。体部上半には櫛描波状文と直線文を交互に施す。650は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。651はなで肩の体部に直立する頸がついた長頸壺である。外面は全面をハケで仕上げる。652は口縁部に擬凹線を施した直口壺である。頸部には擬凹線の原体でつけた直線文が巡る。体部は外面をハケで、内面をヘラケズリで仕上げる。653は口縁端部を拡張し端面に凹線文を施した甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。654は大型の甕である。655は高杯の脚部であり、外面を２段の平行沈線帯で飾り、内面をヘラケズリで仕上げている。これらの土器は、650・654が弥生時代中期前半（Ⅲ期）、651・652・653・655が弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）～後期前半（Ⅴ－２期）のものである。

SR01第Ⅲ層出土土器（656～706）

旧河道SR01の東側肩部からは弥生時代終末期の多くの土器がまとまって出土している。656～665は

壺である。656は口縁部を上方に拡張した複合口縁をもつ小型の壺である。口縁部の下側には2個一対の紐通しの孔があく。657は口縁部を大きく上方に拡張し端面に擬凹線を施した小型の壺である。658は甕の底部である。659は扁球形の体部に直立気味に立ち上がった口縁部がつく小型の壺である。660は球形の体部に三角錐形の脚部が付いた壺である。外面をヘラミガキで丁寧に仕上げた精製品である。661は口縁部を上方に拡張した甕である。内面はヘラケズリを施す。662は口縁端部を上方に拡張し、受け口口縁とした広口壺である。663は無花果形の体部に直立する長い頸がついた長頸壺である。外面はハケで仕上げられているが、タタキ目が残る。口縁部は縦方向のヘラミガキが施される。664は粗製の壺である。内外面をハケで仕上げるが、タタキ目や粘土紐接合痕が残り、全面にユビオサエによる指頭圧痕が残る。665は短い口縁部がつく広口短頸壺である。内外面に指頭圧痕が多く残る。

666～684は甕である。666は口縁部を拡張した小型の甕である。内面はヘラケズリで仕上げる。667はタタキ成形の甕の底部である。668も甕の底部である。669は口縁部を肥厚させた甕である。体部内面をヘラケズリで仕上げる。670はタタキ成形の甕である。内面はナデで仕上げる。671は口縁部を上方に拡張した甕である。外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。672は口縁部を大きく上方に拡張し、端面に擬凹線を施した甕である。外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。673は口縁端部を拡張し擬凹線を施した甕である。674は口縁部に凹線文を施す。675・676はくの字形口縁の甕であり、内面をヘラケズリで仕上げる。677は口縁端部を上方に拡張し、端面に擬凹線を施した甕である。肩部に列点文を施す。内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。678は口縁部端面に擬凹線を施した甕である。外面はハケで仕上げるが、タタキ目がわずかに残る。内面はヘラケズリする。679は口縁部を上方に拡張したハケ仕上げの甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。680も口縁部を拡張した甕である。681は拡張した口縁部端面に凹線文を施した大型の甕である。外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。682・683は口縁部を上方に拡張したハケ仕上げの甕であり、内面をヘラケズリで仕上げる。684は口縁端部を下方に拡張し、端面に擬凹線を施した大型の甕である。外面はハケで仕上げており、内面にはヘラケズリを施す。

685～695は鉢である。685はわずかに口縁を作り出した小型のミニチュア鉢である。686は内外面をヘラミガキした小型の鉢である。687は口縁部を大きく拡張した複合口縁の鉢である。口縁部端面には擬凹線を施す。内外面ともに丁寧な横方向のヘラミガキを施す。688は小型丸底鉢である。粘土紐接合痕や指頭圧痕が残る作りの粗いものである。689は平底の鉢である。外面はハケをナデ消しており、内面は細かなハケで仕上げる。690は有孔鉢である。691は椀形の鉢に脚台がつく台付鉢である。摩滅のため調整は不明である。693はタタキ成形の有孔鉢である。694も有孔鉢である。内面をヘラケズリする。695は口縁部を拡張し擬凹線を施した鉢である。底部付近にタタキ目が残る。

696～706は器台と高杯である。696はゆるやかに外反する口縁部をもつ高杯である。口縁部端面に擬凹線を施し、内面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。697は裾部が大きく広がる高杯脚部であり、外面に細線ヘラミガキを施す精製品である。698も同様の高杯脚部であるが、作りは粗い。699は細身の筒部に伏鉢形の裾部がついた高杯脚部である。外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで仕上げる。700は受け部の口縁端部を上下に拡張し外面に擬凹線を施す器台である。筒部はゆるやかに裾に向かって開き、裾部には円孔をあける。701は複合口縁をもつ高杯である。口縁部端面には擬凹線を施す。杯部と脚部は一体成形であり、底部に円盤充填する。702も複合口縁をもつ高杯であるが、脚部は中実であり、杯部と脚部を別々に成形後に接合している。口縁部端面には擬凹線を施し、杯部から脚部にかけてヘラミ

ガキを施す。703は屈曲して外反する杯部をもつ高杯である。脚部は中実である。内外面ともにヘラミガキで丁寧に仕上げる。704は複合口縁の器台である。受け部の内外面をヘラミガキで仕上げる。705は受け部を欠く器台である。706は口縁部を拡張し擬凹線を施す器台である。

以上の土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１～２期）のものである。

７．Ｈ地区出土土器

SH01出土土器（795・796）

壺と甕が出土している。795は口縁端部を拡張し、端面に縦方向の沈線を施した広口壺である。796は内面を板ナデで仕上げる甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

８．Ｊ地区出土土器

SK01出土土器（800・801）

甕が出土している。800は張りの少ない体部に短く屈曲する口縁がついた甕である。口縁端部は丸くおさめる。801は大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK02出土土器（802・803）

802・803はいずれも頸部が締まった体部に端部を肥厚させた口縁部がつく甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK06出土土器（804・805）

804は広口壺の口縁である。口縁端部に強いヨコナデを加えており、端面がわずかにくぼむ。口縁部には横方向のハケを施す。805は口縁部を水平に折り曲げた高杯の杯部である。内外面ともにハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK07出土土器（806）

806は頸部の締まりが弱い体部に端部を肥厚させた口縁部がつく甕である。口縁部内面に横方向のハケを施す。弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK10出土土器（807・808）

807は口縁端部を上方につまみあげた甕である。口縁部全体に強いヨコナデを加える。808はミニチュアの鉢である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK11出土土器（809～814）

809は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、強いヨコナデを加える。810は口縁端部の下面に刻みを施した広口壺である。811は口縁端部を上方につまみ上げた甕である。端部に強いヨコナデを加えているため、凹線文状の沈線が巡る。812は口縁端部を下方に拡張し、２段に刻み目を施した広口壺である。口縁直下に２個一対の紐孔をあける。頸部には櫛描直線文を施す。813は甕の底部である。内外面ともにハケで仕上げる。814は裾が広がる脚部である。外面をヘラミガキで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK13出土土器（815～821）

壺と甕が出土している。815は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。816は壺の底部である。817は口縁端部をわずかにつまみあげた甕である。818は頸部のしまりが弱い甕であり、内面にヘラケズリを施す。819は口縁端部を上方につまみ上げ、端面に凹線文を施した甕である。820・821はくの字

形の口縁がつく甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものであるが、819は凹線文が採用されていることから、中期後半への過渡期のものである。

SD01出土土器（822～826）

822は口縁端部を上方に拡張し、端面に擬凹線を施す広口壺である。823は口縁部を上方に拡張して、端面に擬凹線を施す甕である。内面は頸部までヘラケズリを施す。824はタタキ成形の鉢である。825はタタキ成形の甕であり、底部付近の外面はハケで仕上げる。826は口縁端部を拡張し擬凹線を施す甕である。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

SD03出土土器（827～830）

827は広口壺の口縁部である。口縁部付近に強いヨコナデを施す。828は直口壺である。内外面ともにハケで仕上げる。829は内外面をハケで仕上げる甕である。830は大型の甕であり、内外面ともにハケで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SD05出土土器（831・832）

831は口縁部付近に２条の刻み目を施した断面三角形突帯を巡らせた鉢である。口縁部にも刻みを施す。832は短い口縁部をもつ甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

包含層出土土器（833・834）

833は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁端部に刻み目を施した直口壺である。口縁部・体部ともにハケで仕上げる。834は口縁端部をつまみ上げた甕である。内面を板ナデで仕上げる。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

９．Ｋ地区出土土器

P19出土土器（835）

835はくの字形の口縁をもつ甕である。口縁端部をわずかに肥厚させる。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

P23出土土器（836）

836は底部付近をわずかにヘラケズリする甕の底部である。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

P24出土土器（837）

837は外面にハケを施す壺の底部である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK01出土土器（838～840）

838は口縁端部をわずかにつまみ上げる甕である。内外面ともにハケで仕上げる。839・840は大型の甕である。口縁部内面に横方向のハケを施す。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK04出土土器（841）

841は口縁部を強くヨコナデし、口縁端部を拡張した甕である。内外面ともにハケで仕上げる。弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK12出土土器（842）

842は口縁端部を肥厚させた大型の甕である。口縁部内面に横方向にハケを施す。弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK19出土土器（843～848）

843は全面をハケで仕上げた無文の広口壺である。844は口縁部を拡張し端面にヘラ描の斜格子文を施した壺である。845は体部下半部にヘラミガキを施した甕である。846は内外面をハケで仕上げた壺の体部である。847は内外面をハケで仕上げた甕である。848は口縁部に押圧を施した甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SK25出土土器（849～857）

849は逆ハの字形に開く頸部に端部を拡張した口縁部がつく広口壺である。850は頸部に2条の断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。851は外面を太いヘラミガキで仕上げる甕である。852は口縁部に押圧を施した甕である。内外面ともにハケで仕上げる。853は口縁部端をわずかにつまみ上げた甕である。口縁部内面にも横方向のハケを施す。854は甕の底部である。855は丈の低いずんぐりした体部に短い口縁がついた壺である。口縁部内面に横方向のハケを施す。856は口縁部内面に突帯が巡る水平口縁の高杯である。857は高杯の脚部である。杯部と脚部は一体に成形されており、底部に円盤を充填する。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SK26出土土器（858～861）

858は内外面をハケで仕上げた壺の底部である。859は大型の甕である。860は大型の鉢であり、外面の中位付近にヘラミガキが認められる。861は大型の鉢である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD02出土土器（862～866）

862は頸部に断面三角形突帯を巡らせる壺である。口縁部はやや下方に垂れ、端面にはヘラで平行した2本の沈線を×字形に交差させた格子文を刻み、その上に2個1単位の円形浮文を貼付する。口縁部内面には横方向のハケが施される。863は大型の壺の底部である。864は口縁部に強いヨコナデを施した甕である。865は口縁端部に刻み目を施す甕である。口縁部内面に横方向のハケが施される。866は外反する長い口縁部がつく鉢である。内外面ともに板ナデで仕上げるが、外面には横方向のヘラミガキを施す。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

SD03出土土器（867～870）

867はつまみのついた蓋である。868は広口壺の口縁部である。869は口縁部を上方につまみ上げ、端面に1条の凹線を施した甕である。体部内面は下半部をヘラケズリする。870は大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）の初頭のものである。

SD04出土土器（871）

871は外面を粗いハケで仕上げた甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD09出土土器（872・873）

872は内外面をハケで仕上げた甕である。873は大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD11出土土器（874）

874は口縁端部を肥厚させ、ヨコナデを施す甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD12出土土器（875・876）

875・876は頸部が締まる甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）のものである。

包含層出土土器

877はくの字形の口端部をもつ大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のも

のである。

10. L地区出土土器

SX01出土土器（878～880）

878は細長い体部に短い頸部がつく広口壺である。口縁部内面には櫛描の扇状文が、体部には粗い櫛で稚拙な直線文と波状文が施される。この土器は黒褐色の特徴的な胎土をもち、他の土器とは全く異なる。いずれかの土地からの搬入品であろう。口縁部と底部は出土していないが、故意に壊したものかどうかは不明である。879は甕である。880は杯部外面に凹線文を施した高杯である。脚部と杯部は一体に作られており、底部に円盤を充填していた痕跡がある。脚部外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面は横方向にヘラケズリする。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）である。

SX02出土土器（881）

SX02内SP01に正位で埋められていた土器である。頸部に凹線文を巡らせ、上方に拡張した口縁部の端面には櫛描波状文を施した後に円形浮文を貼付する。体部には櫛描波状文と直線文を交互に施す。体部外面はヘラミガキで仕上げ、底部内面はヘラケズリが施される。焼成後に底部を穿孔している。この土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SX12出土土器（882～893）

882は拡張した口縁部の端面に凹線文を施した広口壺の口縁である。内面には櫛描の扇状文が施される。883は上下に拡張した口縁部の端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼付する広口壺の口縁部である。内面にも櫛描波状文を施す。884は頸部に断面三角形突帯を巡らせ、口縁部端面に円形浮文を貼付する広口壺である。口縁部内面には櫛描の扇状文を２重に施す。885は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁部端面には刻み目を施す。886･887は口縁部端面を上方につまみ上げた甕である。888は外面にヘラミガキを施す壺の底部である。889は甕である。890は口縁部に刻みを施し、体部に櫛描直線文を施す甕である。891は高杯の脚部であり、裾部内面をヘラケズリする。893も高杯の脚部である。裾部に小円孔を刺突によってあけ、内面をヘラケズリする。これらの土器は弥生時代中期前半～後半（Ⅱ期～Ⅳ－１期）のものである。

SX21出土土器（894～896）

894は口縁端部をつまみあげる甕である。895は壺の底部である。896は内面をヘラケズリする甕の底部であり、底部外面にハケが施されている。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK08出土土器（897）

897は口縁端部をつまみあげる甕である。弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）のものである。

SK09出土土器（898）

898はゆるやかに外反する口縁部をもつ甕である。体部に櫛描波状文が施される。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK10出土土器（899）

899は口縁端部を肥厚させた甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK11出土土器（900）

900は甕の底部である。内外面ともにハケで仕上げる。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものであろう。

SK14出土土器（901・902）

901は甕である。口縁部内面を横方向のハケで仕上げる。体部外面は全体をハケで仕上げるが、口縁

部直下と底部付近に横方向の板ナデを加えて、ハケ目をナデ消している。902は大型の甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK16出土土器（903）

903は球形の体部をもつ無頸壺である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK21出土土器（904）

904は甕の底部である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK23出土土器（905）

905は壺の体部である。外面に櫛描直線文と波状文を施す。弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ期）のものである。

SK26出土土器（906）

906は広口壺の口縁部である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK35出土土器（907～909）

907は口縁端部に押圧を加えた甕である。908は甕の底部であるが摩滅のため調整は不明である。909は口縁部端面に押圧を加える甕である。体部内面の底部付近にヘラケズリを加える。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SD04出土土器（910～912）

910はタタキ成形された甕もしくは壺の体部である。911は口縁端部を上方に拡張した甕である。912は口縁部に凹線を施した器台である。外面は全面にヘラミガキを施し、内面は受け部にヘラミガキを施す。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－２期古段階）のものである。

SD05出土土器（913～917）

913は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。914は口縁部端面に櫛描波状文を施した広口壺である。底部も同一個体であるが接点がないため、全形は不明である。915は口縁部に押圧を加えた倒鐘形の甕である。体部上半には櫛描波状文と直線文を交互に施す。916は底部裾が張り出した壺である。917は壺の底部である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅱ－２期）のものである。

SD06出土土器（918～930）

918は拡張した口縁端部に斜線を交互に加え格子文にする広口壺である。919は拡張した口縁部端面に凹線文を加え、内面に波状文を施す広口壺である。920は体部外面と口縁部内面に櫛描波状文を施した壺である。921は体部からゆるやかに外反する頸部がのび、短い口縁が付く壺である。口縁部は上下に拡張され、端面には櫛描波状文を施し、内面には櫛描直線文を施す。頸部から体部にかけては櫛描直線文・波状文を交互に施し、下半部はヘラミガキを施す。922は頸部に凹線文を施す壺である。口縁部は上下に拡張し端面に凹線文を施した後に、円形浮文と縦方向の沈線で飾る。口縁部内面には外側に櫛描波状文を、内側に櫛描の扇状文を施す。退部には櫛描直線文と波状文を交互に施す。体部下半は外側をヘラミガキで仕上げ、内側にはヘラケズリが施される。

923は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁端部を上下に拡張し、端面に細い凹線文を施し、その上から縦方向の沈線を刻み、上下３個２列１単位の円形浮文を貼付する。口縁部内側は、まず口縁端部上面に刻み目を施し、その内側に刻み目を施した突帯を巡らせ、さらにその内側に櫛描波状文を施す。頸部外面は縦方向のハケが施され、内面には横方向のヘラミガキが施される。体部は外面上半に櫛描直線文と波状文を交互に施し、下半部はヘラミガキで仕上げる。内面は全体をハケで仕上げる。

底部は焼成後に穿孔されている。924は口縁端部を拡張し凹線文を施した大型のタタキ成形の甕である。内面はヘラケズリの痕跡が確認できる。

925は口縁部に刻み目を施した甕である。926は口縁端部をつまみ上げ、端面に凹線文を施した甕である。927はタタキ成形の甕であり、口縁部までタタキで成形されている。928は口縁部に凹線文を施した甕である。外面にはタタキの痕跡が認められ、内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。929は甕の底部である。930は台付鉢の脚部であり、裾部には大きな円形の透かし孔をあける。これらの土器は弥生時代中期前半から後半（Ⅲ期～Ⅳ期）のものが大半を占めるが、927は弥生時代終末期（Ⅵ－２期）、928は弥生時代後期初頭（Ⅴ－１期）のものである。

SD07出土土器（931～934）

931は頸部に断面三角形突帯を巡らせる壺である。外面には櫛描波状文を施し、内面にも縦方向の櫛描波状文を施す。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。932・933は内外面ともに粗いハケで仕上げた甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。934はタタキ成形した甕の底部である。弥生時代後期～終末期（Ⅴ期～Ⅵ期）のものである。

SD08出土土器（935～938）

935は肩部に櫛描直線文の端を丸めた流水文風の文様を施した壺である。底部は焼成後に穿孔している。936は口縁部内面に横方向のハケ目を施した甕である。937は体部に波状文を施した甕である。938は口縁部に刻みを施し、体部に櫛描直線文を施した甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅱ期～Ⅲ期）のものである。

SD12出土土器（939・940）

939は口縁内面に櫛描波状文を施した広口壺の口縁部である。940も広口壺の口縁部である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SD13出土土器（941・942）

941は大型の甕の口縁部である。942は脚台である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SD15出土土器（943～945）

943は口縁端部を上方に拡張する広口壺の口縁である。944は口縁部を大きく拡張し、端面に擬凹線を施す複合口縁の鉢である。内面をヘラケズリする。945は台付鉢の脚部である。これらは弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものである。

SD01出土土器（958）

958は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施すタタキ成形の大型の甕である。弥生時代中期末～後期初頭（Ⅳ－２期～Ⅴ－１期）のものである。

11．Ｍ２地区出土土器

SK01出土土器（959）

959は底部である。内外面ともに板ナデで仕上げる。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK09出土土器（960～963）

960は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。961は甕である。962は短い口縁部がつく小型の甕である。963は大型の壺の底部である。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK19出土土器（964）

964は口縁部に圧痕文突帯を巡らせる直口壺である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK28出土土器（965・966）

965は壺の底部である。966は口縁部に刻み目を施した断面三角形突帯を貼り付け、その下に櫛描の直線文と波状文を施す無頸壺である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK30出土土器（967・968）

967は口縁部に刻みを施す広口壺である。968は壺の体部である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－1期）のものである。

SD01出土土器（969～974）

969は口縁部端面に櫛描直線文を施し、その上下に刻み目をつけた壺の口縁である。970は口縁部を拡張し端面に凹線文を施す広口壺である。971は口縁部端面に斜格子文を施した壺の口縁部である。972は壺の体部である。973・974は甕である。975は台付鉢の脚部である。底部には円盤を充填していた痕跡が残る。これらは弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ期）のものである。

SD15出土土器（976～979）

976は口縁端部をつまみあげた甕である。内面は口縁部下までヘラケズリを施す。977は単純なくの字形の口縁をもつ甕である。978は壺の体部である。979は高杯の脚部である。裾端面に凹線文を施す。これらは中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

12. M地区出土土器

SH01出土土器（989～999）

壺・甕・鉢・高杯が出土している。989は二重口縁広口壺の口縁部である。990はハケ調整の甕の底部である。991はタタキ成形の甕であり、内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。992もタタキ成形の甕である。内面は口縁部直下までヘラケズリを施す。993は高杯の脚部である。内面をヘラケズリする。994は低脚高杯である。995は精製の高杯の脚部であり、外面に細かいヘラミガキを施す。996は脚部である。997は低い脚台のつく鉢である。998は裾が広がる低い脚台のつくタタキ成形の鉢である。999は丸底の体部に直線的に立ち上がる口縁部がつく壺である。内面はヘラケズリを施す。これらの土器は弥生時代終末期末（Ⅵ－2期新段階）のものである。

SH02出土土器（1000～1001）

1000･1001は外反する口縁部がつく鉢である。1000は口縁部端面に擬凹線を施す。弥生時代後期末（Ⅴ－4期）のものである。

SH03出土土器（1002）

1002は下ぶくれな無花果形の体部に長い頸がつく長頸壺である。弥生時代後期末（Ⅴ－4期）のものである。

SH06出土土器（1003・1004）

1003は口縁部を上方に拡張した高杯である。内外面ともに丁寧にヘラミガキを施す精製品である。1004は甕の蓋である。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期）のものである。

SH07出土土器（1005）

1005は裾部端面に凹線文を施した脚である。内面はヘラケズリを施す。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SH08出土土器（1006～1011）

1006は複合口縁の甕である。1007は体部に波状文を施した甕である。1008は複合口縁の小型鉢である。1009はタタキ成形した有孔鉢である。1010は蓋である。1011は細頸壺の頸部である。これらのうち、1007は弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものであり、他は弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものである。

SH09出土土器（1012）

1012は口縁端部を上方に拡張し、端面に擬凹線を施したタタキ成形の甕である。弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものである。

SH05出土土器（1013～1024）

1013はタタキ成形の甕であり、内外面をハケで仕上げる。1015・1016は口縁端部を上方に拡張した甕である。1017はタタキ成形の甕であり、口縁部に押圧を施す。内面はヘラケズリで仕上げる。1018は口縁部を拡張した甕である。外面をハケで仕上げる。1019は壺の底部である。底面に木の葉の圧痕が残る。1020も壺の底部である。1021は低脚杯の杯部である。内外面ともにヘラミガキで仕上げる。1022は脚部である。1023・1024は受け部の口縁部を上方に拡張した器台である。1023は筒部外面をヘラケズリする。これらは弥生時代終末期（Ⅵ－２期古段階）のものである。

P202出土土器（1025～1026）

1025は口縁端部をつまみ上げ、端面に凹線文を施す甕である。1026は口縁部に刻みを施す鉢である。これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

P270出土土器（1027）

1027は口縁部端に刻みを施し、体部に櫛描直線文と波状文を施した甕である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SX03出土土器（1028）

1028は内外面をハケで仕上げ、口縁部内面にも横方向のハケを施す甕である。弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SX06出土土器（1029～1032）

1029は球形の体部に細くのびる頸がついた細頸壺である。頸部から体部上半にかけて櫛描波状文・直線文を施す。体部下半はヘラミガキを施す。1030は大型の壺の底部である。外面にヘラミガキが施される。1031は短い頸部に外反する口縁がつく広口壺である。体部外面には櫛描直線文・波状文が交互に施される。体部下半はヘラミガキで仕上げられ、内面は板ナデで仕上げる。1032もほぼ同じプロポーションの広口壺である。こちらは内面をハケ・ナデで仕上げる。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SX09出土土器（1033）

1033は口縁部に刻みを入れ、体部に櫛描直線文と波状文を施した甕である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SX11出土土器（1034）

1034は体部に櫛描直線文と波状文を施した小型の甕である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SX12出土土器（1035～1037）

1035は口縁部端面に上下２段ハの字形に刻みを施し、内面に櫛描波状文を施した広口壺である。1036は広口壺である。1037は体部に直線文と波状文を施した壺の体部である。これらの土器は弥生時

代中期前半（Ⅱ期～Ⅲ－１期）のものである。

SX13出土土器（1038～1039）

1038は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁部端面に斜格子文を施す広口壺である。1039は大型の甕である。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX14出土土器（1043～1047）

1043・1044は内外面をハケで仕上げる甕である。1045は短く外反する広口壺の口縁部である。1046は口縁部端面に刻みを施し、体部に櫛描波状文を施す甕である。1047は短い口縁部がつく甕である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SX15出土土器（1040～1042）

1040は広口壺の口縁部である。1041は頸部に凹線文と刻みを施す断面三角形突帯を巡らせた壺である。1042は外面をヘラミガキする壺の底部である。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）の初頭のものである。

SX16出土土器（1048・1049）

1048は甕の口縁部である。1049は甕の底部である。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SX17出土土器（1050～1055）

1050は底部内面をヘラケズリする甕である。底部を焼成後に穿孔している。1051は大型の甕である。1052～1054は甕の口縁部である。1055は櫛描直線文を施した壺蓋である。これらのうち1055は弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものであり、他はⅢ期のものである。

SX18出土土器（1056～1057）

1056は頸部に凹線文を施し、口縁端部に刻みを施す直口壺である。1057は広口壺の口縁部である。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－１期）の初頭のものである。

SK01出土土器（1058～1065）

1058は無文の広口壺である。底部外面をヘラミガキする。1059は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁端部を拡張し端面に凹線文を施す広口壺である。1060は拡張した口縁部端面と口縁部内側に、櫛描の綾杉文を施す広口壺である。1061は口縁部に押圧を施す甕である。1062は口縁部に刻みを施す断面三角形突帯を２条巡らせた鉢である。突帯間に２個一対の紐孔をうがつ。1063は頸部が締まる甕である。1064は水平近く外反させた口縁部がつく鉢である。1065は口縁部端面に円形浮文を貼付した水平口縁の高杯である。脚部と杯部は一体に成形する。これらの土器は弥生時代中期前半～後半（Ⅲ－２期～Ⅳ－１期初頭）のものである。

SK04出土土器（1066）

1066は口縁部に刻みを施し、その下に×形の刻みを施す突帯を貼り付けた鉢である。弥生時代中期前半（Ⅲ期）のものである。

SK29出土土器（1067）

1067は体部に櫛描直線文を施した無頸壺である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SK30出土土器（1068）

1068は短く外反する口縁がつく甕である。弥生時代中期前半（Ⅱ期）のものである。

SK56出土土器（1069～1071）

1069・1070は上下に拡張した口縁部端面に凹線文を施す広口壺である。1071は口縁端部をつまみあ

げた甕である。内外面ともにハケで仕上げる。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK63出土土器（1072）

1072は球形の体部に長い頸がつく細頸壺である。口縁部直下から体部にかけて直線文・波状文を交互に施す。弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SK81出土土器（1073）

凹線文と櫛描波状文で飾る高杯である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SK82出土土器（1074～1076）

1074は口縁部に押圧を加えた甕である。1075は外面をヘラミガキした壺の底部である。1076は外面をヘラミガキした蓋である。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK81・82切り合い部分出土土器（1077～1081）

いずれの遺構に帰属するか不明なものである。1077は短い頸部をもつ無文の広口壺である。1078は口縁部に押圧を加えた甕である。1079も口縁部に押圧を加えた甕であるが、口縁部内面に横方向のハケを施す。1080は単純なくの字形口縁の甕である。1081は口縁端部に押圧を加えた甕である。内外面ともにハケで仕上げる。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK83出土土器（1084・1085）

1084は口縁部をつまみ上げた甕である。1085は口縁部をつまみあげ、端面に凹線文を施した甕である。これらは弥生時代中期後半（Ⅳ－２期）のものである。

SK99出土土器（1086）

1086は口縁部に押圧を加えた甕である。口縁部内面にも横方向のハケを施す。弥生時代中期前半（Ⅲ－２期）のものである。

SK101出土土器（1087）

1087は外面に凹線文を巡らせた高杯である。弥生時代中期後半（Ⅳ期）のものである。

SD10出土土器（1088～1090）

1088は頸部に櫛描波状文を施す広口壺である。1089は壺の底部である。1090は口縁部付近に強いヨコナデを施し、体部外面を板ナデする甕である。これらは弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

SD25出土土器（1091）

1091は口縁部に刺突文を施す甕である。

SD32出土土器（1092～1096）

1092は口縁端部を上方に拡張した甕である。1093は壺の底部である。1094は高杯もしくは器台の脚部である。1095は高杯の脚部である。1096は口縁部を上方に拡張し、内面をヘラケズリする甕である。これらは弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものである。

SD52出土土器（1097～1101）

1097・1098は甕の口縁部である。1099は内外面をハケで仕上げた甕である。1100は甕の底部である。1101は口縁部と体部に刺突文を施した鉢である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－１期）のものである。

包含層出土土器（1102・1103）

1102は口縁端部をわずかに拡張した甕である。1103は底部に多くの孔をあけた鉢である。

SD01上層出土土器（1104～1164）

SD01からは大量の弥生時代中期の土器が出土しているが、そのうち主要なものを選択して図化した。このため出土資料に含まれる各器種のレパートリーは示すが、出土数量を反映するものではない。

1104～1128は壺である。1104は加飾のない広口壺の口縁部である。1105は頸部に凹線文を施す広口壺である。口縁部端面を拡張し凹線文を施し、内面に櫛描波状文を施す。1106も頸部に凹線文を施す広口壺である。口縁部端面を主に下へ拡張し、端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼付する。内面には櫛描波状文を施し、4個1単位の孔を穿つ。1107・1108・1109は無文の広口壺である。1110は頸部に凹線文を施し、拡張した口縁部端面にも凹線文を施す。1111は口縁部端面に櫛描波状文を施し、体部にも櫛描波状文と直線文を施す。底部内面にヘラケズリを施す。1112は体部に直線文と波状文を交互に施し、口縁部端面に櫛描波状文、内面に櫛描扇状文を施す広口壺である。1113はタタキ成形の壺の体部である。

1114は頸部に突帯を2条巡らせ、垂下させた口縁に櫛描による斜線を施した広口壺である。1115は頸部に断面三角形突帯を巡らせ、口縁部端面に櫛描波状文、内面に櫛描扇状文を施した広口壺である。1116は頸部に断面三角形突帯を巡らせた広口壺である。加飾が豊かであり、上下に拡張し、中をくぼませた口縁部端面の上下に刻みを施し、内面には竹管文・櫛描扇状文・縦方向の直線文を施す。1117も1116と同じモチーフの広口壺である。体部には櫛描直線文と竹管文を施し、口縁部内面は櫛描波状文・竹管文・扇状文で飾る。1118は拡張した口縁部端面に凹線文を施し、その上から縦方向の沈線を密に施し、6個1単位の円形浮文を貼付している。内面には外側から、扇状文・斜格子文・波状文を施す。1119は頸部に断面三角形突帯を3条巡らせ、拡張した口縁部端面及び内面に櫛描の斜格子文を施す。体部には櫛の刺突による列点文を上下2段に施している。1120は頸部に凹線文を施した広口壺である。体部上半に櫛描直線文・波状文を交互に施す。

1121は頸部に圧痕文突帯を巡らせた広口壺である。口縁部や体部への加飾はない。外面は底部付近のみヘラミガキを施す。1122は内傾する口縁部をもつ壺である。頸部には圧痕文突帯を巡らせる。1123は頸部に圧痕文突帯を巡らせた直口壺である。体部には列点文が施される。1124は頸部に幅広の圧痕文突帯を巡らせた短頸壺である。口縁部端面には斜格子文が施され、下部に押圧が加えられる。1125は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁部端面にハケ状工具の押圧による列点文を施す広口壺である。1126は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、体部に櫛描直線文と波状文を施した広口壺である。1127は口縁直下と頸部に凹線文を施した直口壺である。頸部外面は縦方向のハケが施される。1128は受け口口縁をもつ近江型の細頸壺である。口縁部に櫛描波状文を施し、頸部から体部にかけても櫛描直線文・波状文を施す。近江地方からの搬入品であろう。

1129は口縁部に刻みを施した短頸壺に把手をつけた水差し形土器である。1130は頸部に凹線文を施し、脚をつけた水差し形土器である。脚部と壺部は一体に作られている。1131は口縁部に2個一対の孔をうがつ無頸壺である。外面をハケで仕上げ、内面は底部付近を板ナデする。1132は円形の透かし孔をあけた脚が付く無頸壺である。

1133～1147は甕である。1133～1136は口縁部に3カ所1単位の棒状工具による押圧を加えた甕である。いずれも内外面ともにハケで仕上げる。1137は大型の甕であるが、これも口縁端部に押圧を加えている。内外面ともにハケで仕上げ、底部付近をヘラケズリしている。1138は口縁端部を丸くおさめた甕である。底部内面をヘラケズリする。1139は口縁端部をつまみあげた甕である。体部は丸みをおび、内面は下半部をヘラケズリする。1140は大型の甕である。口縁部内面に横方向のハケを施す。1141は

小型の甕である。内外面ともにハケで仕上げる。1142は受け口口縁をもつ近江型の甕である。外面を粗いハケで仕上げる。体部には列点文を施す。近江からの搬入品である。1143は口縁端部を拡張した甕である。体部外面にタタキ目が認められる。1144は口縁部端部を拡張した大型の甕である。1145は口縁端部をつまみあげ、端部に押圧を加えた大型の甕である。口縁部内面に横方向のハケを施す。1146は内面をヘラケズリした甕の底部である。1147も甕の底部である。

1148·1149は鉢である。1148は口縁部にヘラによる刻みを施したものである。1149は小型の鉢である。1150は口縁部に刻みを施し円形浮文を貼付する鉢である。口縁下に2個一対の紐孔をあける。1151～1154は高杯である。1151は深めの杯部にやや上方に開く水平口縁がついたものである。杯部と脚部は一体に成形する。1152は水平口縁の端部を垂下させた高杯である。1153は内面の突帯がない高杯である。1154は水平口縁がやや下方に下がるものである。1155は高杯の脚部である。外面をハケで仕上げる。1156は台付鉢である。口縁部を内側に向けて肥厚させる。鉢部の上半と脚部の上端に凹線文を施す。口縁部下には2個一対の孔を穿つ。脚部内面はヘラケズリを施す。1157は凹線文とヘラ描の鋸歯文で飾った器台である。裾部には円形の透かし孔をあける。内面はヘラケズリする。

1158は乳頭状のつまみがついた蓋である。2個一対の紐孔をあける。1159は分銅形土製品である。片面に刺突によってV字形の文様を表現する。1160は小型の鉢である。1161はミニチュアの壺である。1162は台形土器である。内面には指頭圧痕が残る。1163は用途不明の土製品である。片側を平らにつくり、外面にヘラで格子状の文様を施し孔を穿つ。1164は土器片を転用した紡錘車である。

これらの土器は弥生時代中期後半（Ⅳ－1期）の初頭のものが中心であるが、一部中期前半（Ⅲ－2期）のものも認められる。

SD01下層出土土器（1165～1184）

1165は頸部に圧痕文突帯を巡らせる無文の広口壺である。頸部外面には粗いハケが施される。1166は頸部に圧痕文突帯を巡らせる広口壺である。口縁端部を垂下させ、端面には櫛描波状文を施し、内面に扇状文を施す。体部には櫛描直線文と波状文を交互に施す。1167は頸部に断面三角形突帯を1条巡らせる広口壺である。口縁部端面に櫛描波状文を施し、内面には扇状文を施す。体部には櫛描直線文と波状文を交互に施す。1168は頸部に圧痕文突帯を巡らせる広口壺である。体部には櫛描直線文と波状文を交互に施す。1169は頸部に圧痕文突帯を巡らせる広口壺である。口縁端部を拡張し、端面にハケ状の工具を押圧した斜格子文を施す。内面には櫛描波状文と扇状文を施す。体部には櫛描直線文を施し、その間をヘラ描の斜格子文を施す。1170は体部最大径付近に列点文を施した広口壺である。

1171は口縁部の一部を窪め注口をつくる壺である。1172は短く外反する口縁をもつ短頸壺である。1173は小型の広口短頸壺である。1174は頸部に圧痕文突帯を巡らせ、口縁部を竹管文で、体部を櫛描波状文と竹管文で飾る。1175は口縁部を内傾させ、鍔状の突帯を巡らせた壺である。口縁端部と突帯に刻み目を施し、その間に櫛描波状文を施す。1176は上下に拡張した口縁部端面に凹線文を施し、その上に円形浮文と棒状浮文を貼付する広口壺である。口縁部内面には粘土粒を貼りつけ、その内側に櫛描波状文と扇状文を施す。1177は頸部に2条の断面三角形突帯を巡らせ、垂下した口縁部の端面に円形浮文を貼りつける。口縁部内面には櫛描の扇状文を施す。1178は頸部に断面三角形突帯を巡らせ、垂下した口縁部端面に円形浮文を貼付した広口壺である。口縁部内面には刻み目を施した突帯を2条巡らせる。体部には櫛描波状文と直線文を施す。1179は口縁部に押圧を加えた甕である。1180は口縁部端をつまみあげ、端面に押圧を加えた大型の甕である。

1181は涙滴形の透かし孔をあけた脚部をもつ台付鉢である。脚部と鉢部の境には断面三角形突帯を巡らせる。1182は口縁部に2条の断面三角形突帯を巡らせた台付鉢である。脚部と鉢部の境にも断面三角形突帯を巡らせる。1183は高杯の脚部である。1184は蓋である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）のものが大半を占め、一部中期後半（Ⅳ－1期）のものがまじる。

SD02出土土器（1185～1193）

1185は口縁部端面に凹線文を施した壺である。1186は口縁部と頸部に凹線文を施した直口壺である。1187は口縁部に2個一対の紐孔をあけた無頸壺である。1188は口縁端部を上方に拡張した壺である。体部には列点文が施され、内面は中位までヘラケズリが施される。1189は内面をヘラケズリする甕である。1190は口縁端部に押圧を施した甕である。口縁部内面に横方向のハケを施す。1191は水平口縁の端部を垂下させた高杯である。脚裾部端面に凹線文を施す。脚部は中実であり、裾部内面はヘラケズリを施す。1192は脚台付の鉢である。1193は土器片を打ち欠いた紡錘車である。これらの土器は弥生時代中期前半（Ⅲ－2期）～中期後半（Ⅳ－2期）のものである。

第2節　古墳・奈良時代の土器

1．E地区出土土器

SD01出土土器（514～519・522～524）

514・515は須恵器杯B蓋である。514は平坦な頂部につまみがつく。515は笠状を呈し、縁をわずかに屈曲させる。516～519は須恵器杯Bである。底部は平坦で、底部と口縁部の境付近に高台がつく。522は須恵器稜椀である。523は須恵器皿Aである。これらは奈良時代後半のものである。524は土師質の管状土錘である。

SD02出土土器（526・527）

526は須恵器杯Bである。平坦な底部と口縁部の境付近に低い高台がつく。527は須恵器壺L口縁部である。外彎する長い口縁部で、短部は上方へ拡張して面をもつ。奈良時代後半のものであろう。

2．F地区出土土器

SB06出土土器（604・605）

604・605は須恵器壺の底部と思われる。604は平坦な底部から屈曲して体部に続く。底部と体部の境付近に高台がつく。605は平坦な底部と体部の境に高台がつき、体部下半に稜をもつ。

P149出土土器（610）

610は須恵器杯蓋である。体部が丸みをもち、平坦な頂部に宝珠状のつまみがつく。体部内面には退化したかえりがつく。

P188出土土器（611）

611は須恵器杯蓋である。体部が丸みをもち、頂部はやや平坦になり扁平なつまみがつく。縁は屈曲させる。

SK16出土土器（621～623）

621は須恵器杯Aである。底部はやや丸みをもち、屈曲させ口縁部へ続く。622は須恵器杯Bである。底部と口縁部の境界付近に低い高台がつく。623は土師器甕である。外反する口縁をもつ。体部は下半

部を欠くが丸みをもつようである。体部の最大径は口径よりも大きい。

SD03出土土器（625～632）

625・626は須恵器杯Aである。625は平坦な底部で、屈曲して口縁部につづく。口縁短部は外へ屈曲する。626は口縁部がまっすぐのびている。627･628は須恵器椀Eである。629は須恵器高台付鉢である。体部上半に穿孔する。また一条の沈線が巡る。口縁部との境付近に短い高台がつく。630は須恵器高台付甕である。631は土師器椀Aである。底部から口縁部へ丸みをもつ。632は土師器甕である。外反する口縁をもつ。体部は下半部を欠くが丸みをもつようである。体部の最大径は口径よりも大きくなる。

SD03・04出土土器（633～637）

いずれの溝から出土したか不明の土器である。633は須恵器杯B蓋である。平坦な頂部につまみがつく。つまみは扁平で中央部が突出する。634・635は須恵器杯Bである。器高に比べて口径が大きい。636は須恵器杯Aである。平底の底部に外傾する口縁部をもつ。637は須恵器杯Bである。底部と口縁部の境に高台がつく。

SD04出土土器（638）

638は須恵器皿Bである。外に大きく開いた低い高台がつく。

SD10出土土器（639～642）

639・640は須恵器杯Aである。639は底部が平底になり、口縁端部が外に開く。640は平底の底部で、口縁部は外傾する。641は須恵器杯Bである。器高に比べて口径が大きい。口縁端部が外へ開く。642は須恵器稜椀である。底部は平底で短い高台がつく。口縁端部は外へ屈曲させている。

SD11出土土器（643～647）

643は須恵器稜椀蓋である。平坦な頂部に輪状のつまみがつく。端部は短く屈曲させる。644は須恵器杯Aである。底部が平底になり、口縁端部が外に開く。645は須恵器杯Bである。平坦な底部から屈曲して口縁部につながる。底部と口縁部の境付近に短く直立する高台がつく。646は須恵器稜椀である。口縁端部は外へ屈曲させる。底部には高い高台がつく。647は須恵器甕である。体部外面は平行タタキをカキ目で消している。

SR01Ⅰ層出土土器（707～742）

707～713は須恵器杯B蓋である。概して平坦な頂部に扁平なつまみがつき、器高の低いものである。端部はいずれも屈曲させている。714は稜椀蓋である。頂部の輪状つまみの部分のみ残存する。715～721は須恵器杯Aである。718は底部が丸みをもつ。718・719は底部と口縁部の境が不明瞭である。716・720・721は底部と口縁部の境が屈曲したものとなり、底部も平底になっている。口縁部は斜め上方へまっすぐのびる。720は底部外面に墨痕がかすかに認められ、墨書土器の可能性がある。722～724は須恵器杯Bである。いずれも器高に比べ口径が大きい。722・723は口縁端部がやや外へ開く。724は口縁部が斜め上方へまっすぐのびる。725は須恵器鉢Bである。726は底部のみ残存し器種は不明である。内面に漆が付着している。漆容器に用いられたものであろう。727は蓋付円面硯と考える。図示していないが長方形透かしが２ヵ所に認められる。728は須恵器皿Bである。平底の底部に屈曲して口縁部がつく。底部に低い高台がつく。729・731は須恵器椀Eである。底部は平底ぎみで、口縁部は内彎ぎみである。730は須恵器稜椀である。底部は平底で内彎する口縁部がつく。口縁端部は短く屈曲する。732は須恵器高杯脚部である。短脚で裾部は脚柱部からゆるやかに広がる。端部は上下に拡張している。733は須恵器高台付鉢である。口縁部は大きく内彎する。丸みをもつ平底の底部に短い高台がつく。

734は須恵器壺である。口縁部は外反しながら開き、端部は小さく斜め外方に肥厚する。体部の形状は不明である。735･736は須恵器壺底部と思われる。736は平底の底部から屈曲させ体部に続く。体部はコップ形をなすと考える。737は須恵器平瓶である。肩部に取っ手がつく。肩部と体部の境には明瞭な稜がつく。口縁部は水平に開く。底部は平底で高台がつく。738は須恵器甕である。大きく外反する口縁部をもつ。体部の形状は明らかでない。740は土師器皿である。平らな底部に短く外傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。741は高杯脚部である。裾部は脚柱部からゆるやかに広がる。脚柱部は面取りを行う。742は須恵器甕である。

3．I地区出土土器

SR01出土土器（799）

799は須恵器杯である。口径に対して器高が高く、内傾する口縁部をもつ。本調査で唯一の古墳時代後期の遺物である。

4．L地区出土土器

SD01出土土器（946～952・955）

946は須恵器杯G蓋である。笠形の頂部に宝珠状のつまみがつく。　947･948は須恵器杯B蓋である。947は器高が低く平坦な頂部の縁を屈曲させている。948は笠状を呈する頂部につまみがつく。949は須恵器壺蓋である。頂部は平坦で縁は垂下する。950～952は須恵器杯Bである。950・951は平坦な底部から屈曲して口縁部がつづく。952は平坦な底部に低い高台がつく。955は須恵器高杯脚部である。脚柱部からゆるやかに裾部へつづく形態と思われる。

5．M地区出土土器

SB08出土土器（1194）

1194はP810から出土した須恵器杯B蓋である。平坦な頂部に扁平なつまみがつく。上面にはヘラ状工具によるキズが目立つ。1196・1197と焼成の具合が類似する。

SK60出土土器（1195）

1195はSK60から出土した。底部に剥離痕があり、須恵器高杯の杯部と思われる。口縁部が内彎する。

SB16出土土器（1196）

1196はP505出土の須恵器杯Aである。平底ぎみの底部をもつ。底部と口縁部の境は屈曲させる。底部はヘラ切り不調整である。

P513出土土器（1197）

1197は須恵器杯Bである。平坦な底部に低い高台がつく。

P525出土土器（1198）

1198は須恵器杯Bである。底部と口縁部の境が明瞭に屈曲する。残存部分は少ないが、他の須恵器と比較してつくりがシャープであることから生産地が異なる可能性がある。

SK62出土土器（1199）

1199は須恵器杯Bである。平底ぎみの底部に低い高台がつく。

SK45出土土器（1200）

1200は須恵器杯蓋である。やや丸みのある体部に扁平なつまみがつく。縁部は内傾する。

SK81出土土器（1201～1204）

1201・1202は内面にかえりをもつ須恵器杯蓋である。1201は平坦な頂部につまみがつく。内面のかえりは短く退化したものである。1202は頂部から縁へ丸みをもつ。内面のかえりは痕跡を残す程度に退化している。1203は縁を屈曲させる。1204は須恵器杯Bである。底部と口縁部の境は丸みをもち、底部には低い高台がつく。

SK72出土土器（1205）

1205は須恵器杯Aである。底部は平底で口縁端部は外へ開く。

SK18出土土器（1206～1209）

1206・1207は須恵器杯Bである。1206は底部を欠き高台の形状は不明である。1207は平底に短い高台を貼り付けるが仕上げは雑である。1208は須恵器椀Eである。体部は丸みをもち、口縁端部が屈曲する。1209は須恵器高杯杯部の可能性がある。口縁部と底部の境に稜をもつ。

包含層出土土器（1210）

1210は須恵器杯Bである。平坦な底部に低い高台がつく。

6．墨書土器、硯

硯（1234）

F地区SR01Ⅰ層から出土した圏足円面硯である。破片であるが全容の復元が可能である。硯面は海と陸の区別が明確なもので、海は浅く、陸の周囲の土手も小さくなっている。圏足には長方形方形透し孔は2か所現存し、6か所に痕跡が残っている。復元すると24か所の透しが開けられていたと考える。

墨書・刻書土器（1235～1244）

ここで取り扱う土器はすべてF地区から出土したものであり、1238がSK16から、1243がP528から出土した他はSD03・04、SR01上層または整地層内からの出土である。いずれの土器も破片のため文字の一部を欠いているものが多く、墨の残存も良好とはいえないが文字あるいは記号として認識できたものはすべてここに掲載している。

墨書が書かれたものは須恵器杯であり、杯蓋の内面に書かれたもの（1235～1237・1239）、杯底部に書かれたもの（1238・1240～1243）がある。

1235～1237は「春マ」あるいはその可能性のあるものである。1238・1239は「得」またはその可能性のあるものである。文字は墨書のある部位から「得」1文字しか書かれていないと考える。これは昭和59・60年度調査の出土例とも一致する。1240・1241は「十」であるが1241は前に墨痕が確認でき1文字がある可能性がある。1242は「郷□」である。前回の調査では「春部郷」の例はあるが、郷の後に文字が続くならば新規例とる。1243は「古」であるがその前に1文字ある可能性がある。

1244は底部にヘラ状工具により文字か記号を刻書しているが大半の部分を欠き判読不明である。

第3節　平安時代の土器

1．D地区出土土器

D地区からは、土師器杯・小皿、黒色土器椀・小皿、須恵器椀が出土している。431の土師器杯を除

き、掘立柱建物跡（SB01・02・03）、井戸（SE01）、柱穴（P65・244）の遺構内より出土している。特にSB01を構成する柱穴P60からは、土師器杯・皿、黒色土器椀がまとまって出土している。

SB01出土土器（386～390）

P60内より土師器杯・小皿が出土している。土師器杯は、いずれも口縁部の破片で完形ではない。杯は口縁が外反する器形であるが、386は内彎気味に立ち上がる体部をもつのに対して、387は直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

388は土師器小皿である。外面底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。

389は両黒の黒色土器椀である。内外面ともにヨコヘラミガキが密に施されている。390はP62内より出土した両黒の黒色土器である。内外面ともにヨコヘラミガキを施す。389の大きく外反する口縁部に比べ、390は外反部分が小さい。

SB02出土土器（391・392）

P279より土師器小皿（391）、P276より両黒の黒色土器椀（392）が出土している。391は口縁部が大きく外反する小皿である。底部の切り離しは、回転糸切り手法と考えられる。

392はP276より出土した両黒の黒色土器である。口縁部は短く外反する。内外面にヨコヘラミガキを密に施す。

SB03出土土器（393・394）

P171より土師器杯（393）、P174より両黒の黒色土器小皿（394）が出土している。393は口縁部が大きく外反する杯である。394は底部回転糸切りの小皿で、内外面ともに密なヨコヘラミガキを施す。口縁端部は短く外方に拡張している。

P244出土土器（395）

口縁部が外反する須恵器椀（395）が出土している。

P65出土土器（396）

両黒の黒色土器椀（396）が出土している。口縁部が短く外反し、内外面ともにヨコヘラミガキを施す。

SK10出土土器（401）

両黒の黒色土器椀（401）が出土している。口縁部が短く外反し、内外面ともに密にヨコヘラミガキを施す。

SE01出土土器（419～425）

井戸内の最下層からは、須恵器小皿（419）・両黒の黒色土器椀（424）が出土している。419は底部の切り離しが回転糸切り手法の小皿である。424は口縁部が内彎し肥厚する椀で、内外面にヨコヘラミガキを施している。

井戸埋土中層（第4層上面）からは内黒の黒色土器椀が出土している。平高台の底部をもち、底部の切り離しは回転糸切り手法である。内面にはヘラミガキを密に施す。外面の調整は不明である。

埋土上層（第2層）からは須恵器椀（420）と土師器甑（421）が出土している。須恵器は口縁部のみの破片で、口縁部は肥厚している。土師器甑（421）は口縁部が外反する甑で、内外面ともに回転ナデ調整が施される。

出土層位の不明なものに422の土師器小皿、425の黒色土器Bの小皿がある。422の底部の切り離しは回転ヘラ切りと考えられ、また425の黒色土器B小皿は、内面にはヨコヘラミガキが施され、底部は回転糸切りである。

包含層出土土器（431）

包含層からは、土師器杯（431）が出土している。外面は回転ナデ調整が顕著で、底部は回転糸切り痕が残る。

小結

黒色土器は、423の内黒の椀を除き、多くが両黒の椀と皿である。

両黒の黒色土器は、口縁部が短く外反する390・392・396・401の一群と口縁部が大きく外反する389、口縁部が内彎する424に分かれる。このなかでも389・390・396・389・401の一群は、黒化状況が良好で器壁が薄く、また丁寧なミガキを施す特徴をもち、黒色土器のなかでも良質な仕上がりの一群である。

423の内黒で回転糸切り底の平高台椀は須恵器椀を模倣したタイプと理解できる。また、小皿は口縁部が短く外反するタイプ（394・425）のみ出土している。D地区での黒色土器の主体は、口縁部が短く外反するタイプと考えられる。

2．E地区出土土器

E地区の土抗、溝内より、須恵器杯A・B、皿B、鉢、壺や瓦器椀、白磁、青磁碗が出土している。いずれも出土土器に時代幅が認められ、一括で出土したものはない。

SK01出土土器（482～486）

須恵器杯A・杯B、椀が出土している。

482は杯Aないしは杯Bの口縁部である。483は杯Aの底部破片である。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施している。484は杯B底部である。

485・486は平高台椀の底部である。内面底部と体部の境には段をもつ。485は底部回転糸切りによる切り離し後未調整であるが、486は回転糸切り後、高台脇をナデ調整しており、古い様相を示す。

SK02出土土器（487・488）

杯Bと瓦器椀の底部破片が出土している。

487は高台と体部の境に括れをもたない杯Bである。内面見込み部にはナデ調整が施されている。

488は瓦器椀の底部である。内外面ともに遺存状況が不良で、調整は不明である。

SK03出土土器（489～492）

須恵器杯B、皿B、鉢が出土している。

489は体部から高台部の括れが顕著な杯Bである。490・491は皿Bである。

492は小型の鉢である。

SK04出土土器（493）

493は底部に高台を有する小型壺と考えられる。

SK05出土土器（494）

494は壺の底部である。

SK06出土土器（495）

495は椀の口縁部と考えられる。496は皿Bである。

SD01出土土器（520・521・525）

奈良時代の須恵器に混じり、須恵器椀（520・521）、白磁皿（525）が出土している。

520・521は平高台の椀である。内面体部と口縁部に明瞭な段差をもつ。

525は白磁皿の破片である。内面にはヘラ描きによる文様が彫られる。

包含層出土土器（599）

龍泉窯系の青磁碗（599）が出土している。内面は無文、外面には鎬連弁文が施される。

3．F地区出土土器

旧河道（SR01）の最上層より緑釉陶器が出土した。

SR01出土土器（743・744）

緑釉陶器は、椀（743）と皿（744）がある。

743は底部削り出しの平高台椀で、底部は部分的に施釉している。胎土は黄灰色を呈する軟質の仕上がりである。釉調は透明度が高く、色は淡緑色を呈している。

744は皿の口縁部である。胎土は砂粒を若干含む須恵器質の仕上がりである。釉の透明度は低く、色は灰緑色を呈する。

4．G地区出土土器

掘立柱建物（SB01）を構成する柱穴内より土師器杯・小皿、須恵器椀・小皿、黒色土器A・B椀が柱穴内あるいは掘方内より出土している。とくにP13は土師器堝・甕、須恵器椀、黒色土器椀がまとまって出土している。

この他建物として識別できなかった柱穴ないからも土師器小皿・杯・甕、須恵器椀、黒色土器椀などの破片が出土している。

破片率が高く決して良好な資料とはいえないが、本調査区比較的まとまった資料としてSK01の出土遺物がある。土抗内からは、破片が主体ではあるが須恵器椀、土師器杯・托・小皿、黒色土器椀がまとまって出土している。また細片ではあるが白磁碗が出土している。

G地区内では2基の井戸（SE01・SE02）が確認されている。これらの井戸井側内より、土師器堝・小皿、瓦器椀、黒色土器、須恵器椀などが出土している。

SB01出土土器（745～770）

建物を構成する柱穴内より土器が出土している。

P3からは、内面底部との境に明瞭な段差をもち、糸切り底の須恵器椀（750）が出土している。

P10からは、外面に横位のタタキ目を施した堝（764）と回転糸切り底の土師器小皿（758）が出土している。

P11からは須恵器小皿（745）と土師器杯底部片（755）が出土している。いずれも回転糸切り底である。

P12柱穴内からは、須恵器椀（749）、平高台内黒の黒色土器椀（769）と両黒の黒色土器椀が出土している。また掘方内からは、回転糸切り底の土師器杯（757）、回転糸切り底と考えられる口縁部が外反した小皿（760）、黒色土器のなかでは古相の内黒の椀（765）と両黒の椀（766）が出土している。

P13は、比較的まとまって土器が出土している。747～749の須恵器椀以外に、底部糸切りで平高台の須恵器椀（752）がある。752は内面底部との境に明瞭な段差をもたない。761の土師器小皿、両黒の輪高台付きの黒色土器椀（768）、平高台内黒の黒色土器椀（770）が柱穴内より出土している。また外面に斜位のタタキ目を施した土師器甕、口縁部がく字に屈曲し、端部をつまみ上げた堝（763）が掘方内より出土している。

P17は回転糸切り底の須恵器小皿（746）が出土している。

P19は、回転糸切りの平底で、内面底部との境に段差をもたない椀（751）が出土している。

P92の掘方内より土師器杯が出土している。

P15出土土器（771）

平底の土師器杯（771）が出土している。底部には回転糸切り痕が残る。

P26出土土器（772～776）

平高台の須恵器椀（772）、回転糸切り底の土師器小皿（773）と堝（774）、両黒の黒色土器椀（775）、平高台で両黒の黒色土器椀（776）が出土している。

SK01出土土器（777～787）

777～787は土抗内より出土している。784の土師器托は完形で、それ以外は破片での出土である。

777は口縁部が外反し、端部を丸くおさめた須恵器椀である。778・779は土師器杯である。780～783の土師器小皿は、780を除き、平底で底部に回転糸切り痕を残す。784は突出した平高台をもつ托である。

785・786は内黒の黒色土器椀である。いずれも平高台をもち、底部には回転糸切り痕跡を残す。

SE01出土土器（788～790）

土師器堝（788）・瓦器椀（789）、両黒と思われる黒色土器椀（790）が出土している。このうち790の黒色土器は上層からの出土である。

788は口縁部がく字状に屈曲し、端部が平坦な堝である。胴部外面には斜位のタタキ目が施される。

789は瓦器椀である。内外面ともに摩滅が著しく、暗文の痕跡を認めることはできない。外面体部には、指押さえ調整の凹凸が認められる。底部は断面台形状を呈し、古い要素をもつ。

790はわずかに突出した平高台をもつ黒色土器椀である。両黒タイプと考えられる。底部には回転糸切り痕が残る。

SE02出土土器（791～794）

須恵器椀（791・792）、土師器小皿（793・794）が出土している。791・793は井戸内上層より出土している。

須恵器椀は、いずれも内面体部と底部の境にわずかな段差をもち、口縁部が外反する椀である。

土師器小皿は、手つくね成形の793とロクロ成形の794が出土している。

小結

G地区出土の黒色土器は、内黒の椀（765・769・770・785・786）と両黒の椀（766・767・768・775・776）がある。内黒の椀は、口縁部ないしは底部破片が大半で785を除き、全容は明らかではない。ここでの主たるタイプの内黒椀は、この785に代表される口縁部が外反し平高台の椀と考えられる。

両黒の椀は、口縁部が内椀して立ち上がる767と若干外反する766がある。いずれも底部を欠き全容は明らかではない。底部は2種類の形が確認できる。回転糸切り手法により切り離した後、輪高台を貼り付けた768、退化した平高台をもつ776である。776の底部はヘラケズリ痕跡が顕著に見られ、削り出し高台の可能性をもつものである。

こうした内黒平高台の黒色土器椀は、近隣の成果では10世紀後葉に比定されている範疇におさまると理解している。また両黒椀はこれに後出するものである。

また、SB01出土の須恵器椀（751・753）は、東播系須恵器編年（森田編年）に照らし合わせれば、内面の見込みに凹みがない点から、第Ⅱ期第1段階に相当すると理解している。また750・752の見込み

部に凹みをもつ平高台椀は、第Ⅰ期の範疇におさまると考えておきたい。11世紀後半～12世紀後半の時期におさまると理解したい。

また、SE02の須恵器椀（791・792）は第Ⅱ期第２段階に相当し12世紀末から13世紀初頭の時期を考えたい。

G地区より出土した遺物は、黒色土器の示す10世紀後葉から12世紀後半の時期に比定できる。

５．Ｌ地区出土土器

SD01内より弥生時代から奈良時代の土器に混じって須恵器椀・壺、土師器小皿が出土している。

SD01出土土器（953・954・956・957）

953・954は平高台の椀である。底部の調整は、回転糸切り後ナデ調整を施している。

957は壺の底部と考えられる。底部には回転糸切り痕跡を残している。

956は土師器小皿である。外面には強いナデ調整が施される。

６．Ｑ地区出土土器

Ｑ区より出土した遺物は、掘立柱建物を構成する柱穴内および土抗内から出土している。掘立柱建物の柱穴内より出土した土器は、いずれも破片が多く、良好な一括資料は見られない。また土坑（SK23）内出土の土器についても同様である。

SB01出土土器（1211・1224・1225）

P304掘方内より瓦質土器（1211）が出土している。底部のみの破片であるため、器種は不明である。

P299内からは土師器杯（1224）が出土している。杯は平底で、回転糸切り痕を残す。

P302内からは黒色土器の底部破片（1225）が出土している。黒色土器は平高台両黒の椀で、内外面にミガキ痕を残す。全体的に粗雑な造りである。

SB04出土土器（1212・1213）

P247内より土師器小皿（1212）、黒色土器小皿（1213）が出土している。

1212は底部平底の皿である。外面底部はナデ調整が施され、糸切り痕の有無は不明であるが、ロクロ成形の皿と理解している。

1213は両黒の黒色土器皿である。内外面は丁寧なミガキが施され、外面底部には回転糸切り痕跡を残す。

SB05出土土器（1214・1215）

P234より土師器杯（1214）が出土している。底部には回転糸切り痕を残す。

P236からは土師器小皿（1215）が出土している。外面底部は回転糸切り痕跡が認められ、ロクロ成形の皿である。

SB08出土土器（1216）

P167内より両黒の黒色土器椀（1216）が出土している。口縁部は短く外反し、端部を摘み上げている。内外面ともに密なミガキを施し、丁寧な仕上がりである。

SB09出土土器（1217・1218）

P102内より土師器杯（1217）が出土している。回転糸切り底の杯である。

P88内より土師器鍋と考えられる堝の口縁部片（1218）が出土している。

SB11出土土器（1219）

P33内より両黒の黒色土器椀（1219）が出土している。外面体部にはケズリ様の粗いミガキが施されている。

SB13出土土器（1220）

P3内より回転糸切り底の土師器杯（1220）が出土している。

SB15出土土器（1221～1223）

P91からは、糸切り底の土師器杯（1221）と内黒の黒色土器椀（1222）が出土している。

P101内からは土師器小皿（1223）が出土している。底部には回転糸切り痕が明瞭に残り、ロクロ成形の皿である。

SK23出土土器（1226・1227）

土師器堝片（1226）と両黒の黒色土器椀（1227）が出土している。堝は口縁端部を上方に摘み上げており、外面胴部には、タタキ目を施す。黒色土器椀は、輪高台を貼り付けており、高台内はヘラケズリ痕が明瞭に残る。内外面ともミガキが密に施される。

7．R地区出土土器

掘立柱建物を構成する柱穴内、それ以外の柱穴内より黒色土器椀・皿、土師器小皿や甕が出土している。いずれも小破片で、まとまりのある土器の出土は無かった。また包含層からは土師器小皿が出土している。

SB01出土土器（1228）

P25内より黒色土器小皿（1228）が出土している。遺存状況が極めて悪く、調整は不明である。

SB02出土土器（1229）

P51内からは、回転糸切り底の土師器杯（1229）が出土している。

SB04出土土器（1230・1231）

同建物からは1230の回転糸切り底の土師器とP93内より出土した土師器甕（1231）がある。

P81出土土器（1232）

1230の土師器小皿と同形の小皿（1232）が出土している。

包含層出土土器（1233）

該当する土器は、1233の回転糸切り底の土師器小皿がある。

第4節　出土石器

1．概要

出土した石器は総数1,064点にものぼる。そのうち器種を判別することができたものは692点で、剥片等を除いた道具類に至っては438点を数える。以下の記述では便宜的に図の左側をA面、右側をB面と呼称し、各面の上下左右などと表現して説明を行う。

2．狩猟具・武器

打製石鏃

36点を図化した。松木武彦氏（松木1989）・禰宜田佳男氏（禰宜田1999）の分類を参考に下記のように１～５類に分類する。各型式ともに、畿内のものと比較してバリエーションが非常に少なく画一的に近い顔ぶれである。なお、S30～S36については未製品ないしは欠損部位が存在するなど、分類が困難であったため分類対象から除外した。

１類　平基式石鏃（S1～S20）

36点中20点と最も多い。全長は2.05cm～4.6cmと幅広いが、3.9cmを超える大型のグループS1～S3と2.0cm台にほぼ収束する小型のグループS4～S20とに区別できる。後者は厚さ3mm～4mmのものが多く、その結果重量も２ｇ以下と前者の半分程度である。ただし後者の中にもS4やS8のように比較的厚みがあって重量のある、前者の属性に近い中間的なものも存在する。

２類　凹基式石鏃

完成品では該当するものがなかった。未製品のS34がこの型式になる可能性がある。

３類　凸基Ⅰ式（円基式）石鏃（S21～S24）

最大幅部位が基部付近にあり、基部の形状が平基式に比して丸みを帯びる。全長4.75cmと非常に大きいS21と、1.9cmのS24のほかに中型のグループである３cm台のS22・S23が認められ、平基式とは異なった様相を呈する。S22は基部が尖り気味であり凸基Ⅱ式に近い形状であるが、全長に対する最大幅や厚みのバランスからこの項に含めた。

４類　凸基Ⅱ式（尖基式）石鏃（S25～S28）

最大幅部位が凸基Ⅰ式に比べかなり先端部側に寄り、幅も1.5cm程度と２cm近い凸基Ⅰ式より細身である。大型のグループ（S25・S26）と中型（S28）、小型（S27）に分かれる。

５類　有茎式石鏃（S29）

鏃身と茎が容易に区別できるS29のみが該当する。全長2.5cm、重量1.1ｇと小型であり、他遺跡に認められる大型のものが認められない。前回報告(種定1990)を見ても、少数かつバリエーションに富まず、畿内の様相と大きな差異が看取される。

３．加工具

石錐（S37～S42・S89）

打製石錐は６点、磨製石錐１点を図示した。打製石錐の形態は、錐の機能を持つ刃部にあたる「錐部」と、その基部にあたる「頭部」からなる。ここでは、蜂屋晴美氏の分類（蜂屋1985）に従う。

１類（S37・S39・S42）

頭部と錐部の境が明瞭で、錐部が細長いもの。S37は錐部の先端が扁平でかなり薄い。S39はＡ面側に直角に近い稜をなし、横断面は三角形をなすが錐部先端は丸みをおびる。S42は錐部先端を欠損する。両側縁が一見直線状に見えるが、頭部と錐部の境が認められる。この境界付近まで錐部に磨耗が認められる。

２類（S41）

全体が部厚い多角形ないし涙滴形を呈し、その尖った部分に錐部がつくりだされているもの。S41は五角形に近く、錐部の先端を欠損する。頭部はＡ面側から重点的に加工されている。

３類（S38・S40）

頭部と錐部の境がなく、ほぼ一定の幅を持つ棒状のもの。S38は先端を欠損するが、基端から先端に

向かって直線的に移行し、一定の厚さを持つ。横断面形は先端付近では円形に近い紡錘形を呈する。錐部の欠損部から1.4cmの範囲で磨耗が認められる。S40は基端側を欠損し、本来の形態が1類になる可能性もある。先端から1.2cmの範囲で磨耗が認められる。

磨製石錐（S89）

横断面形は頭部が長方形、錐部が楕円形に近い多角形を呈す。錐部各面ともに水平方向の擦痕が認められ、錐部全体が磨耗し先端から1cmの範囲において特に顕著である。

削器（S43～S49）

S43は上部を欠損するが、撥形の刃器で打製石斧か。B面基端に微細な剥離痕跡を留め、刃部にも同様に認められることからクサビとして使用された可能性がある。S45は細かい剥離がなされ、弧を描く刃部付近に磨耗が認められる。S46は両側縁に細かい調整を施すが、A面右側の刃部のほうがよく使い込まれている。S48は片側に自然面を残す横長剥片を用い、表裏両面から調整し刃部を形成する。S49は打面及び片側端面に自然面を残す横長剥片で、両面から調整し弧を描く鋭利な刃部を形成する。

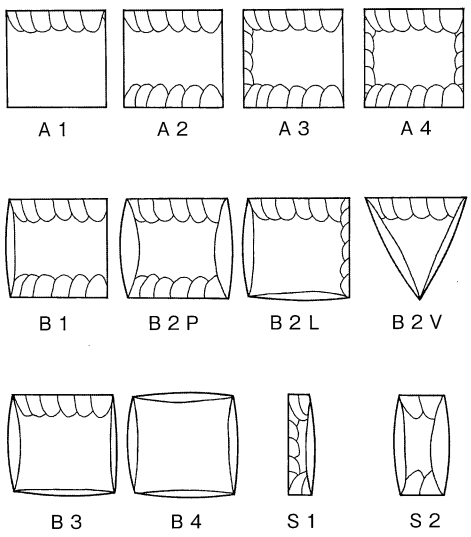
石匙（S50）

横長剥片を利用し、片側端部に自然面を残す。摘み部や肩部の加工はA面側において重点的に施されている。刃部は表裏両面から細かく調整されている。

楔形石器（S51～S68）

向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になって存在し、何かを割るためのクサビ（間接具）に用いられたことが想定されている（岡村1983）。対辺同士を直線的に結ぶ剥断面が形成される場合が多い。この対辺どうしの剥離の大きさと階段状剥離の段差を見比べると、いずれか一方がもう一方より微細な剥離が認められるが剥離の数は少なく、逆にもう一方は量的にも多く剥離の単位も階段状剥離の段差も大きいという傾向が看取される。

ここでは山本誠氏の分類（山本1998）に従う。まず、剥断面のある削片（スポール）状のもの（S類）を区別し、残りの楔形石器の全体もしくは大部分の形状を遺存するもののうち、剥断面の認められないものをA類、剥断面の認められるものをB類とする。A類については微細な剥離痕を形成する辺の数でA1～A4に細別する。剥断面を持つB類とS類についてはその面数により（例えばB類で剥断面を1つの面に有するものをB1とする）B1、B2、B3、B4、S1、S2などと細別する。さらにB2類に関しては、平行する両側辺に認められるものをB2P、隣り合う2辺に認められるものをB2L、V字状に鋭角をなして隣りあうものをB2Vとする。なお、A1～A3・B3・B4・S1類は認められなかった。



第10図　楔形石器の形式分類

A4類（S54・S55）

S54は粘板岩を用い、両面に自然面を残す。階段状剥離が顕著に認められる。S55は長さ6.95cm、幅8.2cmと今回の出土例の中で最大。4辺ともに剥離が認められるが、特に上下端の剥離が顕著である。A面中央の剥離面に敲打痕が認められること、粘板岩製であることから石庖丁素材から転用された可能

性が考えられる。

B1類（S51・S58・S65・S66・S68）

S51では3辺、S58では2辺に剥離が認められる。S51は半月形に整えられるが剪断面が形成され約3分の1を欠損する。幅6cm程度の刃器が転用された可能性が考えられる。S65では剪断面の対辺に階段状になった自然面を残す。S68はA面側に剪断面形成後の微細な剥離が顕著に認められ、結果的にA4と同様の状況に至っている。

B2P類（S56・S57・S64・S67）

S67が最も典型的であり、上下端に微細な階段状剥離が認められる。S67の場合上端より下端のほうに微細な剥離が認められ、逆に上端は剥離の単位が大きく階段状剥離の段差も大きい。S56は微細な剥離とそれに伴う階段状剥離が著しい。左右に剪断面が生じた後も左側に新たに微細な剥離が認められ、連続して利用した形跡が看取される。

B2L類（S53・S60・S62・S63）

S60は上辺の微細な階段状剥離が顕著で、下辺の剪断面上には新たな微細な剥離が認められる。

B2V類（S59・S61）

S59は上辺に微細な階段状剥離が認められるものの、下端は二つの剪断面により欠損し残存しない。S61も上端に顕著な剥離が認められ、やはり二つの剪断面により下端を欠損するが、かろうじて剥離痕跡を留める。

S2類（S52）

S52は剪断面が両側縁にあり、長さに対し幅が狭い典型的な楔形石器のスポールである。

二次加工ある剥片、使用痕ある剥片（S69～S76）

剥片の一部に当初の剥離と区別される剥離痕跡をもつものである。S69はA面からの加工が主であるが、周囲を加工することで薄い剥片を利用した剥片鏃的な利用を目指したものであろうか。S70は角礫の原石から得られた大型の板状の横長剥片を用いており、長さ11.25cm、幅7.3cm、厚さ1.5cmを測る。A面左下に鋭利な斜辺を持ち、細かい剥離が認められる。一方B面では右側にやや大きい剥離が施されている。本来規模から考慮すれば打製石庖丁の素材になり得るが、刃器的な利用がなされたのであろうか。刃部と背部の付近にわずかながら磨耗した痕跡が認められる。

S71及びS72、S76では、一辺ないし二辺に連続して加工が認められる。削器的な使用を念頭に置いたものであろうか。S73～S75では微細な剥離が部分的に認められる。いずれも鋭利な辺に認められ、使用によるものの可能性がある。

4．祭祀具

磨製石鏃（S77・S78・S79）

有茎式2点と平基式1点が出土した。いずれも粘板岩製である。S77は鏃身から茎まで両面を平滑にした後、両側辺付近を鋭利に研ぎ出だしている。S78はやや曖昧ながらも鏑を持ち、断面形は菱形を呈す。

磨製石剣（S81～88・S90）

9点出土した。すべて粘板岩を素材とする鉄剣形石剣で、銅剣形のものはない。そのうち鏑を持ち横断面形が菱形を呈すもの（S81・S83・S85）と、側辺が鋭角をなすように2面に研がれ、横断面形が扁平な六角形を呈するもの（S82・S87・S88・S90）の2つのタイプがある。完存するS81は、C地区

SX02周溝の出土で、中央に鏑を有し断面形は菱形を呈する。ただし基部付近では鏑が甘くなり、基部の側面に約6cmにわたって“握り研磨面（寺前1998）”を有する。S84は2つの斜辺に側面を設け、基端にも研磨が及ぶ。側辺に穿孔箇所があり、対する側片は曲面的に研ぎ分けられ、石庖丁の背部の状況と共通する。かつ片面に穿孔途中の痕跡を留めることから、石庖丁から転用された可能性が高い。S85も方形周溝墓SX05周溝からの出土で、やはり基部に“握り研磨面”を5.3cmの範囲で持つ。刃部断面形も菱形をなすが、S81のように基部側面が平行に対峙せず、刃部境界から基端に向かってすぼまっている。S90は基部に抉りを持つ。S88は短剣の刃部付近を破損により新たに刃部及び基端面を研ぎ出し扁平片刃石斧に転用している。S86は紅簾石片岩を用いており、断面が丸くよく磨耗した背部と、A面側に研ぎ出しの比重をおいた鋭利な刃部が認められる。

石棒（S91・S92）

S91は砂岩製で、横断面形がかまぼこ形に丸く仕上げられている。S92は結晶片岩製で、残存する部分の下半に成形時の敲打痕を残す。

有孔円盤（S80）

直径2.1cm、厚さ1.8mmの滑石製の円盤で、直径1.5mmの孔をA面側から2箇所穿孔している。両面を平滑に磨き、一定した方向の研磨痕が顕著に認められる。周縁にも曲面を形成する。

5．磨製石斧

太型蛤刃石斧（S93～S101・S122）

全部で50点出土したうち、未製品を含む11点を図示した。完成品はすべて横断面形が楕円形を呈し、厚さが5cmを超えるものはなく、幅に対する厚さの比率（幅厚比）は59%～78%の間に収束する。両側面が「()」形に対峙し中央付近に最大幅を持つものと、ハの字形に対峙し平面形が撥形になるものが存在する。前者は大陸系磨製石器群の一つとして弥生時代以降に韓半島からもたらされた型式で、両側面が「｜｜」に対峙するものに準じるものであるが、後者は縄文以来の伝統があり、古い形態が残存しているか、もしくは前者と古い形態が影響しあい、折衷形態として古い形態の特徴が残存したものと考えられる。刃部まで残るものの中には、S98のように敲打具として転用され、刃先が使用により潰れているものが認められる。

未製品ではS122を図示した。玄武岩の扁平な礫の縁辺を敲打して横断面形の両脇に丸みをもたせ楕円形に近づけている。

扁平両刃石斧（S124）

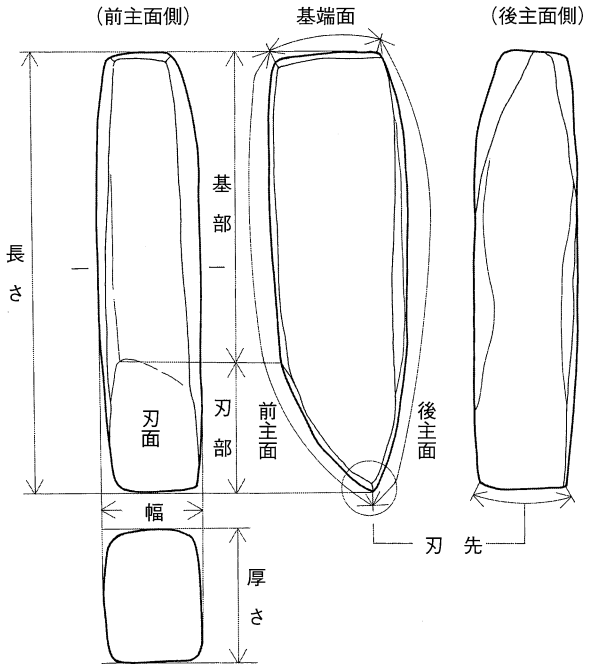
S124は扁平で鏑とするには戸惑うが研磨面どうしの間に比較的明瞭な稜をもつ。刃先の平面形が丸みを帯びる。図示していないが、小形で細長く、刃部が両刃の鑿状の石斧が1点認められる。

柱状片刃石斧（S102～S106）

全部で15点出土したうち、5点を図示した。灰白色の凝灰質頁岩を用いるものが多く、他に結晶片岩と粘板岩が用いられている。みな石材の節理が主面方向に直交する形で加工がなされている。

前主面側では刃部と基部の境界をなす鏑を設けるものが多い。鏑からはS106のように中央部付近まで直線的に移行し基端にむかってわずかにすぼまるものと、S105のように鏑から基端に至る傾斜の急なものとがある。後主面ではS103に代表されるように、中央部から刃部にかけ外湾する一方で、中央部から基部にかけてもわずかにゆるく外湾し、前主面のカーブとともに基端面付近ですぼまる形状を

呈している。柄に装着し緊縛する際に石斧身が離脱しないように、このような基部の形状が意図的に成形されたものと考えられる。また前・後主面と左右側面との間には、刃部付近では鋭利な鏑を持つが、中央部付近の部分では鏑がなくなり、あいまいな２つの稜線の間に細長い曲面を持ち、基端付近で再び１本の稜線に戻っている。図示しなかったが、中央部付近のこの２つの稜線間の曲面的な範囲に細かいくぼみ状の敲打痕を集中して持つものも認められた。なお、S104では刃先が幅９mmにわたって潰れており、敲打具に転用されている。



第11図　片刃石斧の各部名称

さて、完成品の横断面形に注目すると、幅より高さの値の大きい長方形状を呈するものが１点認められるのに対し、高さと幅の値が近似する、もしくは高さより幅の値が大きい正方形状に近いものが４点存在する。長さでは完存する３点では8cm～12cmの間に収まり、いわゆる鑿形の小形片刃石斧（小形方柱状石斧）を含めない狭義の柱状片刃石斧の範疇としては小型のものが多い。このような規模や横断面の特徴は、県内で15cm～20cm前後の大型・中型サイズの柱状片刃石斧の出土が顕著な瀬戸内沿岸地域の状況とは異なり、京都府丹後・丹波地域や大阪府の淀川流域及び河内湖周辺地域と共通する特徴である。

S102は未製品である。S102は刃部付近の左側面を中心とした破片で、左側面から丸みをおびた角を経て移行する前主面と、境界に鏑を持ち平滑な面として存在する後主面がすでに形成されている。しかしながら刃面や後主面の刃先付近は剥離面を残し研磨が及んでいない。

扁平片刃石斧（S107～S111・S120・S121）

全部で20点出土したうち、未製品を含めた7点を図示した。すべて灰白色の凝灰質頁岩を用いているが、柱状片刃石斧の節理方向とは異なり、節理が主面方向に平行する角度に近い。特にS107では前後の各主面にマーブル状に模様が現れている。全体的に各面と面の間に鏑を持つものが多い割には、それぞれの面ではやや丸みをおび、全体の形がずんぐりむっくりした感じを受ける。

完成品の規模に着目すると、大型サイズのS111、中型サイズのS107・S108、小型サイズのS110の３つのサイズに分けられる。小型サイズや中型サイズのうちでもやや小規模なもの（S107・S108）は平面形が長方形に近く、全体的に鏑が明確であるのに対し、中型サイズでも大規模なS109や大型サイズS111では平面形では基部側が細く全体的に丸みをおびた形状を呈している。S111は刃先の平面形が弧を描き、先端は非常に鋭利に研がれている。

S109及びS120・S121は未製品で、研磨が進み、鏑が形成されている段階にある。S109は刃面が研ぎ出されるが、先端に幅約3mmの面を残す。

環状石斧（S123）

武器説が有力であるが、便宜的に磨製石斧の項に含めた。大まかな敲打により全体の厚みを減らした後、細かい敲打により細部の加工を施している段階の未製品である。この直後ないしはさらに細かい敲打を施した後に穿孔を経て研磨工程に移行すると考えられる。特に中心部では両面から敲打してくぼみが深くつくられており、穿孔の際の労力を最小限にする配慮が現れている。

6．農具

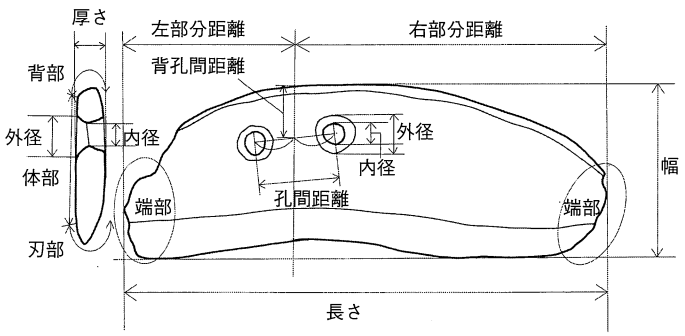
磨製石庖丁（S125～S137・S139～S147・S149～S155・S157・S158・S160～S166・S168～S172）

全部で150点出土したうちの43点を図示した。そのうち完成品が37点、刃部形態が確認できるものは30点ある。さらにそのうち背部弧度が刃部の弧度に比してはるかに弱い外湾刃半月形が１点、背部弧度と刃部の弧度がほぼ同等の杏仁形が２点、刃部が直線かもしくはやや内湾気味のもの（直線刃半月形として総括する）は27点存在する。

典型的な外湾刃半月形はS169のみで、軟質の安山岩を素材とする。A面側に穿孔途中痕を２箇所留め、深く留める１箇所を観察すると、穿孔具について先端がわずかだけが細くそこからすぐに急激に太くなるものを使用していたことがわかる。S151は長方形に近いが、背部弧度の弱いところから外湾刃半月形に含めるべきであろうか。S151、S169ともに片刃付けされている。杏仁形の最も典型的なものはS170であるが、S172とともにやはり片刃付けが施されている。直線刃半月形の中にはS140のように刃部が極めて直線的なものと、S126のように両側がやや外湾するもの、S141のように中央付近がやや内湾するものが認められる。S144は前回報告（種定1990）において左利きの可能性が指摘された、穿孔箇所がA面の右側に偏るイレギュラーなタイプ。

さて、当遺跡出土石庖丁の特徴を穿孔位置から概観したい。まず２孔間の距離は1.19cm～2.91cmまで幅広い値の分布が認められるが、平均値は1.96cmである。3cm近いものは２点にとどまり、1.2cm前後の３点のほかは、1.5cm～1.8cm前後のものと2.0cm～2.5cm程度のものに大きく分かれている。なお、孔間距離が３cm近いものは弥生前期の九州から瀬戸内・大阪湾沿岸にかけて広い範囲に分布する。一方、弥生時代中期における畿内出土の石庖丁の孔間距離は通常2.1cm～2.3cmにピークがあり、粘板岩製石庖丁が主体を占める地域では2cmに限りなく近い傾向がある。

また、孔と背部の距離（背孔間距離）を２孔の中間の点の位置から、刃部に対して垂直な方向にみたときの背部との距離を計測した。その結果、背孔間距離は2.45cmを測る１点を除き、0.77cm～1.87cmの範囲に散在し、平均値は1.41cmである。畿内では概ね0.9ｃｍ～1.3cmにピークがあり、２孔の位置が畿内の出土例に比べてかなり背部と離れた箇所にある。このような背孔間距離の値が大きくなる傾向は京都府福知山市興・観音寺遺跡や和歌山市太田・黒田遺跡等にも認められ、畿内の外縁部に共通して認められる特徴のようである。



第12図　石庖丁の各部名称

さらに、前回報告で片刃付けさ

れた刃部の位置と関連した法則性が見出された２孔の穿孔位置の偏りについて、２孔の間の中心の点が、全長からみてどれぐらい左端に近いか（真ん中が50％）とする偏在率（＝左部分距離÷全長×100）を求めた。外湾刃半月形のS169が45％と穿孔位置は中心に近いが、その他の直線刃半月形のものは概ね30％台を示し、かなり左側に偏っている。

以上の孔間距離の短かさと２孔の穿孔位置の偏在性という特徴から畿内の粘板岩製石庖丁を多く出土する地域と共通する特徴が見出される一方で、穿孔位置の背部との距離が大きいことや、孔間距離が3cmに近いものが存在するなど、伐採斧に認められた特徴と同様にやや古い形態の情報を残していることがうかがえる。

未製品は６点を図示した。従来の製作工程の研究を概観すると、①粗割→②敲打調整→③研磨→④穿孔→⑤仕上げの順の各製作工程に分けることができる。粗割段階のものは認められず、敲打段階の初期のものとしてS130があり、Ａ面左側端部やＢ面底辺の一部を敲打し、完成時の平面形を意識した整形が開始されている。このような整形の進んだものとしてS152、S166がある。研磨段階のものとしては杏仁形のS131が挙げられる。厚さが1.4cmもあり、完成品の平均的な厚さである5mm～8mmと比べると約2倍の厚さである。S171は完成品と変わらない厚さであるが、残存箇所に穿孔が認められない。

打製石庖丁（S156）

楕円形に近い形状の直線的な刃部を持つ打製石庖丁である。サヌカイトを用いており、肉眼では金山産に識別される。背部付近に最大厚があり、鋭利な刃部にかけて厚みが収束する。周縁全体が丁寧に敲打整形されるが、特に背部付近両面及びＢ面側の刃部に重点的に加工が施されている。表面全体に磨耗が激しく、特に背部付近とＡ面側中央部付近、Ｂ面左側半分に顕著に認められる。

大型石庖丁（S138・S148・S159・S167）

用途に様々な説があり、農具に含めるのが妥当かどうか議論が必要であるが、ここでは便宜的にこの項に含める。いずれも粘板岩製である。平面形を観察すると、S138以外のものでは残存する部分において、刃部と鋭角をなして直線的に立ち上がる背部の形状が確認でき、大型石庖丁特有の底辺長の値の大きい三角形を呈することが想定されよう。S138は背部に近接して２孔が穿たれ、刃部はＢ面側からの研ぎ出しの比重が大きいが基本的には両刃付けされている。S148はＡ面側に刃部認められるが、鏑を形成せず厚みのある体部からやや外湾気味にスムーズに刃部に至る。S159は研磨工程段階にあり、片側端部を欠損する。Ａ面から見て左側の端部はやや内湾気味に整形されるが、左側端部は直線的な割れをそのまま活かす。刃部は研ぎきらず先端に幅約1.3mmの面を残す。S167は縦方向に２箇所の穿孔を確認できる。

７．漁撈具

石錘（S177）

３点出土しているうちの１点を図示した。粘板岩の楕円形を呈する扁平な自然礫を用いた切目石錘である。礫の周縁はよく磨耗している。長軸方向の上下二箇所に施した溝状の刻目は２～３mmほどであるが、近接して１mm程の溝状の擦過痕が複数認められることから、先端の鋭い刃器のようなもので何回も擦り切って現在の溝の状況に仕上げられている。重量は62.5g。

８．加工具・調理具

磨石・凹み石（S173～S176・S198）

S173は表裏の平坦面に集中的な敲打痕跡をもち、周縁にもごつごつしたくぼみ状の痕跡を持つ。

S174は周縁から平坦面に向かって夥しい敲打痕が認められる。S175は表面の全体が小さなくぼみ状の敲打痕跡でごつごつしており、対象物にまんべんなくぶつかる作業が繰り返されていたのであろう。S176は柱状の礫で上部を欠損し先端も潰れて大きな剥離が認められるが、2つの相対する平坦面にくぼみ状の痕跡を持つ。S198は安山岩質の球形をなすもので、敲打によりつぶれた箇所が認められるほか、一定の方向に溝状の痕跡がまとまって残る。

砥石（S178～S194）

70点出土しているが、21点を図化した。横断面形が長方形に近く、隣り合う2辺ないしは対辺にあたる面同士等複数の砥面が形成される大型のものがほとんどであるが、小型のものや隣り合う面が多角形上に鈍角をなすもの、円礫の平坦面を利用するものも認められる。前者には砂岩や玄武岩等の粒子が粗く疎らなものが多く、後者は細粒砂岩や凝灰質頁岩など粒子が緻密なものが用いられている。

S178は目の粗い砂岩の円礫を利用し凹面を形成する。砥面境界付近に幅約2mmの溝状の痕跡を留める。S179は細粒砂岩製で柱状をなし、側面4面ともが弱い凹面を呈す砥面である。各面の長軸方向に無数の細かい擦過痕が認められ、上下端面にも若干の研磨が及ぶ。S185は細粒砂岩で、裏面側の状況から一部が剥離した蓋然性が高い。右側面に粗い溝状の痕跡が認められる。S187は柱状をなし、欠損する両端以外の表面全体に敲打痕跡を持ち、図示したように一箇所平坦な研磨面を持つ。横断面形は楕円形に整えられ、伐採斧ないしは石棒の未製品の可能性も考えられる。S188は図示した砥面2面のほか裏側の面にも研磨が及ぶ。S189は図正面の砥面1面のほか平滑な面を持つ。S191は凝灰質頁岩製で、図上面を除くすべての面が極めて平滑である。S192は細粒砂岩製。3つの凹面からなる砥面を形成し、非常に緻密である。S193は長さ21.55cmに及ぶ角閃石玄武岩礫を利用した砥石で、粗砥用か。砥面は確実なものだけでも9面に及び、残る表面全体に敲打ないし剥離の痕跡を留め、砥面として利用可能である。S194は砂岩製で砥面4面を持ち図正面に凹面を形成する。

石皿（S195・S196）

S196は砥面のようには発達しないものの平坦な面をつくり、あばた状にざらざらしている。

9．器種不明の磨製石器（S197）

S197は表裏両面を平滑に磨いた棒状の磨製石器で泥岩製である。表面全体にやや粗めの研磨痕を留める。S89のように先端が磨耗し、水平方向の擦過痕が認められることから磨製穿孔具の可能性を挙げておく。

10．M地区SK65出土石器（S112～S119）

M地区SK65に一括して埋納されたもので、ここで別に記述する。石材はいずれも凝灰岩で、S112は石斧未製品、S114とS117は打製石斧、S116は削器、S113・S115・S118・S119は剥片である。

S112は、粗割された後上下の基端部がわずかに整形され研磨工程に向けた準備が開始されている。各面の面取りがしっかりなされており、横断面形は一辺4cm前後のいびつな台形をなす。S113は、縞目状に節理が発達した石材を用い、これに沿って割れているために横断面が平行四辺形を呈している。鋭角の一つを敲打しようとしている。S114・S117は使用による磨滅は認められない。S116は一縁辺を加工し、刃部を作り出している。

11. 小結

組成について

表２は七日市遺跡で出土した石器を器種ごとに集計した一覧表である。なお、転用の認められるものは転用される前の本来の器種に含めている。一覧表の組成率を眺めると、磨製石器の量が非常に目立つ。特に石庖丁が全体の約３分の１を占め、磨製石斧もまた約２割を占めている。さらに、磨製石器を研磨する砥石も16％を占めているのは示唆的である。これらの数値は当遺跡の前回報告分（種定1990）と近似しており、遺跡内における平均的な様相と見て差し支えないだろう。

一方打製石器の占める割合は23.6％であり、瀬戸内沿岸の太子町亀田遺跡の82.5％とは歴然とした差が認められる。参考までに三田盆地の有鼻遺跡の割合を求めると、打製石器の割合が80.1％を占めている。これは打製石器の大部分を占めるサヌカイト原産地との距離と、それに派生する利器の材質の選択に起因するものであろう。例えば、石庖丁の材質にサヌカイトを用いるか粘板岩を用いているかが大きく影響する。なお、今回報告している中ではサヌカイト製打製石庖丁はわずかに１点を数えるのみである。

今述べたように、当遺跡において粘板岩製の磨製石器が主体を占めることは明らかであるが、他の磨製石器では加工用の片刃石斧類を中心に灰白色の凝灰質頁岩が多用され、一部では蛤刃石斧にも使用されている。この石材は扁平片刃石斧では転用品を除けば73.7％のシェアで、柱状片刃石斧では60％を占める。畿内や瀬戸内沿岸では、片刃石斧には通常結晶片岩ないしは硬砂岩などを用いており、七日市遺跡と同様の状況は京都府福知山市興・観音寺遺跡や同府舞鶴市志高遺跡にも認められ、丹波から丹後にかけて共通する様相として認識可能である。なお、石材では同地域との共通性は認められるものの、形態では畿内及び瀬戸内沿岸地域の結晶片岩製同様、鏃を持ち横断面形が四角形を呈し、丹波・丹後地域に多く認められる丸みを帯びた面同士の境界のあいまいな状況とは異なっている。石材と形態の点では当遺跡例が両地域の中間的な様相を示しているのである。

サヌカイトは肉眼での識別ではあるが、７割強が金山産と目される。特に石鏃や楔形石器では約８割と高い比率を占める。禰宜田氏はⅣ様式前後の県内遺跡におけるサヌカイト供給について、明石川流域や阪神間の遺跡では従来金山産が多かったのが二上山産優勢に転換し、一方で三田盆地は二上山産から金山産優勢に転換する全く異なる傾向を指摘し、畿内の集団と明石側流域の集団のつながりが強まったこと、さらにその背景に鉄器の流通を確保するために畿内の西方の結びつき強化の必要性を挙げている（禰宜田1998）。Ⅱ～Ⅳ様式を通じて存続する七日市遺跡では各期細かい動向を考慮した上での集計が必要であるが、概ね金山産優勢であると考えられる。再三にわたって述べられてきた七日市遺跡の位置する氷上盆地に「加古川・由良川の道」における分水嶺が存在する状況（種定2000）を考えれば、内陸にあってサヌカイトの供給源を瀬戸内に目を向けていた可能性は充分に考えられる。このような瀬戸内に開かれたサヌカイト供給ルートと、加工用石斧の北近畿的な様相が好対照をなしているのは、このような環境にある七日市の性格をよく現していると言えよう。

表２　七日市遺跡の石器組成一覧

機能	器種	点数(点)	組成率(%)	分類・備考
狩猟具・武器	打製石鏃	36	8.2	１類　平基式
				２類　凹基式
				３類　凸基Ⅰ式（円基式）
				４類　凸基Ⅱ式（尖基式）
				５類　有茎式
工具	石錐	7	1.6	１類　頭部と錐部の境目が明瞭なもの
				２類　多角形の尖った部分に錐部を持つもの
				３類　一定の幅を持つ棒状のもの
				磨製石錐
	削器	10	2.3	
	石匙	2	0.5	
	楔形石器	39	8.9	A類　剪断面の認められないもの
				B類　剪断面の認められるもの
				C類　剪断面を持つ削片
	加工･使用痕ある剥片	12	2.7	
	磨製石斧	84	19.2	太型蛤刃石斧
				柱状片刃石斧
				扁平片刃石斧
				扁平両刃石斧
				環状石斧
祭祀具	磨製石鏃	3	0.7	
	磨製石剣	9	2.1	鉄剣形磨製石剣
	石棒	2	0.5	
	有孔円盤	1	0.2	
農具	石庖丁	150	34.3	大型石庖丁を含む
漁撈具	石錘	2	0.5	
調理具・加工具	磨石・凹み石	4	0.9	
	砥石	70	16.0	
	台石・石皿	6	1.4	

(引用・参考文献)

岡村道雄1983「ピエス・エスキーユ，楔形石器」『縄文文化の研究』７　雄山閣

平井勝1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニュー・サイエンス社

高木芳史2000「亀田遺跡出土の石器について」『亀田遺跡（第２分冊)』兵庫県文化財調査報告第209冊　兵庫県教育委員会

種定淳介編1990『七日市遺跡（Ⅰ）—第２分冊—』兵庫県文化財調査報告第72－２冊　兵庫県教育委員会

種定淳介2000「七日市遺跡と「氷上回廊」」『三万年のメッセージ　七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館

寺前直人1998「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻第２号　考古学研究会

禰宜田佳男1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店

禰宜田佳男1999『有鼻遺跡』兵庫県文化財調査報告第185冊　兵庫県教育委員会

蜂屋晴美1985「石錐」『弥生文化の研究』５　雄山閣

松木武彦1989「弥生時代の石製武器の発達と地域性」第35巻第４号　考古学研究会

山本誠1998「石器」『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊　兵庫県教育委員会

第５節　出土金属器

出土した金属器は、12点を数える。すべて鉄製品である。その内訳は、斧・刀子・釘などの工具類、鉄鏃の武具類である。これら以外に、いわゆる小鍛冶段階の椀形鉄滓（Ｍ４・６）をはじめ、M10のような大鍛冶段階に生ずる大型の椀形鉄滓も出土している。

弥生時代の鉄器には、鉄斧（M1･２）、椀形鉄滓（Ｍ４）がある。とくにM1の袋状鉄斧とM2の鉄斧は、弥生時代の遺構の密集度が高いＡ地区からの出土である。

M2は、平面形が逆台形でコ字形の断面形を呈する特徴的な斧である。これと同形の斧は、佐賀県吉野ヶ里遺跡にがあり、本稿においても、斧に分類した。

小型の椀形鉄滓M4は、弥生時代の溝（Ｋ地区SD03）内より出土している。表面および内面は多孔質化が進んでいる。鉄滓の左端部分は切断されている。いわゆる小鍛冶段階の滓と考えられる。

奈良時代に比定される鉄器は、M11の釘とM12の不明鉄製品がある。いずれもＭ区の遺構内（SB16･P512）より出土している。M11は先端部を欠くが、長さが18㎝前後の大型の頭巻きの釘である。

平安時代の鉄器には、鑿と思われるM5、両関式の刀子M3と片関式のM7、釘M9、有茎式の鉄鏃M8、椀形鉄滓がある。椀形鉄滓には、小型のM6と大型のM10がある。大型のM10の表面には部分的に錆が生じている。また重量も重く鉄分の含有量が多いと判断される。

表３　出土金属器一覧　　（　）内数値は残存値

番号	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土位置	備考
M1	斧	鉄	(6.75)	3.35	1.3	(36.4)	Ａ３地区 SK46	弥生中期
M2	斧	鉄	(5.35)	2.65	0.7	(21.0)	Ａ地区柱穴内	弥生
M3	刀子	鉄	(11.05)	2.35	0.8	(27.2)	Ｄ地区 SB01：P111	平安
M4	椀形鉄滓		(4.1)	3.1	1.5	(19.2)	Ｋ地区 SD03	弥生中期
M5	鑿？	鉄	(15.5)	2.2	1.3	(58.5)	Ｅ地区 SDO1	平安
M6	椀形鉄滓		(4.25)	(3.35)	1.7	(21.4)	Ｅ地区 SDO1	平安
M7	刀子	鉄	(8.65)	1.55	0.5	(7.9)	Ｇ地区 SK01	平安
M8	鏃	鉄	(6.5)	(2.5)	0.65	(11.4)	Ｇ地区 SB02：P59	平安
M9	釘	鉄	(6.25)	1.2	0.85	13.0	Ｇ地区 SB02：P54	平安
M10	椀形鉄滓		(9.4)	(7.4)	3.3	293.1	Ｇ地区 SB01：P13	平安
M11	釘	鉄	(10.95)	1.35	0.95	17.8	Ｍ地区 SB16：P160	奈良
M12	不明	鉄	(4.2)	(2.45)	0.65	26.6	Ｍ地区 P512	奈良

註）

註１　松井和幸　『日本古代の鉄文化』　雄山閣　2001

第５章　下野村遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

下野村遺跡は竹田川左岸の扇状地の末端部、標高87～89mのところに位置している。表土下0.5～1mにA.T.火山灰層があり、それより下には白色シルト層・砂礫層が堆積している。A.T.よりも上には１～３層ほどの土壌層が認められ、その間に砂礫層を挟んでいる。最上層の土壌層は弥生時代以降のものであり、下位の土壌層は縄文時代を中心とした時期のものと考えられるが、遺構・遺物が認められるのは最上層のみである。ほ場整備による削平が著しいため最上層の土壌層（黒褐色シルト層）が残存している部分は調査範囲の中の相対的にレベルが低い部分のみであり、遺構が位置する高位の部分は土壌層のみでなくその下の土までが大半失われている。遺構は土壌層を除去した褐色シルトもしくは砂礫の面で検出している。ただし部分的にはA.T.の上にクロボク層が発達しているところもあり、このような場所ではクロボク層を除去した面で遺構を検出している。

調査区は東西200m、南北60mの範囲であり、東側のブロックをＡ地区、西側のブロックをＢ地区として調査した。

第２節　Ａ地区の遺構

１．概要

地形は東西両端が高く中央部が低い。遺構は西側の微高地上で弥生時代後期の土坑（SK16・17・18）、中央部の低地で弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路（SD06・07）、東側の微高地と低地の境で自然流路（SD08）、微高地の上で柵列（SA01）をそれぞれ検出した。

２．土坑

SK16（図版203　写真図版187・188）

検出状況　調査区西北で検出した。

規模・形状　長径1.48ｍ、短径1.23ｍ、深さ0.17ｍの楕円形の土坑である。底は平坦である。

埋土　黒褐色シルトで埋没しており、埋土内には土器と炭が多く含まれる。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1245～1248）が出土している。

時期　弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

SK17（図版203　写真図版188）

検出状況　調査区西南で検出した。

規模・形状　長径1.8ｍ、短径1.6ｍ、深さ0.13ｍの楕円形の土坑である。

埋土　３層に分かれる。第１層は暗褐色シルト層であり、礫・土器・炭を含む。第２層は礫まじりの黒色シルトであり、第３層は灰褐色シルトである。

出土遺物　第１層から弥生時代終末期の土器（1249）が出土している。

時期　弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

SK18（図版203　写真図版188）

検出状況　調査区の西側中央で検出した。確認調査時に約1/3を掘削しており、本発掘調査時に残りを調査した。中央部に攪乱が入るが、坑底までは達していない。

規模・形状　長径2.4ｍ、短径1.5ｍ、深さ0.25ｍの東西に長い楕円形の土坑である。

埋土　上層は暗褐色シルトが、下層は黒褐色シルトが堆積する。

出土遺物　下層から弥生時代終末期の土器（1250～1252）が出土している。

時期　弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

３．溝

SD06（図版203　写真図版188・189）

検出状況　調査区北西で検出した。検出したのは東西約25ｍである。本来は東西にさらに続いていたと思われるが、ほ場整備の際に大きく削平され、深い部分のみ残存している。

規模・形状　幅は２～３ｍ、深さ0.3ｍほどであり、底は平坦である。

埋土　褐色のシルトで埋没する。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1253・1254）が出土している。

時期　弥生時代終末期にはほとんど埋没していたようである。

SD07（写真図版188）

検出状況　調査区北西、SD06に隣接して検出した。本来はSD06と同じ流路の一部であった可能性もある。

埋土　黒褐色のシルトで埋没する。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物が無いため、時期は不明である。

SD08（写真図版189）

検出状況　調査区東端で検出した。南北方向に直線的に走る。

規模・形状　　幅約３ｍ、深さ１ｍであり、南側の方が幅が広い。底はＶ字状となり、人工の溝である可能性が高い。

埋土　砂礫で埋没する。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物が無いため、時期は不明である。

４．柵

SA01（写真図版189）

検出状況　調査区東端、SD08の東岸で検出した。SD08に沿うように柱穴列が２列並ぶ。東側の列は７間分、西側の列は５間分を検出している。

規模　柱穴は直径0.3ｍ～0.4ｍほどである。検出した長さは南北約25ｍ、柱間は約3.6ｍである。柱列間の距離は3.5ｍほどである。

性格　柱間が通常の掘立柱建物に比べて広すぎること、流路に近接しすぎていることなどから建物ではなく柵列であると考える。

時期　柱穴からの出土遺物はなかったが、周辺で平安時代後期の遺物が出土していることからこの時期のものである可能性が高い。

第３節　Ｂ地区の遺構

１．概要

地形は西側が低く、東側が高い。西端に弥生時代後期～平安時代前期の自然流路（SD01）、中央部に縄文時代晩期～弥生時代後期の自然流路（SD03）がある。いずれの流路も上層は黒色ないしは黒褐色のシルトで埋没しており、遺物の出土量は少ない。

東側の微高地上には弥生時代後期の土坑（SK10～15）、溝（SD04・05）がある。土坑はいずれも黒褐色シルトで埋没しており、多量の土器が廃棄された状態で出土している。SK10からは土器のほかに、白色シルトのブロックが出土している。溝SD04・05は上部を削られているため底の部分しか残存していないが、本来は一連の溝であったと考える。

２．土坑

SK10（図版205　写真図版190）

検出状況　調査区北東の微高地上で検出した。

規模・形状　東西2.7ｍ、南北0.95ｍ、深さ0.17ｍの長方形の土坑である。底は平坦である。

埋土　最下層に暗褐色シルトがあり、その上に灰白色粘土の塊が置かれている。その上に土器・炭をまじえた暗灰色の粗砂まじりシルトが堆積する。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1255～1257）が出土している。

時期　弥生時代終末期のものである。

SK11（図版205　写真図版191・192）

検出状況　調査区北東の壁際で検出した。一部は調査区外までのびる。

規模・形状　検出した規模は東西2.2ｍ、南北2.3ｍであり、深さは0.4ｍである。東側は浅く底が平坦であるが、西側の東西1.4ｍ、南北1.7ｍの範囲が円形に深く窪む。

埋土　下層は灰黒色粗砂混じりシルトであり、上層は暗褐色砂～砂礫混じりシルトである。

出土遺物　上層から弥生時代終末期の土器（1258～1260）と石皿（S201）が出土している。

時期　弥生時代終末期のものである。

SK12（図版205　写真図版191・192）

検出状況　調査区北東隅で検出した。

規模・形状　長さ1.6ｍ、幅0.75ｍの隅円長方形の土坑である。

埋土　黒褐色粗砂混じりシルトで埋没する。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1261）が出土している。

時期　弥生時代終末期のものである。

SK14（図版205）

検出状況　調査区北東で検出した。確認調査のトレンチに約半分かかるため、平面的に調査したのは約半分である。

規模・形状　検出したのは南北約１ｍ、東西約0.6ｍであり、深さは0.1ｍである。

埋土　黒褐色粗砂まじりシルトで埋没する。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1262・1263）が出土している。

時期　弥生時代終末期のものである。

SK15（図版205　写真図版191・192）

検出状況　調査区の東端で検出した。

規模・形状　東西2.9ｍ、南北2.2ｍ、深さ0.13ｍの楕円形の土坑である。中央部がやや窪んでいる。

埋土　下層は暗褐色シルトであり、上層は黒色シルトである。上層には炭・土器が多く含まれる。

出土遺物　弥生時代終末期の土器（1264～1268）が出土している。

時期　弥生時代終末期のものである。

３．溝

SD01（図版206　写真図版192・193）

検出状況　調査区北西隅を南西→北東へと走る自然流路である。

規模・形状　幅約５ｍ、深さ0.35～0.5ｍあり、底は平坦である。

埋土　シルトで埋没しており、出土遺物から奈良～平安時代にはほとんど埋没していたようである。

出土遺物　古墳時代～平安時代の土器（1269～1274）と砥石（S199）が出土している。

時期　弥生時代には形成され、平安時代には埋没している。

SD03（図版206　写真図版193）

検出状況　調査区中央部を南北方向に走る自然流路である。本来は南側から続くものであるが、ほ場整備によって削平され、深い部分しか残存していない。

規模・形状　南端では幅約20ｍあり、北側では幅約５ｍである。深さは0.6ｍ前後であり、中央部が浸食により深くなっている。

埋土　シルトによって埋没している。

出土遺物　縄文時代晩期～弥生時代終末期の土器（1275～1284）と石剣（S202）、砥石（S200）、磨石（S203）が出土している。

時期　縄文時代晩期には既に形成されており、弥生時代にはかなり埋没が進んでいる。

第４節　出土遺物

１．出土土器

(1) Ａ地区

SK16出土土器（1245～1248）

1245は口縁端部を拡張し擬凹線を施す甕である。1246はタタキ成形の甕の底部である。1247は壺の底部である。1248は脚台付鉢である。いずれの土器も摩滅が著しく調整は不明瞭である。弥生時代終末期（Ⅵ－１期新段階）のものである。

SK17出土土器（1249）

1249は単純なくの字形の口縁部をもつ甕である。弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものである。

SK18出土土器（1250～1252）

1250は甕もしくは鉢の底部である。1251は脚部である。1252は椀型の杯部をもつ高杯である。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期）のものである。

SD06出土土器（1253～1254）

1253は底部である。1254は脚台である。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものである。

(2) B地区

SK10出土土器（1255～1257）

1255は口縁部を拡張し擬凹線を施した甕である。1256は口縁部が外反する小型の鉢である。1257は口縁部を拡張し端面に擬凹線を施す鉢である。これらは弥生時代終末期（Ⅵ－1期）の土器である。

SK11出土土器（1258～1260）

1258は小型の壺の口縁部である。1259は高杯の脚部、1260は口縁部を外反させた高杯である。これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期）のものである。

SK12出土土器（1261）

1261は脚台付の鉢である。弥生時代終末期のものである。

SK14出土土器（1262・1263）

1262は鉢の底部である。1263は脚台である。弥生時代終末期のものである。

SK15出土土器（1264～1268）

1264は端面に凹線文を施した壺の口縁部である。1265は壺の底部である。1266は口縁部を拡張した甕の口縁部である。1267は口縁部を拡張した壺である。1268は底部に突帯をめぐらせる鉢である。これらの土器は弥生時代終末期のものである。

SD01出土土器（1269～1274）

1269～1271は弥生時代終末期の土器である。1269は椀形の杯部をもつ高杯である。1270は内面をヘラケズリする高杯の脚部である。1271は椀型の杯部をもつ高杯である。1272・1273は奈良時代の須恵器杯である。1274は古墳時代の須恵器杯蓋である。

SD03出土土器（1275～1284）

1275・1276は縄文時代晩期の土器である。1275は口縁部に突帯文を巡らせる壺である。1276は突帯文を巡らせる深鉢である。1277～1284は弥生時代終末期の土器である。1277は口縁部に擬凹線を施す長頸壺である。1278・1279・1280は甕、1281～1284は有孔鉢である。

包含層出土土器（1285～1288）

1285は弥生時代終末期の台付鉢である。1286・1287は須恵器杯Bである。1288は平安時代後期の須恵器椀である。

2．出土石器

S199・S200は砥石である。S200は赤紫色の凝灰質細粒砂岩製で、細長い中央部分の破片。3面残る砥面のうち2面がよく使用され凹面を形成する。S201は石皿である。S202は細粒砂岩を用い、上下端部を敲打するほか、側面からの剥離により横断面形を菱形ないしはレンズ状にする意図が看取される。小形の磨製石剣の未製品の可能性が考えられる。S203は敲打具で下端につぶれ状の痕跡が認められる。

表裏両面に磨耗した箇所が認められ、磨石的な使用方法も想定される。

第５節　小　結

下野村遺跡では縄文時代～中世の遺構が認められた。中心となるのは弥生時代終末期であるが、土坑と溝のみであり集落の中心部からははずれている。地形を考慮すれば、集落の中心は扇状地の上側、すなわち調査区の南側にある可能性が高い。下野村遺跡の東側には竹田川上流域の拠点集落である七日市遺跡があり、下野村遺跡は七日市遺跡の分村ととらえることができる。またＢ地区の西側で古墳時代後期から奈良時代の遺物が出土している。調査区内で遺構は認められなかったが、その南側に同時期の集落がある可能性が高い。いずれの時期の集落についても調査区内ではその縁辺部を調査したにすぎないが、隣接地に弥生時代から中世にいたる時期の集落が存在する可能性を示唆するデータを得ることができたのが最大の成果である。

第6章　まとめ

第1節　弥生時代の七日市遺跡

弥生時代における七日市遺跡の集落構造については調査中から機会のあるごとにその概要を紹介してきた（多賀2000・2002bなど）が、出土遺物の詳細な検討を通じて、各遺構の時期比定に若干の誤りがあったことが明らかになった。七日市遺跡の遺構の変遷過程については今回提示するものを確定版とし、本報告刊行以前の内容を修正する。また以下の記述で用いる時期区分（Ⅰ～Ⅵ期）は、丹波地域の土器編年案（多賀2002a）に対応するものである。

弥生時代前期（Ⅰ期）

約24,000年前の最終氷期、姶良カルデラから噴き上がる火山灰が大地を覆った後、久しく人類の足跡が消えていた七日市遺跡の地に、再び人類の足跡が印されるのは縄文時代晩期のことである。この時期の痕跡はわずかにD地区旧河道SR01から出土した突帯文土器の存在が物語るのみであり、いかなる生活を送る人々がこれを残したものかは、ひとつの遺構も検出していないため伺いしれない。氷上郡では青垣町応相寺遺跡で突帯文土器と弥生時代前期新段階の土器が共伴しており、おそらく七日市遺跡のこの土器も、縄文文化の担い手たる狩猟採集生活者が残したものと考えるよりも、大陸から伝来した稲作を試みた最初の弥生人が、高燥な山を下り平野の低湿地の泥にその足を埋めた第一歩であると考えるべきであろう。昭和59・60年の調査において出土している最古の弥生土器はまさしく前期新段階のものであり、氷上郡の「弥生化」はここから始まるのである。

弥生時代前期の遺構は七日市遺跡を形成する3筋の河道に分断された3つの微高地のうち、最も広く高い東側の微高地の上にまばらに営まれている。確実な住居跡はなく、土坑がわずかに検出されているだけであり、河道の周辺に広がるわずかな低湿地を水田化する小規模な集落であったようである。これが後に兵庫県下屈指の大集落に成長する七日市遺跡の原点であり、その始まりは通常の農耕集落としてのものであった。

弥生時代中期初頭（Ⅱ期）

弥生時代前期に始まる集落はその後大きな変化もなく続いていたようである。この時期の遺構も最も東側の微高地の上に点在するが、確実な住居跡はない。この時期で特筆すべきことは、周溝墓や木棺墓から構成される墓域の形成が始まることである。居住域が広がる微高地の西側段丘崖に近いところに、最初の方形周溝墓が営まれている。方形周溝墓は小型のものであるが、周辺の木棺墓のうちのいくつかはこの時期のものである可能性もあり、墓域の形成当初から周溝墓と木棺墓という階層性が存在した可能性も考えられる。

弥生時代中期前半（Ⅲ期）

弥生時代前期にこの地に定着した人々は、世代を重ね小規模な集落を維持してきたが、弥生時代中期前半になってその活動の領域を大きく広げ、東西・南北300m以上の広い範囲に生活の痕跡を残すよう

になる。その変化はまず居住域の移動から始まるようであり、Ⅲ期の生活の痕跡はJ・K地区といった南側のエリアに偏っており、その本体は今回の調査範囲のさらに南側にあることが伺われる。前時期までの居住域であった東側の微高地には引き続き円形・方形の周溝墓と木棺墓が築かれ、広い範囲が墓域として利用されていたようである。この墓域はさらに拡大を続け、Ⅲ期の後半にはA地区やC地区にまで広がってくる。C地区の墓域は周溝墓の規模に大小が見られ、周溝墓の中にも階層性が明確になってくる。

弥生時代中期後半（Ⅳ期）

Ⅲ期からⅣ期の間には谷部の埋積が進み、七日市遺跡は次第に平坦化してゆく。埋没した河道を掘削して新たな水路が造られるなど、大規模な土木工事が行われている。おそらくこの地形変化の影響によってであろう、Ⅳ期に入ると居住域は再び大きく移動することになる。南側のJ・K地区の居住域での生活の痕跡が希薄になるのに連動して、北側のA地区付近に住居が集中するようになる。また東側の微高地の上にも、周溝墓群を避けるように住居が築かれるようになる。この居住域は拡大を続け、次第にⅢ期の墓域を浸食してゆく。居住域の中には竪穴住居、土坑などが造られ、多くの柱穴が掘立柱建物の存在をうかがわせる。

この居住域の拡大に伴い、墓域は居住域の南側に移動し、ここに累々と方形周溝墓群がⅣ期末まで築かれる。また方形周溝墓群に付随して、その周辺部に木棺墓や土器棺墓からなる墓域が形成される。L地区には木棺墓群と周溝墓群の中間的な小型周溝墓を伴う木棺墓群が形成されるなど、社会構成の複雑化を伺わせる現象が見られるようになる。

弥生時代後期（Ⅴ期）

弥生時代中期後半に東西300m、南北500m以上の範囲に広がり、最大規模にまで達した七日市遺跡は、Ⅴ期になると突如として人跡が希薄になる。Ⅴ期初頭の竪穴住居がわずかにあるのみであり、以後Ⅴ期末に至るまで遺構は存在しない。これは出土遺物からも伺われ、Ⅴ期の遺物は七日市遺跡からはほとんど出土していない。この七日市遺跡の欠落時期に、遺跡の南約2kmに国領遺跡が営まれていることを考えると、七日市遺跡の居住者たちはその土地を離れ、大きく居住域を移動したと考えるのが妥当であろう。F地区SR01の埋没状況を見ると、Ⅳ期末の土器を包含した砂礫層が厚く堆積しており、また他の河道や溝もⅣ期末頃には砂礫によって埋没している。中期末に大規模な洪水があり、七日市遺跡の繁栄に何らかのダメージを与えたことが推察されるが、後期初頭まで集落自身は継続しているので、他の社会的な要因と相まって集落が放棄されたのであろう。

弥生時代終末期～古墳時代前期（Ⅵ期～Z期）

後期末～終末期のはじめ頃、七日市遺跡に再び人々が姿を現す。Ⅵ期の竪穴住居は東側の微高地の全域、A地区の全域など遺跡の北側を中心に広い範囲に高密度で営まれる。切り合いや建て替えがなく、ほぼ同じ方位に主軸を向けて並ぶ住居群は、そこに計画的な匂いさえ伺われる。この時期の集落は純粋な居住域のみしか把握できておらず、中期まであれほど盛んにおこなっていた造墓活動が、少なくともこれまでの調査範囲の中では認められない。丹波地方では日本海側の地域通有の現象として、弥生時代後期から墓制が丘陵上の台状墓に移行し、平地の墓は原則消滅する。七日市遺跡でも同じ理由により、

平地での造墓が止むのであろう。

この時期が七日市遺跡の弥生集落としての終焉の時であり、これ以降古墳時代の人々の生活の痕跡はこの遺跡からぷっつりと消え去るのである。

まとめ

七日市遺跡は水稲耕作の開始とともに形成が始まり、中期前半に飛躍的に集落規模を拡大する。そして中期後半には居住域、墓域ともに拡大し、複雑な社会組織をもった集落としてその繁栄の頂点に達する。しかし後期初頭、突然集落は放棄され、国領遺跡など周辺の遺跡に移動する。この状況が弥生時代後期末まで続くが、終末期になると再び居住域が形成され、ほぼ中期に近い規模の集落が復活する。集落の終焉は古墳時代前期初頭であり、この時期をもって再びこの集落は放棄される。

このような集落構造の大きな変革は何に由来するのであろうか。集落そのものとしては、七日市は弥生時代後期の一時期を除き、弥生時代前期から古墳時代前期までの長期間にわたって継続しており、一見安定した生活が継続されてきたように見える。しかしその実態は安定には程遠い、頻繁な居住エリアの変更を余儀なくされたものであった。

今回の調査では集落の生産域についての情報は得られるところが少なく、居住域・墓域・生産域の変化の相関関係を把握するには至っていない。このため集落構造の変化の要因を、弥生時代を通じて進行した河川の埋没と地形の平準化の過程における、洪水等の自然災害に帰することができるかどうかは不明である。七日市遺跡も、石庖丁等の農具の出土が示すように基本的には農耕集落であり、自然環境の変化への対応が集落構造を規制したことは否定できないが、それだけでは説明できない変化も存在する。弥生時代中期後半（Ⅳ期）を通しての急激な集落の膨張と断絶は、自然環境への適応に伴う変化だけでは理解が難しい。そこに社会的、経済的な背景を想定するべきであろう。Ⅳ期の土器に顕著になる播磨地方からの強い影響は、播磨と丹波の交流の緊密性を示すものであり、この背景に南からの盛んな人と物の動きがあることは言うまでもない。

七日市遺跡は由良川流域の日本海側世界と加古川流域の瀬戸内側世界の接点に位置しており、その地理的特性は日本海側地域への瀬戸内側地域由来の物資の供給拠点となりうるものである。七日市遺跡を経由して日本海側地域にもたらされた代表的な物資は、ほとんどの武器・利器の素材として不可欠のものであるサヌカイトであったであろう。七日市遺跡の繁栄の要因は、この讃岐金山産サヌカイトの供給を軸とした石器流通システムに求めることが状況としては最もふさわしい。石器の出土量が激減し、石器流通システムが解体に向った結果、弥生時代後期に七日市遺跡も集落としての存立基盤を失うのであろう。

七日市遺跡が再び大規模な集落となる弥生時代後期末から終末期は、丹後の王墓に副葬された豊富な鉄製品が示すように、丹後を核とした鉄器流通システムが形成されており、七日市遺跡は中期とは逆に、日本海側世界の瀬戸内側世界への窓口として機能することになる。土器に見られる丹後の強い影響がこれを雄弁に物語っている。しかしその繁栄も長続きはせず、古墳時代に入り丹後から畿内へと鉄器流通の中核が移るとともに、流通拠点としての七日市遺跡の役割は終焉を迎える。以後、奈良時代に至るまで、七日市遺跡に再び人々の足跡は消えるのである。

七日市遺跡は農耕集落として出発し、物流拠点として繁栄した集落であり、摂津・播磨・丹後・近江など周辺地域との交流の拠点、「であいの地」であったと言えるだろう。

（参考文献）
多賀茂治　2000「石と鉄をめぐって－弥生時代－」『七日市遺跡と「氷上回廊」』
2002a「兵庫丹波における弥生土器の様相（予察）」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要第２号』
2002b「兵庫丹波地域における弥生集落の動態」『みずほ』第37号

第２節　奈良・平安時代の七日市遺跡

七日市遺跡(1)は昭和56年度以来調査を継続し、南東に位置する山垣遺跡(2)も含め広範囲で当該期の遺構を多数検出している。特に昭和59・60年度は広い面積で調査を行い、検出遺構を地方官衙と想定するなど多くの成果を得ている。今回の調査は昭和59・60年度調査区を拡張する形で行ったため、遺構は先の調査のもと一体をなし、成果についても補完・追認するものといえる。ここでは昭和59・60年度調査区での成果も合わせて奈良・平安時代の七日市遺跡について概観したい。

１．出土遺物

出土した当該期の遺物の大半は土器であり、他に少量の鉄器がある。木器も出土しているが図化できるものはなかった。出土はＥ・Ｌ地区東半部とＭ・Ｆ地区に限られ、中でもＦ地区東半部の溝と旧河道の上層、そしてこれらを埋める整地土からのものが大部分を占める。柱穴や土坑などの遺構から出土した遺物は少ない。墨書土器はいずれも破片であり、記載文字についても新たな知見を加えるものはない。

出土土器の傾向については、土師器より須恵器の出土が多く、須恵器でも小型の杯が多く出土する傾向にあり、この傾向は前回の報告と同様である。

七日市遺跡では過去の調査において木簡や墨書土器などの文字資料の他、石帯や木製祭祀具など官衙的要素の強い遺物が出土しているが、今回の調査では稜椀や硯などが少量出土したのみで、特に官衙的な要素の強い遺物の出土はみられなかった。

２．検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構は掘立柱建物や溝であり、他に若干のピット、土坑などを検出した。

掘立柱建物

Ｍ地区24棟、Ｆ地区５棟の計29棟の掘立柱建物を検出した。周辺部での過去の調査を含めると70棟以上の掘立柱建物を検出したことになる。

側柱建物はＭ地区で完掘した掘立柱建物のうち４棟あり、そのうち３棟が２間×５間、１棟が２間×４間である。隣接調査区で検出した建物に続く可能性のある建物も２間×５間か２間×４間となる可能性が高い。いずれの建物も南北棟で床面積は最大で58.0 ㎡、平均54.7 ㎡を測る。過去の調査も含めると、床面積が50 ㎡を超える建物は10棟を数え、周辺地域の集落遺跡と比較すると、大型建物の占める割合は高いといえる(3)。このうち最大規模の建物である[SB105]（昭和59・60年度調査区検出の遺構は[] で示す）は100 ㎡を越す。[SB105]は床面積だけでなく個々の柱穴の規模も大きく、形状も整うなど一般集落の建物とは一線を画している。

今回の新たな成果は、Ｍ地区西半部で倉庫と考えられる総柱建物群を検出したことである。総柱建物の数はＭ地区検出の建物の半数以上を占め、２間×３間と２間×５間の建物を各１棟、２間×２間ある

第13図　条里制地割と奈良・平安時代の遺構

いはその可能性のある建物13棟を検出している。ただしこれら建物の中には近接･重複するものがあり、すべてが同時併存するものではない。２間×５間の建物であるSB12は中央に仕切りをもち、２間×２間の倉庫2棟を合わせたような構造になっていたと考える。

総柱建物のうち完掘できた10棟をみると床面積は最小7.3 ㎡、最大26.7 ㎡を測り、平均15.3 ㎡である。同様の倉庫群が検出された遺跡と比較すると、昭和57年度調査区検出の６棟は、最大22.5 ㎡、平均16.6 ㎡[4]、市辺遺跡（推定氷上郡衙関連施設）検出の９棟の床面積は９～24 ㎡[5]、吉田南遺跡（推定明石郡衙）検出の13棟は、最大36.1 ㎡、平均17.4 ㎡である[6]。本調査区検出の倉庫はこれらと比較するとやや小型ではあるが、これは他の遺跡よりも２間×２間建物の占める割合が高いからと思われ、

同規模の建物を比較すると大きく異なる規模ではない。いずれにしても郡衙の正倉とするには小型であるが、正倉以外の目的の倉庫としては標準的な規模と考えていいだろう。

今回検出した建物の大半は南北棟であり、その桁行方向を分類すると下記のように分類できる。

① ほぼ座標北を示すもの：M地区 SB05・SB07・SB14、F地区 SB04

② 座標北から5° 程度西偏するもの：M地区 SB01・SB04・SB09・SB11・SB15・SB20・SB23・

③ 座標北から10° 程度西偏するもの：M地区 SB03・SB06・

④ ①と②の中間的なもの：M地区 SB08・SB13・SB16・SB19・SB22

⑤ ②と③の中間的なもの：M地区 SB10・SB12・SB18・SB21・SB24、F地区 SB06

⑥ 座標北から70° 程度西偏するもの：F地区 SB01・SB02

⑥の建物の分布がF地区に限定される以外は全ての建物の桁行方向はほぼ座標北から10° 西偏する範囲に収まる。調査区一帯にみられる条里制地割はN5° W程度の偏りをみせるが、建物の桁行方向もこの方向を示すものが最も多く、その他の建物もほぼ±5° の範囲で収まること、同方向の建物が必ずしも同一の群をなさないことなどから建物の方向は条里制地割を意識したものと考えることができる。

溝

検出した主な溝は南北方向ののびるもの5本、東西方向にのびるもの1本である。その多くは昭和59・60年度調査区検出の溝に続き、一帯の条里制地割とも一致する。

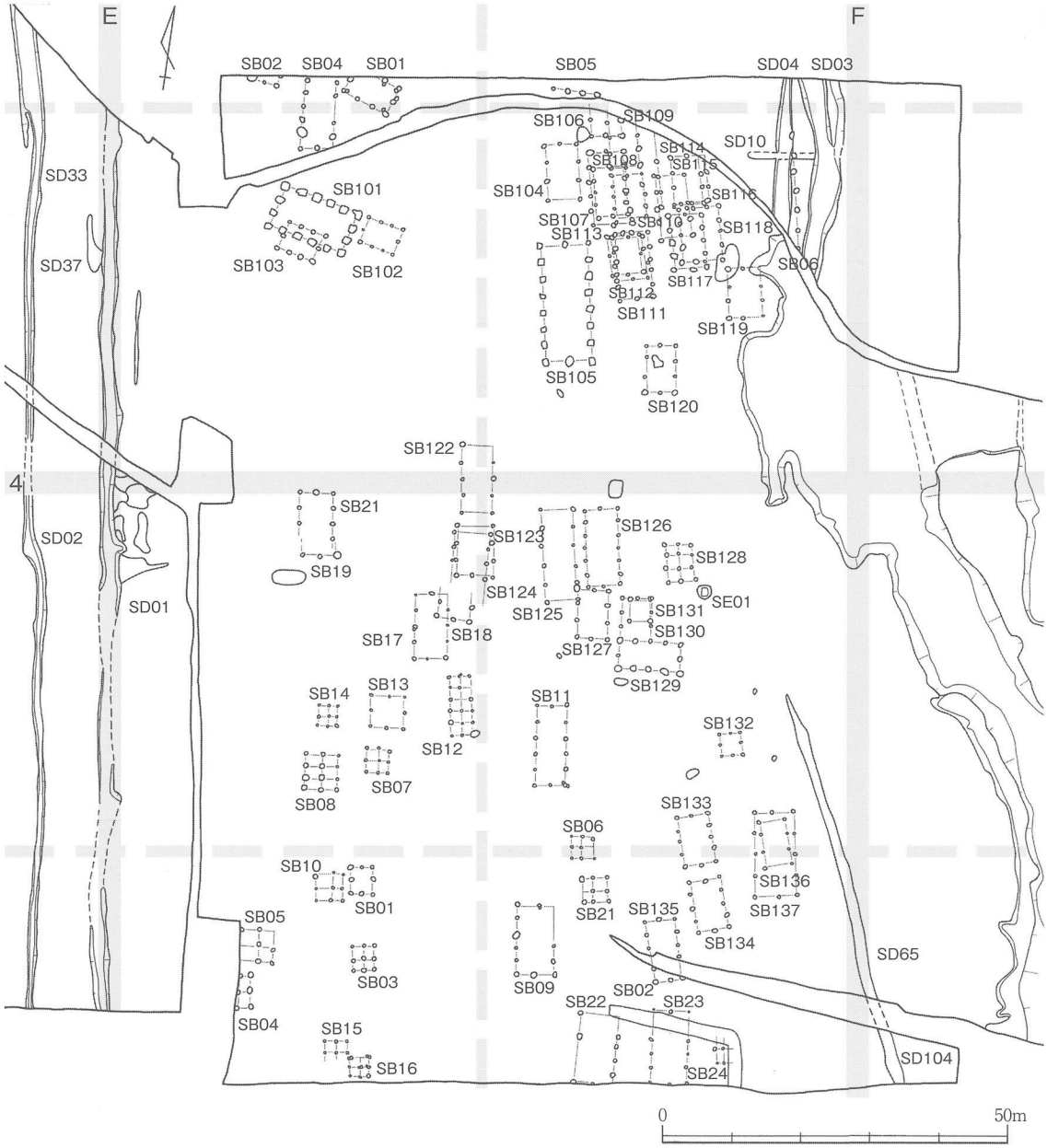
E、L地区 SD01・02 は、前回の調査時に丹後道の道路側溝である可能性が指摘された［SD33・37］の南側に続くもので、さらに南側調査区外へのびている。道路遺構に関しては、今回の調査では肯定も否定もする資料を得ることはできなかった。SD01は里界線と一致しているが、SD02と埋没時期に差がある可能性があること、F地区 SD03、04もほぼ里界線に一致する溝で2本が平行していることから、ある時期に里界線が移動したとも考えられる。丹後道は山陰道から分岐して丹後国府に至る街道であるが、地理的に七日市遺跡に近接して通過していることは間違いなく、丹後道の道路遺構であるか否かの判断は諸学による丹後道の復元や近隣での調査例の増加を待ち、改めて検討する必要があるだろう。

3．遺跡の範囲

今回の調査区で当該期の遺構が分布する範囲は、調査区の東端にあたるF・M地区のほぼ全域とE・L地区の東半部に限られ、その他の地区では当該期の遺構は全く検出していない。これは昭和59・60年度調査区の成果とも合致する。

すでに前回の報告において当該期の遺跡の範囲について検討されている。これによれば、遺構の分布する範囲は、東西については、［SD33･37］を西端、旧河道西岸と［SD65］付近を東端とする、と考えた。今回の調査では、西端となる［SD33・37］の南側に続くE・L地区 SD01・02を検出し、その西側では同様に遺構を検出していない。また東端については、今回、旧河道西岸付近でF地区 SD03･04を検出し、これを北半部における東限と考える。南半部については［SD65］に続くM地区 SD104 を検出し、これより東側では遺構を検出していない。今回の調査は前回の調査結果を追認したといえよう。

南北の端については今回の調査では、南北いずれにも遺構が続くことを確認したが、遺跡の端を確定するには至らなかった。ただ、周辺での調査結果や地形から北端は国道175号線付近、南端は昭和57年度調査区付近と推定しうる。昭和57年度調査区は本調査区の南側約150ｍに位置し、南北棟の掘立柱建物11棟を検出、うち6棟の倉庫はM地区検出の倉庫群と同様に南北方向に直列している。これらから



第14図　奈良・平安時代遺構配置図

七日市遺跡における当該期の遺構の広がりは東西約100ｍ、南北500ｍ以上と想定される。なお、本調査区から南東約350ｍに位置する山垣遺跡とは旧河道により隔てられるが、七日市遺跡同様に条里制地割に規制され、出土遺物にも連続性、同時性がうかがえ、１つの遺跡群として把握できると考える。

七日市遺跡の立地する竹田川左岸の春日町七日市から棚原、野村の一帯には条里制地割が広範囲に認められた。1980年代に行われたほ場整備により地割は改変されてしまったが、現在でも道路などにその名残を読み取ることができる（第13図）。これを拡大し、条里制地割を奈良・平安時代の遺構が検出できた地区に重ね合わせたものが第14図である。調査区内には里界線Ｅ･Ｆと条界線４が通っているが、検出した溝はこの地割とほぼ合致し、遺構の分布を規制している。

里界線ＥはＥ・Ｌ地区SD01（[SD37]）と、里界線ＦはＦ地区SD03・04 とほぼ一致し、遺跡の東西を限るものと考える。ただし南東部については、里界線Ｆでなく旧河道西岸とこれに平行するＭ地区SD104（[SD65]）によって規制されるようである。

4．建物の配置

里界線に合致する溝によって遺構の分布が規制されることは先に述べたが、さらにその内側についても溝、柵などの区画施設は検出していないが、建物の並びや疎密から見て里界線Ｅ・Ｆの半町にあたる坪界と条界線４によって少なくとも４ブロックに分けられていると考えられる。建物の中には桁行、梁行を条界線や坪界線に揃えるものがある他、条界線沿いに空白地が帯状に認められる。また各ブロックで建物の規模、構造などに違いが認められる。

北東ブロック　里界線Ｅ・Ｆの半町以東、条界線４以北にあたる。北側の状況は調査区の制約により明らかにしえないが、検出した建物も多く、同じ場所で複数の建て替えが認められる。またここには七日市遺跡でも最大規模の［SB105］、同様の規模をもつと推定されるＦ地区SB06がある。大型建物とそれに伴う数棟の中・小規模の建物から構成されるブロックである。

南東ブロック　条界線４以南、里界線Ｅ・Ｆの半町以東にあたる。さらに条界線４・５の半町付近を境に南北の２群に細分できそうである。南北棟の側柱建物を主体とし、数棟の総柱建物がこれに伴う。平面積が50 ㎡を超える大型の建物もあるが、柱穴の規模は小さく、並びもやや整然さを欠く。また建物の重複も少ない。ここで特徴的なのは建物に井戸が伴うことである。北端で［SE01］を検出したほか、［SE01］の南側約100ｍの地点でも井戸が検出されており、七日市遺跡検出の井戸はこのブロックのほぼ１町の中に納まる。数棟の側柱建物と１、２棟の倉庫、そして井戸から構成される建物群である。

南西ブロック　条界線４以南、里界線Ｅ・Ｆの半町以西にあたる。北半部に側柱建物が集まる他は２間×２間を主体とする倉庫が南北に直列する。さらに詳細に群内の建物をみると、南北に並ぶ２棟程度を１単位としているように見受けられる。南北約15ｍの範囲内に２棟の建物を配置、さらに約10ｍの間隔をおいて次の建物を建てている。このうちSB01・10の北辺が条界線４・５の半町に合致する。

北西ブロック　条界線４以北、里界線Ｅ・Ｆの半町以西にあたる。このブロックは２つの特徴がある。まず遺構が希薄であること、条里制地割の方向と大きく異なる方位の建物が存在することである。検出建物の桁行方向は70°程度西偏するが、柱穴内から出土した土器は他のブロックの建物の時期と大差なく、なんらかの理由で地割による規制を受けなかったと思われる。これらの建物群は今回検出したＦ地区SB01･02も含めてさらに北側へ広がる可能性がある。なお本ブロックの中心的建物である［SB101］は山垣遺跡検出の建物と同一規模・規格で造られ、両遺跡の関連をうかがわせる。

5．遺跡の性格について

七日市遺跡で検出した建物は、一般集落と比較すると、大型建物や倉庫の占める割合が高いといえる。特に最大規模の［SB105］については、庇などは持たないが構成する柱穴の規模も大きく、形状も整うなど一般集落の建物とは一線を画しているといえよう。また、多数の建物は雑然と存在するのではなく、建物群の中にある程度意図された配列をみることができる。南西ブロックの倉庫群と南東ブロックの側柱建物群は並列するが、一定の距離を保ち、交わることはない。このような建物配置は同じ氷上郡内の市辺遺跡や播磨国明石郡の吉田南遺跡など郡衙あるいはその関連施設の一角に見ることができる。また過去の調査において官衙的要素の強い遺物が出土していることからも七日市遺跡が地方官衙である可能性は高いといえよう。氷上郡衙は氷上郷にあたる氷上町氷上付近に有力な推定地があるので、七日市遺跡は郡衙以外の行政施設ということになる。氷上郡は16郷を管轄する大郡であり、郡域が加古川、由良川両水系に跨るなど郡を分割統治する諸要因があり、山垣遺跡出土の文字資料から氷上郡東部を掌握

する郡衙別院とする指摘[7]は妥当と考えられる。

郡衙別院は郡衙の行う職務全般を分割されているのではなく、少なくとも七日市遺跡においては機能が特化または簡略化されていたと思われる。まずコ字、L字状など整然とした官衙的な建物配置がみられないことから、いわゆる郡衙の中枢域的なエリアが明確化されておらず、そこで行われるべき政務的な機能は弱かったと思われる。一方、建物の多くが河道に面し、倉庫が多くあることから物資の集荷を行う性格がより強かったと思われる。七日市遺跡付近は由良川水系の竹田川が最も加古川や山陰道に接近する地点であり、丹後道もそばを通過するなど水陸両方の交通に恵まれた立地を示している。明確な遺構は検出していないが、津としての性格をもち、税物の集積などを行う機能も兼ねていた可能性は高い[8]。丹後道、竹田川を介して丹後国や氷上郡東部をはじめとする丹波国各郡と氷上郡衙、山陰道、加古川を結ぶ中継地点とした場合、恵まれた立地条件であると考える。出土した文字資料に六人部里(天田郡)、伊干我郡など氷上郡以外の地名が見られることから、単に氷上郡東部を担当する行政施設にとどまらず、水陸運により少なくとも丹波国レベルで税などの物流を担っていた施設と考えたい。

七日市遺跡において古墳時代は空白時期であり、今回検出した掘立柱建物群は8世紀に突如として造営された感がある。周辺に集落が存在する可能性を残すものの、現状ではこの建物群が古墳時代集落や有力者の居宅から継続して発展したものとは考え難い。氷上郡東部においては現市島町の竹田郷付近に郡内唯一の古代寺院である三ッ塚廃寺があり、古墳や想定される集落などの分布状況[9]などからも在地有力者の本拠地にふさわしい地と思われる。七日市遺跡の所在する春部郷は氷上郡東部では西に偏る地点である。郡衙推定地とも直線距離で7㎞程度しか離れておらず、途中に交通の障害となる地形もない。在地有力者の本拠地と考えられる竹田郷でなく春部郷の地に官衙を設置したのは、水陸運を重視し、郡衙や山陰道を介した中央を指向したものと考える。

註

(1) 兵庫県教育委員会『七日市遺跡』(Ⅰ)第3分冊　兵庫県文化財調査報告書第72冊－3　1991年　以下昭和59・60年度の調査成果はこれによる。

(2) 兵庫県教育委員会『山垣遺跡』兵庫県文化財調査報告書第75冊　1991年　以下山垣遺跡の調査成果はこれによる。

(3) 森下衛「京都北部における古代の集落」『京都府埋蔵文化財論集第4集』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2001年

(4) 氷上郡教育委員会『昭和56年春日町棚原記録保存地区埋蔵文化財実績報告書』掲載の表から計算した。

(5) 種定淳介「兵庫・市辺遺跡」『木簡研究』22　木簡学会　2000年

(6) 吉田・片山遺跡調査団『吉田南遺跡7次調査現地説明会』1978年　掲載の表から計算した。

(7) 平川南『古代地方木簡の研究』吉川弘文館　2003年

(8) 山中敏史「奈良・平安時代の山垣・七日市遺跡」『七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館2000年

(9) 氷上郡埋蔵文化財調査団・奈良大学文学部考古学研究室『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(1)－兵庫県氷上郡市島町－』兵庫県氷上郡教育委員会　1994年

第３節　平安時代の集落

１．集落の立地

平安時代の居住域は七日市遺跡の中でも、県道春日栗柄線をはさんだＤ・Ｇ・Ｈ・Ｐ～Ｒ地区に集中している。検出された遺構は掘立柱建物40棟・井戸６基・土坑などで、建物の分布から「中央居住区」「東居住区」「西居住区」「西外居住区」の４グループに分類することができる。

中央居住区

Ｄ・Ｇ・Ｐ地区とＱ地区の東側に位置するグループで、最も大きな集団を形成し、県道春日栗柄線の両側に建て並んでいる。おそらくこの道は当時から条里の坪境であり、主要な通路ともなっていたため、長期間にわたって建て替えが繰り返されたのであろう。

このグループに属する建物はＤ地区SB01～07、Ｇ地区SB01～05・07、Ｐ地区SB01、Ｑ地区SB07～13・15・18の23棟で、南北軸の方向で３つに分類した。

真北かやや東にふれる「N0°～N5° E」の方位をとるのはＤ地区SB01・05・06、Ｐ地区SB01、Ｑ地区SB10 の５棟である。そのうちある程度時期の判る土器が出土しているのはＤ地区SB01 で、11世紀代～12世紀初頭の年代が与えられる。

真北よりやや西にふれる「N3°～N8° W」の方位をとるのはＤ地区SB02～04・07、Ｇ地区SB01・04・05・07、Ｑ地区SB08・09・15・18 の12棟である。そのうち最も出土土器が多いＧ地区SB01 は12世紀前半代のものである。このＧ地区SB01 に属するSK01 とＤ地区SB02 に属するSE01 の土器様相がほぼ同じであることから、双方の建物も併行するものと考えられる。他の建物からはまとまった土器が出土していないため時期は判然としないが、概ね11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。またこれらの建物のうち、Ｄ地区SB02～04・07の４棟は整然と配置されており、セットになるものとみられる。同様にＧ地区SB01・04もセット関係が確実である。

最も西にふれる「N9° W～N12° W」の方位をとるのはＧ地区SB02・03、Ｑ地区SB07・11～13の６棟である。そのうちＧ地区SB03に属するSE02の出土土器は12世紀後半の年代が与えられる。

東居住区

Ｈ地区に単独で建てられたSB01がある。建物の南北軸はN9° Ｗで中央居住区の最も新しい建物群の方位に近いが、出土土器には11世紀代の黒色土器があり、時期的には古い段階に併行するものとみられる。

西居住区

Ｑ地区の中央とＲ地区の西側に位置するグループである。このグループに属する建物はＱ地区ＳＢ01～06・14、Ｒ地区SB01～07の14棟で、中央居住区にならって南北軸の方向で３つに分類した。

ほぼ真北に近い「N1° W」の方位をとるのはＱ地区SB04、Ｒ地区SB03の２棟である。そのうちＱ地区SB04からは12世紀前半の土器が出土している。

真北よりやや西にふれる「N3°～N8° W」の方位をとるのはＱ地区SB01～03・06・14、Ｒ地区SB01・02・04・06の９棟である。そのうちＱ地区SB01からは12世紀代の土器が出土している。

最も西にふれる「N9° W～N11° W」の方位をとるのはＱ地区ＳＢ05、Ｒ地区SB05・07の３棟である。そのうちＱ地区SB05からは12世紀代の土器が出土している。

西外居住区

Q地区の西北隅に位置するグループで、Q地区SB16・17 の２棟が重複する場所に建てられている。両者の方位は「N2～3° W」とほぼ同一であるが、前後関係は不明である。年代の手掛かりとなる遺物はなく、時期不明である。

２．集落の変遷

D・G・H・P～R地区で検出された40棟の掘立柱建物を始めとする中世の遺構群は、出土土器からみて概ね11世紀～12世紀にかけての集落に伴うものであることがいえる。ただし時期を判別できる遺構が限られており、また春日町域における当該時期の土器編年が確立していない現状では、調査成果から導かれる考察にも自ずと限界がある。そういった制約上、ここで述べる集落の変遷は厳密さに欠けていることを予め断わっておく。

集落変遷の手掛かりとなる建物が集中するのは「中央居住区」と「西居住区」で、建物の軸線から３つのグループに分類した。建物の方位に基づいて分類した３つのグループを検討した結果、両地区では概ね同じ傾向を示し、真北かやや東にふれる「N1° W～N5° E」の方位をとる一群は11世紀代～12世紀初頭〔中世Ⅰ期〕、真北よりやや西にふれる「N3° ～N8° W」の方位の一群は11世紀末～12世紀前半〔中世Ⅱ期〕、最も西にふれる「N9° W～N12° W」の方位の一群は12世紀後半〔中世Ⅲ期〕を中心とする年代が与えられる。以上のように「中央居住区」と「西居住区」では、建物の方位は東寄りから次第に西向きに変遷する傾向が認められる。

時期を判別できる遺構・遺物が限られており、柱穴同士の切りあい関係もほとんどないため、建物群の詳細な変遷の提示は不可能であるが、上記の検討から建物群を〔中世Ⅰ期〕～〔中世Ⅲ期〕の各段階に分類できるものとする。

〔中世Ⅰ期〕

建物の分布は「東居住区」「中央居住区」「西居住区」に散在しており、「西居住区」の建物は比較的規模が小さい。

主屋となりうる建物はD地区SB01・H地区SB01 で、棟は南北方向、梁間３間以上、桁行もおそらく４間以上、床面積は100 ㎡前後の規模になると考えられる。それ以外の建物は１×２間～２×３間で、床面積15～35 ㎡程度である。

〔中世Ⅱ期〕

建物の分布は「中央居住区」に主屋とセットになる建物群が複数単位認められ、「西居住区」には一回り規模の小さい建物が分布する。

主屋となりうる建物はD地区SB02・G地区SB01 で、棟は南北方向、梁間４間、桁行４間、床面積は110～120 ㎡前後の規模になる。特にD地区SB02には、東西棟で床面積40～80 ㎡規模の建物がセットになっている。またG地区SB01 にも床面積20 ㎡規模の建物がセットとなる。さらに主屋に井戸・土坑が付設される点も特徴といえる。

一方、「西居住区」の建物は大きいものでも床面積80 ㎡止まりで、30～55 ㎡の建物が中心である。

〔中世Ⅲ期〕

建物の分布は中世Ⅱ期と同様、「中央居住区」に主屋が立地し、「西居住区」には一回り規模の小さい建物が分布する。

主屋となりうる建物はG地区SB02・03で、棟は南北方向、梁間３間以上、桁行４～５間、床面積は

80～110㎡以上の規模になる。SB03には井戸が付設する。「中央居住区」のQ地区側には、東西棟で床面積80㎡規模のSB11の他、40㎡規模の建物が立地する。

「西居住区」では床面積15～80㎡規模の建物が散在する。

なお「西外居住区」の建物はこの段階以降の所産となる可能性がある。

以上、各段階の概要にみられるように、主要な建物群は終始「中央居住区」に立地することが判る。これは現在の県道春日栗柄線が中世条里の坪境にあたり、当時から主要な通路となっていたことを意味するものだろう。

建物の方位はほぼ条里方向に沿っているが、時期差による微妙なズレが認められ、概ね11世紀代～12世紀後半にかけての所産と考えられる。

表4　七日市遺跡平安時代掘立柱建物一覧

地区	遺構名	南北軸	間数		規模		柱間		床面積(㎡)	居住区	時期	備考
			東西	南北	東西	南北	東西	南北				
D	SB01	N2° E	3+ α	2+ α	(7.9)	(8.4)	2.6～2.7	3.1	(48.98)	中央	11c～12c初	南辺に廂付き
D	SB02	N8° W	4	4	9.8	13.0	2.2～2.6	2.6～2.9	109.76	中央	11c末～12c前半	南辺に廂付き
D	SB03	N6° W	3	2	7.8	5.1	2.4～2.7	2.5～2.6	39.78	中央	11c末～12c前半	
D	SB04	N6° W	4	3	10.2	8.2	2.4～2.6	2.6～2.9	83.64	中央	11c末～12c前半？	
D	SB05	N0°	1	2	2.7	5.6	2.7	2.7～3.1	15.12	中央		
D	SB06	N5° E	2	2	5.0	7.0	2.4～2.6	3.4～3.7	35.0	中央		
D	SB07	N5° W	4	2	9.6	5.9	2.0～2.7	2.6～3.0	56.64	中央	11c末～12c前半？	
G	SB01	N5° W	4+ α	4	(10.2)	12.5	2.4～2.7	3.1～3.3	(120.22)	中央	12c前半	
G	SB02	N11° W	3+ α	4	(7.6)	10.8	2.2～2.8	2.6～3.0	(82.08)	中央		
G	SB03	N9° W	3+ α	6	(7.2)	15.6	2.3～2.5	2.7	(112.32)	中央	12c後半？	南辺に廂付き
G	SB04	N5° W	2	2	4.6	4.9	2.2～2.5	2.2～2.6	22.54	中央		
G	SB05	N6° W	3	2	6.2	4.1	2.0～2.1	2.0～2.1	25.42	中央		
G	SB07	N5° W	1	2	2.0	5.7	1.8～2.0	2.8～2.9	11.4	中央		
H	SB01	N9° W	3	3+ α	7.9	(9.9)	2.6～2.8	3.2～3.4	(78.21)	東	11c末～12c初	
P	SB01	N1° E	1	2	5.3	6.4	5.3	3.0～3.4	33.92	中央		
Q	SB01	N5° W	2	4	5.0	10.9	2.3～2.7	2.4～3.0	54.5	西	12c代	
Q	SB02	N3° W	2	2	5.0	6.4	2.4～2.6	2.8～3.7	32.0	西		
Q	SB03	N4° W	3	2	7.4	5.8	1.8～2.8	2.7～3.0	42.92	西		
Q	SB04	N1° W	2	2	4.5	4.6	2.1～2.5	2.1～2.5	20.7	西	12c前半	
Q	SB05	N9° W	2	3	4.6	6.7	2.2～2.4	2.2～2.3	30.82	西	12c代	
Q	SB06	N5° W	2	2+ α	5.3	(4.6)	2.5～2.8	2.0～2.4	(24.38)	西		
Q	SB07	N10° W	2	2+ α	5.5	(4.8)	2.6～2.8	2.4	(26.4)	中央		
Q	SB08	N5° W	2	3	6.3	8.0	1.8～4.5	2.5～2.9	50.4	中央	11c末～12c初	
Q	SB09	N6° W	2+ α	4	(5.2)	11.2	2.0～2.8	2.2～3.2	(58.24)	中央	12c前半	
Q	SB10	N0°	α	3	-	7.9	-	2.1～2.9	-	中央		
Q	SB11	N12° W	4	3	9.4	8.2	1.9～2.7	1.9～2.7	77.08	中央	12c代	
Q	SB12	N10° W	2	2	5.4	7.7	2.7	3.7～3.9	41.58	中央		
Q	SB13	N11° W	1+ α	4	2.7	10.8	2.7	2.5～2.9	(29.16)	中央	12c後半	
Q	SB14	N5° W	1	1	2.0	1.8	2.0	1.8	3.6	西		
Q	SB15	N3° W	2	2	5.0	5.8	2.3～2.7	2.7～3.2	29.0	中央	12c前半	
Q	SB16	N3° W	2	2	4.6	6.5	2.3～2.6	3.0～3.5	23.14	西外		
Q	SB17	N2° W	2	2+ α	4.6	(4.0)	2.3	1.9～2.0	(18.4)	西外		
Q	SB18	N4° W	α	3	-	6.0	-	2.0	-	中央		
R	SB01	N3° W	3	2+ α	7.8	(5.7)	2.3～2.8	2.6～3.1	(44.46)	西		
R	SB02	N4° W	3	3	7.4	9.3	2.1～2.6	2.4～3.7	55.59	西		
R	SB03	N1° W	2	2+ α	7.2	(4.6)	3.5～4.0	1.6～3.1	(33.12)	西		
R	SB04	N3° W	2+2	4+ α	10.7	(11.0)	2.3～3.4	2.5～2.9	(80.17)	西		
R	SB05	N9° W	2	3+ α	8.2	(10.2)	3.0～5.2	3.1～3.9	(74.34)	西		
R	SB06	N8° W	1	1	2.3	1.8	2.3	1.8	4.14	西		
R	SB07	N11° W	1	2	2.5	5.6	2.5	2.7～2.9	14.0	西		

表5　七日市遺跡　出土土器観察表

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1	A地区	SH01	弥生土器	細頸壺	4.80	(5.00)			口縁部～頸部3/4残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ	口縁部タテヘラミガキ
2	A地区	SH01	弥生土器	壺	(14.60)	(6.00)			口縁部1/4残存	φ7㎜の小石1個、3㎜以下の極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部不明
3	A地区	SH01	弥生土器	広口壺	(16.50)	(4.50)			口縁部～頸部1/6残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ? 頸部ヨコナデ?	口縁部擬凹線／ヨコナデ、頸部タテヘラミガキ
4	A地区	SH01	弥生土器	広口壺	(16.90)	(10.35)			口縁部若干残存	φ5㎜大の小石数個含	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、体部ヨコナデ／板ナデ	口縁部ヨコナデ、頸部タテユビナデ、体部タテハケ後板ナデ
5	A地区	SH01	弥生土器	広口短頸壺	(11.40)	(12.60)			口縁部2/3、頸部1/1、肩部2/3残存	φ1㎝の小石～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部下のみヨコヘラケズリ以下体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ヨコハケ後胴部上のみヨコヘラミガキ
6	A地区	SH01	弥生土器	甕	(13.60)	(4.55)			口縁部1/6残存	φ3㎜大の極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部擬凹線／ヨコナデ、体部タテヘラケズリ
7	A地区	SH01	弥生土器	甕	(13.05)	(11.10)			口縁部1/2残存	φ10mm の小石1個、極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後ナデ	口縁部擬凹線／ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
8	A地区	SH01	弥生土器	甕	(16.20)	(7.30)			口縁部1/2残存	極粗砂、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部擬凹線／ヨコナデ、体部タテハケ
9	A地区	SH01	弥生土器	甕	(10.70)	(6.60)	(11.60)		口縁部1/3、体部若干残存	φ3㎜の小石数個、荒砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ後ナデ
10	A地区	SH01	弥生土器	高杯	(12.40)	(4.75)			口縁部1/9残存	φ4㎜以下の極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ? 見込み部調整不明	口縁部ヨコナデ、杯底部ヨコヘラミガキ
11	A地区	SH01	弥生土器	脚台付鉢		(7.95)			口縁端部・脚端部欠損	φ4㎜の小石～粗砂を多く含む	体部ナデ	体部タテハケ後ナデ
12	A地区	SH01	弥生土器	手焙り		(10.20)			覆部一部残存	φ6㎜の小石～細砂を多く含む	タテ方向のヘラケズリ／ユビオサエ後ナデ	タテ方向のヘラケズリ／刻み目突帯
13	A地区	SH02	弥生土器	広口壺	(19.35)	(1.95)			口縁部のみ若干残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ?	口縁部ヨコナデ
14	A地区	SH02	弥生土器	甕	(13.80)	(3.35)			口縁部～頸部1/10残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
15	A地区	SH02	弥生土器	高杯	(13.50)	(1.90)			口縁部のみ若干	粗砂を少量含む	口縁部不明	口縁部擬凹線／ヨコナデ
16	A地区	SH02	弥生土器	甕	(15.80)	(6.05)			口縁部1/6残存	φ2㎜大の極粗砂を少量含む	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部ハケ後ナデ?
17	A地区	SH02	弥生土器	高杯	(23.50)	(4.10)			口縁部1/11残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部不明	口縁部擬凹線
18	A地区	SH02	弥生土器	高杯脚部		(2.10)		(16.00)	脚端部1/9残存	粗砂を少量含む	ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ／凹線
19	A地区	SH03	弥生土器	広口壺	(15.20)	(1.25)			口縁端部1/10残存	粗砂を少量含む	口縁部不明	口縁部凹線
20	A地区	SH03	弥生土器	台付鉢		(5.15)	(42.80)		体部若干残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
21	A地区	SH03	弥生土器	高杯	(18.95)	(3.10)			口縁部のみ若干残存	極細砂を少量含む	口縁部不明	口縁部ヨコナデ?／凹線
22	A地区	SH03	弥生土器	広口壺	(21.30)	(1.60)			口縁部のみ若干残存	φ2㎜大の極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
23	A地区	SH05	弥生土器	甕底部		(3.10)		(5.40)	底部1/5残存	細砂を多く含む	底部ナデ?	底部ナデ?
24	A地区	SH05	弥生土器	脚部	(14.55)	(1.40)			脚端部若干残存	極細砂を少量含む	脚部ヨコナデ	脚部ヨコナデ、2個1単位の円孔有す
25	A地区	SH07	弥生土器	甕	(14.60)	(3.75)			口縁部1/3残存	φ5㎜の小石～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
26	A地区	SH07	弥生土器	甕	(19.55)	(3.30)			口縁部のみ若干残存	φ3㎜大の小石を数個、極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	口縁部擬凹線、体部ヨコナデ
27	A地区	SH07	弥生土器	器台	(19.80)	(5.20)			口縁部1/2残存	極粗砂・粗砂を少量含む	口縁部ナデ後ヨコヘラミガキ、体部ミガキ?	口縁部擬凹線／ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコナデ後タテヘラミガキ
28	A地区	SH07	弥生土器	台付鉢	(7.20)	(5.00)			脚端部若干残存	φ6㎜の小石1個、極粗砂を少量含む	杯部ナデ、脚部板ナデ	杯部ミガキ?、脚部タテヘラミガキ
29	A地区	SH08	弥生土器	台付鉢	(17.70)	(5.50)			口縁部1/15残存	細砂をごく少量含む	ナデ	タテハケ後ヨコナデ、口縁端面に刻み目、口縁直下に列点文
30	A地区	SH09	弥生土器	甕	(13.00)	(12.80)	(18.85)		口縁部～体部1/2残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、最大径付近に列点文
31	A地区	SH10	弥生土器	高杯脚部		(3.50)			脚部1/4残存	粗砂・細砂を多く含む	ナデ	ナデ?（ヘラミガキ?）、ヘラ描き沈線帯
32	A地区	SH11	弥生土器	高杯	(23.00)	(2.60)			口縁部1/16残存	細砂を少量含む	ヨコナデ	口縁部凹線
33	A地区	SH12	弥生土器	甕	(14.40)	(3.15)			口縁部のみ若干残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ? 体部不明（ケズリか）	口縁部ヨコナデ、体部不明
34	A地区	SH12	弥生土器	甕		(3.20)			口縁部1/11残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
35	A地区	SH12	弥生土器	甕	(14.70)	(2.70)			口縁部のみ若干残存	極細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	凹線／ヨコナデ
36	A地区	SH12	弥生土器	甕	(18.40)	(4.30)			口縁部1/7残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ? 体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部不明
37	A地区	SH12	弥生土器	鉢	(16.40)	23.40			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ／凹線
38	A地区	SH12	弥生土器	鉢	(19.35)	(2.95)			口縁部のみ若干残存		ヨコナデ	ヨコナデ／凹線
39	A地区	SH12	弥生土器	脚部		(2.80)		(16.90)	脚端部1/12残存	極細砂を多く含む	脚部ヨコヘラケズリ	脚部ヨコナデ後タテヘラミガキ
40	A地区	SH13	弥生土器	直口壺	(13.50)	(5.45)			口縁部のみ若干残存	φ5㎜大の小石1個、粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ	口縁部凹線、頸部タテハケ
41	A地区	SH13	弥生土器	広口長頸壺	(19.15)	(1.75)			口縁部のみ若干残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ／凹線、端面に縦ヘラ描き沈線
42	A地区	SH13	弥生土器	脚部	(13.20)	(2.60)			脚端部のみ若干残存	φ2㎜の極粗砂を多量に含む	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明
43	A地区	SH14	弥生土器	壺底部	(12.70)	(4.85)		(8.35)	底部約1/2残存	φ4㎜以下の石粒含む	板ナデ	体部タテハケ、底部ハケ状工具によるナデ
44	A地区	SH14	弥生土器	甕	(15.10)	(1.45)			口縁部若干残存	粗砂をごく少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ
45	A地区	SH14	弥生土器	甕	(15.70)	(3.90)			口縁部若干残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部凹線、体部ナデ
46	A地区	SH14	弥生土器	甕	(18.80)	(2.30)			口縁部1/18残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	口縁部凹線、体部ナデ、頸部直下に波状文
47	A地区	SH14	弥生土器	鉢	(11.40)	(2.45)			口縁部のみ若干残存	細砂を少量含む	ヨコミガキ	口縁部凹線、体部ヨコミガキ／タテミガキ
48	A地区	SH14	弥生土器	甕	(12.50)	(5.35)	(13.00)		口縁部～体部1/10残存	極粗砂～細砂を多量に含む	ヨコナデ	凹線／ヨコナデ
49	A地区	SH15	弥生土器	短頸壺	(33.20)	(1.55)			口縁部若干残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	凹線／ヨコナデ
50	A地区	SH15	弥生土器	甕	(20.00)	(3.75)			口縁部のみ若干残存	粗砂を多く含む	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明
51	A地区	SH16	弥生土器	広口短頸壺	(13.70)	(3.20)			口縁部のみ若干残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコミガキ	口縁部ナデ、頸部ヨコナデ
52	A地区	SH16	弥生土器	直口壺	(12.60)	(3.40)			口縁部のみ1/4残存	粗砂を少量含む	ナデ	ナデ／凹線
53	A地区	SH16	弥生土器	壺底部		(4.10)		5.60	底部のみ完存	極粗砂を少量含む	ヨコハケ／タテハケ	ヨコハケ
54	A地区	SH16	弥生土器	甕	(11.60)	(4.55)			口縁部のみ若干残存	φ3㎜大の極粗砂を多量に含む	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径（mm）	器高（mm）	腹径（mm）	底径（mm）	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
55	A地区	SH16	弥生土器	甕	(14.60)	(3.80)			口縁部のみ若干残存	φ2㎜大の極粗砂を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ／擬凹線
56	A地区	SH16	弥生土器	甕	(14.60)	(3.30)			口縁部のみ若干残存	φ3㎜大の小石数個、粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部タテハケ
57	A地区	SH16	弥生土器	甕	(19.10)	(3.60)			口縁部1/12残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
58	A地区	SH16	弥生土器	鉢底部		(3.80)		2.90	底部のみ残存	粗砂をごく少量含む	底部ナデ?	底部タタキ後ナデ
59	A地区	SH16	弥生土器	器台	(18.20)	(4.00)			口縁部1/4残存	粗砂を多く含む	ヨコミガキ	口縁部凹線／刻み目、受部ヨコミガキ後波状文、屈曲部に刻み目
60	A地区	SH16	弥生土器	蓋	9.30	4.00			口縁部1/2残存、つまみは完存	細砂を多く含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ
61	A地区	SH16	弥生土器	台付鉢	10.00	8.65		9.05	口縁部1/3欠損	粗砂を多く含む	鉢部ヨコミガキ、脚部ナデ	鉢部ヨコミガキ、脚部ミガキ
62	A地区	SH17	弥生土器	直口壺	(15.00)	(6.10)			口縁部1/7残存	極粗砂を多く含む	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明
63	A地区	SH17	弥生土器	甕	(10.90)	(5.70)	(11.20)		口縁部1/4、体部若干残存	φ4㎜の小石～細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部ハケ
64	A地区	SH17	弥生土器	甕		(3.65)			口縁部1/10残存、端部は欠損	細砂を多く含む	摩滅のため調整不明	擬凹線
65	A地区	SH17	弥生土器	高杯（精製）		(6.70)			脚部のみ残存	粗砂を少量含む	杯部ミガキ、脚部タテミガキ	杯部ミガキ、脚部ハケ、表面スリップ
66	A地区	SH17	弥生土器	器台	(21.35)	(4.55)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、受部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、受部タテハケ後ヨコナデ、表面スリップ
67	A地区	SH17	弥生土器	鳥形土器		(4.90)			不明	φ3㎜の小石～細砂を少量含む	ハケ／ナデ	ハケ／板ナデ
68	A地区	SH19	弥生土器	広口壺	(15.50)	(2.00)			口縁部1/8残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、頸部ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ、端面刻み目、頸部タテハケ
69	A地区	SH19	弥生土器	広口壺	(21.80)	(1.95)			口縁部1/10残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上面に扇形文	口縁部ヨコナデ、端面に波状文＋円形浮文
70	A地区	SH19	弥生土器	広口壺	(14.00)	(5.80)			口縁部1/9残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後ヨコナデ、表面スリップ
71	A地区	SH19	弥生土器	鉢	(20.30)	(4.30)			口縁部のみ若干残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコミガキ	口縁部擬凹線／ヨコナデ後ヨコミガキ
72	A地区	SH19	弥生土器	甕底部		(3.70)		4.00	底部完存	φ3㎜大の極粗砂を多量に含む	底部ナデ	底部ナデ
73	A地区	SH19	弥生土器	甕	(12.80)	(4.35)			口縁部若干残存	φ2㎜大の極粗砂を多く含む	口縁部摩滅のため調整不明、体部ヨコヘラケズリ	摩滅のため調整不明
74	A地区	SH19	弥生土器	高杯 or 壺?		(2.05)			小片	φ2㎜の小石2個含む	摩滅のため調整不明	凹線
75	A地区	SH19	弥生土器	鉢	(16.00)	(2.00)			口縁部1/10残存	極細砂を少量含む	口縁部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ
76	A地区	SH19	弥生土器	器台	(22.30)	(4.10)			口縁部1/10残存	粗砂を少量含む	杯部ミガキ	杯部タテハケ
77	A地区	SH19	弥生土器	高杯	(28.60)	(4.10)			口縁部1/14残存	φ3㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ	口縁部擬凹線／ヨコナデ
78	A地区	SH20	弥生土器	直口壺	(10.50)	(6.50)			口縁部のみ若干残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部タテハケ後／凹線
79	A地区	SH20	弥生土器	直口壺	(11.70)	(6.30)			口縁部1/12残存	細砂を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ／凹線、表面スリップ
80	A地区	SH20	弥生土器	直口壺	(13.60)	(5.15)			口縁部1/7残存	φ3㎜の小石～細砂を多く含む	口縁部ヨコ板ナデ	タテハケ後ナデ／凹線
81	A地区	SH20	弥生土器	直口壺	(18.20)	(7.50)			口縁部1/16残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ?	口縁部タテハケ後ヨコナデ／凹線
82	A地区	SH20	弥生土器	広口短頸壺	(21.80)	(3.10)			口縁部若干残存	粗砂を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ、頸部に指頭圧痕突帯文
83	A地区	SH20	弥生土器	広口壺	(20.85)	(2.20)			口縁部のみ若干残存	細砂を少量含む	ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ／凹線
84	A地区	SH20	弥生土器	壺底部		(10.45)		(9.00)	底部1/2、体部下半若干残存	極粗砂～細砂を多量に含む	底部ユビナデ	底部タテハケ後ユビナデ
85	A地区	SH20	弥生土器	甕	(14.00)	(5.10)			口縁部～肩部1/11残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、タテハケ
86	A地区	SH20	弥生土器	甕	(17.00)	(3.50)			口縁部1/7残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ、体部ナデ?	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
87	A地区	SH20	弥生土器	高杯	(42.3)	(3.0)			口縁部若干残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部端面に凹線／扇形文、口縁部上端に刻み目
88	A地区	SH20	弥生土器	高杯	(19.55)	(4.05)			口縁部1/9残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部タテハケ後ヨコナデ／凹線
89	A地区	SH20	弥生土器	脚部		(4.30)		(14.20)	脚部1/6残存	粗砂・細砂を多く含む	脚部ヨコヘラケズリ	脚部タテヘラミガキ、φ6㎜の円孔2箇所残存
90	A地区	SH20	弥生土器	脚部	(12.40)	(3.90)			脚端部1/6残存	粗砂を少量含む	脚部ヨコヘラケズリ	ハケ後ナデ、円孔有す
91	A地区	SH21	弥生土器	台付鉢	(21.50)	(3.30)			口縁部1/8残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコミガキ	口縁部ヨコミガキ／凹線・ヨコナデ
92	A地区	SH22	弥生土器	甕	(15.60)	(2.85)			口縁部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
93	A地区	SH22	弥生土器	高杯	(31.00)	(2.50)			口縁端部1/18残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
94	A地区	SH22	弥生土器	高杯脚部	(9.30)	(8.60)			脚部若干欠損	極粗砂を多量に含む	脚裾部ヨコユビナデ、柱部に絞り痕残る	脚柱部凹線／不明、脚裾部タテミガキ、5個の円孔有す
95	A地区	SH24	弥生土器	甕	(12.20)	(4.40)			口縁部若干、肩部1/6残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
96	A地区	SH25	弥生土器	広口壺	(20.80)	(2.80)			口縁部のみ若干残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ／凹線
97	A地区	SH25	弥生土器	高杯	(29.90)	(2.10)			口縁部1/18残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に竹管文	口縁部ヨコナデ／竹管文
98	A地区	SH25	弥生土器	台付鉢	(15.30)	(2.20)			口縁部1/11残存	粗砂・細砂を多く含む	摩滅のため調整不明	ヨコナデ／凹線
99	A地区	SH25	弥生土器	台付鉢		(5.70)		5.25	脚部2/3、体部若干残存	極粗砂を少量含む	ナデ	ナデ
100	A地区	SH26	弥生土器	無頸壺	(9.60)	(3.65)			口縁部1/9残存	極粗砂を少量含む	不明	不明、紐通し孔有り
101	A地区	SH26	弥生土器	直口壺	(14.60)	(7.70)			口縁部～頸部1/5残存	粗砂・細砂を多量に含む	ヨコナデ	ヨコナデ／凹線、指頭圧痕突帯文
102	A地区	SH26	弥生土器	甕	(14.00)	(4.50)			口縁部～肩部1/8残存	極細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
103	A地区	SH26	弥生土器	甕	(14.60)	(5.10)			口縁部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ
104	A地区	SH26	弥生土器	甕	(25.10)	(5.90)			口縁部～肩部1/6残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ、体部ナデ	口縁部タテハケ後ヨコナデ、体部タテハケ
105	A地区	SH27	弥生土器	甕	(15.35)	(3.25)			口縁部1/6残存	粗砂を多量に含む	不明	不明
106	A地区	SH27	弥生土器	甕	(17.75)	(3.30)			口縁部のみ若干残存	φ2㎜大の極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／擬凹線
107	A地区	SH27	弥生土器	高杯	(32.00)	(4.50)			口縁部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
108	A地区	SH27	弥生土器	脚部		(4.95)		7.80	脚部のみ残存	粗砂～極細砂を多量に含む	不明	不明
109	A地区	SH29	弥生土器	直口壺	(20.10)	(6.35)			口縁部1/10残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
110	A地区	SH29	弥生土器	甕	(16.40)	(3.85)			口縁部1/6残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
111	A地区	SH29	弥生土器	高杯	(21.70)	(5.25)			口縁部1/3残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコナデ、鉢部ヨコハケ後タテハケ	口縁部ハケ後ヨコナデ／凹線、鉢部タテハケ
112	A地区	SH30	弥生土器	高杯	(25.40)	(2.90)			口縁部一部残存	φ1mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
113	A地区	SB01	弥生土器	広口壺	(24.80)	(7.10)			口縁部1/8残存	φ3mm以下の砂粒含む	口縁部上端に波状文、以下不明	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+縦ヘラ描き沈線、頸部に直線文+波状文
114	A地区	SB01	弥生土器	直口壺	(19.25)	(3.70)			口縁部のみ若干残存	粗砂～極粗砂を多く含む	不明	口縁部ヨコナデ／波状文
115	A地区	P65	弥生土器	高杯	(50.00)	(4.70)			口縁部若干残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
116	A地区	P112	弥生土器	広口壺	(15.20)	(4.00)			口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、口縁部端面刻み目、頸部タテハケ
117	A地区	P112	弥生土器	甕	(20.70)	(7.30)			口縁部～肩部1/10残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁端面刻み目+ユビオサエ、体部タテハケ
118	A地区	P127	弥生土器	広口壺	(13.60)	(10.50)			口縁部～肩部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、口縁端面列点文、体部タテハケ後4帯の列点文
119	A地区	P584	弥生土器	広口壺	19.40	(8.60)			口縁部3/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、以下ヨコナデ、頸部付近ヨコ方向の板ナデ	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文+円形浮文、以下タテヘラミガキ、頸部に凹線
120	A地区	P650	弥生土器	甕		(30.40)	(24.00)	(6.95)	底部1/3、体部1/4残存	φ2mm以下の石粒含む	体部上半タテハケ、下半ナデ	体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ、底部ナデ
121	A地区	P813	弥生土器	脚部		(7.80)		13.80	脚部のみ残存	細砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ、脚柱部タテ方向のナデ	脚端部ヨコナデ／凹線、脚部タテミガキ、柱部ヨコナデ7箇所の穿孔(φ7mm)を有す
122	A地区	P890	弥生土器	直口壺	(13.90)	(6.95)			口縁部約1/9残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部板ナデ／ヨコナデ	口縁部タテハケ／ヨコナデ、頸部に凹線
123	A地区	P999	弥生土器	甕	(18.70)	(18.00)	(18.80)		口縁部1/3、体部1/4残存	φ5mmの小石～極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ
124	A地区	P1007	弥生土器	広口壺	(28.40)	(3.90)			口縁部1/12残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部上端に2帯の波状文	口縁部ヨコナデ／凹線+円形浮文
125	A地区	P1012	弥生土器	直口壺	(17.40)	(9.85)			口縁部1/11残存	粗砂・細砂を多く含む	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タタキ、頸部に凹線
126	A地区	P1058	弥生土器	無頸壺	(22.00)	(15.50)	(33.40)		口縁部～体部1/5残存	φ2mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコハケ後ナデ消し、体部上半ナナメハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラミガキ、下半ナナメハケ後タテヘラミガキ
127	A地区	SX01	弥生土器	広口短頸壺	(16.05)	(3.25)			口縁部のみ若干残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部擬凹線／ヨコナデ
128	A地区	SX01	弥生土器	壺	(41.85)	(16.05)			口縁部1/7残存	粗砂を少量含む	ヨコハケ	口縁部上端に刻み目、タテハケ後ヨコハケ
129	A地区	SX01	弥生土器	底部		(7.95)		(8.20)	底部・体部下半若干残存	極粗砂・粗砂を多く含む	タテヘラケズリ	タテハケ
130	A地区	SX01	弥生土器	甕	(14.20)	(14.65)	(16.00)		口縁部若干、頸部～体部1/4残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
131	A地区	SX01	弥生土器	甕	(15.30)	(7.25)			口縁部1/4残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
132	A地区	SX03	弥生土器	広口短頸壺	(15.20)	(4.19)			口縁部1/3残存	粗砂多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部凹線／ヨコナデ、体部不明
133	A地区	SX03	弥生土器	広口壺	(19.10)	(6.65)			口縁部1/6残存	φ2mm大の極粗砂を多く含む	口縁部不明、頸部不明	口縁部刻み目、頸部タテハケ+指頭圧痕突帯
134	A地区	SX03	弥生土器	広口壺	(15.40)	(22.35)	(25.00)		口縁部1/3、肩部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部上端に波状文、頸部下タテヘラケズリ、中半多方向ナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+縦ヘラ描き沈線+円形浮文、頸部に突帯、体部上半に直線文+波状文、屈曲部に列点文、下半タテヘラミガキ
135	A地区	SX03	弥生土器	甕	(14.80)	(4.60)			口縁部1/10残存	φ3mm大の極粗砂を多量に含む	口縁部不明、体部タテ板ナデ	口縁部不明、体部不明
136	A地区	SX03	弥生土器	甕	(18.05)	(4.75)			口縁部若干残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、口縁部板ナデ?
137	A地区	SX03	弥生土器	甕	(19.35)	(5.30)			口縁部1/12残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ?	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、頸部下に波状文
138	A地区	SK02	弥生土器	高杯	(23.90)	(2.65)			口縁部のみわずかに残存	φ0.5mm以下の砂粒含む	ヨコナデ	凹線／ヨコヘラミガキ
139	A地区	SK07	弥生土器	直口壺	(16.80)	(7.30)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	ヨコヘラミガキ	タテハケ後ヨコナデ／凹線
140	A地区	SK08	弥生土器	直口壺	(11.80)	(4.90)			口縁部1/8残存	φ1mm以下など含む	ナデ?	ヨコナデ／凹線
141	A地区	SK14	弥生土器	甕	(13.30)	(3.85)			口縁部1/9残存	φ5mm大の小石、極粗砂を多量に含む	不明	不明
142	A地区	SK18	弥生土器	直口壺	(10.20)	(6.40)			口縁部1/4残存	φ5mm大の石2個、粗砂を少量含む	口縁部ナデ、体部ナデ?	口縁部ヨコナデ／凹線、上端に刻み目、体部タテミガキorタテハケ
143	A地区	SK19	弥生土器	甕	(17.00)	(5.30)			口縁部1/7残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコハケ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ／刻み目、体部タテハケ
144	A地区	SK29	弥生土器	鉢	(14.00)	(3.70)			口縁部1/9残存	φ1mm以下の砂粒含む	ヨコヘラミガキ?	凹線／ヨコナデ
145	A地区	SK31	弥生土器	広口壺	(25.90)	(5.15)			口縁部1/4残存	極粗砂を多量に含む	口縁部不明、頸部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、端面に円形浮文+縦ヘラ描き沈線、頸部タテハケ後ヨコナデ
146	A地区	SK33	弥生土器	甕	(13.80)	(12.30)	(13.10)		口縁部～胴部約1/6残存	φ1mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部凹線／ヨコナデ、体部タテハケ後胴部下タテミガキ
147	A地区	SK33	弥生土器	甕	(11.20)	(6.20)			口縁部～肩部1/2残存	φ2mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部凹線／ヨコナデ、体部タテハケ
148	A地区	SK42	弥生土器	底部		(4.30)		3.40	底部のみ完存	粗砂～極粗砂を少量含む	ヨコハケ	タタキ
149	A地区	SK48	弥生土器	直口壺	(17.50)	(9.90)			口縁部1/7残存	粗砂を多く含む	ヨコナデ	口縁部凹線／ヨコナデ
150	A地区	SK48	弥生土器	広口壺	(19.60)	(8.00)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部上端に波状文、頸部ヨコハケ	口縁端面波状文、頸部波状文+直線文
151	A地区	SK48	弥生土器	甕	(10.40)	(5.10)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部凹線、頸部ヨコナデ、体部不明
152	A地区	SK48	弥生土器	鉢	(18.70)	(5.05)	(23.80)		口縁部1/7残存	φ2mm以下の石粒含む	ヨコナデ	口縁部凹線／ヨコナデ
153	A地区	SK51	弥生土器	鉢	(49.20)	(7.30)			口縁部のみ小片残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線
154	A地区	SK51	弥生土器	広口壺	(20.80)	(1.45)			口縁部1/10残存	粗砂を少量含む	口縁部上端に波状文	口縁部ヨコナデ、端面凹線+縦ヘラ描き沈線
155	A地区	SK51	弥生土器	直口壺	(13.90)	(4.50)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	ヨコハケ後ヨコナデ	口縁部タテハケ後？ヨコナデ／凹線
156	A地区	SK51	弥生土器	甕	(20.00)	(4.85)			口縁部1/8残存	極細砂を多く含む	ハケ後ナデ消し、頸部ヨコナデ、体部不定方向のナデ	口縁部ヨコナデ(凹線？)、体部タテハケ
157	A地区	SK53	弥生土器	甕	(17.50)	(5.95)			口縁部～肩部1/6残存	極粗砂・粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ．体部タテ方向の板ナデ	口縁部ヨコハケ、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
158	A地区	SK57	弥生土器	ミニチュア壺	6.60	8.00	7.55	2.60	口縁部1/5欠損	φ3mm以下の砂粒含む	口頸部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部タテハケ
159	A地区	SK66	弥生土器	短頸壺	(19.60)	(10.70)			口縁部1/10、肩部1/4残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部下斜めハケ後ヨコナデ／体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、頸部下タテハケ、ナデ後肩部よりやや下に列点文
160	A地区	SK70	弥生土器	広口壺	(25.80)	(4.40)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁端部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ後、端面に凹線、頸部タテハケ
161	A地区	SK71	弥生土器	高杯	(14.80)	(2.80)			口縁部1/10残存	細砂を多く含む	口縁部上端に貼り付け突帯後ヨコナデ／ヘラミガキ、杯部ヨコヘラミガキ	口縁端面凹線、杯部タテヘラミガキ、垂下口縁部との接合部のみヨコヘラミガキ
162	A地区	SK72	弥生土器	広口壺	(36.00)	(3.50)			口縁部1/9残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコハケ、上端に波状文+扇形文	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+縦ヘラ描き沈線
163	A地区	SK73	弥生土器	甕	(15.80)	(2.75)			口縁部若干残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、頸部下ヨコヘラケズリ	ヨコナデ／擬凹線
164	A地区	SK74	弥生土器	短頸壺	(10.90)	(15.70)	(17.20)		口縁部1/3、体部1/2残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、体部下半ヨコミガキ、底部ナデ、脚部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、脚との接合部ナデ、脚穿孔有り（推定5箇所）
165	A地区	SK87	弥生土器	短頸壺	(8.00)	10.05	(10.30)	3.15	口縁部～体部1/2以上欠損	φ5mm以下の石粒含む	口頸部横方向の板ナデ、体部タテ方向の板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、底部板ナデ
166	A地区	SK87	弥生土器	鉢		(4.15)		1.90	底部のみ残存	φ7mm以下の石1個、φ4mmの石～粗砂を多く含む	多方向ナデ	ナデ?
167	A地区	SK87	弥生土器	鉢	11.40	6.65		3.80	口縁部1/2欠損	φ3mm以下の砂粒若干含まれる	口縁部から体部ヨコハケ、底部蜘蛛の巣状ハケ	不明
168	A地区	SK99	弥生土器	甕	(16.80)	(3.40)			口縁部1/20小片残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
169	A地区	SK104	弥生土器	脚部		(3.70)		(11.40)	脚部1/4残存	粗砂・細砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ／凹線
170	A地区	SK105	弥生土器	甕	(15.70)	(10.00)	(15.80)		口縁部～体部1/8残存	φ2mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、最大径付近2帯の列点文
171	A地区	SK105	弥生土器	壺	(40.80)	(9.60)			口縁部1/8残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に貝殻列点文+扇形文、以下ナデ?	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ後ナデ?
172	A地区	SK111	弥生土器	甕	(18.10)	(6.10)			口縁部1/16残存、肩部1/5残存	φ3mm以下含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ上げ	口縁部ヨコナデ、体部不明
173	A地区	SK112	弥生土器	脚部		(5.50)		(12.50)	肩部1/4残存	φ2mm以下の石粒含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部板ナデ
174	A地区	SK113	弥生土器	鉢	(20.80)	(4.30)			口縁部1/3残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部不明
175	A地区	SK115	弥生土器	直口壺	(12.90)	(7.90)			口縁部1/5残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ハケ後ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
176	A地区	SK116	弥生土器	甕	(14.60)	(3.50)			口縁部1/7残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
177	A地区	SK121	弥生土器	壺	(16.00)	(6.50)			頸部のみ1/4残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	頸部ヨコハケ	頸部ナデ、屈曲部にヘラ圧痕文突帯
178	A地区	SK122	弥生土器	高杯	(26.95)	(3.90)			口縁部約1/10残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部ナデ?
179	A地区	SK123	弥生土器	広口壺	(20.80)	(6.65)			口縁部1/6残存	φ6mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ、体部直線文
180	A地区	SK125	弥生土器	直口壺	(12.00)	(6.70)			口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ヨコナデ
181	A地区	SK128	弥生土器	長頸壺	15.00	(15.30)			口縁部～頸部残存（口端部1/4欠損）	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ後一部ナデ消し	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、頸部タテハケ（一部ヨコハケも有り）
182	A地区	SK131	弥生土器	高杯	(15.40)	(2.50)			口縁部1/6残存	細砂を多く含む	垂下口縁部ヘラミガキ、突帯貼り付け後ナデ	垂下口縁部ヨコナデ／凹線
183	A地区	SK141	弥生土器	脚部		(3.40)		15.00	脚裾部1/8残存	φ1mm以下の砂粒含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部タテミガキ?
184	A地区	SD08	弥生土器	広口短頸壺	(25.50)	(5.10)			口縁部若干、肩部1/7残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコハケ／ヨコナデ、体部板ナデ?	口縁端面刻み目、頸部ヨコナデ、体部タテハケ
185	A地区	SD16	弥生土器	直口壺	14.90	35.70	(24.30)	(8.60)	口縁部2/3、底部1/2、肩部～体部片残存	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ? 下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部ヘラ圧痕文突帯、体部タテハケ、最大径付近に列点文
186	A地区	SD16	弥生土器	高杯	(20.70)	(7.20)			口縁部1/2残存	φ2mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁端部ヨコナデ、杯部上半ヨコヘラミガキ、屈曲部凹線、体部下半ヨコミガキ／タテミガキ
187	A地区	SD16	弥生土器	脚部		(13.50)		12.10	脚部1/2残存	細砂を多量に含む	脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残す	脚端部ヨコナデ／凹線、脚柱部タテミガキ／凹線、裾部に2帯の刻み目／推定で6箇所の穿孔（φ4mm）有す
188	A地区	SD25	弥生土器	器台		(12.15)		22.55	脚部一部欠損	φ3mm以下の石粒含む	ヨコナデ	脚端部ヨコナデ、脚部に凹線
189	A地区	SD17	弥生土器	広口壺	(32.60)	(6.60)			口縁部1/5残存	φ4mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコハケ／ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、端面にヘラ圧痕による斜格子文、以下タテハケ
190	A地区	SD17	弥生土器	鉢底部		(7.00)		13.15	底部1/6欠損	φ5mm以下の石粒含む	底部板ナデ	底部ヘラケズリ／板ナデ後ユビオサエ、体部タテハケ
191	A地区	SD27	弥生土器	直口壺	(15.70)	(7.80)			口縁部1/5残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部ヘラによる刻み目
192	A地区	SD29	弥生土器	甕	(21.90)	(6.05)			口縁部～肩部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
193	A地区	包含層	弥生土器	直口壺	(12.30)	(32.95)	(21.60)	(5.80)	口縁部1/2～底部若干	φ8mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半板ナデ後ユビオサエ、下半ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ヨコハケ・ナナメハケ後タテハケ
194	A地区	包含層	弥生土器	甕	(23.10)	(9.30)			口縁部～肩部1/2残存	φ1mm以下の砂粒微量に含む	口縁部タテハケ／ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に列点文、体部タタキ後タテハケ
195	A地区		弥生土器	直口壺	(14.20)	(16.20)	(23.00)		口縁部2/3～体部1/3残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向の板ナデ	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、体部上半タタキ後ナデ、中半ヨコヘラミガキ、下半ナデ
196	A地区		弥生土器	広口壺	(23.70)	(9.55)			口縁部1/5～体部1/4残存	極粗砂・粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、頸部タテ方向の指ナデ	口縁部ヨコナデ／タテハケ、口縁端面凹線＋円形浮文＋棒状浮文、頸部に凹線
197	A地区	包含層	弥生土器	台付鉢	(13.40)	(7.50)	(15.20)		口縁部～体部1/4残存	細砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコヘラミガキ、屈曲部いヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、杯部ヨコヘラミガキ、屈曲部に凹線、杯部下半タテミガキ
198	B地区	SX01	弥生土器	壺		(5.80)			体部小片残存	細砂を多量に含む	体部不明	体部波状文+斜格子文
199	B地区	SX01	弥生土器	直口壺	(14.10)	(7.20)			口縁部1/2残存	粗砂～極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
200	B地区	SX01	弥生土器	細頸壺	(8.60)	(19.10)	(14.30)		口頸部4/5残存、体部1/2残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、体部中半ヨコハケ、体部下半ナナメハケ	口縁部タテハケ／ヨコナデ凹線、頸部に凹線、体部タテハケ
201	B地区	SX01	弥生土器	甕底部		(12.50)		6.25	底部1/1、体部1/6残存	φ4mmの小石～細砂を多く含む	体部下半タテヘラケズリ	底部多方向ナデ、体部下半タテハケ
202	B地区	SX01・02	弥生土器	甕	(18.00)	(5.30)			頸部～肩部小片残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	頸部ヨコナデ、体部タテハケ	頸部ヨコナデ、体部タテハケ
203	B地区	SX01・02	弥生土器	高杯	(22.60)	(5.60)			口縁部1/8残存	ほとんど砂粒を含まない	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ?	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部ヨコヘラミガキ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
204	B地区	SX01・02	弥生土器	高杯	(22.60)	(7.00)			杯部1/2残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、屈曲部タテハケ+ヨコハケ後ヨコナデ、杯部板ナデ後ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
205	B地区	SX02	弥生土器	甕底部		(11.20)		(5.20)	底部1/2残存	φ1mm以下の砂粒含む	体部下半タテヘラケズリ	体部下半タテハケ
206	B地区	SX03	弥生土器	甕	(17.70)	(9.50)			口縁部～肩部小片1/6残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
207	B地区	SX04	弥生土器	甕	(16.80)	(17.70)	(22.20)		口縁部2/3、体部1/8残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ
208	B地区	SX04	弥生土器	甕底部		(13.40)		(6.40)	底部1/2～体部残存	φ4mm以下の石粒含む	体部下半板ナデ	体部下半板ナデ
209	B地区	SX05	弥生土器	甕	(29.80)	(39.60)	(39.10)		口縁部～胴部下半1/3残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部下ヨコハケ後ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ上げ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ
210	B地区	SK03	弥生土器	短頸壺	(22.0)	(5.90)			口縁部1/14残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線+縦ヘラ描き沈線、体部ヨコナデ、肩部に列点文
211	B地区	SK03	弥生土器	直口壺	(9.40)	(7.55)			口縁部1/4残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ナデ、頸部付近ヘラケズリか?	口縁部ヨコナデ／凹線
212	B地区	SK03	弥生土器	直口壺	14.80	38.00	24.00	6.70	口縁部2/3、体部1/2、底部1/1残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、底部未調整?
213	B地区	SK03	弥生土器	甕	(12.60)	(2.90)			口縁部1/12残存	細砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
214	B地区	SK03	弥生土器	甕底部		(4.50)		5.70	底部のみ残存	粗砂・細砂を多量に含む	不明	底面多方向ナデ、体部不明
215	B地区	SK03	弥生土器	高杯	(16.80)	(4.50)			口縁部1/7残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
216	B地区	SK03	弥生土器	脚部		(3.55)		(12.40)	脚部1/5残存	粗砂～極細砂を多量に含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ／凹線、脚部タテヘラミガキ
217	B地区	SR01	弥生土器	広口壺	(15.70)	(4.90)			口縁部1/4～頸部残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部上端に扇形文、頸部付近板ナデ	口縁部ヨコナデ、端面波状文、頸部付近タテハケ、頸部下波状文?
218	B地区	SR01	弥生土器	広口壺	(19.10)	(8.40)			口縁部1/4残存	φ2mm以下の砂粒多く含む	口縁部上端に波状文?	口縁部ヨコナデ、端面波状文、頸部に凹線
219	B地区	SR01	弥生土器	広口壺	(19.10)	(20.0)	(31.10)		口縁部1/2～体部残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半ヘラケズリ後ハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部に波状文
220	B地区	SR01	弥生土器	甕	(12.80)	(6.65)			口縁部小片残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ
221	B地区	SR01	弥生土器	甕	(16.90)	(4.10)			口縁部1/6残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ
222	B地区	SR01	弥生土器	甕	(19.80)	(4.80)			口縁部1/7残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ? 体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
223	B地区	SR01	弥生土器	甕	(18.60)	(4.15)			口縁部1/8残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、端面に1条の沈線、体部ナナメハケ
224	B地区	SR01	弥生土器	甕	(13.40)	(5.90)			口縁部～肩部1/6残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部タテハケ
225	B地区	SR01	弥生土器	甕	(14.60)	(6.15)			口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
226	B地区	SR01	弥生土器	甕	(16.80)	(6.30)			口縁部1/10残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、体部タテ方向のナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ（一部ヨコハケ）
227	B地区	SR02	弥生土器	広口壺	(20.60)	(7.50)			口縁部1/4残存	φ3mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、端面は浅い凹線→沈線→羽状文、頸部タテハケ、体部波状文
228	B地区	SR02	弥生土器	広口壺	(24.70)	(5.50)			口縁部1/2残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に羽状文、以下ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線+縦ヘラ描き沈線、以下タテハケ
229	B地区	SR02	弥生土器	甕	(25.20)	(8.20)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ
230	B地区	包含層	弥生土器	直口壺	12.30	(9.90)			口縁部2/3残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部板ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後タテミガキ
231	B地区	包含層	弥生土器	甕	(20.30)	(4.00)			口縁部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／指頭押圧による波状口縁、体部ナナメハケ
232	B地区	包含層	弥生土器	甕	(25.60)	(7.20)			口縁部1/5残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ナナメハケ
233	B地区	包含層	弥生土器	甕	(18.10)	(6.60)			口縁部～肩部残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ
234	B地区	包含層	弥生土器	甕	(17.90)	(8.40)			口縁部1/8残存	5mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
235	B地区	包含層	弥生土器	高杯	(39.50)	(8.10)			口縁部1/2残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、杯部タテヘラミガキ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部ヨコヘラミガキ
236	B地区	包含層	弥生土器	高杯	(18.90)	(5.60)			杯部2/3残存	φ1mm以下の砂粒含む	垂下口縁部ミガキ?杯部タテミガキ、貼り付け突帯後ヨコナデ	垂下口縁部ヨコミガキ?／凹線．杯部タテハケ後ヨコミガキ、下半タテミガキ
237	B地区	包含層	弥生土器	鉢	(25.20)	(9.50)			口縁部1/5残存	φ3mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
238	B地区	包含層	弥生土器	脚部		(14.40)			柱状部ほぼ完形	φ5mm以下の石粒含む	杯部ヨコミガキ、脚柱部ヘラケズリ、絞り痕残す	杯部タテミガキ、脚柱部タテヘラミガキ、2帯の沈線帯
239	B地区	包含層	弥生土器	脚部		(11.00)		(12.00)	脚柱～脚裾2/3残存	φ1mm以の砂粒含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ、脚柱部に絞り痕	脚端部ヨコナデ、裾部タテヘラミガキ、脚柱部にヘラ描き沈線
240	C地区	SH01	弥生土器	高杯		(5.60)			脚部のみ残存、端部は欠損	細砂を多量に含む	脚柱部ヨコナデ、ヘラのあたり痕が残る	脚柱部タテヘラミガキ
241	C地区	P34	弥生土器	台付鉢	(11.30)	(6.50)			口縁部1/2残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、鉢部ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、鉢部ヨコヘラミガキ
242	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(17.00)	(2.60)			口縁部1/2残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+棒状浮文
243	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(18.65)	(7.60)			口縁部1/4残存	φ2mm大の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ+厚い棒状浮文、上下端部に刻み目、以下タテハケ、頸部凹線
244	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(16.10)	(4.45)			口縁部1/2残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ／凹線、端面凹線+棒状浮文、以下タテハケ
245	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(22.60)	(2.70)			口縁部1/3残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文2帯	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+棒状浮文+円形浮文
246	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(22.70)	(2.60)			口縁部1/2欠損	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、口縁部上端に扇形文2帯、3個／単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面凹線+棒状浮文
247	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(17.20)	(11.40)			口縁部～肩部1/4残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不定方向ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後ナデ消し、頸部に凹線、体部タテハケ
248	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(24.30)	(17.20)			口縁部1/2残存	φ5mm以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に貝殻列点文+扇形文、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、端面縦ヘラ描き沈線+凹線+円形浮文+棒状浮文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後直線文+波状文+貝殻列点文

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
249	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(19.00)	(19.70)			口縁部1/1、肩部3/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、以下タテハケ、体部上半ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線+棒状浮文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後波状文+直線文+列点文
250	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(18.60)	(10.15)			口縁部2/3欠損、肩部若干残存	φ2mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、端面凹線+円形浮文、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後直線文+波状文
251	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(19.15)	(11.70)			口縁部若干、頸部1/3残存	φ2mm以下の石粒を多く含む	口縁部上端に波状文	口縁端部ヨコナデ、端面凹線+棒状浮文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテヘラミガキ
252	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(20.40)	(6.95)			口縁部1/2、頸部1/1残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の竹管文、頸部付近ヨコハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、端部に刻み目、端面に竹管文、頸部タテハケ後ナデ消し、頸部に断面三角形突帯
253	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	19.30	(6.80)			口縁部ほぼ完存	φ2mm大の砂粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、以下ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、屈曲部に指頭圧痕文突帯
254	C地区	SX01	弥生土器	短頸壺	(11.30)	(14.55)	(12.35)		口縁部～体部下半1/3残存	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ後ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後タテハケ、下半タテヘラミガキ
255	C地区	SX01	弥生土器	短頸壺	(10.80)	(21.50)	(20.80)	(7.40)	口縁部7/8欠損、底部1/2欠損	φ7mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、肩部に列点文、下半タテミガキ．底面ナデ？
256	C地区	SX01	弥生土器	短頸壺	(18.10)	(14.45)			口縁部1/2、肩部1/3残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／凹線／間に刻み目、頸部に指頭圧痕文突帯、体部最大径付近に列点文
257	C地区	SX01	弥生土器	広口壺	(32.50)	(16.90)			口縁部1/3欠損	φ3mm大の極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、下端に刻み目、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
258	C地区	SX01	弥生土器	広口壺		(33.10)	(37.50)		頸部ほぼ完形～体部残存	φ7mm以下の石粒含む	頸部ヨコナデ、体部ハケ	頸部タテハケ、頸部境に断面三角形突帯、体部ハケ後に波状文+直線文、最大径以下からヨコヘラミガキ、底部タテヘラミガキ
259	C地区	SX01	弥生土器	甕	(15.20)	(4.10)			口縁部1/4残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
260	C地区	SX01	弥生土器	甕底部		(4.30)		5.30	底部若干欠損	φ1～4mm大の石粒を多量に含む	タテ方向の板ナデ	底部ナデ、体部タテハケ
261	C地区	SX01	弥生土器	甕	(15.65)	(8.30)			口縁部～肩部1/9～1/6残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、体部下半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
262	C地区	SX01	弥生土器	甕	(15.90)	(7.85)			口縁部1/2～肩部残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
263	C地区	SX01	弥生土器	甕	(14.20)	(5.75)			口縁部～肩部1/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
264	C地区	SX01	弥生土器	甕	(18.10)	(5.60)			口縁部小片残存	φ1mm以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
265	C地区	SX01	弥生土器	甕	(16.20)	(6.25)			口縁部1/2残存	φ3mm以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部不明
266	C地区	SX01	弥生土器	甕	(12.80)	(7.00)			口縁部1/2～肩部残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、下半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
267	C地区	SX01	弥生土器	甕	(19.60)	(10.20)			口縁部～肩部2/3残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タタキ後タテハケ
268	C地区	SX01	弥生土器	甕	(23.20)	(10.35)			口縁部1/6残存	φ3mm大の極粗を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し
269	C地区	SX01	弥生土器	甕	(32.80)	(6.00)			口縁部残存	φ3mm大の石粒、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ？後ナデ消し
270	C地区	SX01	弥生土器	甕	(29.40)	(9.15)			口縁部1/5、肩部1/2残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
271	C地区	SX01	弥生土器	鉢	(18.90)	(10.80)			口縁部～体部1/8～1/4残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、鉢部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、鉢部上半ヨコハケ、下半タテハケ
272	C地区	SX01	弥生土器	鉢	(35.65)	(7.85)	(37.00)		口縁部1/4残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
273	C地区	SX01	弥生土器	脚部		(10.10)			脚部のみ残存	粗砂を多く含む	脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚柱部タテヘラミガキ、上半に沈線
274	C地区	SX01	弥生土器	脚部		(6.85)		(10.70)	脚端部1/3残存	φ2mm以下の石粒を多く含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部タテハケ
275	C地区	SX01	弥生土器	水差形土器	7.90	18.40	15.40	5.70	全体1/2残存	φ3mm以下の砂粒多く含む	口頸部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／凹線？頸部タテハケ、把手部分は挿入し、内面から粘土を充填
276	C地区	SX02	弥生土器	広口壺	(19.70)	(3.60)			口縁部1/6残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ
277	C地区	SX02	弥生土器	広口壺	(20.20)	(7.50)			口縁部2/3残存	φ3mmの小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文	口縁端部ヨコナデ、端面に刻み目、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
278	C地区	SX02	弥生土器	直口壺	(9.20)	(8.00)			口縁部1/3、肩部1/4残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ナデ
279	C地区	SX02	弥生土器	直口壺	(13.40)	(11.30)			口縁部～肩部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ヨコハケ、体部上半タテハケ後ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
280	C地区	SX02	弥生土器	直口壺	(13.40)	(16.50)			口縁部～肩部1/2残存	φ1mm以下の砂粒微量に含む	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、屈曲部にヘラ圧痕文突帯、体部タタキ後タテハケ
281	C地区	SX02	弥生土器	壺底部		(7.30)		5.45	底部のみ残存	極粗砂・粗砂を多量に含む	体部下半タテハケ	体部下半タテハケ
282	C地区	SX02	弥生土器	壺底部		(7.95)		9.80	底部のみ完存	極粗砂～細砂を多量に含む	不明	底面周縁のみヨコナデ、他多方向ナデ、体部下半タテハケ
283	C地区	SX02	弥生土器	台付壺		(9.40)	(15.30)		体部3/4残存	φ3mm以下の石粒含む	体部上半タテ方向の指ナデ、下半板ナデ、屈曲部ヨコ方向のユビナデ	体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ、屈曲部ヨコミガキ
284	C地区	SX02	弥生土器	広口壺	(35.35)	(14.10)			口縁部1/9残存	φ7mm以下の石粒少量、極粗砂を多量に含む	不明	不明、頸部に指頭圧痕文突帯
285	C地区	SX02	弥生土器	甕	(11.60)	(8.25)	(12.90)		口縁部3/4、体部1/4残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	腹径(㎜)	底径(㎜)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
286	C地区	SX02	弥生土器	甕	(13.80)	(8.60)			口縁部～肩部1/3残存	φ1㎜以下の長石を含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部下半タテハケ
287	C地区	SX02	弥生土器	甕	(27.15)	(13.90)			口縁部1/1、肩部3/4残存	極粗砂～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
288	C地区	SX02	弥生土器	甕	16.35	27.70	(21.00)	(6.35)	口縁部1/1、体部若干、底部1/1残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半多方向ナデ、下方タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部上半タテハケ、中半多方向ハケ、下半タテハケ、底面多方向ナデ
289	C地区	SX02	弥生土器	鉢	(15.60)	(7.60)			口縁部1/3残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、鉢部上半ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部屈曲部に凹線、段状口縁下に紐通し孔（φ4㎜）有り
290	C地区	SX02	弥生土器	台付鉢		(8.70)	(17.50)		鉢部下半1/2残存	φ3㎜以下砂粒をわずかに含む	鉢部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、屈曲部ヨコナデ、円盤充填前に接合面にハケを施す	鉢部上半タテヘラミガキ、下半タテヘラケズリ後タテヘラミガキ、屈曲部のみヨコヘラミガキ、脚柱部タテヘラミガキ
291	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(21.20)	(17.20)		12.80	杯部口縁部1/8、杯部1/2、脚裾部9/10残存	φ2㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、杯部上半及び下半ナナメハケ、屈曲部ヨコナデ、底部はヨコハケ、脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ、絞り残す	口縁部ヨコナデ、屈曲部に凹線、杯部下半及び脚柱部との境にタテヘラケズリ後タテハケ、脚端部ヨコナデ／凹線、脚部タテヘラミガキ
292	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(19.30)	(3.05)			口縁部1/9残存	細砂を多く含む	口縁部上端に突帯貼り付け後ヨコナデ、垂下口縁部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋棒状浮文、杯部タテハケ後ナデ消し
293	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(20.40)	(3.10)	(28.80)		口縁部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部上端に突帯貼り付け後ヨコナデ、垂下口縁部ヨコヘラミガキ	口縁部端面ヨコナデ／凹線／ヨコヘラミガキ、杯部タテヘラミガキ
294	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(24.60)	(4.65)			口縁部1/7残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、杯部下半ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部ヨコナデ
295	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(16.60)	(9.25)			口縁部1/5残存	φ3㎜以下の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、杯部上半ナナメハケ、下半タテミガキ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部不明
296	C地区	SX02	弥生土器	高杯	(42.45)	(10.30)			口縁部1/4残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部ハケ後板ナデ	口縁部ヨコナデ、杯部ハケ後タテヘラミガキ
297	C地区	SX02	弥生土器	脚部		(4.25)			脚部のみ残存	極粗砂～細砂を多く含む	杯部タテハケ、見込み部分中央に穿孔（φ4㎜）あり、脚柱部ヨコヘラケズリ	杯部ナデ、脚柱部との接合面に突帯
298	C地区	SX02	弥生土器	脚部		(7.70)		(11.80)	脚端部1/4残存	極粗砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ／凹線、脚部タテヘラミガキ、柱状部に沈線、その下及び裾部下方に穿孔をめぐらせる（φ4㎜）、上方の方は貫通せず
299	C地区	SX02	弥生土器	脚部		(13.00)		(9.50)	脚部若干欠損	極粗砂を少量含む	脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ／凹線、裾部タテヘラミガキ、柱部に沈線、裾部下方に15箇所の円孔（φ4㎜）あり
300	C地区	SX02	弥生土器	脚部		(12.80)		(12.40)	脚端部1/2残存	粗砂を少量含む	脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ、脚柱部タテヘラミガキ
301	C地区	SX02	弥生土器	脚部		(11.25)		(15.10)	脚端部1/2残存	φ2㎜以下の石粒を多量に含む	脚端部ヨコナデ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ、脚柱部不明
302	C地区	SX03	弥生土器	細頸壺		(13.00)	12.40	5.80	口縁部・体部若干欠損	極粗砂を多量に含む	口縁部ナデ、体部上半タテハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ後ナデ消し、体部上半タテハケ及び直線文+波状文、体部下半板ナデ
303	C地区	SX03	弥生土器	壺底部		(8.40)		9.00	底部若干欠損	φ5㎜以下の石粒を多量に含む	体部不明	体部下半タテハケ？、底面ナデ
304	C地区	SX03	弥生土器	甕	(15.80)	(5.15)			口縁部1/7残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ナデ（一部ヘラの痕跡有り）	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部板ナデ？
305	C地区	SX03	弥生土器	甕	(16.70)	(4.50)			口縁部1/5残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ後ヨコナデ？	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
306	C地区	SX03	弥生土器	甕	(12.50)	17.20	(13.60)	4.15	口縁部1/3欠損	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半板ナデ、下半ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部全体を粗いタテハケ、その後下半のみ狭い原体でタテハケ
307	C地区	SX05	弥生土器	広口壺	(15.40)	(4.30)			口縁部1/4残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文	口縁部ヨコナデ／凹線
308	C地区	SX05	弥生土器	広口壺	(13.55)	(6.20)			口縁部1/6残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端にわずかな波状文の痕跡あり、2個／単位の紐通し孔推定3箇所有り	口縁部ヨコナデ、端面凹線＋円形浮文、頸部に凹線
309	C地区	SX05	弥生土器	広口壺	(18.10)	(7.35)			口縁部1/4残存	φ5㎜の小石～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、頸部との中間に紐通し孔あり	口縁部ヨコナデ、端面凹線＋円形浮文、頸部に指頭圧痕文突帯
310	C地区	SX05	弥生土器	広口壺	19.25	(11.10)			口縁部～頸部1/2残存	粗砂を多量に含む	不明	口縁部不明、頸部に凹線
311	C地区	SX05	弥生土器	直口壺		(11.70)	10.00	5.00	体部～底部完存、口縁部若干残存	φ3㎜以下の石粒を多量に含む	頸部ナデ	頸部ナデ、体部タテハケ、底部ナデ
312	C地区	SX05	弥生土器	水差形土器	(10.50)	(10.90)			口縁部～肩部1/2残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部凹線、体部タテハケ
313	C地区	SX05	弥生土器	壺底部		(9.40)	19.20	5.45	底部若干欠損	極粗砂を多く含む	体部タテハケ？	体部不明
314	C地区	SX05	弥生土器	壺底部		(10.90)		7.70	底部完存、体部若干残存	極粗砂を多量に含む	体部不明	体部タテハケ？
315	C地区	SX05	弥生土器	壺	(39.50)	(14.10)			口縁部1/6残存	φ4㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ／ハケ	口縁部ヨコナデ、頸部に指頭圧痕文突帯
316	C地区	SX05	弥生土器	広口壺		(32.85)	25.60	(7.60)	頸部1/3、体部1/2、底部1/2残存	極粗砂～粗砂を少量含む	頸部ヨコハケ、体部上半タテハケ後ヨコハケ、下半タテハケ、底部ナデ	頸部タテハケ、頸部境にヘラ圧痕文突帯、体部タテハケ
317	C地区	SX05	弥生土器	甕	(15.70)	(11.40)	(16.50)		口縁部1/3～体部残存	φ6㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
318	C地区	SX05	弥生土器	甕	15.10	(9.30)			口縁部3/4、肩部1/2残存	φ4㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、端面に刺突による羽状文、体部不明
319	C地区	SX05	弥生土器	甕	(19.25)	(7.90)			口縁部1/3残存	φ3㎜大の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
320	C地区	SX05	弥生土器	甕	(15.70)	(27.40)	(20.15)		口縁部～体部下半1/3残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後タテハケ、下半タテヘラミガキ
321	C地区	SX05	弥生土器	甕	(34.40)	(7.65)			口縁部1/8残存	φ2㎜大の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
322	C地区	SX05	弥生土器	甕	(29.60)	(44.90)	(34.20)	8.60	口縁部1/4～体部、底部ほぼ残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ状の板ナデ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ頸部のみヨコナデ、底面板ナデ
323	C地区	SX05	弥生土器	台付鉢	14.20	29.75		13.30	口縁部1/3、杯部及び脚部一部欠損	φ3mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ後、屈曲部のみヨコナデ、底部ヨコハケ後タテハケ、脚部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ／凹線、体部上半タテハケ後、直線文＋波状文＋円形浮文＋凹線、下半ヨコヘラミガキ／タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ
324	C地区	SX05	弥生土器	脚部		(14.80)		(13.80)	脚端部1/4、脚部1/2残存	極粗砂を多量に含む	脚部ヨコヘラケズリ、杯部底タテハケ	脚ヨコナデ、柱状部タテヘラミガキ
325	C地区	SX05	弥生土器	台付鉢		(20.45)		13.20	杯部1/6、脚部1/1残存	粗砂・細砂を多く含む	杯部下半ハケ後放射状ヘラミガキ、底部ハケ、脚部ヨコヘラケズリ	杯部ヨコヘラミガキ、脚柱部に3帯の沈線帯／タテヘラミガキ、脚部裾ヨコヘラミガキ、下方にヘラによる刻み目＋竹管文をめぐらせる、脚端部ヨコナデ
326	C地区	SX06	弥生土器	甕底部		(6.50)		6.45	底部1/1残存	極粗砂～細砂を多く含む	体部多方向ナデ	体部タテヘラミガキ、底面多方向ナデ、周縁部のみヨコナデ
327	C地区	SX06	弥生土器	甕	(15.10)	(9.75)	(16.20)		口縁部1/6、体部1/8残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
328	C地区	SX06	弥生土器	甕	(18.60)	(21.90)	(22.90)		口縁部～体部下半1/4残存	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部上半多方向のハケ、下半ナデ？	口縁部ヨコナデ、一部端面に刻み目、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
329	C地区	SX07	弥生土器	広口壺	(16.80)	(2.30)			口縁部1/3残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面刻み目、以下ヨコナデ
330	C地区	SX07	弥生土器	広口壺	17.90	(3.20)			口縁部1/1（端部若干欠損）	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、2個／単位の紐通し孔有り	口縁端部ヨコナデ、端面凹線＋棒状浮文、以下タテハケ後ナデ消し
331	C地区	SX07	弥生土器	壺		(22.00)	(34.50)		体部中半1/2残存	φ2mm以下の砂粒多く含む	体部上半ヨコハケ、下半タテヘラケズリ後タテハケ	体部タテハケ、上半に斜格子文＋直線文、最下端に扇形文
332	C地区	SX07	弥生土器	甕	(14.90)	(7.70)			口縁部1/6～体部残存	φ7mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
333	C地区	SX07	弥生土器	甕	(18.50)	(16.00)	(22.35)		口縁部1/6～体部残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部上半ナナメハケ、下半タテヘラケズリ後タテハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
334	C地区	SX09	弥生土器	広口壺	(23.70)	(10.10)			口縁部1/4残存	φ4mm以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、以下不明	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋円形浮文、体部刺突文＋直線文＋波状文
335	C地区	SX09	弥生土器	広口壺	(23.40)	(8.50)			口縁部1/5残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、以下タテハケ、頸部に凹線
336	C地区	SX09	弥生土器	広口壺	(17.05)	(6.60)			口縁部1/4残存	粗砂～極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、以下タテハケ、頸部に凹線
337	C地区	SX09	弥生土器	広口壺	(15.80)	(6.10)			口縁部1/4残存	φ5mm以下の石粒数個、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文、以下ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部凹線
338	C地区	SX09	弥生土器	広口壺	(17.95)	(21.60)	(27.60)		口縁部～体部1/2残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、体部タテハケ、上半に波状文＋直線文
339	C地区	SX09	弥生土器	直口壺	(19.10)	(23.70)			口縁部2/3残存、胴部上半若干残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ後波状文＋直線文
340	C地区	SX09	弥生土器	広口壺（把手付）	(17.75)	49.10	(36.10)	9.40	口縁部1/3～底部一部欠損	φ8mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋円形浮文、体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ
341	C地区	SX09	弥生土器	甕	(13.60)	(7.10)	(15.00)		口縁部1/5、体部1/8残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
342	C地区	SX09	弥生土器	甕	16.95	(9.05)			口縁部2/3、体部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、中半ナナメハケ
343	C地区	SX09	弥生土器	甕	(9.80)	(13.10)			口縁部1/2、体部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
344	C地区	SX09	弥生土器	甕	(24.45)	(9.80)			口縁部～肩部1/4残存	φ6mm以下の石粒数個、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
345	C地区	SX09	弥生土器	甕	(27.40)	(30.25)	(37.40)		口縁部1/3、体部1/5残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
346	C地区	SX09	弥生土器	高杯		(14.05)		(11.25)	脚部ほぼ完存	極粗砂～細砂を多量に含む	脚端部ヨコナデ、絞り痕有り	脚端部ヨコナデ／凹線、裾部タテヘラミガキ、下方に穿孔（φ6mm）をめぐらせる
347	C地区	SP01	弥生土器	壺		(21.95)	(28.20)	(9.30)	底部1/2～体部残存	φ4mm以下の石粒含む	体部ヘラケズリ?	体部下半タテミガキ、中半タテハケ
348	C地区	SP02	弥生土器	壺		(36.10)	(34.10)	(7.10)	底部1/2～体部1/2残存	極粗砂を多く含む	不明	体部上半不明、下半タテヘラミガキ、底部ヨコ方向の板ナデ、底面ナデ
349	C地区	SK01	弥生土器	甕	(15.50)	(4.65)			口縁部1/6残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
350	C地区	SK01	弥生土器	甕	(17.40)	(5.90)			口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タタキ
351	C地区	SK01	弥生土器	甕	(16.45)	(6.40)			口縁部1/6残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
352	C地区	SK01	弥生土器	高杯	(26.30)	(5.70)			口縁部1/3残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ	不明
353	C地区	SK01	弥生土器	高杯		(13.90)			脚柱部のみ残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	脚裾部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚柱部タテヘラミガキ
354	C地区	SK01	弥生土器	脚部		(7.40)		10.10	脚部のみ残存一部欠損	φ3mm以下の石粒含む	脚端部ヨコナデ	脚端部ヨコナデ、脚柱部に凹線
355	C地区	SK01	弥生土器	脚部		(6.75)		(16.65)	脚端部1/3残存	極粗砂を多く含む	脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部に凹線
356	C地区	SK01	弥生土器	器台		(14.00)		(31.00)	口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒若干含む	脚部ナナメハケ、脚端部ヨコナデ	脚部ヨコナデ／凹線、脚端部ヨコハケ／ヨコナデ、円孔透かし有り
357	C地区	SK02	弥生土器	甕	(13.70)	(4.10)			口縁部1/7残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
358	C地区	SK02	弥生土器	甕	(18.00)	(3.30)			口縁部1/10残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ,体部タテハケ
359	C地区	SK06	弥生土器	広口壺	(29.10)	(2.55)			口縁部若干残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、口縁部上端に波状文	口縁部ヨコナデ、端面に凹線+縦ヘラ描き沈線
360	C地区	SK06	弥生土器	甕	(14.80)	(3.80)			口縁部1/8残存	φ3㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
361	C地区	SK23	弥生土器	広口壺	(16.70)	(23.65)	24.00		口縁部1/8、体部1/3残存	φ6㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、以下ヨコナデ、体部多方向のハケ	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯、体部タテハケ、上半に波状文+直線文
362	C地区	SK23	弥生土器	広口壺	(12.70)	(20.70)	(20.30)	(9.60)	全体として2/3残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ上げ、体部上半ヨコハケ、中半タテハケ後屈曲部ナデ消し、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/凹線、頸部タテヘラミガキ、体部タテヘラミガキ、上半に貝殻列点文
363	C地区	SK23	弥生土器	甕		(20.90)		6.70	底部ほぼ完形～体部1/3残存	φ5㎜以下の石粒含む	体部下半タテヘラケズリ	体部タテハケ
364	C地区	SD02	弥生土器	広口壺	(19.00)	(7.60)			口縁部1/4残存	φ2㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に1条の貼り付け突帯、2個/単位の紐通し孔あり	口縁端部ヨコナデ、端面凹線+縦ヘラ描き沈線+円形浮文、頸部に指頭圧痕文突帯
365	C地区	SD02	弥生土器	広口壺		(5.30)			頸部1/5残存	極粗砂を多く含む	頸部ナデ	頸部タテハケ、断面三角形突帯
366	C地区	SD03	弥生土器	甕	(12.55)	(3.35)			口縁部1/7残存	φ4㎜の小石～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線
367	C地区	SD03	弥生土器	甕	(16.10)	(3.70)			口縁部1/2残存	φ4㎜ の小石～極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
368	C地区	SD03	弥生土器	甕	(20.60)	(5.35)			口縁部1/8残存	φ4㎜の小石～極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/擬凹線
369	C地区	SD03	弥生土器	有孔鉢		(4.00)		(4.00)	底部1/2残存	φ1㎜以下の砂粒含む	不明	不明、底部に焼成前の穿孔有り
370	C地区	SD03	弥生土器	鉢	(12.20)	(3.20)			口縁部1/5残存	φ2㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
371	C地区	SD03	弥生土器	底部		(4.00)		(3.80)	底部のみ残存、端部欠損	φ1㎜以下の砂粒多く含む	底部蜘蛛の巣状ハケ	不明
372	C地区	SD03	弥生土器	高杯		(5.45)			脚部のみ残存（端部は欠損）	極粗砂を多く含む	杯部二方向のヘラミガキ	脚柱部タテヘラミガキ、下方に穿孔有り
373	C地区	SD04	弥生土器	広口壺	(26.30)	(1.90)			口縁部小片（端部欠損）残存	φ1㎜の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文+扇形文	口縁端部ヨコナデ、端面凹線
374	C地区	SD05	弥生土器	直口壺	(14.40)	(6.30)			口縁部1/6残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
375	C地区	SD05	弥生土器	広口壺	(19.05)	(8.95)			口縁部4/5残存	粗砂～極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、頸部ヨコナデ？	口縁部ヨコナデ/凹線、頸部付近タテハケ後ヨコナデ
376	C地区	SD05	弥生土器	広口壺	(14.70)	(14.20)	(22.60)		口縁部～胴部下半1/3残存	φ3㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線
377	C地区	SD05	弥生土器	広口壺	(23.50)	(17.00)			口縁部～頸部1/2、肩部若干残存	細砂～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ後ナデ消し、体部ナナメハケ
378	C地区	SD05	弥生土器	甕	(19.60)	(4.95)			口縁部1/6残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ
379	C地区	SD05	弥生土器	甕	(13.30)	(8.60)	(15.70)		口縁部1/2、体部1/4残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ
380	C地区	SD05	弥生土器	甕	(14.80)	(11.00)	(22.30)		口縁部1/3、体部上半残存	φ1㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/凹線、体部タタキ後タテハケ、最大径付近に列点文めぐらせる
381	C地区	SD05	弥生土器	高杯	(25.00)	(5.75)			口縁部1/8残存	φ2㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、鉢部ヨコハケ後タテヘラミガキ	口縁部ヨコナデ/凹線、鉢部ヨコヘラミガキ？
382	C地区	SR02	弥生土器	広口壺	(18.15)	(5.80)			口縁部1/3残存	φ2㎜大の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ？	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
383	C地区	SR02	弥生土器	広口短頸壺	(20.30)	(5.40)			口縁部1/6残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線、頸部に指頭圧痕文突帯、体部に直線文
384	C地区	SR02	弥生土器	広口壺	(18.00)	(6.25)			口縁部1/4残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線+円形浮文、以下タテハケ、頸部凹線
385	C地区	SR02	弥生土器	壺底部		(11.80)		(12.00)	底部1/3、体部1/8残存	粗砂を多く含む	体部下半タテヘラケズリ	体部下半タテヘラミガキ、底部周縁部のみヨコナデ、底面ヘラケズリ後ナデ
386	D地区	SB01	土師器	杯	(16.00)	(2.70)			口縁部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ
387	D地区	SB01	土師器	杯	(14.90)	(3.20)			口縁部1/7残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
388	D地区	SB01	土師器	小皿	(9.60)	1.50		5.25	約1/2残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
389	D地区	SB01	黒色土器	椀	(15.40)	(4.75)			口縁部1/8残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
390	D地区	SB01	黒色土器	椀	(15.80)	(4.75)			口縁部1/9残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、高台貼り付けナデ
391	D地区	SB02	土師器	小皿	(10.40)	(1.20)		(6.60)	1/2残存	φ2㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、見込み部ナデ	口縁部ヨコナデ、底部ナデ
392	D地区	SB02	黒色土器	椀	(16.80)	(2.70)			口縁部若干残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
393	D地区	SB03	土師器	杯	(15.00)	(2.60)			口縁部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ
394	D地区	SB03	黒色土器	小皿	(9.80)	2.10		(5.10)	口縁部若干、体部、底部1/2残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ？	ヨコヘラミガキ、底部回転糸切り
395	D地区	P244	須恵器	椀	(15.30)	(3.40)			口縁部若干残存	φ2㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ
396	D地区	P65	黒色土器	椀	(15.40)	(3.00)			口縁部1/8残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
397	D地区	SK03	弥生土器	高杯	(31.20)	(2.25)			口縁部1/23残存	φ1.5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線
398	D地区	SK07	弥生土器	広口壺	(15.00)	(1.35)			口縁部1/8残存	φ3.5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面に波状文
399	D地区	SK07	弥生土器	甕	(17.40)	(1.65)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
400	D地区	SK07	弥生土器	底部		(3.45)		(7.00)	底部1/3残存	粗砂を少量含む	底部ヘラケズリ	底部不明
401	D地区	SK10	黒色土器	椀	(14.20)	(4.50)			口縁部～体部1/5残存	極細砂をごく少量含む	口縁端部ヨコナデ、器表面全体にヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、器表面全体にヨコヘラミガキ
402	D地区	SK12	弥生土器	直口壺	(8.60)	(3.90)			口縁部1/4残存	細砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線
403	D地区	SK12	弥生土器	鉢	(35.00)	(5.15)			口縁部若干残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、以下不明	口縁部ヨコナデ/凹線、以下ナデ？
404	D地区	SK12	弥生土器	壺底部		(4.40)		7.00	底部1/2残存	細砂を多く含む	体部下半タテヘラケズリ、底部不定方向ナデ	体部下半タテハケ、底面多方向ナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
405	D地区	SK12	弥生土器	甕	(15.50)	(7.15)			口縁部1/9残存	φ1.5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線？、体部タテハケ
406	D地区	SK26	弥生土器	壺		(12.85)	(31.10)		肩部1/4残存	φ2mm以下の石粒含む	体部上半タテハケ後ヨコハケ、下半タテヘラケズリ	体部タテハケ後直線文＋波状文
407	D地区	SK30	弥生土器	直口壺	(9.50)	(4.60)			口縁部1/6残存	細砂を多く含む	口縁部タテ方向ナデ後ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
408	D地区	SK30	弥生土器	水差形土器	11.20	(18.65)	(22.90)		口縁部ほぼ完形～体部1/4残存	φ10mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、上半に2帯のヘラ先刺突文
409	D地区	SK30	弥生土器	水差形土器		(14.55)	(15.40)	(6.20)	体部～底部1/2残存	粗砂・細砂を多く含む	体部上半ナデ、下半ナナメヘラケズリ	体部上半ナナメハケ、下半板ナデ後タテミガキ、底部ヨコナデ、底面多方向ナデ
410	D地区	SK30	弥生土器	短頸壺		(15.90)	(19.40)	(6.35)	底部1/2～体部1/6残存	φ4mm以下の石粒含む	体部ヘラケズリ後タテハケ	体部タテハケ、上半にヘラ先刺突文
411	D地区	SK30	弥生土器	細頸壺		(5.60)	(18.00)		体部1/6残存	細砂を少量含む	体部上半ナデ、屈曲部ヨコヘラミガキ	体部上半ハケ後ナデ消し、屈曲部ヨコヘラミガキ
412	D地区	SK30	弥生土器	水差形土器		(19.20)	(15.80)	6.00	体部1/2、底部1/1残存	粗砂～極細砂を多量に含む	体部上半ヨコナデ、下半ヨコナデ、脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ	体部屈曲部に凹線、体部下半タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚柱部タテヘラミガキ
413	D地区	SK30	弥生土器	甕	(17.10)	(6.40)			口縁部～肩部1/4残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ消し、中半ヨコヘラケズリ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、口縁端部下方のみ凹線、端面に刻み目、体部タテハケ
414	D地区	SK30	弥生土器	台付鉢	(16.00)	(12.90)			口縁部～脚柱部1/4残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、鉢部タテハケ後タテミガキ？底部ヨコミガキ、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ、鉢部ヨコミガキ、杯と脚柱部の接合部タテハケ
415	D地区	SK30	弥生土器	高杯	(26.50)	(4.00)			口縁部1/2残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
416	D地区	SK30	弥生土器	壺か鉢		(14.95)			杯部下部1/2、脚部残存、脚端部は全欠損	細砂を多く含む	杯部ハケ後ナデ消し、脚柱部ヨコヘラケズリ	杯部タテヘラミガキ、脚柱部タテヘラミガキ
417	D地区	SK30	弥生土器	高杯	(19.60)	17.10		12.50	杯部1/3欠損	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、杯部ナデ、脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部タテヘラミガキ後一部ナデ、脚柱部タテヘラミガキ、杯との接合部と裾部付近にヘラ描き沈線、１６箇所に穿孔（φ４mm）
418	D地区	SK30	弥生土器	台付鉢		(15.00)		12.50	体部1/7、脚部ほぼ完形	φ2mm以下の石粒含む	杯部下半板ナデ／ハケ、見込み部板ナデ後タテヘラミガキ、脚部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	杯部タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ
419	D地区	SE01	須恵器	小皿	8.90	2.05		4.60	完形	極細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
420	D地区	SE01	須恵器	椀	(15.70)	(3.00)			口縁部1/9残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ
421	D地区	SE01	土師器	甑	(22.40)	(11.60)		(11.70)	口縁部～底部1/8残存	φ3mm以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ
422	D地区	SE01	土師器	小皿	(10.20)	1.80		(6.30)	口縁部1/3、底部1/2残存	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り？
423	D地区	SE01	黒色土器	椀	(15.30)	5.80		6.55	底部完形～口縁部1/10残存		ヨコヘラミガキ	ヨコナデ、底部糸切り後不調整
424	D地区	SE01	黒色土器	椀	(15.80)	(5.00)		(8.90)	口縁部若干、体部1/7、底部若干残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
425	D地区	SE01	黒色土器	小皿	(10.60)	1.80		(6.00)	口縁部若干、底部1/3残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ	回転ナデ、底部回転糸切り
426	D地区	SD04	弥生土器	水差形土器	(9.90)	(6.45)			口縁部1/4残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部板ナデ
427	D地区	SD04	弥生土器	甕	(16.90)	(6.20)			口縁部1/8残存	φ1mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
428	D地区	SD04	弥生土器	高杯		(13.10)		13.70	脚部のみ残存	細砂を多量に含む	杯部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	杯部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚柱部タテヘラミガキ、脚柱部と杯・裾部の接合付近にヘラ描き沈線
429	D地区	SR02	土師器	丸底壺		(9.35)	(12.70)		体部のみ完形	φ2mm以下の砂粒わずかに含む	体部ヨコハケ、接合痕を残すほどに粗いナデ	不明
430	D地区	包含層	縄文土器	凸帯文深鉢	(33.70)	(6.30)			口縁部若干残存	φ4mm以下の石粒含む	ナデ	口縁部上端に凸帯文、体部ナデ
431	D地区	包含層	土師器	杯	15.15	3.65		8.35	口縁部1/2、底部3/4残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
432	E地区	SX01	弥生土器	広口壺	18.90	(37.40)	(27.00)	7.15	体部若干残存、口縁部・底部若干欠損	φ2mm大の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、以下タテハケ、頸部に凹線、体部上半タテハケ後、直線文＋波状文、最大径以下ヨコヘラミガキ、底部タテヘラミガキ、底面ナデ
433	E地区	SX01	弥生土器	壺底部		(8.00)		8.80	底部のみ残存	粗砂・細砂を多く含む	体部下半タテヘラケズリ、底部多方向ナデ	体部下半タテヘラミガキ、底面ナデ
434	E地区	SX01	弥生土器	甕	16.10	38.95	23.30	7.60	口縁部～底部2/3残存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後タテハケ、中半タテハケ、下半不明
435	E地区	SX01	弥生土器	甕	(17.10)	11.55			口縁部1/4、体部1/8残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部多方向にハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
436	E地区	SX01・02間	弥生土器	甕	(14.60)	(7.55)			口縁部～肩部12/3残存	φ1mm以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ハケ？
437	E地区	SX01・02間	弥生土器	甕	(14.00)		(23.40)	(4.00)	口縁部1/7、体部1/10、底部1/3残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半不明	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半不明
438	E地区	SX01・02間	弥生土器	甕	(20.90)	(6.60)			口縁部～肩部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
439	E地区	SX01・02間	弥生土器	甕底部		(16.15)		(5.50)	底部3/4、体部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	体部タテヘラケズリ	体部下半不明、底部タテハケ、周縁部のみヨコナデ、底面も円を描くようにナデ
440	E地区	SX02	弥生土器	広口壺	(15.60)	(21.40)	(31.10)		口縁部1/3、体部1/3残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に列点文、体部不明	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部上半に波状文+直線文、下半タテハケ
441	E地区	SX02	弥生土器	甕	(15.10)	(27.00)	(5.50)		口縁部2/3、底部完存	φ1mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、頸部のみヨコナデ、底部板状の工具痕残る	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部上半タテハケ、下半不明
442	E地区	SX02	弥生土器	甕	(14.60)	30.30	(20.70)	(6.00)	口縁部2/3、体部1/3、底部1/6残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ？

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
443	E地区	SX02	弥生土器	甕	19.40	34.50	26.40	(5.60)	口縁部1/6、体部1/4、底部1/6欠損	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラミガキ、底部ナデ
444	E地区	SX03	弥生土器	壺		(27.90)	27.60	(8.40)	体部～底部1/2残存	粗砂を多量に含む	体部上半不明、下半ケズリ？	体部上半不明、下半タテヘラミガキ
445	E地区	SX03	弥生土器	壺		(22.50)	(28.60)	7.10	体部1/2、底部1/1残存	粗砂・細砂を多量に含む	体部上半不明、体部下半タテヘラケズリ	体部上半に直線文＋波状文、下半タテハケ
446	E地区	SX03	弥生土器	広口壺	(21.10)	(19.30)			口縁部～体部1/2残存	φ4㎜大の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端列点文、体部不明	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋円形浮文、体部直線文＋波状文
447	E地区	SX03	弥生土器	水差形土器		(13.20)	(13.20)	(4.50)	体部2/3、底部1/4、把手1/1残存	粗砂・細砂を多く含む	体部上半ヨコナデ、下半多方向ナデ	体部上半不明、下半タテハケ、底面ナデ
448	E地区	SX04	弥生土器	甕	(17.90)	(19.70)	(22.60)		口縁部～体部1/3残存	φ2㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
449	E地区	SX04	弥生土器	広口短頸壺	(15.20)	31.05	(28.80)	(8.80)	約1/2残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ後ナデ消し、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、頸部付近のみヨコナデ、下半タテヘラミガキ、底部ナデ
450	E地区	SX04	弥生土器	広口壺		(27.40)	(25.60)		頸部～体部下1/2残存	φ3㎜以下の砂粒多く含む	頸部不明、体部上半ハケ？、下半不明	頸部タテハケ、頸部境に断面三角形刻み目突帯、体部タテハケ
451	E地区	SX04	弥生土器	甕	(20.20)	(15.00)			口縁部若干、肩部～体部1/2残存	φ3㎜大の石粒を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
452	E地区	SX04	弥生土器	甕底部		(31.40)		(9.60)	体部下半1/8残存	φ2㎜以下の砂粒多く含む	体部中半ナナメハケ、下半タテヘラケズリ	体部中半ナナメハケ、下半タテハケ
453	E地区	SX08	弥生土器	甕	(16.00)	31.90	23.90	6.00	口縁部1/4、体部1/2、底部1/1残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケ後ナデ消し、下半タテヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、下端に刻み目、体部タテハケ、底部周縁部ヨコナデ、多方向のナデ
454	E地区	SX08	弥生土器	甕	(15.20)	25.50	17.80	5.00	口縁部1/4、体部2/3、底部3/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケ、中半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテ方向のナデ、底部周縁部のみヨコナデ、底面多方向ナデ
455	E地区	SX08	弥生土器	甕	(14.40)	30.50	20.60	6.00	口縁部1/3、体部～底部若干欠損	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
456	E地区	SX08	弥生土器	甕	(14.80)	(11.90)	(23.50)		口縁部1/3、体部1/4残存	粗砂～極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
457	E地区	SX09	弥生土器	直口壺	(11.70)	(9.90)			口縁部～頸部1/2、体部若干残存	φ0.5～2.5㎜大の砂粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
458	E地区	SX09	弥生土器	広口壺	(17.60)	(4.90)			口縁部1/6残存	φ5～3㎜の小石を若干、細砂を多く含む	不明	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目＋円形浮文
459	E地区	SX09	弥生土器	広口壺	(17.10)	(5.30)			口縁部1/3残存	φ5㎜大の石数個、φ3㎜以下の石粒を多量に含む	不明	口縁部タテハケ、頸部に断面三角形突帯
460	E地区	SX09	弥生土器	甕	(15.10)	(5.15)			口縁部～肩部1/6残存	極粗砂・粗砂を多量に含む	不明	不明
461	E地区	SX09	弥生土器	甕	(17.20)	(4.75)			口縁部1/4残存	φ5㎜の小石1個、細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目
462	E地区	SX09	弥生土器	甕底部		(9.40)		7.60	体部若干、底部1/1残存	φ5㎜の小石～細砂を多量に含む	不明	不明
463	E地区	SX09	弥生土器	壺底部		(10.20)		7.20	底部～体部ほぼ残存	φ5㎜以下の石粒含む	不明	不明
464	E地区	SX09	弥生土器	高杯	(19.80)	(8.80)			杯部1/2残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に貼り付け突帯、杯部タテヘラミガキ、円盤充填、垂下口縁部ヘラミガキ？	垂下口縁部ヘラミガキ？杯部タテヘラミガキ
465	E地区	SX10	弥生土器	広口壺	(13.60)	(2.70)			口縁部1/9残存	粗砂を少量含む	不明	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部に凹線
466	E地区	SX10	弥生土器	広口壺	(21.00)	(3.50)			口縁部1/12残存	φ5㎜以下の砂粒多く含む	不明	不明
467	E地区	SX10	弥生土器	広口壺	(12.60)	(10.50)	(16.00)		口縁部～体部約1/4残存	φ0.5～5㎜大の砂粒を含む	不明	不明
468	E地区	SX10	弥生土器	広口壺	(22.70)	(10.35)			口縁部1/3、頸部1/4残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に竹管文	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目、以下タテハケ、体部上半に直線文
469	E地区	SX10	弥生土器	壺底部		(5.50)		8.60	底部のみ完存	φ13㎜の石1個、φ9㎜以下の石粒を多量に含む	不明	不明
470	E地区	SX10	弥生土器	甕	(14.40)	(3.70)			口縁部1/6残存	φ1㎜以下の砂粒含む	不明	不明
471	E地区	SX10	弥生土器	甕	(21.50)	(6.40)			口縁部若干残存	φ2㎜大の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
472	E地区	SX10	弥生土器	甕	(17.20)	27.90	(19.50)	5.80	口縁部～体部1/4、底部1/1残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半多方向のハケ、下半タテヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半ナデ
473	E地区	SX10	弥生土器	鉢	(23.60)	(26.15)		(12.00)	口縁部～胴部1/2欠損	φ3㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部上方に断面三角形刻み目突帯、以下タテハケ
474	E地区	SX20	弥生土器	広口壺	(10.70)	(5.60)			口縁部1/6残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
475	E地区	SX20	弥生土器	直口壺	(12.40)	(7.90)			口縁部1/6残存	粗砂を多量に含む	不明	頸部に指頭圧痕文突帯
476	E地区	SX20	弥生土器	広口壺	(16.80)	(6.80)			口縁部若干残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯（凹線を入れ凸部に圧痕を加える）
477	E地区	SX20	弥生土器	広口壺	(17.70)	(7.25)			口縁部1/8、頸部1/6残存	φ3.5㎜の小石～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に直線文
478	E地区	SX20	弥生土器	広口壺	(17.40)	(8.45)			口縁部1/3、頸部1/4残存	φ6㎜の小石～細砂を多量に含む	不明	頸部タテハケ、屈曲部に直線文
479	E地区	SX20	弥生土器	甕	(21.60)	(6.70)			口縁部1/14～体部残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
480	E地区	SX20	弥生土器	甕	(28.70)	(10.50)			口縁部1/8残存	φ2㎜大の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
481	E地区	SX20	弥生土器	甕	(31.20)	(9.40)			口縁部1/9残存	φ9㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
482	E地区	SK01	須恵器	杯B	(11.70)	(3.30)		(8.75)	口縁部1/9、体部1/4残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
483	E地区	SK01	須恵器	杯A底部		(1.70)		(7.60)	底部小片残存	砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り後、多方向にナデ
484	E地区	SK01	須恵器	杯B底部		(2.30)		(11.00)	底部1/5残存	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
485	E地区	SK01	須恵器	椀底部		(2.00)		(6.50)	底部1/3残存	φ2㎜以下の石粒を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
486	E地区	SK01	須恵器	椀底部		(1.90)		(8.20)	底部1/4残存	φ4㎜の小石1個、細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
487	E地区	SK02	須恵器	杯B底部		(2.40)		(8.00)	底部1/4残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ、底部ナデ
488	E地区	SK02	瓦器	椀底部		(1.10)		(5.50)	底部1/6残存	極細砂をごく少量含む	不明	不明
489	E地区	SK03	須恵器	椀	(14.00)	(5.20)		(7.40)	口縁部～底部1/2残存、口縁部はわずか	砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付けナデ
490	E地区	SK03	須恵器	皿B	(14.10)	2.95		(7.00)	口縁部1/5、底部1/4残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
491	E地区	SK03	須恵器	皿B底部		(1.20)		(11.50)	高台部1/8残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
492	E地区	SK03	須恵器	鉢	(14.70)	(4.05)			口縁部1/6残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
493	E地区	SK04	須恵器	壺		(3.00)		(5.90)	底部1/3欠損	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付けナデ
494	E地区	SK05	須恵器	壺底部		(2.75)		(10.80)	底部2/3残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
495	E地区	SK06	須恵器	椀	(13.80)	(2.50)			口縁部1/10残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
496	E地区	SK06	須恵器	椀底部		(2.15)		(7.60)	底部1/6残存	砂粒わずかに含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付けナデ
497	E地区	SK09	弥生土器	甕底部		(3.00)		5.10	底部のみ完存	極粗砂を多く含む	不明	底部不明、底面はナデ
498	E地区	SK09	弥生土器	甕	(19.40)	(3.55)			口縁部～肩部若干残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ？
499	E地区	SK09	弥生土器	甕	(24.00)	(4.70)			口縁部1/12残存	φ3㎜の小石～粗砂を多く含む	不明	体部上半に直線文＋波状文
500	E地区	SK09	弥生土器	甕底部		(5.30)		(5.90)	底部1/3残存	φ5㎜以下の砂粒含む	体部不明、底部板状の工具のあたり痕有り	体部タテハケ、底部ヨコナデ、底面ナデ
501	E地区	SK10	弥生土器	甕	(17.00)	(4.25)			口縁部1/16残存	φ3㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
502	E地区	SK10	弥生土器	甕	(7.00)	(3.80)			口縁部小片残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
503	E地区	SK21	弥生土器	甕	(20.60)	(3.20)			口縁部小片残存	φ2㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ナデ	口縁部ナデ、体部上半に直線文
504	E地区	SK25	弥生土器	直口壺	(11.50)	(4.50)			口縁部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ナデ	口縁部タテハケ後端部のみにヨコナデ、上端に刻み目、その直下に断面三角形刻み目突帯を貼り付ける
505	E地区	SK25	弥生土器	広口壺	(15.60)	(5.30)			口縁部～頸部1/4残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、以下ヨコハケ、2個1単位の紐通し孔あり、頸部ナデ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
506	E地区	SK25	弥生土器	甕	(16.30)	(3.00)			口縁部1/4残存	細砂を多量に含む	不明	口縁部は一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
507	E地区	SK25	弥生土器	甕	(14.40)	(7.90)			口縁部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
508	E地区	SK25	弥生土器	鉢	(11.20)	11.10	(13.50)	(6.60)	口縁部1/5、体部1/3、底部1/1残存	粗砂・細砂を多量に含む	不明	不明
509	E地区	SK35	弥生土器	甕	(37.90)	(3.80)			口縁部小片残存	φ3㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ？	口縁部ヨコナデ
510	E地区	SK35	弥生土器	底部		(4.55)		6.70	底部のみ残存	細砂を多量に含む	不明	不明
511	E地区	SK36	弥生土器	甕	(28.80)	(3.65)			口縁部若干残存	極粗砂～細砂を多く含む	不明	不明
512	E地区	SK36	弥生土器	甕底部		(12.15)		6.50	底部若干欠損	粗砂を少量含む	底部ヘラケズリ	体部タテハケ
513	E地区	SK27	弥生土器	広口壺	(28.30)	(1.90)			口縁部若干残存	粗砂・細砂を少量含む	不明	口縁部ヨコナデ／凹線
514	E地区	SD01	須恵器	杯蓋		(2.60)			天井部2/3、つまみ1/1残存	細砂を少量含む	多方向ナデ、口縁部回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
515	E地区	SD01	須恵器	蓋	(13.60)	(1.95)			口縁部1/5残存	φ6㎜の小石1個、粗砂を少量含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ
516	E地区	SD01	須恵器	杯B底部		(1.80)		(9.10)	底部1/2残存	極粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後、ナデ、高台貼り付けナデ
517	E地区	SD01	須恵器	杯B底部		(2.80)		(8.30)	底部1/4残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後、ナデ？
518	E地区	SD01	須恵器	杯B底部		(2.55)		(11.00)	底部1/4残存	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後、ナデ、高台貼り付けナデ
519	E地区	SD01	須恵器	杯B		(3.20)		(10.05)	底部1/2残存	細砂を少量含む	回転ナデ後ナデ	回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
520	E地区	SD01	須恵器	椀底部		(2.35)		(5.20)	底部1/4残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り後、ナデ消し？
521	E地区	SD01	須恵器	椀	(15.60)	5.10		(5.60)	口縁部～体部1/4、底部1/2残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
522	E地区	SD01	須恵器	稜椀	(17.40)	(6.40)		(9.50)	口縁部～底部1/4	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
523	E地区	SD01	須恵器	皿	(13.70)	(2.35)		(11.80)	口縁部～底部1/10残存	細砂を少量含む（精緻）	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り
524	E地区	SD01	土製品	土錘	長)4.90	幅)1.95	孔の径)0.35		端部若干欠損	極細砂をごく少量含む		ナデ
525	E地区	SD01	白磁	皿		(1.35)			底部若干残存	精良	施釉、見込み部に花文	施釉
526	E地区	SD02	須恵器	杯B底部		(1.80)		(10.05)	底部1/4残存	細砂を少量含む	回転ナデ、見込み部2方向にナデ	回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付けナデ
527	E地区	SD02	須恵器	壺L	(9.50)	(8.45)			口縁部1/7、頸部1/1残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ、頸部との境は貼り付けのためいナデ	回転ナデ
528	E地区	SD13	弥生土器	鉢	(19.40)	(6.90)			口縁部小片残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ／刻み目、体部竹管文、断面三角形刻み目突帯貼り付け、2個1単位の紐通し孔を持つ
529	E地区	SD13	弥生土器	短頸壺	8.30	20.10	15.90	6.40	口縁部～底部2/3残存	φ5㎜以下の石粒含む、粗い	口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ？ 下半不明	口縁部ヨコナデ、頸部に波状文、体部上半にも波状文、下半不明
530	E地区	SD22	弥生土器	直口壺	(12.20)	(6.50)			口縁部若干残存	φ2㎜以下の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
531	E地区	SD22	弥生土器	脚部		(8.80)			脚部のみ残存（端部は全欠損）	粗砂・細砂を多量に含む	脚部裾ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚部タテヘラミガキ
532	E地区	SD21	弥生土器	広口壺	(19.30)	(16.30)			口縁部1/3～体部残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、上半に直線文＋波状文

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
533	E地区	SR01	弥生土器	壺蓋	(8.80)	(3.70)			口縁部～つまみ1/4残存	φ4mm以下の石粒を多く含む	不明	つまみ部不明、以下直線文、2個1単位の紐通し孔（一つは貫通せず）
534	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	9.25	5.05			口縁部3/4残存	極粗砂～細砂が含まれている	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向の板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、2個1単位の紐通し孔を持つ
535	E地区	SR01	弥生土器	壺底部		(4.50)		5.6	底部のみ完存	φ2mm大の石粒を多く含む	板ナデ	不明
536	E地区	SR01	弥生土器	壺底部		(5.00)		(8.25)	底部若干残存	φ5mm大の石を数個、極粗砂を少量含む	体部ヨコ方向の板ナデ	体部タテハケ、底部ナデ
537	E地区	SR01	弥生土器	鉢		(3.95)			口縁部下部若干残存	極細砂をごく少量含む	体部タテハケ、絞り痕残る	体部ヨコハケ、断面三角形突帯、その直下に廉状文＋棒状浮文
538	E地区	SR01	弥生土器	無頸壺	(12.40)	(7.85)			口縁部1/3残存	極細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、体部上半タテヘラミガキ、下半ヨコヘラミガキ、2個1単位の紐通し孔を持つ
539	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(13.80)	(5.45)			口縁部～頸部1/4残存	極粗砂～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文、以下ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ後ナデ消し、頸部に凹線（浅い沈線状）
540	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(13.80)	(5.20)			口縁部1/2残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、以下ナデ、4個1単位の紐通し孔が二箇所残る	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ／凹線
541	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(18.00)	(5.30)			口縁部1/5残存（端部はごくわずか）	φ0.5～2mm大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部に凹線
542	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(18.50)	(7.70)			口縁部1/3残存	極粗砂～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線＋円形浮文、以下タテハケ、頸部の凹線、屈曲部にヨコハケ？
543	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	19.5	(6.80)			口縁部～頸部4/5残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、上端に羽状文	端面に列点文＋波状文＋円形浮文、頸部タテハケ／凹線文
544	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(16.20)	(12.00)			口縁部1/3～肩部残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後凹線、頸部直下に列点文、体部上半タテハケ
545	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	16.9	(6.70)			口縁部～頸部3/4、体部若干残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ？	口縁部ヨコナデ、以下体部までタテハケ後頸部のみヨコナデ
546	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(21.00)	(9.05)			口縁部1/6残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、以下ハケ後ナデ消し	口縁端部、端面とも凹線、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
547	E地区	SR01	弥生土器	直口壺（把手付）	(14.80)	(15.30)			口縁部1/4～肩部残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ユビオサエ、以下タテハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部ハケ
548	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(22.70)	(8.20)			口縁部～頸部1/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の竹管文、以下多方向のハケ、頸部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、端面に竹管文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
549	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(24.25)	(7.65)			口縁部1/2残存	φ10mmの石1個、φ5mm以下の石数個、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線＋棒状浮文＋円形浮文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
550	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(25.15)	(7.90)			口縁部1/2残存	φ2mm大の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文、以下ヨコヘラミガキ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋棒状浮文＋円形浮文、以下タテハケ後凹線、頸部境に直線文
551	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(26.60)	(9.90)			口縁部1/3残存	φ3.5mm以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文2帯、以下ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線、頸部に凹線
552	E地区	SR01	弥生土器	広口壺	(20.50)	(21.35)	(29.65)		口縁部～体部1/2残存	極粗砂～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ヨコハケ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ後上半のみ、直線文＋波状文
553	E地区	SR01	弥生土器	台付壺		(24.20)	(28.40)	14.00	脚部ほぼ残存、体部約1/6残存	φ0.5～2mm大の砂粒を多く含む	体部下半板ナデ、脚端部ヨコナデ、脚部裾ヨコヘラケズリ	体部下半ハケ後タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ／凹線
554	E地区	SR01	弥生土器	直口壺	(14.90)	(28.40)	(25.50)		口縁部完、体部3/5残存	φ1～2mmの砂粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後ナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ
555	E地区	SR01	弥生土器	広口壺		(34.20)	(31.80)	(10.20)	体部1/2、底部若干残存	粗砂・細砂を多く含む	頸部付近タテ方向のユビナデ、体部上半ハケ後ナデ消し、下半タテヘラケズリ	体部上半タテハケ後、波状文+直線文、最大径付近ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、底部ナデ
556	E地区	SR01	弥生土器	壺		44.30	40.50	9.60	底部1/1、体部1/3残存	粗砂を含む	体部上半ハケ、下半タテヘラケズリ	体部上半タテハケ後、直線文＋波状文、下半タテヘラミガキ
557	E地区	SR01	弥生土器	甕	(13.20)	(6.85)			口縁部1/5残存	極粗砂～粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部上半タテハケ後ナデ消し、中半タテハケ
558	E地区	SR01	弥生土器	甕	(19.70)	(3.45)			口縁部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ／列点文	口縁部条痕文／刻み目による波状口縁をなす、頸部も条痕文
559	E地区	SR01	弥生土器	甕	(23.60)	(4.10)			口縁部1/10残存	φ0.5～4mm大の砂粒を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目、体部上半に直線文
560	E地区	SR01	弥生土器	甕	(19.70)	(6.75)			口縁部1/3残存	極粗砂～粗砂を多量に含む	不明	体部タテハケ
561	E地区	SR01	弥生土器	甕	(16.75)	(8.70)			口縁部～肩部1/2残存	φ2mm大の石粒～極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
562	E地区	SR01	弥生土器	甕	(14.30)	(12.65)	(20.20)		口縁部1/4～体部残存	φ2mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半板ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、肩部に列点文
563	E地区	SR01	弥生土器	甕	(13.40)	(17.50)	(19.60)		口縁部～体部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ後ナデ消し、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、肩部ヨコハケ後タテハケ、中半粗いヨコハケ、下半ヨコハケ後ナデ
564	E地区	SR01	弥生土器	甕	(25.65)	(8.35)			口縁部1/6残存	φ2mm大の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
565	E地区	SR01	弥生土器	甕	21.30	(17.70)	(29.90)		口縁部3/4、体部1/3残存	粗砂、φ0.5から2mm大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ後ハケ、体部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ後ナデ、その後ナデ、ユビオサエ
566	E地区	SR01	弥生土器	短頸壺	(26.30)	(8.20)			口縁部1/4残存	極粗砂・粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ヨコハケ後板ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に列点文、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ
567	E地区	SR01	弥生土器	短頸壺	(28.40)	(7.65)			口縁部1/2残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	腹径(㎜)	底径(㎜)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
568	E地区	SR01	弥生土器	甕	23.30	33.40	28.80	6.70	口縁部～肩部1/4欠損	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、端面ヨコナデ後ハケ？体部上半回転ハケ後タテハケ、下半タテハケ、底部ハケ後ナデ
569	E地区	SR01	弥生土器	甕蓋	(15.20)	5.85			口縁部1/8、つまみ1/1残存	粗砂・細砂を多量に含む	ナデ	口縁部ヨコナデ、つまみ部ハケ、他不明
570	E地区	SR01	弥生土器	壺底部		(6.45)		8.70	底部完形	φ8㎜以下の石粒含む	体部ヨコハケ、底部ナデ	体部板ナデ、底部ナデ
571	E地区	SR01	弥生土器	鉢	(17.40)	(6.60)			口縁部1/6残存	φ0.5～4㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部不明
572	E地区	SR01	弥生土器	台付鉢	(32.60)	23.70		16.60	約3/4残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明、脚端部ヨコナデ、他不明	口縁部ヨコナデ、体部上半凹線、脚端部ヨコナデ／凹線、5箇所の円孔透かし（φ16㎜）持つ
573	E地区	SR01	弥生土器	無頸壺	(10.90)	(5.50)			口縁部1/2残存	細砂を多く含む	口縁部ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線7箇所の円孔透かし（φ8㎜）持つ
574	E地区	SR01	弥生土器	鉢	(14.60)	(5.65)	(18.00)		口縁部1/3残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、鉢部下半ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、2個1単位の紐通し孔有り
575	E地区	SR01	弥生土器	鉢		(9.15)		(15.30)	脚部1/2残存	細砂・極細砂を多量に含む	底部多方向ナデ、脚部ヨコヘラケズリ	鉢部下半多方向のハケ後ナデ消し、脚端部ヨコナデ／凹線、脚部タテハケ後ナデ消し、円形の四孔透かしを持つ
576	E地区	SR01	弥生土器	高杯	(26.00)	(7.00)			口縁部～受部2/3残存	粗砂を含む	口縁部上端に貼り付け突帯、垂下口縁部ヘラミガキ、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ	口縁部凹線／ヨコヘラミガキ、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
577	E地区	SR01	弥生土器	高杯	(34.95)	(6.80)			口縁部1/3残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ／波状文、屈曲部に凹線、以下タテヘラミガキ
578	E地区	SR01	弥生土器	高杯	(17.80)	17.90		(15.10)	杯部1/8、脚部1/2残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に貼り付け突帯、杯部ヨコハケ+タテハケ、底部ナデ、脚部ヨコ方向の指ナデ、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ、脚部タテハケ、脚端部ナデ
579	E地区	SR01	弥生土器	高杯	(16.60)	19.00		(15.00)	約1/2残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に貼り付け突帯、垂下口縁部ヨコヘラミガキ、杯部ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	口縁部不明、杯部ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚柱部3帯の沈線帯、脚部裾に3段にわたって穿孔をめぐらせる
580	E地区	SR01	弥生土器	脚部		(10.80)			脚柱部のみ残存	φ2㎜大の石粒を多量に含む	杯部ナデ、脚部裾ナデ	脚柱部上下の両端にあたる位置に断面三角形突帯を貼り付ける、以下不明
581	E地区	SR01	弥生土器	脚部		(11.55)		14.80	脚端部若干欠損	φ2㎜大の石粒、極粗砂～細砂を少量含む	杯部ナデ、脚端部ヨコヘラケズリ	杯部タテハケ？脚部境に凹線、脚部ヨコナデ
582	E地区	SR01	弥生土器	脚部		(6.10)		(12.20)	脚部1/4残存	粗砂をごく少量含む	脚端部ヨコナデ、脚部裾ナデ	脚端部ヨコナデ、脚裾部タテヘラミガキ、柱部タテハケ、裾下方に穿孔をめぐらせる
583	E地区	SR01	弥生土器	脚部		(8.20)		15.90	脚部2/3残存	細砂をごく少量含む	不明	不明
584	E地区	SR01	弥生土器	脚部		(9.85)		(13.65)	脚部のみほぼ完存	φ3㎜以下の石粒～粗砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、以下ナデ	脚端部ヨコナデ、直線文+波状文+斜格子文
585	E地区	SR01	土製品	紡錘車	縦)4.25	横)4.75	厚)0.55		ほぼ完形	φ2㎜以下の石粒含む	不明	ハケ
586	E地区	SR01	土製品	紡錘車	縦)(3.85)	厚)(1.70)	横)(3.90)		若干欠損	φ3㎜以下の石粒～粗砂を多量に含む	不明	不明
587	E地区	SR02	弥生土器	広口壺	(18.90)	(2.20)			口縁部若干残存	極粗砂～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
588	E地区	SR02	弥生土器	広口壺	(19.15)	(4.75)			口縁部1/4残存	極粗砂～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
589	E地区	SR02	弥生土器	甕	(25.30)	(5.65)			口縁部若干残存	φ2㎜以下の石粒～細砂を多く含む	ナデ?	不明
590	E地区	SR02	弥生土器	甕底部		(4.40)		4.00	底部のみ完存	φ3㎜の石粒数個、極粗砂を多く含む	底部ユビオサエ	底部タタキ?
591	E地区	SR02	弥生土器	高杯		(14.05)			体部のみほぼ完存	φ4㎜以下の石粒含む	脚柱部ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚柱部タテヘラミガキ、柱状部上下両端に凹線
592	E地区	包含層	弥生土器	広口壺	(20.40)	(5.90)			口縁部1/4残存	φ6mm の石1個、φ3㎜以下の粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線+円形浮文（貼り付けの痕跡のみ）、以下タテ方向にナデ
593	E地区	包含層	弥生土器	広口壺	(25.35)	(10.05)			口縁部1/3	φ6㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
594	E地区	包含層	弥生土器	広口壺	(21.00)	(11.80)			口縁部2/3残存	φ4㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の波状文、以下ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に波状文、下端に指頭押圧、頸部に波状文と扇形文でなす流水文風波状文
595	E地区	包含層	弥生土器	甕	(27.30)	(5.40)			口縁部約1/10残存	粗砂を多く含む	不明	体部タテハケ
596	E地区	包含層	弥生土器	甕蓋	5.00	(6.10)			把手部付近のみ残存		ナデ	つまみ部ユビオサエ／ナデ、以下タテハケ
597	E地区	土器棺	弥生土器	壺	(30.60)	51.40	(38.90)	8.50	口縁部1/4、体部1/2、底部完	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部下ヨコハケ、以下体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、受け口部波状文、体部上半タタキ後、簾状文+波状文+直線文、体部下半タテヘラケズリ後タテハケ、底部タテヘラケズリ、底面ナデ
598	E地区	包含層	弥生土器	広口壺	13.00	(19.50)	(17.50)	(6.60)	口縁部1/2、体部1/3、底部若干残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半いユビナデ	口縁部ヨコナデ、体部不明
599	E地区	包含層	青磁	碗	(17.60)	(2.30)			口縁部1/8残存	精良	無文	鎬蓮弁文
600	F地区	SH01	弥生土器	甕	(17.80)	(4.50)			口縁部1/8残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ？体部ヘラケズリ後ナデ？	口縁部ヨコナデ？体部タタキ
601	F地区	SH01	弥生土器	高杯	15.30	(9.65)			口縁部4/5、脚部1/5残存	粗砂を含む	不明	不明、2箇所に円形透かし
602	F地区	SH02	弥生土器	甕	(28.20)	(8.00)			口縁部1/12残存		口縁部ヨコナデ、体部ハケ？	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？
603	F地区	SB04	弥生土器	広口壺	(13.10)	(3.75)			口縁部1/8残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、上端に刻み目、端面に直線文、以下ハケ後ナデ、頸部に直線文
604	F地区	SB06	須恵器	壺底部		(2.90)		(9.00)	底部1/3残存	極細砂を少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
605	F地区	SB06	須恵器	壺底部		(4.75)		(11.10)	底部1/3残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ、高台貼り付けナデ
606	F地区	P45	弥生土器	広口壺	(17.40)	(4.15)			口縁部1/5残存	粗砂・細砂を多量に含む	不明	不明
607	F地区	P55	弥生土器	直口壺	(9.70)	(5.65)			口縁部1/7残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
608	F地区	P55	弥生土器	甕	(29.70)	(8.20)			口縁部1/4残存	φ2㎜大の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部不明

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	腹径(㎜)	底径(㎜)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
609	F地区	P55	弥生土器	甕	(16.60)	(3.20)			口縁部1/10残存	φ0.5～3㎜大の砂粒・石粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
610	F地区	P149	須恵器	杯蓋	(13.40)	3.25			口縁部1/4、つまみ完存	φ3㎜の石粒2個、粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
611	F地区	P188	須恵器	杯蓋	(10.80)	2.50			口縁部1/6、体部1/3、つまみほぼ1/1残存	細砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
612	F地区	SK11	弥生土器	広口壺	(22.40)	(3.25)			口縁部1/4残存	極粗砂から細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、端面に沈線＋刻み目
613	F地区	SK11	弥生土器	広口壺	(19.30)	(3.30)			口縁部1/6残存	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文	口縁部ヨコナデ、端面に波状文
614	F地区	SK11	弥生土器	甕	(23.60)	(3.65)			口縁部若干残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、端面刻み目、肩部に直線文
615	F地区	SK11	弥生土器	甕	(24.30)	(7.05)			口縁部1/12残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ナデ、体部ヨコハケ	口縁部ナデ、端面に刻み目、肩部に直線文、体部タテハケ
616	F地区	SK11	弥生土器	底部		(5.50)		(8.20)	底部1/4残存	φ1～3㎜の石粒を多く含む	不明	体部タテハケ
617	F地区	SK12	弥生土器	広口壺	(23.60)	(8.05)			口縁部1/8残存	φ1～3㎜大の石粒を多く含む	不明	口縁部（上）下端に押圧あり、頸部断面に三角突帯
618	F地区	SK15	弥生土器	無頸壺	(14.60)	(5.85)			口縁部若干残存	細砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ、体部不明、2個1単位の紐通し孔をもつ
619	F地区	SK15	弥生土器	甕	(18.80)	(4.20)			口縁部若干残存	粗砂を含む	口縁部ヨコハケ／ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
620	F地区	SK16	弥生土器	底部		(3.10)		7.40	底部ほぼ完存	細砂を少量含む	体部ユビオサエ／ユビナデ	体部下半タテハケ、底部ナデ
621	F地区	SK16	須恵器	杯A	(10.60)	3.65		(7.30)	約1/4残存	極細砂を多く含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
622	F地区	SK16	須恵器	杯B	(14.20)	(3.95)		(10.85)	口縁部1/12～底部1/5残存	φ1～1.5㎜の石粒、細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
623	F地区	SK16	土師器	甕	(22.20)	(8.40)			口縁部1/6残存	粗砂～極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
624	F地区	SD03	弥生土器	高杯	(12.60)	(10.40)			口縁部～脚部1/4残存	φ4～6㎜の石4個、2㎜以下の石粒を少量含む	口縁部ヨコナデ、杯部ヨコヘラミガキ、脚柱部ナデ、脚部裾ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、脚柱部タテヘラミガキ
625	F地区	SD03	須恵器	杯A	(10.85)	3.55		(7.00)	口縁部1/4～底部1/2残存	φ4㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ？
626	F地区	SD03	須恵器	杯A	(11.50)	3.40		(8.00)	口縁部1/9、底部1/3残存	極細砂を多く含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
627	F地区	SD03	須恵器	椀E	(11.80)	4.70		7.10	口縁部1/3～底部完存	粗砂～細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り
628	F地区	SD03	須恵器	椀E	(11.30)	4.90		(7.20)	口縁部～底部1/2残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ
629	F地区	SD03	須恵器	高台付鉢	(9.80)	7.55		(7.70)	口縁部～体部1/4、底部1/2残存	細砂を含む	回転ナデ、見込み部多方向ナデ	回転ナデ、高台付近ヘラケズリ後ハケ？底部ヘラ切り後ナデ、高台貼り付け後ナデ
630	F地区	SD03	須恵器	高台付瓶		(5.75)		(6.10)	底部1/2、体部1/2残存	φ3㎜大の石粒数個、粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け
631	F地区	SD03	土師器	椀A	12.30	4.50		6.70	完存	φ1～3㎜の石粒を少量含む	回転ナデ後ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ？
632	F地区	SD03	土師器	甕	(18.80)	(8.55)			口縁部1/6残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ
633	F地区	SD03・04	須恵器	杯B蓋	(16.90)	2.60			口縁部1/9残存、つまみ完存	粗砂を少量含む	回転ナデ後、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
634	F地区	SD03・04	須恵器	杯B	(15.10)	3.35		(10.10)	口縁部～底部1/7残存	極粗砂少量、細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
635	F地区	SD03・04	須恵器	杯B？	(15.80)	3.70		(11.10)	口縁部若干、体部～底部1/8残存	粗砂、φ8㎜の石1個を含む	回転ナデ後、見込み部のみナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
636	F地区	SD03・04	須恵器	杯A	(13.109	(2.95)		5.80	底部完形～口縁部1/6残存	φ5㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
637	F地区	SD03・04	須恵器	椀B	(13.30)	4.00		9.00	口縁部～底部1/8残存	細砂、0.5～2㎜大の砂粒をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
638	F地区	SD04	須恵器	皿B	(17.80)	3.80		(12.00)	口縁部1/3、体部2/3残存	細砂を少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
639	F地区	SD10	須恵器	杯A	(11.20)	4.00		(7.30)	口縁部1/5、底部1/8残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
640	F地区	SD10	須恵器	杯A	(13.70)	4.20		10.60	口縁部1/3～底部完存	粗砂を多く含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
641	F地区	SD10	須恵器	杯B	(16.30)	4.40		(12.40)	口縁部1/5、底部1/4残存	細砂を多く含む	回転ナデ、見込み部多方向ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ、高台貼り付けナデ
642	F地区	SD10	須恵器	稜椀	(17.60)	6.85		(11.00)	口縁部1/7、底部2/5残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、高台付近回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
643	F地区	SD11	須恵器	稜椀蓋	(17.70)	2.65			口縁部1/4～つまみ部2/3残存	φ6㎜以下の石粒含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ貼り付けナデ
644	F地区	SD11	須恵器	杯A	(11.80)	3.90		7.35	底部1/1、口縁部1/6、体部1/3残存	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
645	F地区	SD11	須恵器	杯B	(16.20)	4.20		(10.90)	底部1/5、口縁部～体部若干残存	細砂、φ0.5～1.5㎜の砂粒をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
646	F地区	SD11	須恵器	稜椀	(18.20)	6.55		(11.65)	口縁部若干～底部1/4残存	φ1㎜以下の石粒含む	回転ナデ後不定方向ナデ	回転ナデ、口縁部付近回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
647	F地区	SD11	須恵器	甕	(16.10)	6.30			口縁部1/3残存	極細砂を少量含む	口縁部回転ナデ、体部当て具後ナデ消し	口縁部回転ナデ、体部平行タタキ、肩部にカキ目
648	F地区	SD12	弥生土器	壺底部		(4.90)		(7.80)	底部2/3残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒・小石を含む	不明	不明
649	F地区	SR01（Ⅳ層）	弥生土器	広口壺	(12.90)	(15.00)	17.25	4.50	口縁部5/6欠損	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に波状文＋竹管文、体部上半に波状文＋直線文、最大径付近のみヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキ、底部ナデ
650	F地区	SR01（Ⅳ層）	弥生土器	広口壺	(23.80)	(9.30)			口縁部1/6残存	φ2㎜以下の石粒～粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、頸部板ナデ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ後ナデ、頸部に断面三角形突帯

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
651	F地区	SR01(Ⅳ層)	弥生土器	長頸壺	(11.75)	(26.80)		(7.60)	口縁部若干欠損、底部若干残存	φ6㎜以下の小石数個、φ2㎜大の石粒を少量含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部上半ナデ、下半不明	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部タテハケ、底部ナデ
652	F地区	SR01(Ⅳ層)	弥生土器	直口壺	(11.05)	(13.85)	(15.80)		口縁部1/5、体部1/4残存	粗砂～細砂を含む	口縁部ヨコハケ、体部ヨコヘラケズリ	口縁ヨコナデ/擬凹線、頸部に擬凹線状の直線文、体部タテハケ
653	F地区	SR01(Ⅳ層)	弥生土器	甕	(14.209	(8.20)			口縁部～頸部1/3残存	粗砂、φ0.5～3.5㎜大の石粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/凹線、体部タテハケ
654	F地区	SR01(Ⅳ層)	弥生土器	甕	(31.65)	(8.40)			口縁部若干残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
655	F地区	SR01(Ⅳ層)	弥生土器	高杯		(13.30)		(12.50)	脚端部ごくわずか、底部1/4残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	杯部ハケ後ナデ、脚端部ヨコナデ、他ヨコヘラケズリ	杯部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ/凹線、他タテヘラミガキ、脚柱部上下端にヘラ描き沈線帯
656	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	壺	(10.60)	9.30	11.30	2.15	口縁部4/5欠損	細砂・極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ後ナデ、底部多方向ハケ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部ヨコヘラミガキ、頸部に2個1単位の紐通し孔有り
657	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	壺	(13.70)	(6.05)	(10.30)		口縁部～肩部1/6残存	極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ/擬凹線
658	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕底部		(3.65)		(3.30)	底部1/4欠損	φ2㎜以下の石粒、粗砂を少量含む	不明	体部下半タテハケ後タテヘラミガキ、底部ナデ
659	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	壺	8.10	11.90		(3.40)	底部1/2欠損	極粗砂～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、体部上半ハケ後ヨコナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部上半タテハケ、中半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
660	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	台付壺		(12.00)	(14.00)	9.50	底部ほぼ完、体部1/3残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒のほか、5.5㎜大の小石を1個含む	体部タテ後ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚部裾上方ヨコヘラケズリ、下方タテハケ	体部中半ヨコヘラミガキ、下半タテハケ後タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、端部付近のみヨコヘラミガキ
661	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.65)	(7.80)			1/9残存		口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？
662	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	広口壺	15.15	8.60			口縁部～肩部1/3欠損	φ3㎜以下の石粒、粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
663	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	長頸壺	10.25	24.65	14.85	3.70	2/3残存	粗砂～細砂が含まれています	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ、体部上半ナデ上げ、多方向のナデ	口縁部ヨコナデ、頸部タテヘラミガキ、体部タタキ後タテハケ、その後タテヘラミガキ、底部ナデ
664	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	広口壺	(13.20)	20.20	16.60	(5.80)	口縁部3/4、体部2/3、底部1/1残存	粗砂、φ0.5～7㎜大の砂粒・石粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半粗いナナメハケ、下半細かいハケ	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ、下半のみタタキ残る、底部未調整？
665	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	壺	(12.50)	(22.60)	19.30		口縁部～体部2/3、底部欠損	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコハケ、体部ハケ後ナデ消し	口縁端部ヨコナデ、以下ハケ後頸部はナデ消し
666	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(10.10)	(5.359	(9.60)		口縁部～体部1/4残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ
667	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕底部		(3.70)		3.70	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	体部ハケ	体部タタキ後ナデ、底部ナデ
668	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕底部		(4.70)		3.50	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～3.0㎜大の砂粒・小石を含む	底部板ナデ後ナデ	底部タテハケ後ナデ
669	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.20)	(6.10)			口縁部1/4残存	φ1～4㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部不明
670	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.40)	(7.80)			口縁部～頸部1/4残存	粗砂、φ0.5～3㎜の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ/体部ハケ？	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
671	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(13.80)	(8.05)			口縁部～体部1/6残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ
672	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(16.40)	(7.80)			口縁部～頸部1/2残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を多く含む	口縁部ヨコハケ/ヨコナデ、体部ハケ/ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、口縁部タテハケ
673	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.20)	(9.50)	(15.60)		口縁端部若干、頸部～体部1/3残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
674	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(17.45)	(7.70)	(18.85)		1/9残存	φ6㎜の石～粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部不明
675	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(12.20)	(12.10)	(14.40)		口縁部～体部1/4残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒・小石を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
676	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	18.80	(6.10)			口縁部～頸部7/8残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の石粒を含む	口縁部ヨコナデ. 体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ？
677	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(18.75)	(7.80)			口縁部1/4残存	φ4㎜以下の石粒、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部ヨコハケ？ 肩部に列点文
678	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(13.70)	(12.25)	(20.10)		口縁部～体部上半1/2残存	粗砂、φ0.5～3.5㎜大の砂粒・石粒を含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部タテヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部タタキ後タテハケ
679	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.60)	(16.70)	(18.00)		口縁部若干、体部1/2残存	φ4㎜大の石、極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
680	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(19.60)	(9.00)			口縁部～頸部1/3残存	粗砂、φ0.5～4㎜大の砂粒・石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ケズリ？	不明
681	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(23.60)	34.20	31.50	8.40	口縁部2/3、体部1/6欠損	φ5㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部上半ヨコヘラケズリ、下半タテヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ/凹線、体部ハケ後頸部付近のみヨコナデ、底部ナデ
682	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	(15.80)	(10.95)			口縁部1/2、体部若干残存	φ3㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコハケ、体部タテハケ
683	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	16.10	21.90	18.75	2.70	口縁部一部欠損～底部完形	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
684	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	甕	24.70	34.10	31.70	(9.20)	約3/4残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部ナナメハケ
685	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	鉢	(2.70)	4.90	4.90	1.80	口縁部のみ欠損	細砂を少量含む	口縁部ナデ、体部下半ハケ、未貫通の穿孔有り	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ
686	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	鉢	(6.50)	5.25		2.20	口縁部～体部1/2欠損	φ3㎜大の石、極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラミガキ、底部ナデ
687	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	鉢	(14.70)	(3.45)			口縁部1/8残存	少量の細砂を含む	口縁部ヨコナデ/ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ/擬凹線、頸部ヘラミガキ
688	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	鉢	9.80	6.85	9.10		口縁端部若干欠損	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ/ナナメハケ、体部ナナメハケ
689	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	鉢	11.15	6.40		4.10	完形	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ、底部ナデ
690	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	有孔鉢		(2.70)		2.50	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	体部ハケ後ナデ	体部ハケ後ナデ？ 底部ナデ
691	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	台付鉢	(12.10)	(7.30)		6.60	口縁部2/3欠損	粗砂を含む	不明	不明
692	F地区	SR01(Ⅲ層)	弥生土器	脚台付鉢		(3.90)		4.60	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	鉢部ハケ、脚部ハケ後ナデ	ハケ後ナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
693	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	有孔鉢	(15.20)	9.25		2.10	口縁部～体部1/4、底部1/1残存	粗砂、φ0.5～3.0㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後タテハケ、下半タテハケ後ユビオサエ、底部に穿孔有り
694	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	有孔鉢	(16.80)	11.20		2.90	口縁部～体部2/3、底部ほぼ1/1残存	粗砂、φ0.5～3.5㎜大の石粒を含む	体部ハケ	体部タテヘラケズリ
695	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	鉢	18.30	10.85		4.70	口縁部1/3欠損	φ5㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部不明、底部タタキ後ナデ
696	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯	16.40	(6.30)			杯部ほぼ1/1、脚部欠損	粗砂、0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部タテハケ、下半のみタテヘラミガキ
697	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯		(7.00)			脚部のみ完存	極粗砂を少量含む	脚柱部板ナデ？脚部裾ヨコハケ、頭頂部に孔（φ1cm）2個有す	脚柱部タテハケ後ヨコヘラミガキ、脚部裾ヨコハケ
698	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯		(7.40)		16.40	柱状部1/4～底部1/2残存	φ4㎜以下の石粒含む	脚部不明、絞り痕残る	不明
699	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯		(15.65)		(17.70)	柱状部完形～底部1/2残存	φ7㎜以下の石粒含む	脚部ヨコヘラケズリ、下方のみハケ	脚部ヘラミガキ、3方向に円孔をあける
700	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	器台	23.80	(15.20)			杯部6/7残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヘラミガキ、受部ヘラミガキ、脚部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、受部タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、円孔透かし有り
701	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯	(24.50)	18.55		16.90	口縁部1/2欠損	φ2～3㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコヘラミガキ、脚柱部ヨコナデ、脚部裾ヨコハケ、円盤充填	口縁部ヨコナデ／擬凹線、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテハケ後ヨコヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、三方向の円形透かしを持つ
702	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯	23.70	22.10		(18.95)	杯部3/4、底部4/5、脚部ほぼ完存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ／ヨコヘラミガキ、杯部多方向ハケ、脚部裾ヨコハケ、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ／擬凹線、杯部ヨコハケ後タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、下方のみヨコヘラミガキ、四方向の円形透かし有り
703	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	高杯	27.25	(22.50)		(19.60)	杯部～柱状部ほぼ完形、脚部1/3残存	φ5㎜以下の石粒含む	杯部口縁ヨコヘラミガキ、杯部タテヘラミガキ、脚部ヨコハケ、上方のみヨコヘラケズリ、絞り痕残る	口縁部ヨコヘラミガキ、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラケズリ、脚部タテヘラミガキ、下方のみヨコヘラミガキ、四方向の円形透かし
704	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	器台	14.50	(7.35)			口縁部一部欠損～体部残存	φ6㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、受部ヨコヘラミガキ、脚柱部ユビナデ?	口縁部ヨコナデ、受部ヨコヘラミガキ、以下ヘラミガキ
705	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	器台		(12.30)		(13.10)	脚部1/6残存、基部は完存	細砂をごく少量含む	受部底部ナデ、脚端部ヨコナデ、脚部裾ヨコヘラミガキ？下方はヨコハケ	脚部タテハケ後タテヘラミガキ、円孔（φ8㎜）あり
706	F地区	SR01（Ⅲ層）	弥生土器	器台	17.20	14.40		13.65	口縁部1/2～脚端部1/3残存	φ3㎜大の石粒を少量含む	不明	口縁部ヨコナデ／擬凹線、以下タテヘラミガキ
707	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(14.40)	3.00			つまみ完存、口縁部1/6、天井部1/4残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ、つまみ部貼り付けナデ
708	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(15.50)	1.45			口縁部1/18、体部2/3残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部のみ多方向ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
709	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(16.30)	2.60			つまみ部1/1、体部1/2残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の小石を含む	回転ナデ、中央部多方向ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
710	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(16.80)	2.40			口縁部～天井部1/6、つまみ完存	φ6㎜以下の石3個、極粗砂を少量含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ
711	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B蓋	(14.20)	2.35			口縁部～体部・つまみ部1/2残存	細砂、φ0.5～1.5㎜程度の砂粒を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
712	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B蓋	(16.40)	3.15			口縁部1/2、つまみ部～体部1/2残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
713	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	稜椀蓋	(19.00)	(3.00)			つまみ完形～口縁部1/6残存	φ7㎜以下の石粒含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
714	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	蓋F蓋		(2.159	(10.80)		つまみ1/2残存	φ3㎜以下の石粒数個、細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
715	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	(11.00)	3.25		7.60	口縁部1/3、底部1/1残存	極細砂をごく少量含む　精緻	回転ナデ、中央部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
716	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	(11.80)	3.40		(8.90)	口縁部1/3、体部1/2残存	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	回転ナデ、中央部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
717	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	11.50	4.00		7.95	口縁部1/2～底部ほぼ完形	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後いナデ
718	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	12.35	3.90		(8.40)	2/3残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
719	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	11.20	3.70		6.20	口縁部～体部1/2残存	φ0.5～1.5㎜大の砂粒を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
720	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	(12.70)	4.80		(9.00)	口縁部1/8、体部1/2残存	粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	回転ナデ、底部ヘラ起こし後ナデ
721	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯A	15.00	4.30		11.35	口縁部若干欠損	細砂を少量含む、精緻	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
722	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(13.80)	3.65		(9.90)	口縁部1/8、底部1/4残存	極細砂を少量含む、砂粒多い	回転ナデ	回転ナデ、高台付近回転ヘラケズリ後ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
723	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(15.70)	4.45		10.20	口縁部1/6、底部1/1残存	細砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
724	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯B	(17.05)	4.20		(12.00)	口縁部～底部1/3残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け
725	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	鉢B	(11.80)	6.70		7.90	口縁部1/8、底部1/1残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
726	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	底部		(1.20)		(9.55)	底部1/4残存	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
727	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	円面硯		(4.85)		(10.00)	底部1/3～体部残存	φ5㎜以下の石粒含む	回転ナデ、中央部ナデ	体部回転ナデ後ヘラ先直線文、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
728	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	皿B	(16.30)	4.10		(11.65)	口縁部若干～底部1/3残存	φ2㎜以下の石粒、粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
729	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	椀E	(11.10)	4.25		7.20	口縁部1/3～底部完形	φ2.5㎜以下の石粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後一部いナデ
730	F地区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	稜椀	(17.20)	6.05		(9.20)	口縁部1/5、底部1/4残存	極細砂を多量に含む	回転ナデ	回転ナデ、高台付近回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ後ナデ、高台貼り付けナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
731	F地区	SR01（I層）	須恵器	椀E	(11.50)	4.65		7.10	口縁部1/7、底部1/1残存	φ4㎜の小石1個、細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
732	F地区	SR01（I層）	須恵器	高坏脚部	(6.60)		(10.80)		底部～柱状部1/4残存	φ1㎜以下の石粒含む	底部多方向のナデ、脚部回転ナデ	回転ナデ
733	F地区	SR01（I層）	須恵器	高台付鉢	(14.40)	6.65		(8.90)	口縁部～底部3/4残存	φ6㎜以下の石粒含む	回転ナデ、見込み部多方向ナデ	回転ナデ、高台付近回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
734	F地区	SR01（I層）	須恵器	壺	(10.80)	(5.10)			口縁部1/2残存	φ6㎜の石1個、極粗砂・粗砂を少量含む	回転ナデ、頸部以下ユビオサエ後ナデ	口縁部回転ナデ．体部タタキ後ナデ？
735	F地区	SR01（I層）	須恵器	壺底部		(4.05)		(7.60)	底部～体部1/2残存	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
736	F地区	SR01（I層）	須恵器	壺底部		(4.65)		(3.80)	底部1/2、体部若干残存	細砂を含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
737	F地区	SR01（I層）	須恵器	平瓶	(8.20)	(10.15)	15.30	9.90	口縁部1/3残存、体部・底部若干欠損、把手欠損	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む		底部ヘラ切り後ナデ、把手・高台貼り付けナデ
738	F地区	SR01（I層）	須恵器	甕	(23.30)	(7.50)			口縁部～頸部1/4残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ、体部平行タタキ
739	F地区	SR01（I層）	須恵器	甕	(58.60)	(16.00)			口縁部1/4残存	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、体部タタキ
740	F地区	SR01（I層）	土師器	皿	(19.80)	2.60		(17.20)	口縁部～底部1/3残存	φ5㎜の石1個、粗砂を少量含む	回転ナデ、中央部多方向ナデ	回転ナデ、底部ユビオサエ有り
741	F地区	SR01（I層）	土師器	高坏脚部		(8.90)		(14.90)	柱状部1/1、裾部1/3残存	粗砂を少量含む	不明	ヘラによる面取り
742	F地区	SR01（I層）	土師器	甕	(17.80)	(12.80)			口縁部～体部1/2残存	極粗砂～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部下ナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
743	F地区	SR01（I層）	緑釉	椀		(2.15)		(6.60)	底部1/2残存	精良	体部施釉	底部回転ヘラケズリ後部分施釉
744	F地区	SR01（I層）	緑釉	皿	(15.60)	(2.50)			口縁部1/12残存	φ1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ後施釉	回転ヘラケズリ後施釉
745	G地区	SB01	須恵器	小皿	(8.60)	2.30		(4.80)	約1/4残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
746	G地区	SB01	須恵器	小皿	8.00	1.70		5.60	1/2残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
747	G地区	SB01	須恵器	椀	(14.40)	(4.00)			口縁部1/7残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ
748	G地区	SB01	須恵器	椀	(14.00)	(5.20)			口縁部若干、体部1/5残存	φ4㎜の小石3個、細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
749	G地区	SB01	須恵器	椀	(15.60)	(5.30)		(7.45)	口縁部～底部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ、回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
750	G地区	SB01	須恵器	椀底部		(1.90)		(6.60)	底部1/4残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部静止糸切り
751	G地区	SB01	須恵器	椀底部		(4.10)		(5.00)	底部1/3残存	細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
752	G地区	SB01	須恵器	椀底部		(4.10)		(5.70)	体部1/6、底部1/2残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
753	G地区	SB01	須恵器	椀底部		(2.70)		(5.40)	底部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒わずかに含む）	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、底部回転糸切り
754	G地区	SB01	土師器	杯底部		(1.30)		(6.10)	底部残存	φ0.5㎜程度の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
755	G地区	SB01	土師器	杯底部		(1.90)		6.70	底部2/3～体部残存	φ1.5㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り
756	G地区	SB01	土師器	杯底部		(1.95)		(7.00)	底部1/3残存	極細砂をごく少量含む	見込み部ナデ	回転ナデ
757	G地区	SB01	土師器	杯底部		(2.05)		(8.00)	底部1/2残存	φ2㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
758	G地区	SB01	土師器	小皿	8.10	1.40		5.00	口縁部2/3、底部3/4残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ？	回転ナデ？ 底部回転糸切り
759	G地区	SB01	土師器	小皿	9.45	1.20		5.50	口縁部1/2欠損	φ3㎜以下の石粒含む	ヨコナデ、見込み部ナデ	ヨコナデ、底部ナデ
760	G地区	SB01	土師器	小皿	(9.90)	1.55		(7.30)	口縁部1/4、底部1/3残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ
761	G地区	SB01	土師器	小皿	(15.40)	1.50			約1/4残存	極細砂をごく少量含む	不明	不明
762	G地区	SB01	土師器	甕	(19.50)	(7.60)			口縁部～肩部1/14残存	φ3.5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
763	G地区	SB01	土師器	塝	(19.50)	(5.00)			口縁部1/5残存	極粗砂～細砂を多量に含む	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部一部タタキ目が残る
764	G地区	SB01	土師器	塝	(20.20)	(13.05)	(21.90)		口縁部1/6、体部1/4残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向のナデ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
765	G地区	SB01	黒色土器	椀	(16.40)	(3.65)			口縁部1/5残存	φ2㎜以下の砂粒含む	ヨコヘラミガキ	回転ナデ
766	G地区	SB01	黒色土器	椀	(14.05)	(4.65)			口縁部～体部1/10残存	φ3㎜以下の石粒含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、高台貼り付けナデ
767	G地区	SB01	黒色土器	椀	(15.50)	(4.55)			口縁部1/10残存	極細砂を少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
768	G地区	SB01	黒色土器	椀		(1.60)		(6.00)	底部2/3残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、底部回転糸切り、高台貼り付けナデ
769	G地区	SB01	黒色土器	椀		(2.60)		(6.60)	底部1/3残存	極粗砂をごく少量含む	2方向のヘラミガキ	回転ヨコナデ、底部回転糸切り
770	G地区	SB01	黒色土器	椀		(2.70)		(6.40)	底部一部欠損～体部残存	φ5㎜以下の石粒含む	放射状のヘラミガキ	回転ナデ、底部回転糸切り
771	G地区	P15	土師器	杯	(16.10)	4.25		(7.40)	口縁部1/6、底部2/3残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
772	G地区	P26	須恵器	椀底部		(2.00)		(6.00)	底部1/3残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
773	G地区	P26	土師器	小皿	(9.90)	(1.50)		6.30	底部ほぼ完形～口縁部若干残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	底部回転糸切り
774	G地区	P26	土師器	甕	(17.10)	(3.60)			口縁部1/11残存	φ4㎜の小石1個、極粗砂・粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タタキ？
775	G地区	P26	黒色土器	椀	(14.50)	(4.10)			口縁部1/12残存	極細砂を少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ
776	G地区	P26	黒色土器	椀		(1.00)		(4.60)	底部3/4残存	極細砂をごく少量含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ、底部回転糸切り後、多方向にヘラケズリ
777	G地区	SK01	須恵器	椀	(15.20)	(4.20)			口縁部小片残存	φ1㎜程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ
778	G地区	SK01	土師器	杯	(13.60)	(3.20)			口縁部1/8残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ
779	G地区	SK01	土師器	杯	(15.20)	(2.80)			口縁部1/8残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ？	回転ナデ？
780	G地区	SK01	土師器	小皿	(8.80)	1.45		(5.00)	口縁部1/7、底部1/8残存	細砂をごく少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ、底部手捏ね成形後不調整
781	G地区	SK01	土師器	小皿	(9.30)	1.45		(5.50)	口縁部1/2、底部3/4残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
782	G地区	SK01	土師器	小皿	9.00	1.20		6.20	1/2残存	極細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
783	G地区	SK01	土師器	小皿	8.80	1.45		4.90	完形	φ2㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
784	G地区	SK01	土師器	托	(14.00)	(5.00)		(6.10)	口縁部～底部1/3残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
785	G地区	SK01	黒色土器	椀	(15.30)	5.25		(6.40)	口縁部1/4、底部1/2残存	細砂を少量含む	ヨコヘラミガキ、見込み部のみタテヘラミガキ	回転ナデ、底部回転糸切り
786	G地区	SK01	黒色土器	椀		(2.90)		(7.00)	底部1/4残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ後見込み部のみ放射状ミガキ	回転ヨコナデ、底部回転糸切り
787	G地区	SK01	白磁	椀					小片	砂粒殆ど含まず		
788	G地区	SE01	土師器	塝	(24.30)	(9.90)	(26.50)		口縁部～肩部1/8残存	極粗砂～細砂を多量に含む	不明	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
789	G地区	SE01	黒色土器	椀	(15.20)	(4.90)		(5.45)	口縁部～底部1/4残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ？	不明
790	G地区	SE01	黒色土器	椀		(2.60)		6.45	底部2/3～体部、口縁部はほぼ欠損	φ2㎜以下の石粒含む	不明	不明、底部回転糸切り
791	G地区	SE02	須恵器	杯	(17.00)	5.20		(5.80)	口縁部1/9、底部1/3残存	極粗砂を少量、細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り後一部ナデ
792	G地区	SE02	須恵器	杯	(17.10)	(4.55)		(5.80)	口縁部～底部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
793	G地区	SE02	土師器	小皿	(7.60)	1.30			口縁部～底部1/8残存	φ2㎜以下の石粒含む	ヨコナデ、見込み部ナデ	ヨコナデ、手捏ね成形後不調整
794	G地区	SE02	土師器	小皿	(8.80)	0.90		(6.20)	1/6残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
795	H地区	SH01	弥生土器	広口壺	(28.20)	(5.85)			口縁部1/5残存		口縁部ヨコナデ/タテハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に列点文、以下タテハケ
796	H地区	SH01	弥生土器	甕		(4.00)		5.90	底部3/4残存	細砂を多量に含む	底部板ナデ	体部下半にはヘラの痕跡のみ残す、底部ナデ
797	H地区	SB01	黒色土器	椀	(15.30)	(4.40)			口縁部1/5残存	極細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
798	H地区	SB01	黒色土器	椀	(16.00)	(5.70)		(7.20)	口縁部～底部1/2残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、底部回転糸切り
799	I地区	SR01	須恵器	杯	9.00	(5.25)			口縁部1/3～体部残存	φ2㎜以下の石粒含む	回転ナデ	受部回転ナデ、体部2/1回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り未調整
800	J地区	SK01	弥生土器	甕	(17.20)	(8.70)			口縁部～肩部1/3欠損	φ3㎜大の石粒～極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部不明
801	J地区	SK01	弥生土器	甕	(31.10)	(4.55)			口縁部1/12残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
802	J地区	SK02	弥生土器	甕	(16.60)	(11.15)			口縁部1/4、体部1/8残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
803	J地区	SK02	弥生土器	甕	(17.50)	(13.20)			口縁部1/6、体部若干残存	φ2㎜の石粒少量、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
804	J地区	SK06	弥生土器	広口壺	(15.60)	(3.90)			口縁部1/2残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、以下タテハケ後ナデ消し	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ
805	J地区	SK06	弥生土器	高杯	(25.60)	(8.60)			口縁部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ
806	J地区	SK07	弥生土器	甕	(23.40)	(6.40)			口縁部1/4残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
807	J地区	SK10	弥生土器	甕	(13.20)	(4.05)			口縁部1/6残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ？	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
808	J地区	SK10	弥生土器	ミニチュア鉢	(5.00)	3.95		4.00	口縁端部8/9、底部1/4欠損	粗砂を少量含む	ヨコナデ	口縁部未調整、体部タテハケ、底部ナデ
809	J地区	SK11	弥生土器	広口壺	(21.30)	(6.60)			口縁部1/4残存	φ3㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、指頭圧痕文突帯をめぐらす
810	J地区	SK11	弥生土器	広口壺	(24.60)	(4.00)			口縁部1/9残存	φ1㎜以下の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、下端に刻み目、以下タテハケ
811	J地区	SK11	弥生土器	甕	(27.10)	(2.70)			口縁部1/7残存	φ3㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ハケ後ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/凹線
812	J地区	SK11	弥生土器	広口壺	(17.30)	(10.10)			口縁部1/4～頸部1/2残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ/板ナデ、2個1単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面に2帯の刻み目、頸部タテハケ後直線文
813	J地区	SK11	弥生土器	甕		(15.15)		(5.70)	底部1/2、体部1/6残存	細砂を多く含む	体部タテハケ	口縁部タテハケ、底部周縁部のみヨコナデ、底面未調整
814	J地区	SK11	弥生土器	脚部		(7.85)		(16.20)	脚部1/3残存	極粗砂～細砂を多量に含む	脚部ヨコナデ	脚端部ヨコナデ、脚部タテヘラミガキ
815	J地区	SK13	弥生土器	広口壺	(24.10)	(7.90)			口縁部～頸部1/4残存	φ2㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、断面三角形突帯を貼り付ける
816	J地区	SK13	弥生土器	壺底部		(7.85)		(8.20)	底部1/5残存	粗砂を多く含む	体部下半ナデ	体部下半タテハケ、底部周縁部のみヨコナデ、以下ナデ
817	J地区	SK13	弥生土器	甕	(13.80)	(3.25)			口縁部1/7残存	粗砂を多量に含む	不明	不明
818	J地区	SK13	弥生土器	甕	(12.40)	(7.20)			口縁部1/3残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコ方向板ナデ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
819	J地区	SK13	弥生土器	甕	(12.20)	(6.20)			口縁部1/3残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ/凹線？体部タテハケ
820	J地区	SK13	弥生土器	甕	(19.00)	(5.00)			口縁部1/12残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ
821	J地区	SK13	弥生土器	甕	(20.10)	(6.40)			口縁部1/6残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部不明
822	J地区	SD01	弥生土器	広口壺	(12.15)	(1.90)			口縁部1/6残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ/擬凹線
823	J地区	SD01	弥生土器	甕	(19.80)	(5.05)			口縁部1/6残存	φ3.5㎜の小石と粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ/擬凹線
824	J地区	SD01	弥生土器	鉢		(3.85)		(3.80)	底部1/3欠損	φ2㎜以下の石粒、細砂を少量含む	体部ナデ	体部から底面にかけてタタキ
825	J地区	SD01	弥生土器	甕		(11.50)	(13.95)	(2.20)	底部完存、体部下半2/3残存	φ2㎜以下の砂粒含む	底部ナデ上げ、体部不明	体部中半タタキ、下半平行タタキ後タテハケ
826	J地区	SD01	弥生土器	甕	(27.209	(9.10)			口縁部1/4、体部若干残存	φ6㎜の小石～極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ？	口縁部ヨコナデ/擬凹線、体部不明
827	J地区	SD03	弥生土器	広口壺	(19.70)	(2.90)			口縁部1/4残存	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ
828	J地区	SD03	弥生土器	直口壺	(16.30)	(7.10)			口縁部1/2残存	φ3㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、以下ナナメハケ、頸部付近ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ
829	J地区	SD03	弥生土器	甕	(16.40)	(18.90)	(18.60)		口縁部～体部下半2/3残存	φ2㎜以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、下半部のみ粗いタテハケ有り

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	腹径(㎜)	底径(㎜)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
830	J地区	SD03	弥生土器	甕	(37.00)	12.70			口縁部1/5、体部若干残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後、頸部のみナデ消し
831	J地区	SD05	弥生土器	鉢	(23.40)	(3.15)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁上端に刻み目、その下に断面三角形刻み目突帯文を貼り付ける
832	J地区	SD05	弥生土器	甕	(15.10)	(6.10)			口縁部若干残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ/ハケ？、体部上半ナナメハケ、中半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
833	J地区	包含層	弥生土器	直口壺	19.60	(19.20)			口縁部3/4、体部1/4残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部2方向のハケ	口縁部ヨコナデ、上端に刻み目、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ
834	J地区	包含層	弥生土器	甕	(10.00)	(3.80)			口縁部若干残存	φ1㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ
835	K地区	P19	弥生土器	甕	(17.60)	(2.40)			口縁部1/12残存	極粗砂・粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
836	K地区	P23	弥生土器	甕		(3.55)		4.50	底部完形	φ3.5㎜以下の石粒含む	体部タテハケ、底部ヘラケズリ後指ナデ	体部タテハケ、底部周縁部のみヨコナデ、底面ナデ
837	K地区	P24	弥生土器	壺底部		(3.00)		(5.90)	底部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	不明	体部タテハケ、底部周縁部ヨコナデ、底面ナデ
838	K地区	SK01	弥生土器	甕	(19.80)	(21.20)	(23.75)		口縁部若干～体部残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
839	K地区	SK01	弥生土器	甕	(32.85)	(4.65)			口縁部1/9残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部不明
840	K地区	SK01	弥生土器	甕	(35.20)	(6.65)			口縁部1/5残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
841	K地区	SK04	弥生土器	甕	(17.15)	(5.20)	(16.50)		口縁部1/10残存	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
842	K地区	SK12	弥生土器	甕	(40.80)	(7.90)			口縁部小片残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部タテハケ	口縁部ヨコハケ、体部タテハケ
843	K地区	SK19	弥生土器	広口壺	(11.40)	(7.70)			口縁部若干残存	φ2㎜以下の石粒数個、細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ヨコハケ後ナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、体部タテハケ
844	K地区	SK19	弥生土器	壺	(26.70)	(4.75)			口縁部1/10残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁ヨコナデ、端面に斜格子文
845	K地区	SK19	弥生土器	甕	(12.90)	(15.50)	(14.80)		頸部～体部下半1/3残存	φ1㎜以下の砂粒わずかに含む	体部不明	体部上半タテハケ、下半タテヘラミガキ
846	K地区	SK19	弥生土器	壺		(10.10)			体部小片残存	砂粒少ない	体部ナナメハケ	体部タテハケ、最大径付近に2帯のヘラ状の刺突文をめぐらせる
847	K地区	SK19	弥生土器	甕	(14.40)	(5.70)			口縁部若干残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し
848	K地区	SK19	弥生土器	甕	(16.80)	(25.00)			口縁部1/3欠損、底部1/2残存	φ5㎜以下の石粒数個、極粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、一部指頭押圧による波状口縁、体部不明
849	K地区	SK25	弥生土器	広口壺	(18.85)	(5.20)			口縁部3/4残存	φ6㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ
850	K地区	SK25	弥生土器	広口壺		(9.00)			頸部のみ6/7残存	φ1㎜以下の砂粒含む	頸部ヨコハケ後タテハケ	頸部タテハケ、断面三角形突帯を貼り付ける
851	K地区	SK25	弥生土器	甕		(8.75)		(7.10)	底部1/6残存	粗砂を多く含む	底部多方向にハケ、見込み部にヨコヘラミガキ	体部タテヘラミガキ、底部ヨコヘラミガキ、底面未調整
852	K地区	SK25	弥生土器	甕	(16.20)	(13.30)	(16.30)		口縁部～体部下半1/4、口縁部は2/3残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ/一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
853	K地区	SK25	弥生土器	甕	(17.80)	(7.30)			口縁部1/7、体部若干残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ナナメハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
854	K地区	SK25	弥生土器	甕底部		4.40		(4.50)	底部のみ残存	φ1㎜以下の砂粒わずかに含む	ナデ上げ	体部タテヘラミガキ、底部周縁部ヨコナデ、底面ナデ
855	K地区	SK25	弥生土器	壺	(18.20)	18.50	(20.20)	(7.40)	口縁部1/4、体部1/3、底部1/4残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部上半ナナメハケ、下半タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
856	K地区	SK25	弥生土器	高杯	(23.50)	(3.70)			口縁部1/8残存	φ3㎜の石粒を多く含む	口縁部上端に突帯を貼り付ける	不明
857	K地区	SK25	弥生土器	高杯		(10.70)		(9.20)	脚端部1/4残存	φ2㎜大の石粒、粗砂を多く含む	杯部見込み多方向にハケ、脚部ナナメハケ、絞り痕残る	脚部タテハケ
858	K地区	SK26	弥生土器	壺底部		(7.60)		8.90	底部ほぼ完形～体部残存	φ5㎜以下の石粒含む	体部タテハケ	体部タテハケ、底面ナデ
859	K地区	SK26	弥生土器	甕	(25.50)	(6.00)			口縁部1/10残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
860	K地区	SK26	弥生土器	鉢	(36.00)	(16.50)	(38.20)		口縁部1/6、体部若干残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部2方向のハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、下半のみヘラミガキ
861	K地区	SK26	弥生土器	鉢	(24.60)	(7.40)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
862	K地区	SD02	弥生土器	広口壺	(17.30)	(6.35)			口縁部1/4欠損	φ2㎜大の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、端面に斜格子文＋円形浮文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
863	K地区	SD02	弥生土器	壺底部		(4.40)		(16.40)	底部1/8残存	粗砂を少量含む	不明	体部タテハケ、底面ナデ
864	K地区	SD02	弥生土器	甕	(15.65)	(4.30)			口縁部1/6残存	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
865	K地区	SD02	弥生土器	甕	(17.80)	(4.10)			口縁部小片残存	φ2㎜以下の砂粒含む2	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、端面刻み目、体部タテハケ
866	K地区	SD02	弥生土器	鉢	(18.80)	(6.90)	(15.30)		口縁部1/6、肩部1/5残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部下半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテ方向に板ナデ後ナナメ方向にヘラミガキ
867	K地区	SD03	弥生土器	蓋	(2.10)	(3.10)			つまみ部若干欠損	φ2㎜の石粒を少量、粗砂を多く含む	ヘラミガキ？	つまみ部ナデ、以下放射状にヘラミガキ
868	K地区	SD03	弥生土器	広口壺	(19.80)	(2.20)			口縁部1/7残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ
869	K地区	SD03	弥生土器	甕	14.00	27.30	18.40	5.80	全体として1/2、底部完存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部板ナデに近いタテハケ、底面板ナデ
870	K地区	SD03	弥生土器	甕	(27.70)	(5.20)			口縁部1/12残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
871	K地区	SD04	弥生土器	甕	(18.90)	(11.10)	(21.00)		口縁部1/3、体部1/8残存	極粗砂～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
872	K地区	SD09	弥生土器	甕	(18.30)	(7.35)			口縁部若干残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
873	K地区	SD09	弥生土器	甕	(27.40)	(8.20)			口縁部～肩部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
874	K地区	SD11	弥生土器	甕	(25.15)	(7.80)	(24.80)		口縁部1/9算残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部不明
875	K地区	SD12	弥生土器	甕	(14.50)	(4.40)			口縁部1/5残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
876	K地区	SD12	弥生土器	甕	(17.15)	(4.35)			口縁部若干残存	φ2㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
877	K地区	包含層	弥生土器	甕	(27.40)	(4.30)			口縁部1/11残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
878	L地区	SX01	弥生土器	広口壺		(29.50)			体部1/2残存	極粗砂を多量に含む	口縁部上端に扇形文、体部タテハケ	体部上半に直線文＋波状文、下半タテハケ
879	L地区	SX01	弥生土器	甕	(17.20)	(24.70)	(17.20)	(6.00)	口縁部1/6、体部若干、底部1/4残存	極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテ方向のナデ、下半不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
880	L地区	SX01	弥生土器	高杯	(21.60)	(17.90)		(12.00)	杯部1/2、脚部2/3残存	φ2㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部屈曲部以下ヨコヘラミガキ、脚部ヨコヘラミガキ、絞り痕残す	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部下方タテヘラケズリ後タテハケ、脚端部ヨコナデ、脚部タテハケ後タテヘラミガキ
881	L地区	SX02(SP01)	弥生土器	広口壺	14.80	30.50	28.50	8.60	体部若干欠損	φ2㎜大の石粒、極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラケズリ？	口縁部ヨコナデ、端面に波状文＋円形浮文、頸部に凹線、体部上半に直線文＋波状文、中半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
882	L地区	SX12	弥生土器	広口壺	(21.40)	(2.50)			口縁部若干残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端にヨコハケ後扇形文	口縁部ヨコナデ／凹線、端部裏ハケ後ナデ消し
883	L地区	SX12	弥生土器	広口壺	(24.00)	(3.20)			口縁部1/2残存	φ2㎜大の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、3個1単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面に凹線＋棒状浮文
884	L地区	SX12	弥生土器	広口壺	(19.80)	(7.80)			口縁部1/4残存	粗砂、0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の扇形文	口縁部ヨコナデ、端面に円形浮文、頸部に断面三角形突帯
885	L地区	SX12	弥生土器	広口壺	(18.65)	(7.80)			口縁部1/5残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁端部ヨコナデ、端面刻み目、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
886	L地区	SX12	弥生土器	甕	(14.70)	(6.30)			口縁部1/6～肩部1/4残存	極粗砂～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケ、下半タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部不明
887	L地区	SX12	弥生土器	甕	(13.40)	(17.80)	(17.40)		口縁部1/2、体部1/3残存	粗砂、0.5～5㎜大の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ナナメハケ、下半タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、上半部のみナデ消し
888	L地区	SX12	弥生土器	壺底部		(5.90)		8.80	底部のみ残存	粗砂、0.5～3㎜大の砂粒を多く含む	不明	体部下半タテヘラミガキ？
889	L地区	SX12	弥生土器	甕	(19.30)	(27.00)		(6.00)	口縁部1/10、底部1/4残存	極粗砂～細砂を多く含む	不明	不明
890	L地区	SX12	弥生土器	甕	(23.60)	(5.80)			口縁部若干残存	φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	ナデ？	口縁部ナデ？ 端面に三角形刺突文、体部タテハケ後直線文
891	L地区	SX12	弥生土器	高杯		(16.60)		(16.50)	脚部5/6残存	極粗砂～細砂を多量に含む	脚端部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚柱部タテヘラミガキ
892	L地区	SX12	弥生土器	高杯	(15.20)	(1.65)			口縁部1/12残存	φ3.5㎜の小石～細砂を多量に含む	不明、口縁部上端に貼り付け突帯	不明
893	L地区	SX12	弥生土器	高杯		(8.30)		(13.40)	脚部1/3残存	極粗砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、他ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部裾タテヘラミガキ、下方に穿孔(φ4㎜)めぐらせる、柱部に沈線帯
894	L地区	SX21	弥生土器	甕	(20.60)	(2.10)			口縁部1/12残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
895	L地区	SX21	弥生土器	壺底部		(9.20)		(10.00)	底部1/8残存	φ6㎜の小石～細砂を多量に含む	不明	不明
896	L地区	SX21	弥生土器	甕底部		(4.05)		(6.10)	底部1/4残存	粗砂を多く含む	体部下半タテヘラケズリ、底部ナデ	体部下半タテハケ／ナナメハケ、底面ハケ後ナデ
897	L地区	SK08	弥生土器	甕	(15.40)	(8.70)	(17.20)		口縁部1/3、体部若干残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？
898	L地区	SK09	弥生土器	甕	(18.00)	(3.25)			口縁部1/11残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？	口縁部ヨコナデ、肩部に波状文
899	L地区	SK10	弥生土器	甕	(16.95)	(4.50)	(16.50)		口縁部若干残存	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
900	L地区	SK11	弥生土器	甕底部		(5.90)		(4.60)	底部3/4残存	粗砂・細砂を多く含む	体部ヨコハケ	体部タテハケ、底部ナデ
901	L地区	SK14	弥生土器	甕	(14.90)	21.20	15.70	(4.40)	口縁部1/4、体部～底部1/3残存	極細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部上半ナナメハケ、中半タテハケ、下半不明	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ後頸部付近のみヨコに板ナデ、以下タテハケ、底部ヨコ方向に板ナデ
902	L地区	SK14	弥生土器	甕	(24.10)	(18.00)	(23.30)		口縁部1/6、体部1/4残存	極粗砂・粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ
903	L地区	SK16	弥生土器	無頸壺	(10.90)	(16.90)	(23.10)		口縁部～体部下半1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテヘラミガキ、下半タテハケ
904	L地区	SK21	弥生土器	甕底部		(4.80)		(6.20)	底部1/3残存	φ4㎜の小石～細砂を多量に含む	不明	不明
905	L地区	SK23	弥生土器	壺		(3.40)			頸部若干残存	φ4㎜以下の石粒含む	不明	波状文＋直線文
906	L地区	SK26	弥生土器	広口壺	(15.30)	(5.10)			口縁部1/8残存	φ3.5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
907	L地区	SK35	弥生土器	甕	(19.30)	(7.10)			口縁部2/3残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部不明
908	L地区	SK35	弥生土器	甕底部		(12.50)		(6.90)	底部1/4残存	φ1㎜以下の砂粒含む	不明	不明
909	L地区	SK35	弥生土器	甕	(15.80)	24.10	(17.40)	(6.60)	口縁部1/2、体部1/2、底部1/6残存	粗砂～極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ消し、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
910	L地区	SD04	弥生土器	壺		(16.50)	(15.80)	4.60	体部1/3、底部1/1残存	極粗砂～細砂を多く含む	体部ヨコヘラケズリ？	体部下半タテハケ?、底部付近にタタキの痕跡有り
911	L地区	SD04	弥生土器	甕	(16.70)	(5.05)			口縁部1/5残存	極粗砂・粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部不明
912	L地区	SD04	弥生土器	器台	(19.50)	(18.60)		(15.20)	口縁部1/16残存、脚部1/4残存	2㎜以下の砂粒わずかに含む	口縁部ヨコナデ、受部ヨコヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚部裾ヨコハケ、柱状部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、受部ヨコヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、他タテヘラミガキ、円形の四孔透かしを持つ
913	L地区	SD05	弥生土器	広口壺		(9.35)			頸部2/3残存	φ5㎜以下の石粒含む	頸部ヨコハケ	頸部タテハケ、断面三角形突帯を貼り付ける
914	L地区	SD05	弥生土器	広口壺	(24.00)			10.00	口縁部1/7、底部1/1残存	φ4㎜の小石～粗砂を多く含む	口縁部ヨコハケ、一部ナデ消し、底部多方向ナデ	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文、以下ヨコハケ、頸部付近タテハケ、体部下半タテハケ、底部周縁部ヨコナデ、底面ナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
915	L地区	SD05	弥生土器	甕	(15.80)	(16.00)		5.10	口縁部～体部下半1/3、底部完存	φ5mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ／一部？指頭押圧による波状口縁、体部上半直線文＋波状文、体部下半不明	
916	L地区	SD05	弥生土器	甕底部		3.50		6.40	底部1/2残存	φ5mm以下の砂粒多量に含む	底部ナデ	底部板ナデ？ 底面ナデ
917	L地区	SD05	弥生土器	壺底部		(3.70)		(8.00)	底部1/3残存	φ5mm以下の石粒含む	底部ヘラケズリ	底部タテハケ、底面板ナデ
918	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	(29.40)	(6.20)			口縁部1/9残存	φ5mm以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁端部ヨコナデ、端面にヘラ先圧痕による斜格子文、以下タテハケ
919	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	(23.40)	(4.45)			口縁部若干残存	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコハケ、口縁部上端に波状文	口縁部ヨコナデ／凹線
920	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	12.30	(4.30)			口縁部のみ残存（一部欠損）	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後波状文
921	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	18.80	23.80	31.80	7.70	体部1/8欠損	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、体部上半ナデ、下半タテハケ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に波状文、体部上半タテハケ後直線文+波状文、中半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、底部ナデ
922	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	(24.90)	(35.30)	(33.60)		口縁部3/4～体部残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文、体部上半ナナメハケ、下半タテヘラケズリ	口縁端部ヨコナデ、端面に凹線＋縦ヘラ描き沈線＋円形浮文、以下タテハケ、頸部に凹線、体部上半直線文＋波状文、最大径以下ヨコヘラミガキ、体部下半タテヘラミガキ
923	L地区	SD06	弥生土器	広口壺	22.40	40.85	(36.00)	9.50	口縁部～底部のうち胴部1/2欠損	φ5mm以下の砂粒多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に貼り付け刻み目突帯＋波状文、以下ヨコヘラミガキ、体部タテハケ、底部ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、上端に刻み目、端面に縦ヘラ描き沈線＋凹線＋円形浮文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部上半タテハケ後直線文＋波状文、最大径以下ヨコヘラミガキ、底部タテヘラミガキ、底面ハケ？
924	L地区	SD06	弥生土器	甕	(29.00)	(31.10)	(33.60)		口縁部～体部1/2残存	φ5mm以下の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タタキ
925	L地区	SD06	弥生土器	甕	(19.15)	(3.80)			口縁部若干残存	φ2mm大の石粒少量、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ後ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、端面に刻み目、体部タテハケ
926	L地区	SD06	弥生土器	甕	(15.50)	(5.30)			口縁部1/4残存	極粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
927	L地区	SD06	弥生土器	甕	(17.60)	(8.85)			口縁部1/9～肩部1/4残存	φ4mm以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部多方向にナデ？	口縁部タタキ後ヨコナデ、体部タタキ
928	L地区	SD06	弥生土器	甕	(19.20)	(7.25)			口縁部1/4残存	φ4mm以下の石粒、細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タタキ後タテハケ
929	L地区	SD06	弥生土器	甕底部		(4.50)		5.30	底部完存	粗砂を少量含む	体部不明	タテハケ
930	L地区	SD07	弥生土器	鉢脚部		(5.75)		10.60	脚部のみ残存	極粗砂～細砂を多量に含む	不明	不明、脚部に6方向の透かしを持つ
931	L地区	SD07	弥生土器	壺		(7.80)			頸部1/4残存	φ3mm以下の石粒を多く含む	頸部ナナメハケ後タテ方向に波状文	頸部ヨコハケ、頸部に波状文、断面三角形突帯を貼り付ける
932	L地区	SD07	弥生土器	甕	(19.90)	(4.40)			口縁部1/7残存	φ3mm以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
933	L地区	SD07	弥生土器	甕	(17.80)	(3.90)			口縁部若干残存		口縁部ナデ、体部ヨコハケ	口縁部ナデ、体部タテ方向にタテハケ
934	L地区	SD07	弥生土器	底部		(4.00)		4.50	底部完存	φ3mm大の石粒、粗砂を多く含む	不明	タタキ後ナデ消し、底面ナデ
935	L地区	SD08	弥生土器	壺		(29.90)	24.90	7.90	体部～底部1/3欠損	φ5mm以下の小石を多く含む（粗い）	体部ハケ	体部上半に流水文（直線文＋扇形文）、体部タテハケ後、多方向にヨコヘラミガキ
936	L地区	SD08	弥生土器	甕	(22.40)	(5.25)			口縁部若干残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
937	L地区	SD08	弥生土器	甕		(5.25)			肩部若干残存	粗砂を少量含む	頸部下にヘラの痕跡あり	頸部ヨコナデ、肩部に波状文、体部ナデ
938	L地区	SD08	弥生土器	甕	(23.60)	(4.00)			口縁部若干残存	極粗砂を多く含む	ナデ	口縁部ナデ、端面に刻み目、体部上半に直線文
939	L地区	SX22	弥生土器	広口壺	(18.80)	(1.70)			口縁部1/12残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の波状文	口縁部ヨコナデ
940	L地区	SX22	弥生土器	広口壺	(20.80)	(1.85)			口縁部1/12残存	極粗砂～細砂を多量に含む	不明	不明
941	L地区	SD13	弥生土器	甕	(29.90)	(4.50)			口縁部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
942	L地区	SD13	弥生土器	脚部		(4.15)		(7.00)	脚部1/2残存	極粗砂～細砂を多く含む	杯部？ 底面ミガキ、脚部裾ヨコハケ	脚部タテヘラミガキ
943	L地区	SD15	弥生土器	広口壺	(18.10)	(3.30)			口縁部1/8残存	φ5mmの小石～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
944	L地区	SD15	弥生土器	鉢	(19.80)	(5.85)	(16.40)		口縁部1/6、肩部1/4残存	φ4mmの小石～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ？ 体部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部不明
945	L地区	SD15	弥生土器	脚部		(3.00)		9.60	脚部のみ残存	極粗砂～細砂を多量に含む	ナデ	不明
946	L地区	SD01	須恵器	杯蓋		(2.70)			天井部1/6、つまみ1/1残存	極細砂をごく少量含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、つまみ部貼り付けナデ
947	L地区	SD01	須恵器	杯蓋	(14.20)	(1.55)			口縁部若干、天井部1/4、つまみ1/1残存	極細砂をごく少量含む	多方向ナデ、口縁端部回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
948	L地区	SD01	須恵器	杯蓋		(2.40)			全体として1/6、端部欠損	砂粒殆ど含まず	回転ナデ後、多方向によるナデ	回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
949	L地区	SD01	須恵器	壺蓋	(10.60)	(3.00)			口縁部～底部1/8残存	砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ
950	L地区	SD01	須恵器	杯B	(11.50)	(3.70)		(8.70)	口縁部若干～底部1/4残存	φ4mm以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
951	L地区	SD01	須恵器	杯B		(3.85)		(8.65)	底部1/4～体部残存	φ3mm以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
952	L地区	SD01	須恵器	杯B		(2.20)		(9.50)	底部1/2残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部多方向によるナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
953	L地区	SD01	須恵器	椀		(2.20)		(6.00)	底部1/8～体部残存	φ1.5mm以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ
954	L地区	SD01	須恵器	椀		(2.00)		(5.90)	底部1/2残存	極細砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、回転糸切り後ナデ
955	L地区	SD01	須恵器	高杯		(5.05)			脚部のみ残存、端部は全欠損	φ5mmの小石1ケ、細砂を少量含む	見込み部ナデ、脚部回転ナデ	回転ナデ
956	L地区	SD01	土師器	小皿	(9.75)	1.90		(6.50)	口縁部1/8～底部1/3残存	φ3mm以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部不整方向のケズリ、あるいはいナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
957	L地区	SD01	須恵器	壺底部		(4.70)		(8.40)	底部1/3残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
958	L地区	SD01	弥生土器	甕	(28.20)	(10.40)			口縁部1/4、肩部若干残存	φ3㎜の小石～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タタキ
959	M2地区	SK01	弥生土器	底部		(4.40)		(14.10)	底部1/6残	φ6㎜の石1個、φ2㎜以下の石粒極粗砂を少量含む	底部板ナデ、周縁部ヨコナデ	底部板ナデ、底面ナデ
960	M2地区	SK09	弥生土器	広口壺	(20.00)	(5.90			口縁部1/6残存	φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、頸部付近ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
961	M2地区	SK09	弥生土器	甕	(15.70)	(6.15)			口縁部1/5残存	極粗砂～細砂を含む	口縁部ナデ、体部ナデ	口縁部ナデ、体部不明
962	M2地区	SK09	弥生土器	甕	(10.20)	(9.60)			口縁部1/8～体部1/2残存	極粗砂～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
963	M2地区	SK09	弥生土器	壺底部		(10.60)		(8.20)	底部1/1、体部若干残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒・石を含む	不明	体部タテハケ、底部周縁部ナデ
964	M2地区	SK19	弥生土器	直口壺	(17.50)	(5.60)			口縁部若干残存	φ2㎜の石粒、極粗砂を多量に含む	不明	口縁部ヨコナデ、以下指頭圧痕文突帯を4条以上貼り付ける
965	M2地区	SK28	弥生土器	底部		(5.00)		(2.90)	底部1/3残存	φ3.5㎜～粗砂を含む	ナデ	ナデ
966	M2地区	SK28	弥生土器	無頸壺	(14.60)	(7.20)			口縁部小片	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部上半には断面三角形刻み目突帯、中半から直線文＋波状文
967	M2地区	SK30	弥生土器	広口壺	(13.00)	(4.60)			口縁部1/8残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目
968	M2地区	SK30	弥生土器	壺		(21.05)	23.80	8.10	底部完存、体部1/2残存	極粗砂～粗砂を少量含む	体部上半タテハケ、体部下半板ナデ上方のみヨコハケ	体部タテハケ後ヨコヘラミガキ、底部付近ヨコ方向の板ナデ、底部ナデ
969	M2地区	SD01	弥生土器	広口壺	(14.50)	(4.90)			口縁部1/3残存	φ2㎜の砂粒を含む	不明	刻み目による波状口縁、端面に直線文、下端に刻み目、体部不明
970	M2地区	SD01	弥生土器	広口壺	(18.70)	(5.40)			口縁部1/6残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、以下板ナデ？	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ
971	M2地区	SD01	弥生土器	壺	(28.20)	(4.20)			口縁部1/5残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に斜格子文、以下タテハケ
972	M2地区	SD01	弥生土器	壺		(20.60)		(7.35)	底部1/3～体部残存	φ4㎜以下の石粒含む	不明	ハケ? 底部周縁部ヨコナデ
973	M2地区	SD01	弥生土器	甕	(15.50)	(7.00)			口縁部1/6残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ
974	M2地区	SD01	弥生土器	甕	(19.70)	(8.10)			口縁部1/7残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
975	M2地区	SD01	弥生土器	台付鉢		(7.95)		(12.00)	脚部1/3残存	φ3㎜～粗砂を含む	底部ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚部ナデ、円盤充填	杯部ナデ、脚端部ヨコナデ、他タテヘラミガキ
976	M2地区	SD15	弥生土器	甕	(20.00)	(9.90)			口縁部～体部1/4残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ
977	M2地区	SD15	弥生土器	甕	(23.40)	(7.00)			口縁部1/10残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の石粒を多く含む	口縁部不明、体部ナデ／ユビオサエ	不明
978	M2地区	SD15	弥生土器	壺		(15.10)		(6.30)	底部～体部1/4残存	φ5㎜以下の石粒を多量に含む	体部中半タテハケ後ナデ消し、下半ケズリ？	不明
979	M2地区	SD15	弥生土器	脚部		(12.80)		(13.40)	底部2/3、脚部1/1残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の石粒を含む	脚端部ヨコナデ？ 脚裾部板ナデ？	脚端部ヨコナデ／凹線、脚柱部タテヘラミガキ
980	M2地区	SK08	須恵器	杯B		(1.40)		(9.45)	底部若干残存		回転ナデ、見込み部ナデ	高台付近回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、高台貼り付け後ナデ
981	M2地区	SK08	須恵器	椀		(2.40)		(11.70)	底部1/10残存	φ0.5～2㎜大の砂粒をごく少量含む	回転ナデ	回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ
982	M2地区	SK13	須恵器	杯A	(12.70)	3.60		(8.70)	口縁部～底部1/9残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部ナデ？
983	M2地区	SK24	土師器	杯A	(11.50)	(2.50)		(5.20)	口縁部1/10残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
984	M2地区	SK24	土師器	杯A	(13.60)	(2.30)		(9.05)	口縁部～底部1/4残存	細砂を少量含む	回転ナデ後、放射状暗文	回転ナデ、底部多方向のナデ
985	M2地区	SK24	土師器	杯A	(15.80)	(2.40)		(13.40)	口縁部1/10残存	φ0.5～1㎜大の砂粒をごく少量含む	回転ナデ後、ヨコヘラミガキ？	回転ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、回転ヘラ切り後ヨコヘラミガキ
986	M2地区	SK26	須恵器	蓋	(14.80)	(1.90)			口縁部1/4残存	φ0.5～1㎜大の砂粒を少量含む	回転ナデ後中央部のみナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ
987	M2地区	SK26	須恵器	底部		(1.50)		(11.90)	底部若干残存	細砂を少量含む	回転ヨコナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
988	M2地区	SK31	須恵器	壺底部？		(2.10)		6.20	底部完形	φ3㎜以下の石粒含む	多方向ナデ	高台付近回転ヘラケズリ、底部多方向のナデ、高台貼り付けナデ
989	M地区	SH01	弥生土器	広口壺	(21.25)	(7.65)			口縁部1/3残存	φ2～5㎜の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ？	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ
990	M地区	SH01	弥生土器	甕底部		(3.70)		3.00	底部完存	粗砂を少量含む	不明	底部タテハケ、底面ナデ
991	M地区	SH01	弥生土器	甕		(4.00)			頸部1/4残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ
992	M地区	SH01	弥生土器	甕	(13.60)	(5.80)			口縁部～体部1/8残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部上半ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ
993	M地区	SH01	弥生土器	脚部		(5.80)			脚部のみ残存（端部は欠損）	粗砂を多く含む	脚裾部ナデ、脚柱部ヨコ方向のヘラケズリ	脚柱部タテハケ後ナデ消し
994	M地区	SH01	弥生土器	高杯		(7.00)			脚部～杯部残存	粗砂を含む	脚柱部ヨコヘラケズリ、脚部裾ナナメハケ	脚柱部タテハケ
995	M地区	SH01	弥生土器	高杯		(5.90)		(11.00)	底部2/3、脚部1/1残存	粗砂を含む	脚部裾ヨコハケ	脚端部ヨコナデ、他ハケ後ヨコヘラミガキ
996	M地区	SH01	弥生土器	脚部	11.35	(5.30)			脚部1/2残存	φ3㎜の石粒数個、粗砂を少量含む	ナデ	脚部ヨコヘラミガキ
997	M地区	SH01	弥生土器	鉢	(10.45)	7.45		(3.20)	底部ほぼ完形、口縁部1/3残存	φ4㎜以下の石粒含む	不明	不明、底部ナデ
998	M地区	SH01	弥生土器	鉢	(12.10)	7.75		(7.60)	口縁部1/9～底部1/4残存	φ2㎜の石粒～細砂を少量含む	体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部ヨコナデ、底面ナデ
999	M地区	SH01	弥生土器	丸底壺	(7.00)	10.40	(9.40)		口縁部1/2、底部1/4残存	φ4㎜の小石～細砂を多量に含む	口縁部不明、体部上半ユビナデ、下半ヨコヘラケズリ？	不明
1000	M地区	SH02	弥生土器	鉢	(17.00)	(6.20)	(15.60)		口縁部～頸部1/2、体部若干残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケ、下半タテハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部ナナメハケ後タテヘラミガキ
1001	M地区	SH02	弥生土器	鉢	(17.60)	(6.60)			口縁部1/5残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半不明
1002	M地区	SH03	弥生土器	長頸壺	(12.70)	(31.90)	(17.90)	3.30	口縁部～頸部1/4、体部～底部2/3残存	φ0.5～4.5㎜大の砂粒・石を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ、下半ハケ後ナデ?	口頸部不明、体部板ナデ後ユビオサエ、底面ナデ
1003	M地区	SH06	土師器	高杯	(10.80)	(3.00)			口縁部1/3残存	φ2㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラミガキ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1004	M地区	SH06	弥生土器	蓋	(12.40)	6.80			つまみ部1/1、体部1/3残存	φ0.5～4mm大の砂粒、小石を含む	ヨコハケ	つまみ部ヨコハケ、以下ハケ、端部はヨコナデ
1005	M地区	SH07	弥生土器	脚部		(7.80)		9.30	脚部のみほぼ完存	粗砂、φ0.5～2.5mm大の砂粒を含む	脚端部ヨコナデ、脚部裾ヨコヘラケズリ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ／凹線、脚柱部タテヘラミガキ
1006	M地区	SH08	弥生土器	甕	(19.40)	(3.20)			口縁部1/6残存	φ1～5mmの石粒を多く含む	不明	不明
1007	M地区	SH08	弥生土器	甕底部	(21.70)	(5.50)			口縁部小片残存	φ3mm以下の石粒を多く含む	不明	口縁部不明、体部上半に波状文
1008	M地区	SH08	弥生土器	鉢	(8.90)	8.30	(8.70)	1.30	口縁部～体部1/2残存	φ0.5～4mm大の砂粒、石を含む	口縁部ヨコナデ？、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ？ 体部ハケ後ナデ？
1009	M地区	SH08	弥生土器	有孔鉢		(2.90)		3.40	底部のみ残存	粗砂を少量含む	タテハケ	底部タタキ、底面ナデ、穿孔あり
1010	M地区	SH08	弥生土器	蓋		(2.40)			つまみ部約1/2残存	粗砂、φ0.5～2mm大の砂粒を含む	多方向のハケ	タテハケ後つまみ部のみナデ
1011	M地区	SH08	須恵器	細頸壺		(8.50)			頸部のみ残、端部は全欠損	極細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ
1012	M地区	SH09	弥生土器	甕	(16.50)	(14.35)	(21.00)		口縁部～肩部1/3残存	φ6mm以下の小石、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ？	口縁部ヨコナデ／擬凹線、体部タタキ
1013	M地区	SH05	弥生土器	甕	(13.60)	(26.80)	(20.85)	(4.40)	口縁部～底部1/2残存	極粗砂～粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ、頸部のみヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後ナナメハケ、下半ナデ、底面ナデ
1014	M地区	SH05	弥生土器	壺	(14.60)	(9.25)			口縁部2/3残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、頸部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ後ヘラ描き曲線文
1015	M地区	SH05	弥生土器	甕	(13.70)	(5.10)			口縁部1/3残存	φ2mmの石、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部下半ヨコヘラケズリ？	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ
1016	M地区	SH05	弥生土器	甕	(16.60)	(2.95)			口縁部1/6残存	φ3mm以下の石粒数個、細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ	不明
1017	M地区	SH05	弥生土器	甕	(16.20)	(6.90)			口縁部1/2残存	粗砂、φ3mm～5.5mm大の小石を含む	口縁部ナデ、体部ヨコヘラケズリ	口縁部指頭押圧による波状口縁、ハケ後ナデ？、体部ハケ後タタキ
1018	M地区	SH05	弥生土器	甕	(17.50)	(11.10)			口縁部若干欠損、肩部1/2残存	φ1～5mmの石粒を多く含む	不明	口縁部不明、体部タテハケ
1019	M地区	SH05	弥生土器	底部		(3.55)		4.10	底部完存	φ5mm以下の石粒含む	底部蜘蛛の巣状ハケ	体部下半タテハケ
1020	M地区	SH05	弥生土器	壺底部		(4.30)		5.30	底部若干欠損	φ4～6mm大の石粒数個、極粗砂～細砂を少量含む	体部ヨコハケ／タテハケ	体部下半タテハケ後タテヘラミガキ、底部ナデ
1021	M地区	SH05	弥生土器	高杯	(10.40)	(7.90)			口縁部～体部1/4残存	粗砂、φ0.5～2.5mm大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、杯部ハケ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
1022	M地区	SH05	弥生土器	脚部		(4.75)			脚部3/5残存	粗砂～細砂を含む	不明	不明
1023	M地区	SH05	弥生土器	器台	(19.80)	(13.35)			受部1/4残存	φ7mmの小石～細砂を多く含む	不明、脚部に絞り痕残る	口縁部不明、受部ヨコハケ、脚柱部タテヘラケズリ
1024	M地区	SH05	弥生土器	器台	(21.20)	15.90		14.20	口縁部～受部2/3、脚部～底部4/5残存	粗砂をごく少量含む	口縁部ヨコナデ、受部ヨコヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、脚部裾タテハケ	口縁部ヨコナデ？ 受部タテヘラミガキ、脚部裾ヨコヘラミガキ
1025	M地区	P202	弥生土器	甕	(15.20)	(5.30)			口縁部2/5残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
1026	M地区	P202	弥生土器	鉢	(17.7)	(2.55)			口縁部若干残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、上端に刻み目	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1027	M地区	P270	弥生土器	甕	(19.70)	(14.65)	(20.00)		口縁部1/4、体部1/6残存	極粗砂～細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ／端部に刻み目、体部タテハケ、肩部に直線文＋波状文
1028	M地区	SX03	弥生土器	甕	(22.40)	(6.00)			口縁部1/5残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコハケ／ヨコナデ、体部多方向ハケ後ナデ	口縁部ヨコハケ／ヨコナデ、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
1029	M地区	SX06	弥生土器	細頸壺	(7.80)	23.10	(18.00)	6.75	口縁部1/3、体部1/5欠損	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半多方向ユビナデ、中半多方向板ナデ、下半不明	口縁部ヨコナデ、頸部から体部上半にかけてタテハケ後波状文＋直線文、中半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ
1030	M地区	SX06	弥生土器	壺底部		(13.60)		8.05	底部ほぼ完存	φ2mm以下の石粒、極粗砂を多く含む	体部下半ハケ後ナデ	体部下半タテハケ？ 底部タテヘラミガキ
1031	M地区	SX06	弥生土器	広口壺	(12.80)	22.40	(18.80)	6.20	口縁部1/8、体部1/2、底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2.5mm大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテ方向の板ナデ	口縁部タテハケ後ヨコナデ、頸部タテハケ、体部上半タテハケ後直線文＋波状文、下半タテハケ後ヘラミガキ、底面ナデ
1032	M地区	SX06	弥生土器	広口壺	(13.60)	24.90	19.05	7.20	口縁部1/2欠損	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、頸部タテヘラミガキ、体部上半直線文＋波状文、下半タテヘラミガキ、底面ナデ
1033	M地区	SX09	弥生土器	甕	(23.40)	(16.10)			口縁部1/6、体部1/4残存	極粗砂を多く含む	口縁部ナデ、体部多方向ナデ	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目、体部タテハケ、肩部に直線文＋波状文
1034	M地区	SX11	弥生土器	甕	(12.70)	15.65	(10.80)	4.40	口縁部1/4、体部1/2、底部1/1残存	極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部多方向のハケ	口縁部ヨコナデ、体部肩部直線文＋波状文、以下タテハケ
1035	M地区	SX12	弥生土器	広口壺	(20.50)	(2.80)			口縁部1/5残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、口縁上端に波状文	口縁部ヨコナデ、端面にヘラ先刺突文による羽状文、体部タテハケ
1036	M地区	SX12	弥生土器	広口壺		(21.50)	(15.90)	5.70	底部完存、頸部～体部1/2残存	φ9mmの石1個、φ2mmの石粒～粗砂を多量に含む	不明	不明
1037	M地区	SX12	弥生土器	壺		(11.80)	(22.20)		体部1/3残存	極粗砂～細砂を多量に含む	多方向ナデ	体部直線文＋波状文
1038	M地区	SX13	弥生土器	広口壺	(30.70)	(8.60)			口縁部1/4残存	φ3mmの石粒、極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、端面にヘラ圧痕による斜格子文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
1039	M地区	SX13	弥生土器	甕	(33.40)	(11.10)			口縁部～肩部1/7残存	φ7mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
1040	M地区	SX15	弥生土器	広口壺	(14.60)	(2.55)			口縁部1/7残存	極粗砂～細砂を多量に含む	不明	不明
1041	M地区	SX15	弥生土器	壺		(5.70)			頸部1/7残存	粗砂を多量に含む	不明	頸部に凹線＋断面三角形刻み目突帯
1042	M地区	SX15	弥生土器	壺底部		(6.10)		5.20	底部1/1残存	粗砂を含む	体部ハケ後ナデ？	体部ハケ後タテヘラミガキ、底部ナデ
1043	M地区	SX14	弥生土器	甕	(17.60)	(11.55)	(17.50)		口縁部若干～肩部1/5残存	φ2mmの石4個、細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ？	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1044	M地区	SX14	弥生土器	甕	(21.20)	(10.30)	(20.10)		口縁部～肩部1/7残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1045	M地区	SX14	弥生土器	広口壺	(17.00)	(3.50)			口縁部1/6残存	粗砂，φ0.5～2mm大の砂粒を含む	口縁部ヨコハケ	口縁部ナデ？ 頸部ヨコハケ後ナデ？ 体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1046	M地区	SX14	弥生土器	甕	(23.60)	(6.30)			口縁部1/10残存	粗砂、φ0.5～3.5mm大の砂粒・小石を含む	口縁部ナデ？体部タテハケ	口縁部ナデ？端面に刻み目、体部タテハケ、肩部ヨコハケ後波状文
1047	M地区	SX14	弥生土器	甕	(28.40)	(7.80)			口縁部1/8残存	粗砂、φ0.5～2.5mm大の砂粒を含む	口縁部不明、体部多方向ハケ	口縁部ヨコナデ
1048	M地区	SX16	弥生土器	甕	(19.60)	(3.30)			口縁部1/10残存	粗砂、φ0.5～2mm大の砂粒を含む	口縁部不明、体部ハケ？	不明
1049	M地区	SX16	弥生土器	甕底部		(4.10)		(6.40)	底部1/2残存	粗砂を含む	体部下半タテハケ	体部下半タテハケ、底部ハケ後ナデ
1050	M地区	SX17	弥生土器	甕	(17.45)	(30.00)		5.60	口縁部若干残、底部若干欠損	φ3mm以下の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1051	M地区	SX17	弥生土器	甕	(32.30)	(10.60)			口縁部1/8残存	粗砂、φ0.5～2mm大の砂粒を含む	口縁部ハケ後ヨコナデ、体部上半ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し
1052	M地区	SX17	弥生土器	甕	(16.70)	(4.25)			口縁部若干残存	φ6mmの小石1個、φ3mm以下の石粒を多量に含む	不明	不明
1053	M地区	SX17	弥生土器	甕	(19.85)	(3.85)			口縁部1/8残存	φ3mm大の石粒、粗砂を多く含む	不明	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？
1054	M地区	SX17	弥生土器	甕	(21.40)	(3.55)			口縁部若干残存	φ6mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ
1055	M地区	SX17	弥生土器	蓋	(11.30)	(2.70)			1/3残存	φ4mm大の石粒、極粗砂を少量含む	ナデ	つまみ部不明、以下直線文
1056	M地区	SX18	弥生土器	直口壺	(15.40)	(7.80)			口縁部1/4残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ？	口縁端部ヨコナデ、端面に刻み目、以下タテハケ後凹線、頸部に列点文
1057	M地区	SX18	弥生土器	広口壺	(18.50)	(5.00)			口縁部1/9残存	φ3mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
1058	M地区	SK01	弥生土器	広口壺	(11.00)	16.80	14.60	5.69	口縁部1/4、体部～底部若干欠損	φ3mm大の石粒少量、粗砂～細砂を多く含む	口縁部不明、体部下半ナデ？	口縁部不明、体部下半タテヘラミガキ、底部周縁部のみヨコ方向の板ナデ
1059	M地区	SK01	弥生土器	広口壺	(18.00)	(6.40)			口縁部1/4残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
1060	M地区	SK01	弥生土器	広口壺	(22.80)	(4.40)			口縁部1/4残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコハケ、上端に綾杉文	口縁端部ヨコナデ、端面に羽状文、以下タテハケ
1061	M地区	SK01	弥生土器	甕	(15.50)	(5.65)			口縁部1/6残存	粗砂～細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1062	M地区	SK01	弥生土器	鉢	(12.60)	(7.30)			口縁部～体部1/4残存	粗砂、φ0.5～4.5mm大の砂粒、小石を含む	口縁部ヨコナデ、体部下半ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、直下に断面三角形刻み目突帯、体部タテハケ、2個1単位の紐通し孔
1063	M地区	SK01	弥生土器	甕	(17.00)	(12.45)	(20.00)		口縁部1/3、肩部1/2残存	φ2mm以下の石粒～極粗砂を多く含む	口縁部不明、体部タテハケ／ナナメハケ	口縁部不明、体部タテハケ
1064	M地区	SK01	弥生土器	鉢	(23.10)	(10.80)	(20.40)		口縁部1/6、体部1/8残存	極粗砂～細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1065	M地区	SK01	弥生土器	高杯	(15.50)	20.30	(13.70)		口縁部若干、体部～脚部1/2残存	φ5mmの石1個、φ3mm以下の石粒、砂粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に突帯貼り付け後ナデ、杯部タテハケ、脚部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、端面に円形浮文、杯部タテハケ、脚部タテヘラミガキ
1066	M地区	SK04	弥生土器	鉢	(30.80)	(7.30)			口縁部若干残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ？	口縁部ヨコナデ、端面ヘラ先刺突文
1067	M地区	SK29	弥生土器	無頸壺	(31.30)	(6.70)			口縁部若干残存	φ5mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、肩部に直線文
1068	M地区	SK30	弥生土器	甕	(31.20)	(4.10)			口縁部若干残存	粗砂・細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半板ナデ	口縁部ヨコナデ
1069	M地区	SK56	弥生土器	広口壺	(21.00)	(4.25)			口縁部1/10残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ
1070	M地区	SK56	弥生土器	広口壺	(20.60)	(4.10)			口縁部1/5残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ
1071	M地区	SK56	弥生土器	甕	(13.70)	(4.80)			口縁部小片残存	細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1072	M地区	SK63	弥生土器	細頸壺	(6.60)	(20.00)	(14.50)		口縁部1/4、体部1/3残存	粗砂、φ0.5～4mm大の砂粒、10mmの石を含む	口縁部ヨコハケ／ヨコナデ、頸部タテハケ、体部ユビナデ	口縁部ヨコナデ、頸部から体部上半にかけてタテハケ後波状文＋直線文、下半ハケ後ナデ、底部付近タテヘラミガキ
1073	M地区	SK81	弥生土器	高杯	(37.20)	(4.25)			口縁部小片残存	粗砂～細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ／ヨコヘラミガキ	口縁部ヨコナデ／凹線、波状文
1074	M地区	SK82	弥生土器	甕	(17.60)	(5.30)			口縁部1/5残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ／一部ハケとヘラの痕跡有り	口縁部ヨコナデ、一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1075	M地区	SK82	弥生土器	底部		(7.05)		(7.00)	底部1/2残存	極粗砂を少量含む	体部下半タテハケ	体部下半タテヘラミガキ
1076	M地区	SK82	弥生土器	蓋		(7.20)			つまみ部完形～体部残存	φ3mm以下の石粒含む	タテヘラケズリ／ヨコヘラミガキ	タテヘラミガキ、天井部ユビナデ
1077	M地区	SK81・82間	弥生土器	広口壺	(12.95)	(15.65)	(19.50)		口縁部1/4欠損、体部1/4残存	極粗砂～細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、頸部ナデ、体部上半ナナメハケ、下半タテハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ
1078	M地区	SK81・82間	弥生土器	甕	(17.50)	(7.25)	(16.90)		口縁部1/3残存	φ4mm以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1079	M地区	SK81・82間	弥生土器	甕	(17.80)	(8.80)			口縁部1/4残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1080	M地区	SK81・82間	弥生土器	甕	(16.70)	(14.10)	(20.95)		口縁部～体部1/6残存	細砂・極細砂を含む	口縁部ナデ、体部タテハケ	口縁部ナデ、体部タテハケ
1081	M地区	SK81・82間	弥生土器	甕	(18.20)	(24.10)	(23.00)		口縁部～体部1/3残存	粗砂、φ0.5～3mm大の砂粒のほか、φ10mmの小石を1個含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1082	M地区	SK92	弥生土器	壺		(4.20)			頸部若干残存	φ3mm以下の石粒含む	頸部ナデ	頸部ナデ、断面三角形突帯
1083	M地区	SK92	弥生土器	広口壺	(21.40)	(1.15)			口縁部小片残存	極粗砂～粗砂を多く含む	不明	口縁端部ヨコナデ、端面に刻み目
1084	M地区	SK83	弥生土器	甕	(12.55)	(4.40)			口縁部1/6残存	細砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
1085	M地区	SK83	弥生土器	甕	(12.40)	(7.00)			口縁部～体部若干残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部多方向のハケ	口縁部ヨコナデ／沈線、体部タテハケ
1086	M地区	SK99	弥生土器	甕	(13.10)	(3.30)			口縁部1/10残存	粗砂を含む	口縁部ナデ／ヨコハケ？、体部不明	口縁部ナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1087	M地区	SK101	弥生土器	高杯	(25.40)	(2.90)			口縁部若干残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
1088	M地区	SD10	弥生土器	広口壺	(16.40)	(5.80)			口縁部1/6残存	φ0.5～4mm大の砂粒・小石を多く含む	口縁部ヨコナデ？	口縁部ヨコナデ？体部多方向のハケ後波状文
1089	M地区	SD10	弥生土器	壺底部		(5.50)		8.30	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2mm大の砂粒を多く含む	不明	不明

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
1090	M地区	SD10	弥生土器	甕	(22.70)	(4.30)			口縁部1/12残存	細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテ方向の板ナデ
1091	M地区	SD25	弥生土器	甕	(17.65)	(7.60)			口縁部1/8残存	φ3㎜以下の石粒～極粗砂を多く含む	口縁部ナデ、体部上半ハケ後ナデ、下半ヨコハケ	口縁部ナデ、直下に刺突文、体部ヨコハケ
1092	M地区	SD32	弥生土器	甕	(21.30)	(4.10)			口縁部1/7残存	φ2㎜大の石粒、粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ
1093	M地区	SD32	弥生土器	底部		(6.75)		(5.55)	底部若干欠損	φ2㎜以下の石粒、極粗砂を少量含む	体部下半タテハケ、底部ヨコハケ	体部下半タテハケ、底部ナデ
1094	M地区	SD32	弥生土器	脚部		(5.90)		(15.40)	脚部1/7残存	粗砂・細砂を多く含む	脚端部ヨコナデ、脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ、脚部タテヘラミガキ、貫通していないが穿孔一箇所有り
1095	M地区	SD32	弥生土器	脚部		(5.75)			脚部のみ残存	極粗砂～細砂を少量含む	不明	タテヘラミガキ
1096	M地区	SD32	土師器	甕	(16.00)	(9.40)	(19.60)		口縁部～体部1/8残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ
1097	M地区	SD52	弥生土器	甕	(18.40)	(6.40)			口縁部1/10残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ/ナナメハケ、頸部のみヨコナデ
1098	M地区	SD52	弥生土器	甕	(17.50)	(6.05)			口縁部1/8残存	粗砂を多量に含む	不明	不明
1099	M地区	SD52	弥生土器	甕	(21.40)	(28.40)	(23.00)		口縁部～体部1/2残存	極粗砂少量、細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナナメハケ、下半ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、頸部のみヨコナデ
1100	M地区	SD52	弥生土器	甕		(6.10)		(5.00)	底部1/2残存	粗砂、φ0.5～3.5㎜大の砂粒、小石を含む	体部下半ヨコハケ後ナデ	体部下半ハケ、底面ナデ
1101	M地区	SD52	弥生土器	鉢	(16.00)	(14.40)		8.80	口縁部～体部1/3、底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、その直下と体部に刻み目、他ナデ
1102	M地区	包含層	弥生土器	甕	(23.10)	(3.60)			口縁部1/8残存	φ2㎜以下の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ
1103	M地区	包含層	弥生土器	有孔鉢		(4.40)		3.00	底部のみ完存	φ3㎜の石粒、極粗砂を少量含む	不明	多数の穿孔（未貫通のものも含む）有り
1104	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	20.7	(6.00)			口縁部ほぼ完存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、以下ハケ	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ
1105	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(13.45)	(7.40)			口縁部1/2残存	φ2㎜以下の石粒～極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、以下不明	口縁部ヨコナデ/凹線、以下タテハケ、頸部凹線
1106	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(16.20)	(7.20)			口縁部1/3残存	φ3㎜以下の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、以下不明、4個1単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面凹線＋棒状浮文、頸部凹線、一部ミガキ？
1107	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(10.70)	(15.30)			口縁部若干～体部1/2残存	φ5㎜以下の石粒数個、極粗砂～粗砂を多く含む	口縁部不明、体部上半ユビナデ、下半タテハケ	口縁部不明、体部上半タテヘラミガキ、下半タテハケ後ナデ消し
1108	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(9.70)	13.45	14.75	6.25	口縁部4/5欠損	細砂を多量に含む	不明	不明
1109	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	8.00	11.50	11.00	4.25	ほぼ完形	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し
1110	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(14.90)	(17.90)	(27.60)		口縁部3/4、体部上半1/2残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ/凹線、頸部に凹線、体部上半タテハケ、屈曲部以下からヨコヘラミガキ
1111	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(18.60)	(25.55)	(30.30)		口縁部3/4、体部1/2残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、端面に波状文、体部上半タテハケ後、波状文＋直線文、下半タテハケ
1112	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(16.50)	(20.50)	(19.20)		口縁部1/2、体部1/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、体部上半ヨコハケ、下半ヘラケズリ	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文、以下タテハケ、体部上半タテハケ後、直線文＋波状文、下半タテヘラケズリ
1113	M地区	SD01（上層）	弥生土器	壺		(18.90)	(27.30)		体部1/3残存	粗砂、φ0.5～3.5㎜大の砂粒を含む	体部ハケ後上半はナデ消し	体部タタキ後ハケ
1114	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	18.00	(10.70)			口縁部3/5、体部若干残存	粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文？以下不明	口縁部ヨコナデ、端面に波状文？頸部ヘラミガキ、屈曲部に断面三角形刻み目突帯
1115	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	22.05	(9.25)			口縁部1/2、頸部1/1残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文	口縁端部ヨコナデ、端面波状文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
1116	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(22.60)	(9.20)			口縁部1/4残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に竹管文2帯＋扇形文＋直線文、以下ヨコハケ	口縁端部ヨコナデ、上下端に刻み目、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
1117	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(24.20)	(11.20)			口縁部1/2、頸部1/1残存	極粗砂～極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋竹管文＋扇形文、以下ヨコハケ、2個1単位の紐通し孔	口縁端部ヨコナデ、端面上下端に刻み目、以下タテハケ、頸部断面三角形突帯、体部直線文＋竹管文
1118	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(29.90)	(6.90)			口縁部1/3残存	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文＋ヘラ描き斜格子文＋波状文2帯、以下ヨコハケ、2個1単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面凹線＋縦ヘラ描き沈線＋円形浮文、以下タテハケ
1119	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	18.05	(20.80)			口縁部4/5、頸部～体部上半1/2残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に斜格子文、以下ヨコハケ、頸部付近タテハケ後ナデ消し、体部タテハケ	口縁端部ヨコナデ、端面斜格子文、以下タテハケ、頸部断面三角形突帯、体部ハケ後ナデ？体部に列点文
1120	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺		(33.00)	33.10		体部1/2残存	φ2㎜以下の極粗砂を多く含む	頸部ナデ、体部ハケ	頸部凹線、体部上半タテハケ後、直線文＋波状文、下半タテヘラミガキ
1121	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	17.30	(34.20)	(23.40)	7.40	口縁部若干欠損、体部1/2～底部完存	極粗砂～細砂を少量含む	口縁部ヨコナデ/ヨコハケ、体部上半ナナメハケ後ナデ消し、下半板ナデ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部上半ハケ・タタキ？後ナデ消し、中半タテハケ、下半タテヘラミガキ
1122	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	22.90	(12.70)			口縁部9/10残存	φ3㎜の小石、粗砂～細砂を含む	不明	タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
1123	M地区	SD01（上層）	弥生土器	直口壺	15.95	(18.00)			口縁部3/5、体部1/8残存	粗砂～細砂を含む	口縁端部ヨコナデ、以下ヨコハケ、体部ヨコハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ、肩部にヘラ先列点文
1124	M地区	SD01（上層）	弥生土器	短頸壺	(30.80)	(6.05)			口縁部1/4残存	φ4㎜の小石～細砂を多量に含む	不明	口縁上端部ヨコナデ、下端部は指頭押圧により波状化、端面斜格子文、頸部に指頭圧痕文突帯

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1125	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(20.30)	(12.70)			口縁部～頸部3/4残存	粗砂0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文、以下ハケ後ナデ？ 体部不明	口縁端部ヨコナデ、端部に刻み目、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ？
1126	M地区	SD01（上層）	弥生土器	広口壺	(20.50)	(10.20)			口縁部若干残～頸部若干欠損	φ2㎜の石粒、粗砂を少量含む	口縁部ヨコハケ、上端に扇形文、体部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後直線文＋波状文
1127	M地区	SD01（上層）	弥生土器	直口壺	15.05	(11.25)			口縁部3/4、頸部1/2残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ後ナデ、体部タテハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、以下タテハケ、頸部凹線、体部ハケ後ナデ
1128	M地区	SD01（上層）	弥生土器	細頸壺	10.80	(21.80)	(25.95)		口縁部1/2～体部残存	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文、頸部タテハケ後直線文、体部タテハケ後波状文＋直線文
1129	M地区	SD01（上層）	弥生土器	水差形土器	(8.10)	(13.20)	(14.40)		口縁部1/2、体部1/2、把手1/2残存	粗砂φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ消し	口縁部ヨコナデ、直下に刻み目、体部ハケ後ナデ
1130	M地区	SD01（上層）	弥生土器	水差形土器	(9.00)	(22.40)	(19.40)		口縁部3/4、地1/2、把手1/1、脚部若干残存	粗砂、0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、頸部下ヘラケズリ後ナデ、体部上半ハケ、下半ハケ後板ナデ、脚部ハケ、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ／凹線／タテハケ、体部タテハケ
1131	M地区	SD01（上層）	弥生土器	無頸壺	11.60	(10.95)	14.35		口縁部5/8、体部4/5残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケ、下半板ナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、2個1単位の紐通し孔有り
1132	M地区	SD01（上層）	弥生土器	無頸壺	(14.80)	(17.80)		10.50	口縁部1/2～底部完存	φ5㎜～10㎜の石3個、φ3㎜以下の石粒を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラミガキ、脚部不明	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、中半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、脚部との境に断面三角形突帯、脚端部ヨコナデ、裾部タテハケ、5箇所に円孔透かし（φ1.5㎜）
1133	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(17.70)	(6.60)			口縁部1/2残存	極粗砂～粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1134	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(14.70)	(9.70)	(15.50)		口縁部1/6～体部残存	φ4㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1135	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	19.25	(18.65)	(19.90)		口縁部2/3～体部残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
1136	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(19.70)	(11.50)			口縁部1/4～体部残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ後頸部のみヨコナデ
1137	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(26.40)	43.15	(35.80)	(9.00)	口縁部1/6～底部3/4残存	φ12㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ、底部ナデ
1138	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(16.00)	25.50		(7.00)	口縁部若干欠損～底部1/4残存	φ2㎜～5㎜大の石粒、極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ消し
1139	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(15.70)	28.10	(22.00)	6.05	口縁部4/5、体部7/8残存	細砂～極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半タテヘケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタキ後タテハケ、底部ヘラケズリ後ナデ
1140	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(22.20)	(19.80)	(27.40)		口縁部～体部1/4残存	細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1141	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(11.80)	(7.65)			口縁部1/2、体部1/3残存	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1142	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(17.70)	(6.20)			口縁部1/4残存	極粗砂～粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ	口縁部ハケ、頸部に列点文？
1143	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(25.80)	(9.00)			口縁部1/5、体部若干残存	粗砂～細砂を含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
1144	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(29.30)	(8.50)			口縁部1/3残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ消し
1145	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕	(26.20)	(19.60)	(38.70)		口縁部1/2、肩部1/3残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ／ヨコハケ、体部ナナメハケ後頸部のみヨコナデ	口縁端部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1146	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕底部		(10.50)		7.15	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒・石粒を含む	体部下半タテヘラケズリ後ナデ	体部下半タテハケ後ナデ、底部ハケ後ナデ
1147	M地区	SD01（上層）	弥生土器	甕底部		(13.70)		8.20	底部1/1、体部1/4残存	極粗砂・粗砂を多く含む	体部不明、底部ハケ	体部ハケ
1148	M地区	SD01（上層）	弥生土器	鉢	(15.30)	13.00		(7.10)	口縁部1/6、体部1/3、底部1/2残存	粗砂、0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ？	口縁部ヨコナデ、直下に刻み目、体部タテハケ
1149	M地区	SD01（上層）	弥生土器	鉢	10.95	6.80		5.15	ほぼ完形	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、底部ナデ
1150	M地区	SD01（上層）	弥生土器	鉢	(17.50)	(6.30)			口縁部1/5残存	粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ後ナデ、下半ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ、端面刻み目＋円形浮文、体部ヨコハケ後ナデ、2個1単位の紐通し孔有り
1151	M地区	SD01（上層）	弥生土器	高杯	(19.60)	17.70		(11.75)	口縁部若干～底部1/3残存	φ2㎜大の石粒少量、粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ、脚部不明	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ、脚部タテハケ、脚端部ヨコナデ
1152	M地区	SD01（上層）	弥生土器	高杯	16.50	(12.50)			口縁端部ごくわずか、脚部1/2、口縁部～体部3/4残存	粗砂、0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、上端に突帯貼り付けナデ、垂下口縁部ヨコナデ／ヘラミガキ、杯部ハケ後ナデ？脚部絞り痕残る	口縁部ヨコナデ、以下不明
1153	M地区	SD01（上層）	弥生土器	高杯	(18.20)	16.00		11.50	口縁部～杯部1/2欠損	φ12㎜の石1コ、φ2㎜以下の石粒～粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、杯部不明、脚部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、杯部タテハケ、脚端部ヨコナデ脚部タテハケ
1154	M地区	SD01（上層）	弥生土器	高杯	24.80	17.30		12.80	底部1/2～口縁部1/4残存	φ6㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部ヨコハケ、脚部不明、絞り痕残る	口縁部ヨコナデ、体部ミガキ？
1155	M地区	SD01（上層）	弥生土器	脚部		(13.35)		14.60	底部2/3、脚部1/1残存	粗砂0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	脚部裾ヨコハケ、絞り痕残る	脚端部ヨコナデ、他タテハケ
1156	M地区	SD01（上層）	弥生土器	台付鉢	(17.10)	(18.65)	(21.60)	(12.00)	口縁部～底部約1/2残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、杯部上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、脚部ヨコヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、杯部下半ヨコヘラミガキ、脚部境に凹線、脚部ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ、2個1単位の紐通し孔有り
1157	M地区	SD01（上層）	弥生土器	器台		(14.30)		(22.80)	脚部3/7残存	粗砂～細砂を含む	脚部ヨコヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	脚部凹線／鋸歯文、3方向の円形透かし有り
1158	M地区	SD01（上層）	弥生土器	蓋	16.00	4.30			口縁部～体部1/2、つまみ部1/1残存	粗砂0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	不明	不明、2個1単位の紐通し孔2方向に有り

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1159	M地区	SD01（上層）	土製品	分銅形土製品	(6.60)	8.65	2.10		1/2残存			
1160	M地区	SD01（上層）	弥生土器	ミニチュア鉢	4.85	6.70	6.25	3.50	ほぼ完形	極細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向の板ナデ／タテ方向のユビナデ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ
1161	M地区	SD01（上層）	弥生土器	ミニチュア壺	4.95	8.35		3.50	完存	φ5㎜以下の小石～粗砂を多く含む	口縁部ナデ、体部ナデ？	口縁部ナデ、体部不明
1162	M地区	SD01（上層）	弥生土器	台形土器		(13.30)		18.20	台部ほぼ完形～脚部残存	φ8㎜以下の石粒含む	ユビオサエ	ナデ？
1163	M地区	SD01（上層）	土製品	不明土製品	(5.60)	7.30			1/2残存	粗砂～細砂が含まれる	不明	天井部ナデ、体部櫛描き格子文、上部に穿孔（φ7㎜）有り
1164	M地区	SD01（上層）	土製品	紡錘車	4.55	4.65	0.85		完存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	ナデ	ハケ
1165	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(19.10)	(6.75)			口縁部3/4残存	粗砂～極細砂を多量に含む	不明	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯
1166	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	20.30	(20.75)	(28.20)		口縁部1/1、体部1/8残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文、以下ヨコハケ、体部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文、以下タテハケ、頸部指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後、上半に直線文＋波状文
1167	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(17.30)	(14.80)			口縁部1/6、頸部4/5、体部若干残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜大の砂粒を含む	口縁部上端に扇形文、以下ハケ後ナデ、体部ハケ後ナデ？	口縁端部ヨコナデ、端面に波状文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯、体部タテハケ後、直線文＋波状文
1168	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺		(14.80)			頸部7/8、肩部3/4残存	粗砂、φ0.5～3.0㎜大の砂粒を含む	不明	頸部タテハケ、屈曲部に指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後、直線文＋波状文＋斜格子文
1169	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(23.80)	(21.15)			口縁部1/2～体部若干残存	φ2㎜大の石粒少量、極粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に波状文＋扇形文、以下不明	口縁端部ヨコナデ、端面に板状圧痕による斜格子文、以下タテハケ、頸部に指頭圧痕文突帯、体部上半に直線文＋斜格子文、下半タテハケ
1170	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(18.40)	34.95	(27.20)	(9.40)	口縁部1/4、体部1/5、底部若干残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁端部ヨコナデ、以下タテハケ、体部上半タテハケ、下半タテ方向の板ナデ、底部ナデ、最大径付近に列点文
1171	M地区	SD01（下層）	弥生土器	直口壺	9.80	(15.00)			口縁部ほぼ完存	φ2㎜の石粒～粗砂を多く含む	口縁部不明、体部ナナメハケ	口縁部タテハケ、体部タテハケ？
1172	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口短頸壺	16.05	(9.60)			口縁部完存～肩部若干欠損	φ2㎜大の石粒～粗砂を多量に含む	不明	不明
1173	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口短頸壺	10.20	15.45	14.20	5.15	口縁部1/3欠損、体部若干欠損	極粗砂を少量含む	口縁部ヨコナデ、体部タテ・ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、底部周縁部ヨコナデ
1174	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(20.00)	(23.05)	(28.30)		口縁部3/4～体部残存	φ12㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、2帯の竹管文、体部ナナメハケ	口縁端部ヨコナデ、端面に竹管文、以下タテハケ、頸部指頭圧痕文突帯、体部タテハケ後、波状文＋竹管文
1175	M地区	SD01（下層）	弥生土器	壺	(19.00)	(6.10)			口縁部1/7残存	粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部条痕	口縁部ヨコナデ、上端に刻み目、体部ヨコハケ／タテハケ、波状文、刻み目突帯
1176	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(21.90)	(4.10)			口縁部7/8残存	粗砂～細砂を含む	口縁部ヨコナデ、上端には突起＋波状文＋扇形文、3個1単位の紐通し孔有り	口縁部ヨコナデ、端面は円形浮文＋棒状浮文
1177	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	20.80	(8.35)			口縁部のみ残存、端部1/10欠損	粗砂、φ0.5～4.5㎜大の砂粒・石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、上端に扇形文2帯	口縁端部ヨコナデ、端面に綾杉文＋円形浮文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯
1178	M地区	SD01（下層）	弥生土器	広口壺	(22.00)	(12.65)			口縁部3/4、頸部1/4残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、上端に2帯の刻み目突帯貼り付け、以下ヨコヘラミガキ	口縁端部ヨコナデ、端面に円形浮文、以下タテハケ、頸部に断面三角形突帯、体部に直線文＋波状文
1179	M地区	SD01（下層）	弥生土器	甕	20.65	(17.15)	(19.80)		口縁部1/2、体部1/4残存	細砂・極細砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ／一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1180	M地区	SD01（下層）	弥生土器	甕	(24.00)	(12.00)			口縁部若干欠損	φ8㎜の小石2～3個、φ5㎜以下の石粒を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部ナナメハケ	口縁部ヨコナデ、端面に刻み目、体部タテハケ
1181	M地区	SD01（下層）	弥生土器	台付鉢		(11.10)		(10.00)	底部1/4残存	φ3㎜の小石数個、極粗砂を多く含む	不明	鉢部不明、脚部境に断面三角形突帯、裾部にヘラ描き沈線、脚端部ヨコナデ、三角形透かし推定10箇所有り？
1182	M地区	SD01（下層）	弥生土器	台付鉢	(11.90)	(15.35)		8.05	口縁部1/3残～底部1/3欠損	φ5㎜大の石粒数個、粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半ハケ、下半板ナデ、脚部不明	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、脚部タテハケ、脚端部ヨコナデ、脚部境に断面三角形突帯、2個／単位の紐通し孔有り
1183	M地区	SD01（下層）	弥生土器	高杯		(10.40)		10.20	底部～脚部のみ残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を多く含む	杯部ハケ後ナデ、脚部ナデ、絞り痕残る	脚部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ
1184	M地区	SD01（下層）	弥生土器	蓋	15.80	5.30			口縁部1/2、つまみ部1/1残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、つまみ天井部ハケ後ナデ
1185	M地区	SD02	弥生土器	短頸壺	(11.30)	(15.80)	(20.00)		口縁部2/3、体部1/4残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ
1186	M地区	SD02	弥生土器	壺	(17.70)	(9.45)			口縁部7/8残存	粗砂を含む	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ／凹線、頸部タテハケ後ナデ、頸部境に凹線
1187	M地区	SD02	弥生土器	無頸壺	(8.00)	9.50	(12.90)	4.75	口縁部若干～底部完存	φ7㎜の石1個、φ2㎜以下の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半ハケ	口縁部ヨコナデ、体部上半不明、下半タテヘラミガキ、底部ナデ、2個1単位の紐通し孔有り
1188	M地区	SD02	弥生土器	壺	(11.50)	14.35	(13.60)	(6.00)	約1/4残存	粗砂・細砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、体部上半タテハケ、下半タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／凹線、体部タテハケ、最大径付近に刺突文
1189	M地区	SD02	弥生土器	甕	(15.20)	(10.60)	(17.70)		口縁部2/3、体部1/3残存	粗砂を少量含む	口縁部不明、体部上半タテ方向のユビナデ、下半タテ方向のヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タテハケ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
1190	M地区	SD02	弥生土器	甕	16.90	(12.60)			口縁部1/2、体部1/2残存	粗砂・細砂を多量に含む	口縁部ヨコハケ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ/一部指頭押圧による波状口縁、体部タテハケ
1191	M地区	SD02	弥生土器	高杯	(18.45)	(21.00)		(15.00)	口縁部1/10～底部1/3残存	φ3㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、上端に突帯貼り付けナデ、杯部タテヘラミガキ、脚部裾ヨコヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、杯部タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、脚端部ヨコナデ/凹線
1192	M地区	SD02	弥生土器	台付鉢	(11.30)	10.10		(5.80)	口縁部1/残～底部1/3欠損	φ2㎜以下の石粒～粗砂を多く含む	口縁部ヨコナデ、杯部ハケ、脚部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、杯部ケズリに近い板ナデ、脚部不明
1193	M地区	SD02	土製品	紡錘車	3.80	3.40	0.55		端部欠損	粗砂、φ0.5～1㎜大の砂粒含む	ナデ	ハケ後ナデ？
1194	M地区	SB14	須恵器	杯蓋	(17.80)	(2.80)			4/5残存		回転ナデ	回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
1195	M地区	SB09	須恵器	高坏	(10.20)	(3.85)			口縁部1/4残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
1196	M地区	SB16	須恵器	杯A	(12.20)	3.70		(9.90)	1/4残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部未調整？
1197	M地区	P513	須恵器	杯B	(16.00)	4.40		(12.00)	口縁部1/11、底部1/4残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
1198	M地区	P525	須恵器	杯B	(13.40)	3.60		(9.00)	底部1/3、口縁部若干残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
1199	M地区	SK62	須恵器	杯B	(15.00)	3.80		(11.00)	1/10残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、高台付近回転ヘラケズリ後、回転ナデ、底部ナデ？高台貼り付けナデ
1200	M地区	SK45	須恵器	杯蓋	(12.40)	3.20			口縁部若干、体部1/3、つまみ部1/1残存	細砂を少量含む	回転ナデ後、多方向のナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
1201	M地区	SK81	須恵器	杯蓋	12.30	2.50			完形		回転ナデ、中央部のみナデ	天井部回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
1202	M地区	SK81	須恵器	杯蓋	(14.80)	(2.85)			1/4、つまみ欠損		回転ナデ、中央部のみ多方向のナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
1203	M地区	SK81	須恵器	杯蓋	(15.00)	(2.80)			口縁部1/2欠損	細砂を少量含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、つまみ部貼り付けナデ
1204	M地区	SK81	須恵器	杯B	(16.30)	4.50		(11.50)	口縁部若干、底部2/3残存	細砂を少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
1205	M地区	SK72	須恵器	杯	(13.60)	3.70		(10.00)	1/2残存	φ0.5～2㎜大の砂粒、φ6.5㎜大の小石をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ
1206	M地区	SK18	須恵器	杯B	(17.80)	(4.00)			口縁部～体部1/4、底部欠損	φ1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ
1207	M地区	SK18	須恵器	杯B	(18.00)	(4.55)		(12.20)	口縁部1/4、底部1/7残存		回転ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
1208	M地区	SK18	須恵器	椀E	(11.20)	4.70		6.90	口縁部1/4、体部2/3残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ起こし後未調整
1209	M地区	SK18	須恵器	高坏？	(13.80)	(4.60)		(10.90)	杯部1/3残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ
1210	M地区	包含層	須恵器	杯B	(13.80)	4.00		(9.80)	口縁部1/7～底部1/2残存	φ2㎜の砂粒1個、極細砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
1211	Q地区	SB01	瓦質土器	底部		(3.70)		(15.00)	底部1/6残存	粗砂を多く含む	不明	不明
1212	Q地区	SB04	土師器	小皿	9.05	1.60		5.40	口縁部1/2欠損	φ3㎜以下の石粒含む	ヨコナデ	ヨコナデ、底部ナデ
1213	Q地区	SB04	黒色土器	小皿	9.90	2.35		5.45	口縁部1/8欠損	細砂をごく少量含む	ヨコヘラミガキ、見込み部は多方向にヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、底部回転糸切り
1214	Q地区	SB05	土師器	杯		(1.90)		(6.90)	口縁部若干残存、底部1/4残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
1215	Q地区	SB05	土師器	小皿	(10.30)	1.55		(7.00)	口縁部1/5、底部1/2残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1216	Q地区	SB08	黒色土器	椀	(18.60)	(5.20)			口縁端部わずか、体部1/4残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ
1217	Q地区	SB09	土師器	杯	(15.20)	4.30		(7.20)	口縁部1/3、底部1/2残存	細砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1218	Q地区	SB09	土師器	堝	(31.70)	(4.70)			口縁部1/8残存	φ3.0㎜以下の砂粒含む		
1219	Q地区	SB11	黒色土器	椀	(17.25)	(5.40)			口縁部～底部若干残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ
1220	Q地区	SB13	土師器	杯	(14.60)	3.65		6.50	口縁部1/4、底部1/1残存	粗砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1221	Q地区	SB15	土師器	杯	(15.80)	4.35		(7.50)	口縁部1/9、底部1/2残存	極細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1222	Q地区	SB15	土師器	小皿	(9.20)	1.35		(6.00)	口縁部1/10、底部2/3残存	粗砂をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1223	Q地区	SB15	黒色土器	椀	(13.55)	(4.70)			口縁部～体部1/8残存	φ2㎜以下の石粒含む	ヨコヘラミガキ	
1224	Q地区	SB01	土師器	杯	(15.50)	3.60		(5.90)	口縁部1/6～底部ほぼ完形	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1225	Q地区	SB01	黒色土器？	椀		2.65		(6.00)	底部1/2～体部残存	φ5㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1226	Q地区	SK23	土師器	堝	(33.80)	(10.70)			口縁部1/8残存	極粗砂・粗砂を多量に含む	口縁部ヨコナデ、体部当て具痕残る	口縁部ヨコナデ、体部タタキ
1227	Q地区	SK23	黒色土器	椀	(17.60)	(5.60)		7.00	口縁部1/4～底部2/3残存	砂粒殆ど含まず	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ、回転糸切り？、高台貼り付けナデ
1228	R地区	SB01	黒色土器	小皿	(8.70)	(1.45)		(5.15)	口縁部～底部1/8残存	φ1㎜以下の砂粒含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1229	R地区	SB02	土師器	杯	(16.10)	(3.70)		(7.30)	口縁部～底部1/3残存	砂粒殆ど含まず	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1230	R地区	SB04	土師器	小皿	10.75	2.00		5.00	口縁部1/4欠損	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ．底部回転糸切り
1231	R地区	SB04	土師器	甕	(13.65)	(3.75)			口縁部1/5残存	φ10㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部不明	口縁部ヨコナデ、体部不明
1232	R地区	P81	土師器	小皿	(10.00)	1.10		4.90	口縁部1/3、底部1/1残存	細砂を多く含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り
1233	R地区	包含層	土師器	小皿	(9.00)	(1.45)		(5.60)	口縁部1/4残存	1.0㎜以下の砂粒を含む	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、底部回転糸切り
1234	ⅢF区	SD03・04	須恵器	円面硯	(20.60)	6.50		(25.80)	1/4残	φ5㎜以下の小石数個、細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ
1235	ⅢF区	SD03	須恵器	杯B蓋	(15.70)	(2.55)			口縁部若干～体部	φ6㎜以下の石粒含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ
1236	ⅢF区	SR01(Ⅰ層)	須恵器	蓋	(16.50)	(1.95)			口縁部～天井部若干残	φ2㎜以下の石粒2～3個、細砂を少量含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ
1237	ⅢF区	SR01(Ⅰ層)	須恵器	杯B蓋	(16.95)	(1.95)			1/8残	極細砂を含む	回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1238	ⅢＦ区	SK16	須恵器	杯Ｂ		(2.65)		(12.50)	底部1/4残	細砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部多方向ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
1239	ⅢＦ区	SR01（最下層）	須恵器	杯蓋	(17.90)	(1.50)			口縁部1/7残	細砂を多量に含む	回転ナデ	回転ナデ
1240	ⅢＦ区	SD03	須恵器	杯Ａ	13.30	5.05		9.70	口縁部2/5欠損	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒をごく少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
1241	ⅢＦ区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	杯Ｂ		(1.75)		(11.30)	底部1/6残	極細砂をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
1242	ⅢＦ区	SR01（Ⅰ層）	須恵器	蓋	3.15	3.70	0.55		小片	細砂を少量含む		
1243	ⅢＭ区	P528	須恵器	杯Ｂ		(1.25)		(7.80)	底部1/2	細砂を含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ
1244	ⅢＦ区	SD03・04	須恵器	杯		(0.90)		(9.20)	底部ごくわずか	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ

表6　下野村遺跡　出土土器観察表

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整（内）	調整（外）
1245	Ａ地区	SK16	弥生土器	甕		(2.10)			口縁部1/4、端部は欠損	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／凹線
1246	Ａ地区	SK16	弥生土器	甕底部		(5.10)		(2.60)	底部2/3残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒、石粒を含む	不明	体部タテハケ後ナデ？
1247	Ａ地区	SK16	弥生土器	壺底部		(4.70)		(5.30)	底部1/3残存	φ4㎜以下の石粒含む	不明	不明
1248	Ａ地区	SK16	弥生土器	台付鉢		(6.30)		(4.70)	脚端部～底部若干残存	φ2～4㎜の石粒、極粗砂を少量含む	不明	不明
1249	Ａ地区	SK17	弥生土器	甕	(14.60)	(4.50)			口縁部1/6残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒含む	口縁部ハケ後ナデ？ 体部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、タテハケ後ナデ
1250	Ａ地区	SK18	弥生土器	底部		(3.10)		2.35	底部ほぼ完形	φ5㎜以下の石粒含む	不明	不明
1251	Ａ地区	SK18	弥生土器	脚部		(3.05)			脚柱部のみ残存	φ5㎜の小石～粗砂を多く含む	不明	不明
1252	Ａ地区	SK18	弥生土器	高杯	(10.30)	(6.20)			口縁部～脚部若干残存	φ2㎜の石粒～極粗砂を少量含む	不明	不明
1253	Ａ地区	SD06	弥生土器	底部		(3.05)		(7.90)	底部1/8残存	極粗砂～粗砂を少量含む	不明	不明
1254	Ａ地区	SD06	弥生土器	脚部		(3.50)		(5.60)	脚5/6残存	粗砂を多く含む	不明	不明
1255	Ｂ地区	SK10	弥生土器	甕	(14.80)	(2.20)			口縁部1/8残存	φ5㎜の小石～細砂を多く含む	口縁部ナデ	口縁部ヨコナデ／擬凹線
1256	Ｂ地区	SK10	弥生土器	鉢	8.90	8.00	8.40	3.90	口縁部～体部1/2欠損	粗砂を多く含む	底部タテハケ	不明
1257	Ｂ地区	SK10	弥生土器	鉢	(29.40)	(8.65)			口縁部～体部若干残存	粗砂、0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ／擬凹線
1258	Ｂ地区	SK11	弥生土器	広口壺	(11.70)	(2.00)			口縁部1/10残存	粗砂、0.5～2㎜大の砂粒を含む	不明	不明
1259	Ｂ地区	SK11	弥生土器	高杯		(5.55)			柱状部ほぼ完形	φ5㎜以下の石粒含む	不明、絞り痕残る	不明
1260	Ｂ地区	SK11	弥生土器	高杯	(21.20)	(11.50)			口縁部1/3、脚基部1/3欠損	φ7㎜以下の石粒数個、極粗砂を多く含む	不明	不明
1261	Ｂ地区	SK12	弥生土器	台付鉢	10.15	6.95		4.00	口縁部若干、体部7/8残存	粗砂～細砂を含む	不明	不明、底部ユビオサエ
1262	Ｂ地区	SK14	弥生土器	鉢		(4.55)		(4.20)	底部2/3、体部若干残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	不明	ハケ後ナデ
1263	Ｂ地区	SK14	弥生土器	脚台		(2.60)		4.70	底部のみ完存	φ2㎜の石粒を少量含む	不明	不明
1264	Ｂ地区	SK15	弥生土器	広口壺	(17.80)	(2.00)			口縁部1/8残存	極粗砂を多く含む	不明	口縁部ヨコナデ／擬凹線
1265	Ｂ地区	SK15	弥生土器	壺底部		(9.00)		(4.90)	底部2/3、体部1/8残存	φ7㎜の小石～粗砂を多く含む	不明	ハケ
1266	Ｂ地区	SK15	弥生土器	甕	(17.90)	(3.35)			口縁部1/5残存	粗砂、φ0.5～1.5㎜の砂粒を含む	不明	不明
1267	Ｂ地区	SK15	弥生土器	壺	(14.20)	(5.60)			口縁部若干欠損	φ2㎜大の石粒～極粗砂を少量含む	不明	不明
1268	Ｂ地区	SK15	弥生土器	鉢		(5.80)		4.50	底部1/1、体部2/3残存	粗砂・細砂を多く含む	不明	不明
1269	Ｂ地区	SD01	弥生土器	高杯	(11.90)	(2.90)			口縁部1/8残存	極細砂を多く含む	不明	口縁部ヨコナデ／擬凹線
1270	Ｂ地区	SD01	弥生土器	高杯		(7.30)		(8.50)	柱状部ほぼ完形～裾部約2/3残存	φ2㎜以下の石粒含む	脚部ヨコヘラケズリ	脚端部ヨコナデ？ 脚柱部ヘラミガキ？
1271	Ｂ地区	SD01	弥生土器	高杯		(12.25)		13.20	杯部1/6、脚部1/1残存	細砂を多く含む	杯部ヨコハケ、脚部タテハケ／ヨコハケ、脚端部ヨコナデ	杯屈曲部に凹線、杯部下半ヨコヘラミガキ、柱状部タテヘラミガキ、脚部裾タテハケ、下方のみヨコヘラミガキ
1272	Ｂ地区	SD01	須恵器	杯Ａ	(15.10)	(3.45)		(10.80)	口縁部1/6～底部1/4残存	φ3㎜以下の石粒含む	回転ナデ	回転ナデ
1273	Ｂ地区	SD01	須恵器	杯	(12.40)	3.40		(9.00)	口縁部1/10残存	細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ
1274	Ｂ地区	SD01	須恵器	杯蓋	(12.40)	3.90		7.80	口縁部3/4欠損	φ5～3㎜の小石2個含む	回転ナデ、中央部ナデ	天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ
1275	Ｂ地区	SD03	縄文土器	壺		(5.20)			肩部約1/4残存	φ7㎜以下の石粒含む	不明	凸帯文
1276	Ｂ地区	SD03	縄文土器	深鉢	(13.00)	(3.55)			口縁部若干残存	粗砂を多く含む	不明	口縁直下に凸帯文
1277	Ｂ地区	SD03	弥生土器	長頸壺	(12.75)	(9.75)			口縁部1/4～肩部残存	φ5㎜以下の石粒含む	口縁部ヨコナデ、体部タテヘラケズリ	口縁部ヨコナデ／擬凹線、以下タテハケ
1278	Ｂ地区	SD03	弥生土器	甕	(14.10)	(3.05)			口縁部1/6残存	粗砂をごく少量含む	不明	不明
1279	Ｂ地区	SD03	弥生土器	甕	(13.80)	(3.20)			口縁部1/10残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を含む	口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ？	口縁部ヨコナデ、体部不明
1280	Ｂ地区	SD03	弥生土器	甕		(4.40)		(3.50)	底部1/3残存	粗砂、φ0.5～2.5㎜大の砂粒を含む	板ナデ後ナデ	不明
1281	Ｂ地区	SD03	弥生土器	有孔鉢		(4.30)		1.30	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～3㎜大の砂粒を多く含む	不明	不明、底部穿孔有り
1282	Ｂ地区	SD03	弥生土器	有孔鉢		(4.00)		1.30	底部1/1残存	粗砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	板ナデ	ハケ後ナデ？ 底部穿孔あり
1283	Ｂ地区	SD03	弥生土器	有孔鉢		(5.10)		1.00	底部のみ残存	粗砂、φ0.5～5㎜大の砂粒・小石を含む	不明	不明
1284	Ｂ地区	SD03	弥生土器	有孔鉢		(11.65)		3.75	底部のみ残存	極細砂を多量に含む	底部タテヘラケズリ	体部タタキ後ハケ？ナデ、底部の穿孔有り

報告No.	地区	遺構名	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	腹径(mm)	底径(mm)	残存率	胎土	調整(内)	調整(外)
1285	B地区	包含層	弥生土器	台付鉢		(6.65)		(9.60)	脚端部1/4残存	極粗砂を少量含む	不明、脚部裾ヨコハケ後ナデ消し	不明
1286	B地区	包含層	須恵器	杯B		(3.20)		(7.00)	底部1/4残存	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒を含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼り付けナデ
1287	B地区	包含層	須恵器	杯B		(2.20)		(7.30)	底部1/4残存	細砂、φ0.5～2㎜大の砂粒をごく少量含む	回転ナデ、見込み部ナデ	回転ナデ、高台貼り付けナデ
1288	B地区	包含層	須恵器	椀		(2.45)		(5.70)	底部1/4残存	極細砂を少量含む	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り

表7　下野村遺跡出土石器観察表

報告No.	遺物No.	地区	遺構名	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
S199	YN-003	B地区	SD01	WS		148.5	114.1	49.1	1185.5
S200	YN-002	B地区	SD03	WS		122.9	53.2	31	320.8
S201	YN-004	B地区	SK11	SD		178.7	112.2	95.1	2040
S202	YN-001	B地区	SK65	AX		131.1	39.5	16.6	119.5
S203	YN-005	B地区	SD03	SP	閃緑岩？	140.2	71.9	44	652

AH：石鏃　DR：石錐　SC：削器　SC'：石匙　PS：楔形石器　RF：加工痕ある剥片　AHP：磨製石鏃
PD：有孔円盤　DGP：磨製石剣　DRP：磨製石錐　SS：石棒　AX：石斧　FL：剥片　CAX：打製石斧
RN：磨製石庖丁　CRN：打製石庖丁　SP：磨石　SW：石錘　WS：砥石　SD：石皿
UF：使用痕ある剥片　未：未製品

表8　七日市遺跡出土石器観察表

報告No.	遺物No.	地区	遺構名	器種	石材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）
S1	YA-001	A地区	SH19	AH	サヌカイト	39	23.5	4.4	3.2
S2	YA-239	E地区	SR01	AH	サヌカイト	41.5	19	5	3.2
S3	YM-096	M地区	P202	AH	サヌカイト	46	21.6	8.5	7.8
S4	YE-238	E地区	SR01	AH	サヌカイト	32	19.5	7.3	3.6
S5	YM-111	M地区	SD50	AH	サヌカイト	27.5	18.5	3.5	1.3
S6	YM-108	M地区	P106	AH	サヌカイト	27.5	18	3.5	1.6
S7	YC-004	C地区		AH	サヌカイト	30.3	16.5	4	2.2
S8	YE-269	E地区	SD01	AH	サヌカイト	27.5	17.5	6	1.5
S9	YE-242	E地区	SK17	AH	サヌカイト	25.8	19	4.2	1.3
S10	YE-271	E地区	SD01	AH	サヌカイト	23.5	13.5	4.5	1.1
S11	YF-004	F地区		AH	サヌカイト	24.5	19	4.5	1.6
S12	YE-273	E地区	SD01	AH	サヌカイト	28.5	15.5	4	1.5
S13	YE-241	E地区		AH	サヌカイト	28	17.4	3.2	1.2
S14	YL-060	L地区	SD07	AH	サヌカイト	26.5	12.2	4.5	1.3
S15	YM-317	M地区		AH	サヌカイト	24.8	13.4	3.3	1.2
S16	YL-058	L地区	SD01	AH	サヌカイト	26	18.3	4.5	1.8
S17	YM-099	M２地区	SD15	AH	サヌカイト	24	16.9	3.1	1.1
S18	YM-116	M地区	P381	AH	サヌカイト	21.1	12.7	4.6	1
S19	YA-030	A地区	SK31	AH	サヌカイト	20.9	16.2	4	1.3
S20	YC-003	C地区	SD01	AH	サヌカイト	22	18	5.2	2.1
S21	YE-240	E地区	SR01	AH	サヌカイト	47.5	19.2	5.1	4.6
S22	YE-270	E地区	SD01	AH	サヌカイト	37	18.5	4.6	2.7
S23	YA-027	A地区		AH	サヌカイト	31	16.3	5.5	2.7
S24	YL-056	L地区	SD13	AH	サヌカイト	19	11	3.8	0.6
S25	YA-032	A地区	P498	AH	サヌカイト	38.4	14.9	5.5	2.8
S26	YM-110	M地区	SD42	AH	サヌカイト	43.3	16.4	5.7	3.7
S27	YE-272	E地区	SD01	AH	サヌカイト	26.8	11.5	4	1.1
S28	YM-120	M地区	P374	AH	サヌカイト	26.5	14.5	3.9	1.3
S29	YM-097	M２地区	SD01	AH	サヌカイト	25.3	14.4	3.8	1.1
S30	YE-378	E地区		AH	サヌカイト	20	13	3	0.6
S31	YE-248	E地区	SR01	AH	サヌカイト	24.7	13.5	5.4	1.5
S32	YE-263	E地区	SR01	AH	サヌカイト	33.5	21.5	7.1	3.8
S33	YE-256	E地区	SR01	AH	サヌカイト	21.9	13	8.5	2.2
S34	YM-114	M地区	SK72	AH	サヌカイト	24.2	17	6	1.9
S35	YE-258	E地区	SR01	AH	サヌカイト	28.5	15.3	6	2.4
S36	YK-007	K地区	SK01	AH	サヌカイト	25.5	14.8	5.9	1.7
S37	YM-101	M地区	SH02	DR	サヌカイト	42.6	17.5	8.8	4
S38	YM-115	M地区	SK10	DR	サヌカイト	41.5	16	7	3.8
S39	YM-107	M地区	P639	DR	サヌカイト	36	14.2	8.3	2.6
S40	YM-098	M２地区	SD02	DR	サヌカイト	26	9	4	0.9
S41	YE-349	E地区	SD01	DR	サヌカイト	36.9	29.4	8.3	7.2
S42	YL-076	L地区	SD01	DR	サヌカイト	18.9	8.7	3.4	0.6
S43	YA-010	A地区	P448	SC	サヌカイト	87	88.5	16.5	149.8
S44	YE-257	E地区	SR01	SC	サヌカイト	36	44.1	8.4	15.4
S45	YM-095	M地区	SK29	SC	サヌカイト	48	41	6.3	13
S46	YL-061	L地区	SD06	SC	サヌカイト	56.5	37.4	9.1	16.4
S47	YE-274	E地区	SK04	SC	サヌカイト	23	20.1	4.6	2.3
S48	YE-275	E地区	SK04	SC	サヌカイト	85	38.9	11.4	40.7
S49	YM-103	M地区	SD01	SC	サヌカイト	86.2	60	11	60.9

報告No.	遺物No.	地区	遺構名	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
S50	YE-243	E地区	SR01	SC'	サヌカイト	66.9	38.6	6	15
S51	YA-023	A3地区	P080	PS	サヌカイト	34.5	42.7	6.5	10.6
S52	YA-031	A地区		PS	サヌカイト	25	13.2	8	3.7
S53	YC-011	C地区	SK01	PS	サヌカイト	28.7	38.8	9.5	9.3
S54	YC-021	C地区	SX06	PS	粘板岩	39.1	55	8.4	18.3
S55	YC-017	C地区	SK01	PS	粘板岩	69.2	82.1	13	85.8
S56	YE-244	E地区	SR01	PS	サヌカイト	32.5	48	10.4	17.2
S57	YC-006	C地区	SX02	PS	サヌカイト	28.5	28.2	19	5.4
S58	YF-007	F地区	SH01	PS	サヌカイト	24.8	32.7	9	6.1
S59	YE-265	E地区	SK04	PS	サヌカイト	22	26.4	8	3.8
S60	YE-245	E地区	SR01	PS	サヌカイト	23.7	26.1	9.2	5.4
S61	YF-009	F地区	SR01	PS	サヌカイト	36.5	23.1	8.8	6.3
S62	YL-055	L地区	SK31	PS	サヌカイト	26.5	33.2	11	10.1
S63	YM-109	M地区	SK104	PS	サヌカイト	20.5	25.7	9	4.3
S64	YM-113	M地区	SK86	PS	サヌカイト	20	24.9	8.5	2.9
S65	YM-100	M2地区	SD01	PS	サヌカイト	37.3	34.5	10.5	13.3
S66	YM-105	M地区	SB21	PS	サヌカイト	27.6	22.6	10.5	7.2
S67	YM-121	M地区	SK104	PS	サヌカイト	26.9	37.5	12	11.1
S68	YM-104	M2地区	SK26	PS	サヌカイト	29	33.5	8.3	6.6
S69	YM-091	M地区	SK65	RF	サヌカイト	25	15.9	3	1
S70	YM-093	M地区	SD36	RF	サヌカイト	112.2	73	15	146.3
S71	YA-012	A地区	P382	RF	サヌカイト	22.5	20.6	3.7	1.5
S72	YC-009	C地区		RF	サヌカイト	28.6	18.3	3	1.9
S73	YF-008	F地区	SH01	FL	サヌカイト	16.2	22.5	3.5	1.4
S74	YA-024	A地区	P099	UF	サヌカイト	27.6	15	6	2.8
S75	YE-324	E地区	SK04	RF	サヌカイト	28.2	19.2	3.6	2.5
S76	YF-006	F地区	SH01	RF	サヌカイト	40.5	29.2	8.5	10.2
S77	YA-008	A地区	P562	AHP		66.2	25.6	5.5	7.3
S78	YM-285	M地区	SD01	AHP		67.8	19.5	6.5	7.9
S79	YE-246	E地区	SR01	AHP		24.5	17.7	4.5	2.9
S80	YM-343	M地区	SH07	PD		21.3	20.7	2.5	1.8
S81	YC-085	C地区	SX02	DGP	粘板岩	213.1	31.2	11.5	84.3
S82	YA-007	A地区	P962	DGP	粘板岩	110	30.5	5.3	29.4
S83	YB-011	B地区		DGP		58.8	27.7	7	12.2
S84	YC-002	C地区		DGP		56.5	20.6	5.3	9.4
S85	YC-001	C地区	SX05	DGP	粘板岩	58.5	29	8.6	17
S86	YC-014	C地区	SX05	DGP	紅簾石片岩	76.5	33.1	6.5	22.9
S87	YE-276	E地区	SR01	DGP	粘板岩	56.7	33.6	7	18.6
S88	YE-277	E地区	SK01	DGP		63.8	32.8	5.5	18.3
S89	YE-279	E地区	SR01	DRP		40.5	7	4.3	2
S90	YE-384	E地区	SR01	DGP	粘板岩	59.5	31.7	7.9	19.8
S91	YC-053	C地区	SX06	SS	砂岩	52.8	28.5	26	63.3
S92	YE-132	E地区	SK02	SS	石英片岩	64.6	28	19.5	60.7
S93	YE-293	E地区	SD02	AX		131	65.2	45.5	562.7
S94	YE-286	E地区	SD01	AX		113.6	48.2	37.8	301.6
S95	YE-285	E地区	SR01	AX	粒状安山岩	77.2	66	49.2	332.2
S96	YM-008	M地区	SK104	AX		118	71.1	48	523.3
S97	YM-017	M地区	SK01	AX		93.2	48.4	28.6	206.8
S98	YM-003	M地区	SK104	AX		161	69.8	40	804.4
S99	YA-053	A地区	SH16	AX	砂岩	73.5	74.3	45.6	435.7

報告 No.	遺物No.	地区	遺構名	器種	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)
S100	YC-048	C地区	SX05	AX	凝灰岩	102.4	51.8	40	296.3
S101	YJ-007	J地区	SK01	AX		97.8	65	48.2	389.2
S102	YA-056	A３地区	SK06	AX	凝灰岩	78.7	44	26	121.2
S103	YA-055	A地区	P810	AX	凝灰岩	115	26.5	35.9	209.5
S104	YC-050	C地区	SX05	AX	粘板岩	102.5	31.5	40.6	183.2
S105	YE-307	E地区	SR01	AX	凝灰岩	96.5	33.7	29.5	174.6
S106	YL-009	L地区		AX	雲母片岩？	83.2	25.5	22	106.1
S107	YA-057	A地区	P086	AX	凝灰岩	78.5	51.6	14.8	91
S108	YA-058	A３地区	P112	AX		72.9	52	12.7	81.5
S109	YC-070	C地区	SD03	AX	凝灰岩	118.1	59.7	19.5	226.1
S110	YC-069	C地区	SX04	AX		51.9	36.2	9.5	31.7
S111	YL-001	L地区	SD07	AX	凝灰岩	154.5	81.9	19	375.6
S112	YM-249	M地区	SK65	AX未	凝灰岩	153	46	41.9	399.1
S113	YM-247	M地区	SK65	FL	凝灰岩	135.8	51.1	31.9	262.7
S114	YM-250	M地区	SK65	CAX	凝灰岩	139.5	71.6	23.5	321.8
S115	YM-251	M地区	SK65	FL	凝灰岩	89.5	72.9	17.4	105.8
S116	YM-244	M地区	SK65	SC	凝灰岩	105.9	95	13	205.5
S117	YM-246	M地区	SK65	CAX	凝灰岩	151.2	67.1	23.2	342.4
S118	YM-245	M地区	SK65	FL	凝灰岩	111	59.9	13.6	102.4
S119	YM-248	M地区	SK65	FL	凝灰岩	131.1	70	17.3	136.1
S120	YM-014	M地区	SK81	AX	凝灰岩	95	67.9	22	267.1
S121	YM-028	M２地区	SK09	AX	凝灰岩	43.5	37	8.5	21.1
S122	YM-339	M地区	SD01	AX未	玄武岩	145.8	98.2	32	675
S123	YE-134	E地区	SR01	AX未	石英安山岩	88.5	86.5	26	232.4
S124	YL-006	L地区	SD01	AX	凝灰質砂岩	90.1	76.7	43	449.5
S125	YA-001	A地区	SK18	RN	粘板岩	85	47.1	5.3	36.3
S126	YA-003	A地区	SK123	RN		101.1	54.8	5	44.5
S127	YA-004	A地区	SH20	RN		58.7	41.2	6	14.6
S128	YA-002	A地区	SX03	RN		72.9	30	7.5	19.9
S129	YB-007	B地区	SK11	RN		64.7	40.9	7.6	29.3
S130	YA-033	A地区	SK130	RN未	粘板岩	134.3	53.1	13.8	140
S131	YA-034	A地区	P081	RN未		130.9	68	14	149
S132	YA-044	A地区	SH20	RN未	粘板岩	87.5	59.5	11	68.1
S133	YB-006	B地区		RN		92.1	52.8	8.5	50.3
S134	YA-005	A地区	SX03	RN	粘板岩	61.3	41.6	7.5	21
S135	YC-032	C地区	SX01	RN	粘板岩	84	34.4	7.8	32.3
S136	YC-039	C地区	SX01	RN		71.5	36.2	6.2	25.5
S137	YC-037	C地区	SX01	RN	粘板岩	68.2	41.1	6.5	22.6
S138	YC-038	C地区	SX02	RN	緑色片岩？	77	96.7	10.5	110.7
S139	YC-074	C地区	SX05	RN		39.8	42	9.5	18.3
S140	YC-036	C地区	SX02	RN		134.8	49.5	8	77
S141	YC-034	C地区	SX02	RN		136	50	8.5	74.9
S142	YC-041	C地区	SX05	RN	粘板岩	70	44.7	6.5	32.2
S143	YC-033	C地区	SX05	RN		62.8	42	8.5	23.6
S144	YC-029	C地区	SX05	RN		77	52	4.5	20.2
S145	YC-045	C地区	SD01	RN	粘板岩	115.3	44.5	8	70.2
S146	YC-030	C地区		RN	粘板岩	109.1	34.8	6.7	35.4
S147	YC-.86	C地区		RN		126.2	46	8	69.1
S148	YE-120	E地区	SD14	RN未	粘板岩	107.8	106	20.5	229.4
S149	YE-109	E地区	SK34	RN	粘板岩	61.7	40.5	9.5	17.7

報告No.	遺物No.	地区	遺構名	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
S150	YE-098	E地区		RN	粘板岩	82.4	45	8.2	48.9
S151	YE-104	E地区	SX03	RN		103.9	61.5	8	80.3
S152	YE-386	E地区	SR01	RN未		94.5	56.5	10.2	71.5
S153	YE-100	E地区	SR01	RN		109.5	43.1	8.5	49.5
S154	YE-097	E地区	SR01	RN	粘板岩	123.1	39	7.9	61.5
S155	YE-099	E地区	SR01	RN		109.7	50.5	7	65
S156	YF-036	F地区		CRN	サヌカイト	137.5	54.2	12.4	121.3
S157	YF-030	F地区	SK16	RN		65.8	49.9	7.5	29.1
S158	YG-001	G地区	SE01	RN		86.1	44	8	41.9
S159	YJ-005	J地区	SD01	RN未	粘板岩	159	113.4	7	153.2
S160	YJ-004	J地区	SK07	RN		109.3	43.5	7.5	49.1
S161	YK-009	K地区	SD09	RN		104	54.5	5	47.3
S162	YL-045	L地区	SK18	RN	粘板岩	40.9	35	7	13.3
S163	YM-275	M地区	SH01	RN		62	44.2	10	29.3
S164	YM-126	M地区	SH02	RN		54.2	45.5	8	24.9
S165	YM-135	M地区	SH02	RN		44.3	40	6	17.9
S166	YM-210	M地区	SH03	RN		84	59.8	10	59.9
S167	YM-342	M2地区	SK31	RN	粘板岩	84.4	93.6	10.5	109.1
S168	YM-272	M地区	SD01	RN		98.4	58.2	9	74
S169	YM-271	M地区	SD01	RN	安山岩	134	50.9	9	77.8
S170	YM-270	M地区		RN		120	44.6	10	69.6
S171	YM-160	M地区	SK81	RN未	粘板岩	81.6	52.8	8.4	45
S172	YM-136	M地区	SK82	RN		88.3	49.2	7	44.3
S173	YC-055	C地区	SX05	SP		79.8	74	47.3	422.2
S174	YC-057	C地区	SK01	SP		107	87.2	52.2	723
S175	YE-129	E地区		SP	半花崗岩？	94.8	74	43.5	444.5
S176	YC-046	C地区	SX01	SP	凝灰質砂岩?	114	47.9	38.7	330.3
S177	YM-211	M地区	SK81	SW	粘板岩	87.2	47.5	11	62.5
S178	YA-089	A3地区	SH01	WS		78.2	70.1	23	127.4
S179	YA-050	A地区	SH02	WS	細粒砂岩	172.3	59.1	52.7	834.8
S180	YA-084	A地区	SK73	WS		166.3	96	61.9	855.8
S181	YA-083	A地区	SK116	WS破片？	泥岩？	51.9	39.4	15.2	26.5
S182	YA-062	A地区	SK87	WS		124.5	93.8	49	688.8
S183	YC-073	C地区	SK01	WS		94	36.1	27	96.3
S184	YC-072	C地区	SK01	WS		77.9	42.1	14.8	47.3
S185	YC-075	C地区	SX02	WS	細粒砂岩	45.6	54.2	10	27.8
S186	YC-068	C地区	SX06	WS		103.5	48.6	28.5	154.4
S187	YC-061	C地区	SX05	WS		162.2	85.1	54	1420
S188	YC-060	C地区	SX05	WS		181.2	98.9	60.1	1460
S189	YC-059	C地区	SX01	WS		164.5	126.6	109.5	3025
S190	YE-320	E地区	SR01	WS		179.2	164.3	78.2	2300
S191	YE-308	E地区	SK04	WS	凝灰質頁岩	106	63	20.6	201.2
S192	YE-313	E地区		WS	泥岩？	79	43.2	40	127.4
S193	YK-001	K地区	SK26	WS	角閃石玄武岩	214.8	160	147	6090
S194	YC-058	C地区	SX01	WS	砂岩	193.8	157.2	72.5	2460
S195	YE-309	E地区	SK04	SD		113.6	112.1	25.5	599.6
S196	YC-062	C地区	SK01	SD		130.2	119.1	54.7	1230
S197	YA-009	A地区	SH18	?	泥岩	88.2	17.5	9	19
S198	YC-056	C地区	SX05	SP	安山岩	70	70.9	67.8	435.5

よみがな	なぬかいちいせき
書　名	七日市遺跡（Ⅲ）　弥生～平安時代の調査
副書名	近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日 JCT）に伴う発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第271冊
編著者名	長濱誠司・多賀茂治・村上泰樹・中川渉・上田健太郎
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号　　TEL 078-531-7011
発行年月日	西暦2004年（平成16年）3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
七日市遺跡（なぬかいち）	兵庫県氷上郡（ひょうごけんひかみぐん）春日町野村（かすがちょうのむら）	28644	930078	35度9分53秒	135度6分49秒	確認調査 19930507～19930726	2172㎡	近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日JCT）に伴う事前調査
			930121			全面調査 19930901～19940303	7229㎡	
			940201			全面調査 19940526～19941006	5422㎡	
			950224			全面調査 19950904～19960126	9903㎡	
			960234			全面調査 19960902～19970319	15420㎡	
			960369			全面調査 19961202～19970319	5192㎡	
			970164			全面調査 19970512～19971007	9868㎡	
下野村遺跡（しものむら）			960094	35度9分50秒	135度6分22秒	全面調査 19960604～19960906	11300㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七日市遺跡	集落・墳墓	弥生時代前期～古墳時代初頭	竪穴住居・周溝墓・木棺墓・土器棺墓 土坑・溝	土器・石器・鉄器	弥生時代を通じて集落が継続 鉄剣形磨製石剣が出土
	官衙	奈良時代～平安時代前期	掘立柱建物・溝・土坑	須恵器・土師器 墨書土器	氷上郡衙別院の一部か
	集落	平安時代後期	掘立柱建物・井戸・土坑	須恵器・土師器・黒色土器	
下野村遺跡	集落	縄文時代～平安時代	溝・土坑・柵	縄文土器・石器	調査時の名称：西野々遺跡

兵庫県文化財調査報告　第271冊

氷上郡春日町

七日市遺跡（Ⅲ）

弥生～平安時代の調査

〔　本　文　編　〕

近畿自動車道敦賀線（吉川～福知山）建設事業（春日JCT）に伴う発掘調査報告書

平成16年3月19日　発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町2－1－5

☎078－531－7011

発行　兵庫県教育委員会

〒650－0011　神戸市中央区下山手通5－10－1

印刷　株式会社　リョーイン

〒652－8585　神戸市兵庫区和田崎町1丁目1番1号

☎078－672－4800